
英雄都市のバカども
3
～アルコ・ホール三番街の何でも屋～
アサウラ
ILL.
だぶ竜
ファンタジア文庫


英雄都市のバカども
3
～アルコ・ホール三番街の何でも屋～
花屋店主殺害の容疑者として
モルトは強制連行されることとなった――


七年前のリキュール
ライ
カルジャガ
モルト
オリービー
リッツ


「約束通りに来たんだ。
リッツを放せ」

# 英雄都市のバカども３

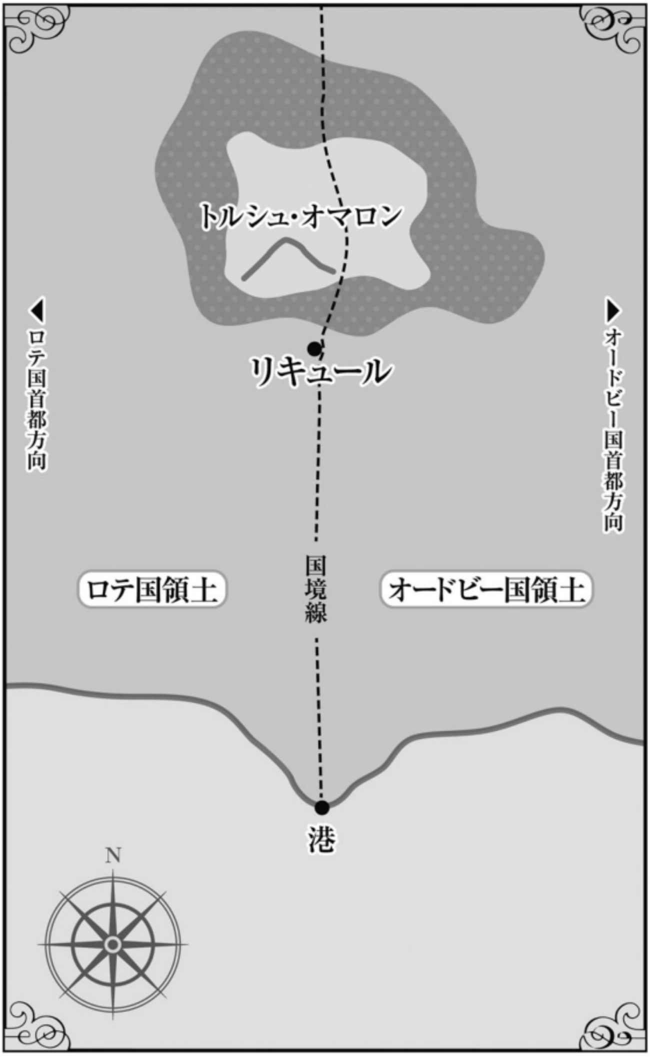
～アルコ・ホール三番街の何でも屋～

アサウラ

富士見ファンタジア文庫

目次

## リキュール周辺地図



●あらすじ

　そこは、リキュールという街。

　山の麓ふもとにある、小さくも人で賑にぎわい、物が大きく行き交かう街。

　どこぞの国の首都ならいざ知らず、何故なぜ、こんな辺境の地に、山の湧わき水を利用した上水道はもちろん、下水道まで整備された街があるのか……遠方の人間からすると不思議に見えるはずだった。

　この不可思議な街の活気の秘密、それはそこを挟はさむ二つの大国にあった。

　一〇〇〇年もの昔、森を更さら地ちに、更地を砂さ漠ばくへ変えるほどの大戦争を行ったロテ国とオードビー国。かつて大戦争を行った二カ国ではあったが、今や王族は政略の思おも惑わくなく頻ひん繁ぱんに姻いん戚せき関係を結ぶほどの間あいだ柄がらとなり、両国の国境は実質的にないに等しいまでになっていた。

　だが、それらの間には戦争の傷きず跡あとが今もなお残り、不毛の土地は合がつ併ぺいに対する厚い壁かべとして数百年を過ぎてもなお変わらずにあり続け、人が生活を為なせる土地になるまでさらにもう一〇〇年の時は必要だと言われている。

　しかしながら、その不毛の土地こそが二国の首都を最短で結ぶ最重要ルートだった。それ故ゆえに、必然として人や物の多くがここを通るのだ。

　そして、その過か酷こくな道の中央に、それはあった。

　深い森を引き連れた山が一つ。その麓に長い歴史を持つ街、リキュール。

　魔ま力りよくが普ふ及きゆうするより前、はるか太古より、少数の民族が山を崇あがめて生活していた集落であり、かつての大戦に

おいてはロテ国の最前線基地ともなった、そこ。

　それはロテ国最強と謳うたわれた軍勢が、その圧あつ倒とう的てきな力でもって鉄てつ壁ぺきとなり、オードビー国軍の侵しん攻こうの出で端はなを挫くじき、さらに国だけでなくその豊かな山や森までをも守り抜ぬいた、奇き跡せきの領域だった。

　そんな特とく殊しゆな歴史を持ち、今や世界中の人や物が行き交う街となったリキュール。そこには不思議な魅み力りよくがあると人々は口を揃そろえる。それは──。

『どこか、懐なつかしい感じがする』

　どこの誰だれであっても、まるで一度は訪おとずれたことがあるような……そんな街。

　特殊な街であるくせに、どこにでもありそうな、ありふれた……そんな街。

　辺境の地にある、物流の重要拠きよ点てんたる街。しかしながらそうであるが故に様々な人や物が入り込み、誰もが故郷を思い出せる不可思議な街ともなっていた。

　旅人や商人にとっては、この街を訪れることが首都間の旅における最大の楽しみだとする者も少なくない。

　様々な土地の人が行き交い、様々な物産が取引され、そして……それら以外の望まれざるものもまた……。

　毎日のように巻き起こる様々な事件、事故、問題──。

　だがそれでもなお、そこに住む人達にとって、全すべては当たり前の日常でしかない。

　それが、リキュールという街なのだ。

## ●第一話『三つの依い頼らい』

公おおやけにできないものには価値がある。それ自体の価値に加え、誰も知らないという状態・状じよう況きように価値が生まれる。だからこそ、モルトは秘密というものがちょっと好きである。

「ほほぅ、秘密厳守の依頼か」

良く晴れた昼のアルコ・ホール、そしてリキュールの臍へそである東西南北に延びる二本の大通りが交差する十字路、そこに何十年と立ち続ける巨きよ大だい掲けい示じ板ばんの前で、モルトは顎あごに指を這はわせて無ぶ精しよう髭ひげをジョリリとやった。

その掲示板は公的専用エリアを除けば、誰でも利用できるものだ。

特売セールの宣伝から知り合いへの連れん絡らくなど盛りだくさんだが、それと同時にモルトのような何でも屋に仕事を依頼するのにも活用される。

宛あて名なのない仕事依頼の貼はり紙、それこそが仕事の発注書である。

そんな中でモルトの目を引いたのは、掲示板の隅すみっこ……それも目線よりも下、モルトからすると鳩尾みぞおちのやや下程度の高さに貼られた貼り紙だ。

『秘密厳守、相談相手を求む。プロの何でも屋を所しよ望もう』

「無骨な文章が無骨な文字で書かれている感じからすると大人の男か。もったいぶった文面のくせに貼られた位置は低く、しかも隅っこで、かつ、数回貼り直しをした形跡……人に頼たのみたいのと同時に頼みたくない……いや、知られたくない、かな」

依頼主は迷ったのだろう。貼って、やっぱりやめようと剝はがし、でもやっぱり貼って、剝がし……。それを繰くり返した末、目立たないところに貼ることで折せつ衷ちゆう案としたのだろう。

　こういう曖あい昧まいな仕事は結構ヤバいのが多かったりする。犯罪すれすれ、というか犯罪そのものだったりもするのだが……当然、報ほう酬しゆうは高い。

　モルトは少し迷うも、最近大家の娘むすめ、リッツによる家賃請せい求きゆうも激しいものになりつつあるのを思い出し、受じゆ諾だくの意味を込こめてその貼り紙を掲示板から剝がした。

　裏側には依頼主との接せつ触しよく方法が書かれている。それに従い、モルトは鞘さや代わりの帯バンドで巻かれた長なが柄え刀とうを肩かたに担かつぎ、掲示板に背を向けたのだった。

　依頼主は今日明日、日のある内は安あん美び亭ていにいるらしい。

　場所が場所なので打ち合わせと称しようして酒の一いつ杯ぱいでも奢おごってもらえるかもしれない。

　そんな期待を込めて安美亭の扉とびらを開き、そこに取り付けられているカウベルの軽かろやかな音を響ひびかせれば、看板娘クラッツの「いらっしゃい」の声が迎むかえてくれる。

「あら、モルト。昼から？　リッツに怒おこられるわよ」

　長い金きん髪ぱつの前まえ髪がみを掻かき上げるクラッツに、モルトは少し得意げに首を振ふった。

「仕事だよ。依頼主に会う。今日、普ふ段だんとは違ちがう客とかって来てないか？」

「うーん……普段と違う人はいるけど、お客かどうかは微び妙みようかしら。……ほら」

　クラッツがクイッと細い顎で店の隅を示す。モルトがその方向へ視線を向ければ……ランチを楽しむ数人の他ほかに、不ふ審しん者が約一名。……店の隅の床ゆかで座ざ禅ぜんを組んでいる男がいた。

　一応クラッツも仕事としてなのか、座禅を組む男の前に水のグラスを置いているが、ほとんど即そく身しん仏ぶつにお供えをしているようにしか見えなかった。

　モルトはその男の前に立つと、察した。この男、武道家だ。汚よごれた服の下には細くも鍛きたえ上げられた体があり、その内に抑おさえ込んでいる覇は気きをモルトは敏びん感かんに読み取っていた。

　ここいらでは見ない顔なので、旅の武芸者なのだろう。得物は床に置かれている棍こん棒ぼうか。

「モルトだ。一応ご要望通りのプロで何でも屋をやっている。依頼主はアンタか？」

　座禅の男がゆっくりと瞼まぶたを開き、モルトを見上げる。

　髭が濃こく、年ねん齢れいがよくわからないが、三〇は超こえているようだ。後ろに束ねた長い黒くろ髪かみがなかなかに艶つややかなので、遠目には若い男に見えていた。

「おぬしが……。まぁ、いい。……いや、これでいいのだ」

　男はモラセスだと自己紹しよう介かいしつつ、立ち上がる。

　身長はモルトと同じく一八〇程度、日に焼けた男だった。

「仕事の話をしたい。人の少ない場所へ移ろう」

「いや、ここでいいだろう。もう少し待てば昼食の客はいなくなる」

　モラセスはどこか仕方なしというような顔で……また座禅に戻もどった。並んで座禅を組む気はなかったので、モルトは近くのテーブルの席でしばらく時を潰つぶすことにした。

　気難しい、というか、クソまじめそうな男だった。彫ほりの深い顔には脂し肪ぼうはなく、どこか殺さつ伐ばつとしている。武芸を極きわめんとする者には多少なりともいるタイプだ。

　酒の奢りは期待しない方がいいかもしれない。

　しばらくしてランチを食べていた客が去り、店内が静かになった頃ころ、モラセスはようやく尻しりを上げ、モルトと同じテーブルに着いた。

「ちょっとー、テーブル使うんなら最低一品は頼んでよね」

　カウンターの奥でグラスを磨みがいていたクラッツから声が飛んでくる。

「いらぬ。水でいい」

　これは面めん倒どう臭くさいタイプかもしれない。モルトは若じやつ干かん嫌いやな予感を覚えつつ、席代的に何か頼むべきだとして、男にメニューを開かせ、自家製燻くん製せいササミを使ったサンドイッチを一つ注文させた。街外れに工こう房ぼうを持つパン職人、ピンガが焼き上げた握にぎり拳こぶし二つほどのバゲットを裂さき、その間にスライスオニオン、レタス、オリーブ、そしてスライスチーズに粗あらく解ほぐした燻製ササミをたっぷりと挟はさんで、そこにオリーブオイルと岩塩、粗あら挽びき胡こ椒しよう、それに黄身の味が濃い自家製マヨネーズという代しろ物ものだ。比ひ較かく的てきシンプルなものだが、これがうまい。ヘルシーで体に優やさしく、そして安いので懐ふところも労いたわってくれる。

　……が、何故か一つだけしか注文していない。厨ちゆう房ぼうで調理していた安美亭店長であるグレーンが、気を遣つかって二つにカットして持って来てくれた。

「モルトと言ったか。某それがし、今は固形物を食することができぬ身ゆえ、貴き殿でんが食べるといい」

　そういう修しゆ行ぎようの最中なのか、それとも固形物を摂とることで胃を重くするのを嫌きらっているのかはわからないが……そういうことなら、とモルトは早さつ速そく頬ほお張ばらせてもらった。

　この手の細長いバゲットに生野菜をたっぷり挟むサンドイッチの場合、どうしても中身がズルリと落ちてしまいかねないので、モルトはギュッと押し潰した上で、口に入れる。

　口いっぱいに食べ物を入れる悦よろこび。今朝に作ったものなのか、まだほんのりと温かさが残る燻製ササミ、そこに生野菜の冷たさとシャキシャキとした歯ごたえが加わる。

「うん、うめぇ。……それで、えーっとモラセスさん、ご依頼は？」

「……う、うむ。それが、実は……生まれてこの方、経験したことのない状況ゆえ、少し言葉に迷っている。今朝方から座禅を組み、瞑めい想そうの中で言葉を探していたのだが……」

「秘密は守る。そこは信じてくれていい。そしてこの店の人間、クラッツとグレーンの二人は聞こえてしまったとしても信用できる相手だ。……安心して言葉を紡つむいでくれ」

　モラセスは視線を下げ、覚かく悟ごを決めるかのように浅く何度も頷うなずいた。

「……正直に言おう。貴殿を見た時に失望もした。だが、貴殿で良かったのだろう」

　残り半分のサンドイッチにかぶりつきながら、モルトは少々眉み間けんに皺しわを寄せた。

　彼が何を言っているかわからなかったが、いちいち質問するより黙だまっていた方が話が早いだろうと、口を言葉ではなくパンで埋うめて腹に落とし、水を含ふくみ──。

「某それがし、恋こいしちゃってるのだ」

　──噴ふいた。モラセスの真しん剣けんな顔が水みず浸びたしになるも、彼は何も無かったかのように真っ直すぐにモルトを見つめている。

「エッホオッホ……あ、あぁ、すまん。およそ予想していない言葉が来たもんで、つい驚おどろいちまった。……おーいクラッツ、何か拭ふくものを持って来てくれ！　……クラッツ？」

　さっきまでカウンターの中にいたはずだが、今はその姿がない。しばらく待ってみると、ブラウスの胸むな元もとを湿しめらせた彼女が厨房の方からタオルを持って現れた。

「……お前、盗ぬすみ聞きしてただろ」

「違う。叔父おじさんがいきなり飲んでた焼しよう酎ちゆうを噴き出したの。そもそも厨房じゃ店内の話し声なんて普通聞こえないわよ」

　酒さけ臭くさいクラッツは、タオルをモラセスに渡わたすと店の

二階にある自室へと下がって行った。

「えーっと、それで、モラセスさん。ではご依頼はその恋……初恋かな？　それに対する相談が依頼ということですかね？」

「う、うむ。そうだ。……ただ初恋ではないが、初恋のようなものというか……。この胸の高鳴りは紛まぎれもなく恋ではあるのだ。おかげでろくに物を食べられないほどだ」

　殺伐とした強面こわもての男が『恋』という言葉を連呼するのは、なかなかに異様なものがあって、モルトは少したじろいだ。

　モラセスは〝恋をしている〟という己おのれの状況に戸と惑まどっている。そしてそうであるがために言葉をまとめきれないのだろう。何を依頼したいのかがいまいちわからない。

　そのため、モルトは話を少し強ごう引いんにまとめることにした。

「まぁ、初恋にせよ何にせよ……らしくもない恋をしてしまって、困っている。それでその恋のお手伝いを俺にして欲しい、と、そういうわけですね？」

「……う、うむ、そういうことだ。何分、何をどうすればいいのかもわからぬ」

　幼き頃より武の道に邁まい進しんし続けたことで、恋はおろか、誰だれもが当たり前にする片かた想おもいすらこの歳としまで経験してこなかったのだろう。それゆえに、突とつ如じよとして抱かかえてしまった今の気持ちに戸惑い、固形物が喉のども通らず、やむなく助けを求めるために迷いながらも依頼書を出した……そういうことのようだ。

　モルトは、ふむ、と顎に手を当てモラセスを今一度見つめる。

　少し怖こわいが、顔の作りは悪くない。体はかなりいい方だろう。今の小こ汚ぎたない格好と髭、髪型をどうにかすればそこそこにいい男である。

　今回のは比較的容易な仕事に思えてきた。とりあえず散髪から始めて、その後はガーナ姐ねえさんでも呼び出して街のブティックで服を選んでもらえば……。だが、問題がある。やはりどうしたって

相手の好みや現状━すでに決まった相手がいる可能性もある━まではどうにもできない。うまいこと出会いのシチュエーション等々を作り上げることまではできても、恋の成じよう就じゅに関してはどうやったってモルトの力量に関係しないところがある。

　そのため、モルトはその説明をし、その上で、できる限りはするものの恋が成就するかしないかまでは責任が持てない、報酬は結果に関係なく頂ちよう戴だいする……とする旨むねを話し、モラセスに頷かせた。提示された報酬も悪くない。

「よし、ならば契けい約やく成立だ。大船に乗った気でいてくれていい」

「世話になる。本当にどうしていいのかわからず悩なやみに悩んでいたのだ……」

「初恋ってのはそういうもんさ。歳がいってればなおのことだ」

　クラッツが新しいブラウスに取り替かえてきて店に現れると、モルト達を気き遣づかったのか、厨房にいるので用があったら大声を出すように言い置き、彼女は店内から姿を消した。

「いや、貴殿……モルト、だったか。……某、別に初恋というわけではないのだ。……恋の経験はむしろ豊富といってもいい。だが、初恋のようなものではある……」

「……どういう意味だ？」

「男を愛しちゃったのは初体験なのだ」

　モルトは卓たくに肘ひじをついて額を押さえ、頭痛がするように頭を支えた。

　ほんのり頬ほおを赤らめながら唇くちびるを噛かみ締しめるモラセスを見ていられず、誰もいない店内を見み渡わたすようにして視線を逸らす。すると、怒いかり顔のクラッツが再び濡ぬれたブラウス姿で二階へと上っていくのが見えた。

　成否にかかわらず報ほう酬しゆうを支し払はらうという契約内容にしておいて、本当に良かったと数十秒前の自分を褒ほめ称たたえながら、モルトはモラセスの話を聞いた。

　モラセスは予想通り、武芸を磨みがくため世界を旅しているらしい。が、若い頃には普通に彼女がいたし、旅先で人並みの出会いと別れもあったそうだ。が……如何いかんせん、男に対しては初めてなので、ある意味において初恋と言えないこともない、ということらしい。

　そりゃ何でも屋に依頼するかどうか迷うわ。モルトはため息を吐ついた。

「リキュールに辿たどり着いて、アルコ・ホールの人ひと混ごみの中、彼と運命の出会いを果たした瞬しゅん間かんに胸がときめき……いてもたってもいられなくなった。一目だ、一目で某は恋に落ちたのだ。……今思い出すだけでも……あぁ、全身がざわめく……」

「わかったわかった。……で？　その相手の名前はわかるのか？」

　モラセスが頷いて口を開きかけるも、カウベルの音が鳴ったために反射的に顎あごを引く。

　来客である。クラッツがいないので、グレーンが厨房から顔を出す。

「おぅ、リッツちゃん、じゃねぇ、か」

　店に入ってきたのはフリルのついたワンピースに、サンダルというそのいつもの格好のリッツ。彼女は左サイドにだけある三つ編みを揺ゆらし、ペコリと頭を下げた。

「あの、すみません、モルトって……あ、いた」

　彼女は店の外にいる誰かに声をかけると、サンダルを鳴らしてモルトの卓へと来る。彼女の後ろについて来る人影が一つ。リッツより少々年上の、一三、四歳程度の少女だ。

　リッツよりもそちらが気になった。少々ゴツめの靴くつこそ少年のように履はき潰しているが、シンプルに小こ綺ぎ麗れいな、丈たけの短い白いワンピースに黒いスパッツを合わせていて、如何いかにも元気な女の子といった様子だ。一番特とく徴ちょう的なのはその髪型だろう。両サイド、そして後ろに二本で、長い髪かみを四本の束にしており、独特の雰ふん囲い気きを纏まとっていた。

　彼女は大きな手て袋ぶくろを着けた腕うでをモルトの前で交差させ、これを開くと共に頭を下げる。

「押忍おす！　リッツんの友達やらせていただいているクアトロっす」

　お、おぅ？　と、モルトは困こん惑わくしつつ応じると、リッツを呼び寄せ、耳打ちをする。

「……あのさ、リッツ。今仕事の打ち合わせ中だから友達紹介してくれるのはまたの機会にしてくれないか。あと、できればもう少し年上のお友達をだな」

　リッツの小さな手がモルトの頭をつかむと、そのまま膝ひざ蹴げりを額に叩たたき込んでくる。細い体のくせして、威い力りよくだけは一人前だ。

「それ目的で紹介するかっ！」

「リッツん、今の膝いいっすよ！　腰こしの捻ひねりが綺麗に膝へ伝わってるっす！」

　困惑するモラセスに待つよう伝え、モルトは仕方なしに少女達に向き合うことにした。

「……何の用なんだよ、リッツ。手短にしろよ」

「うん、実は仕事を紹介しようかと思ったんだけど……そっか、仕事中か。急ぎ？　そうじゃないなら、こっちのは簡単というか、あっという間に終わる内容なんだけど……」

　モルトはモラセスを見やった。

「某は別に急ぎというわけではない。幼い娘むすめさんゆえ、そちらを終えてからでも……」

　クアトロは腕を後ろで組み、無い胸を張るとそこから直角になるほどに深々と一礼をした。彼女も武道か何かをやっているのだろう。暑苦しい礼れい儀ぎがしっかり身についている。

「お言葉に甘えさせて頂くっす。……実はこう見えてあたし、恋しちゃったんす！」

「……気のせいか、最近どこかで似たような話を聞いたな……」

「その相手がなんと……男の方なんっす！」

「うん、だろうな」

「あ、モルト。クアトロね、今まではずっと女性が好きだったんだよ」

「ウッス。初恋の相手はアルコ・ホールでお花屋さんをやっているオリービーさんっす」

「お、おぅ。若じやつ干かん面めん倒どうな気配が漂ただよってきたが、リッツ、本当にすぐに終わる仕事か、これ」

「いいから最後まで話聞いてあげてよ」

「男性を好きになったのは初めてなので、どうアプローチしていいかわからなくて……。なので、これはもうド直球に気持ちを伝えるのが手っ取り早いかと思い、お知り合いだというモルトさんに彼を紹介していただこうかと思いましたっす。依い頼らい料はこれを」

　彼女が取り出した革かわ袋ぶくろを受け取ると、そこそこの金額の硬こう貨かが詰つまっていた。子供の小こ遣づかいにしては少々額が大きいが、それだけ本気だということなのかもしれない。

「紹介するだけで金が貰もらえるんならありがたいが……それだけでいいのか？　仲を取り持つとか、そういうのは……？」

「できるだけいい感じにあたしを紹介していただければと思うっす」

「それだけ？」

「これでも落ち着かせて、よーく考えさせたんだけどね。クアトロ、猪ちよ突とつ猛もう進しんタイプだから。オリービーさんのお店に来るなり他のお客さんいる前でいきなり告白してたし」

「ウッス。ちなみにその時居合わせたのが縁えんで、リッツんと仲良くなったっす」

「……あぁ、うん、そう……。ともかく、片想いの相手を連れてく

るなりして、クアトロをいい感じに紹介すればいい、というわけだな？　わかったわかった、いいだろう。モラセスさん、すみませんが少しお待ちを。……で、その相手は誰だ？」

　モルトは席を立つと、長なが柄え刀とうを肩かたに担かついだ。

「ウッス、何でも屋のサシャさんっす」

「……つまんねぇな……。普通、こういうのって、見るもおぞましいマッチョとかブ男とか、加か齢れい臭しゅうを放ちまくってる中年太りで拘こう束そく具を下着代わりに身に着けて少女のペットになっている変態オッサンとかじゃないのか」

　スパンッ！　と、モルトの尻しりをリッツがひっぱたく。

「女の子好きな娘こがいきなりそっちいったら、さすがに止めるっての！」

　サシャは遠目には━いや、近くで見ても美女と見み間ま違ちがうほどの美び丈じよう夫ふである。彼を好む女性は数知れない。女性が好きだった娘が最初に好きになる男としては納なつ得とくできるが……モルトにとってあまり面おも白しろいものではなかった。

「わかったわかった。んじゃ、あのクソ女たらしを連れてくるよ。少し待ってろ」

「待たれよ、モルト」

　モラセスも何故なぜか席を立ち、床ゆかに寝ねかせていた棍こん棒ぼうを手に取った。

「あぁ、大丈夫ですよ。同業のサシャって奴やつは、どうせそこら辺をふらふらしているんで、すぐに見つかりますから。少しだけ待っててください」

「そうではない。……そうではないのだ」

　モルトが頭に『？』を浮うかべていると、モラセスは俯うつむき加減に下唇を噛み、何かを振ふり絞しぼるようにして小刻みに震ふるえ出した。

「某が生まれて初めて愛しちゃった男というのは、実は……サシャ

殿どのなのだ!!」

　秘密厳守としていた情報をモラセスが全力で叫さけんだ瞬間、店内の空気が固まり、静けさが世界を支配した。

　少し遅おくれて、厨ちゆう房ぼうの方からむせるグレーンの「ブェッホ！　グオゥッホ！」という野太い声が聞こえてくる。モルトは大きく深呼吸をし、全員の顔を見渡した。

「よ、よーし、落ち着けみんな。一見すると面めん倒どう臭くさいが、状じよう況きようは意外とシンプルだ。冷静になれば対処できないことはないぞ……」

　ウッス、とクアトロが鋭するどい目つきで頷うなずいた。

「恋こいのライバル出現というわけっすね」

「どうやらそのようだな、小娘。……雌し雄ゆうを決する時、それは今ッ！」

「お前ら物わかり良すぎるだろ!!」

「その棍棒からするに、男色家の棒遣いってわけっすね。肩書きだけですでに下品……サシャさんのお側そばに寄らせるだけでも汚けがらわしいっす！」

「男色家ではない！　某、女が好きだ！　細くくびれたおなごの腰こし回まわりに欲情を禁じ得ん!!　……し、しかし、しかしだ……この街に来てサシャ殿と出会った瞬間から、心奪うばわれたのだ!!　恋、そして欲情してしまったのだ!!」

「だったらずっとそのまま淫いん乱らん女のケツでも腰でも追い掛かけてればいいっすよ！」

「おぬしこそ、これまで女が好きだったというのなら、これからもそっちを追い掛けておれば良かろう！　神聖な男同士の問題に口を挟はさむな!!」

　ド　ド　ド　ド　ド　ド　ド……という重苦しい対立が始まり、男と小娘が睨にらみ合う。

　ちょんちょん、とリッツがモルトの体を突つついた。

「えっと……つまり、それまで女性が好きだったモラセスとクアトロが初めて好きになった男性がサシャだったってこと？」

「あぁ、よくまとめたな。そしてその二人が同時に俺へ紹介するよう頼たのんできたわけだ」

　言いながらモラセスが当初、プロの何でも屋を希望した真意がわかった気がした。

　もしアレでサシャが来れば、告白する気だったのだろう。男性を好きになってしまったという相談をした上で、最後に「実はその相手は、あなたです」とロマンチックながら言われた方は割とビビる展開に持っていこうとしていたのかもしれない。

「……こういう場合、両方の仕事を受けたモルトってどうするの？」

「俺が聞きたいよ。でもまぁ、どちらも成功失敗に関係なくっていう契約だから……」

　面倒なところは全部サシャにぶん投げつつ報酬だけいただいて、一いつ杯ぱいやるのがベストである。なので問題があるとすれば順番だけだ。

「確か、順番ではあたしが先っすよね。あららぁ、申し訳ないっすねぇ～。先にサシャさんのハート、いただくっすよ」

「否いな!!　おぬしが恋のライバルとわかった以上、先には譲ゆずらん!!　モルト、今すぐサシャ殿を紹介願いたい!!」

「あ、紹介前に散さん髪ぱつ行ったり、服買ったりして……と、俺は考えてたんだけど……」

「あらあら、それは残念っすね！　それなら尚なお更さらその間にあたしの依頼をやっていただくとしまっすよ、ね、モルトさん！」

「あ、いや、でも依頼順はモラセスさんの方が先なわけだから……」

「でも譲ったっすよ!?」

「譲らぬ!!　そして散髪も着き替がえもいらぬ!!　ありのままの姿を

見せるのだ!!」

「そんな汚きたなくて男臭いオジサンが告白したって無理っすよ！」

「貴様こそ年とし端はもいかぬ女好きの小娘の分際で、勝機があるとでも思っているのか!?」

　モルトが見る分には、勝機は確実にクアトロにあるような気がする。確かにちょっと若いというより幼い年ねん齢れいと姿だが、それは時の流れが容易たやすく解決するだろうし、女性ではなく女の子として考えれば潑はつ剌らつとした雰囲気や、今し方の言い合いのような小こ憎にくらしいところは必ずしもデメリットではないようにも思える。いろんな意味で、かわいらしいのだ。

　何より……クアトロは女子だ。サシャに男色の噂うわさはなく、一方で女を口説きまくって黄色い声を浴びている様子は嫌いやというほどモルト自身の目で見ている。

　モラセスの愛が如何いかほどであれ、ハンデキャップはどうしても大きい。

「なぁ、リッツ。一応訊きくが、お前、どっちを応おう援えんする？」

「そんなの、クアトロに決まってるじゃない。友達だし、紹介した手前……そりゃね」

「……となると俺はモラセスを応援せにゃならんか……。いや別に公平にする必要はないんだけどもさ。よし、こうしよう。リッツ、少し場を任せる」

　もはやどちらを優先するとしても問題が起こる気がしたので、モルトは一計を案じることにした。そう、サシャをこの場に連れてくるのだ。どちらかを優先するよりも、同時にやってしまう……というより、責任をさっさとぶん投げるのが一番だ。

　言い合いを続けるモラセスとクアトロを背に、モルトは安美亭を後にしたのだった。

1

　サシャに限らないのだが、リキュールにおける何でも屋というのは、大たい抵ていの場合アルコ・ホール内をうろうろしていれば簡単に見つけることができる。仕事の多くは掲けい示じ板ばんに頼たよるのだが、そこに仕事がない、割の悪いのしかない場合は、固定客を持たないサービス業であるがために人通りの多いところをフラフラしていることが大半である。

　人が多ければ必ずトラブルは起こるもの。それこそが何でも屋にとって飯の種なので、流し歩いているだけでその日の食い扶ぶ持ちぐらいは稼かせげたりするものである。

　また職しよく業ぎよう柄がら、何でも屋はリキュールの住民や、街をよく利用する商人に至るまで顔が知られていることから、人に尋たずねていくだけでもだいたいの居場所が判明する。

　実際、此こ度たびのサシャ捜そう索さくもモルトにとっては容易いものだった。

「よぅ、サシャ。景気はどうだ」

　彼はアルコ・ホールの店と店の隙すき間まに身を差し込むようにして、通りを眺ながめていた。腰には刀、首には異国のマフラー、白に近い金きん髪ぱつを洒落しやれた簪かんざしで留めた彼は、薄うす暗ぐらい中にあっても目に留まる。雑多な草むらの中に、一輪の白い薔ば薇らが咲さいているかのようなものだ。

　スラリとした細身に凜りんとした佇たたずまい、華か美びなようでいてシック、流し見していても目にしっかりと留まる。女であっても相当なものであるその上品な顔付きは、確かに男ですら色気を覚えるものがあった。

「ん？　あぁ、モルトか。どうした、暇ひまそうじゃないか。……お互たがいに、だが」

「実はそうでもないんだな、これが。二つ同時に依頼を受けてて……ともかく、暇だというのなら丁度良かった、これから安美亭へ来てくれ。紹しよう介かいしたい人がいる」

「ほぅ？　素す敵てきな相手だといいんだがな。いや、モルトに期待する方が間違っているか」

　ははは、冗じよう談だんだよ。そう軽くサシャは笑い、モルトの肩を叩たたいて安美亭へ歩き出す。

　何とも爽さわやかな雰ふん囲い気きに、普ふ段だんなら男としての嫉しつ妬と心からむしろ腹が立つところだが、今日のモルトは優やさしく微笑ほほえみ返すだけである。

「で、紹介してくれるのはどんな人だ？　お前のことだ、美人というわけではあるまい」

「二人紹介するよ。一人は美人……美少女かな。元気な感じがいいと思う。もう一人はワイルドな感じだ。どちらも健康美で輝かがやいているぞ。何より、一いち途ずだ」

　並んで歩いていると、サシャが「あぁ」と何かを察したような顔でモルトを見た。

「なるほど、暇ではない理由はそれか。私を紹介する依頼が二つ、というわけだな。同じ依頼が被かぶったから、面倒なところは全部私にぶん投げたい。……加えて、小こ賢ざかしいモルトのことだ、報ほう酬しゆうは前まえ払ばらいか結果如何いかんにかかわらず……だろう？」

「……何でわかるんだよ……」

　考えてみればサシャでさえ見み惚とれる美女であれば、モルトは絶対に紹介などせずに自分を売り込むだろうし、モルトのお眼鏡にかなわない相手ならサシャもまた受け入れはしない、ゆえに成功報酬とするわけがない……論理的に考えると、当然の予想かもしれない。

「わかるさ。まぁ、うまいこと対処するから、今度一いつ杯ぱい奢おごってくれればそれでいい」

　断ったらこの場から逃にげる気だろうか。モルトは考える。しかし〝今度〟と言っている。〝この後〟だと少々問題だが、〝今度〟という約束は必ず守らねばならないようなものではない。何せ〝今度〟だ。一〇〇〇年先だっていいだろう。……ならば……。

「わかった、わかったよ。今度奢るから、大人しくついてこい」

「やった♪ 」

　ニッコリと笑い、上じよう機き嫌げんな言葉がサシャの口から出る。歩みのリズムも一いつ瞬しゆんスキップするように速まった。まるで少女のようなその姿に、彼が女として生まれなかったことがモルトには残念でならなかった。

　しかし、もし彼が女として生まれていればこうしてモルトと肩かたを並べて歩くことなどなく、今いま頃ごろ誰だれか決まった相手と添そい遂とげていることだろう。フリーでいる美人というのは、基本的にこの世の法則に反していると言ったって過言ではないのだ。

　モルトとサシャは最初並んで歩いていたが、急に人が増えてきたので縦に一列となって会話は自然と止まった。次に口を開いたのは安美亭の前にできていた人混みの中で、モルトが頭を抱かかえてからだった。

「うわっ！　……おい、モルト、急に立ち止まるな。私の鼻が潰つぶれるところだ」

「いやぁ……あんまり見たくないものを見ちまってな……」

　背後のサシャはモルトの両肩に手を置くと、跳とぶ。そして上半身を反らすようにして、体を持ち上げた。身長が一八〇ほどあるモルト越ごしに、一七〇ないサシャが前を見るためにやったことだが、そうすると丁度モルトの後頭部に彼の胸が当たった。

　……当然、ふよふよの素晴らしい感かん触しよくがあるわけもない。少し柔やわらかい気もしたが、彼は鳩はと胸むねか何からしいので、それの感触なのだろう。

「棒遣いの薄うす汚よごれた男と、拳けん法ぽうを使うらしき子供が安美亭の前で向かい合っているな。……ふむ、喧けん嘩かにしては珍めずらしい組み合わせだ」

「どう、思う、サシャ？ 」

「普ふ通つうに考えれば男が勝つだろう。……しかし、子供の方も何気に鍛きたえているようだ。見事に隙がない。案外いい勝負をす

るかもしれないぞ」

「……いや、そうじゃなくて……どっちが好みだ？」

「何を言っているんだ？」

　モルトが見上げ、サシャが見下ろし、見つめ合う。そうしている内に、サシャの眉み間けんに徐じよ々じよに皺しわが生まれていった。

「おい、まさか……あの二人を私に紹介する気じゃないだろうな。男と子供だぞ!?」

「どちらも健康美に溢あふれてるだろ？」

　肩の上から下りたサシャに、モルトはかいつまんで二人の情報を比ひ較かく的てき良い感じに伝える。すると、今度はサシャが頭を抱えた。

「人を傷つけるのは趣しゆ味みじゃないが……私にどうしろというんだ。……しかも、何で二人は安美亭の前で向かい合ってるんだ？」

　モルトも気になったので、こそこそと人混みに隠かくれつつ、対たい峙じする二人に見つからないようにして安美亭の中へと入った。

　現場を任せたはずのリッツを捜さがしたが、店内にいたのは酒を手にしながら窓の外を見やる野次馬の客数人と、カウンターの中でグラスを磨みがくクラッツだけだ。

　カウンターに着くなり、コースターのようにしてメモが一枚出される。

『何か面めん倒どう臭くさい状じよう況きようになってきたから、先に帰るね。　リッツ』

　メモを差し出したクラッツを見れば、彼女は肩をすくめる。

「だいたい流れわかるでしょ？　どっちがサシャに相応ふさわしいか腕うでっ節ぷしで決めるんだって」

「凄すごいな、おい。小こ娘むすめ相手に、武道家が本気になるなよな……」

「あ、それね、リッツによるとクアトロも何か拳法やってるらしいわよ？　魔ま獣じゆう駆く除じよの時とかにはお父さんと一いつ緒しよに山に入って、アルバイトしてるぐらいの」

「……で、勝った方がサシャと結ばれる、と、そういうわけか」

　言うまでもないでしょ、というように、クラッツはキュッと音を立ててグラスを磨いた。

「その、なんだ……モルト、クラッツ。何故なぜ、当事者のはずの私の意見がどこにも介かい在ざいしていないのかな……？」

　モルト達は窓の外を見やる。扉とびらは閉まっているし、窓も閉じているのだがそれでも張り上げる二人の声ははっきりと店内にまで響ひびいていた。

　──そろそろおっぱじめますっすかね。オジサン、覚かく悟ごはいいっすか？　──小娘、わずか一〇とおで散る己おのれの哀あわれな運命を悔くやむが良い。──あたしはこの前一三になったっすよ！　──誤差だな。──へー、無む駄だに長く生きているとそうなるんっすね。哀れっす、いやぁ、歳とし老おいるのは哀れっすねー。──フッ。露ろ呈ていしたな。その性しよう根ねの悪さ……サシャ殿どのの隣となりには相応しくない。彼を愛するというのなら身も心も清く正しくあらねばならん。それぐらいわかるだろう？　──あっはっはっはっは、オジサンは性根も悪いっすけどビジュアルもなかなか酷ひどいっすよ？　まるで捨て犬のようっす。小こ汚ぎたないっすよー？　それであのサシャさんのお側そばに行きたいなんて……どうして相手の迷めい惑わくを考えないっすかねぇ？　──この姿はたゆまぬ修しゆ行ぎようの証あかし……サシャ殿のような方は某それがしの男として生きてきた熱き人生を愛してくれる！　そういう方なのだ‼　──いーえ、あたし知ってるっす！　サシャさんはあたしのような元気のいい女の子が好きっすよ！　街中でぶつかっちゃったあの運命の瞬しゆん間かん……〝君のような娘こはとても魅み力りよく的だよ〟って言ってくれたっす！　──ふん、某こそ知っているぞ、サシャ殿は男に興味がある！　否いな、男しか愛せないタイプなのだ‼　何故なら某が密ひそかに調べたところによればサシャ殿に女性ファンは多くとも抱だかれたという者はほぼいない！　これはつまり……そういうことなのだ‼　──ち、違ちが

うっす！　あぁ見えて、サシャさん、ちょっとロリ入ってるっす！　ってか、サシャさんはガチロリなんっすよ!!　だから、その、大人の女性じゃダメなんっす!!　━いいや、男だ、男の体でしか欲情できぬお人なのだ!!　某と人混みの中でぶつかった運命の瞬間……〝いい体をしていますね〟とお声をかけてくださったが……その時、彼の目には獲え物ものを見つけたケダモノのような興奮が宿っていた!!　つまり欲情していたのだ、この鍛えた体に!!

　クラッツとモルトが無言のまま窓からサシャに視線を移してみれば、彼は冷ひや汗あせを浮うかべながらブンブンと首を振ふった。

「ち、違う違う!!　思い出したが、あの二人とは以前アルコ・ホールの人混みでぶつかったか何かして一言二言言葉を交かわしただけで……そういう意味では言ってない!!　私は、その……一般的だ!!」

「あのね、サシャ？　アタシが言うのも何だけど、何でもかんでも特とく殊しゆな性格付けすれば個性が出ると思ったら大間違いよ？」

「ガチロリの男色家、か。ショタってまとめた方がいいな。もしくは『タイプ：オールマイティ』とかにまとめて特殊能力っぽく……」

「だから、違うと言っているだろう!!」

　全力のサシャの否定ではあったが、その声はモルトとクラッツにしか届かないようだ。

　━そうか、あの美び丈じよう夫ふはそんな特殊な性せい癖へきだったのか……。━未成年に……クソッ、イケメンだったら何でも許されるってのか！　━……俺でも相手してくれるかな……

　モラセスとクアトロを囲む野次馬達はもちろん、安美亭店内の客達すらそのような言葉を連ね続けており……サシャの脂あぶら汗あせの量を増やしていた。

　━これ以上は話を続けても無駄のようっすね。━うむ、そのようだ。━ガチロリに男色家を近づけるわけにはいかないっす……。━それはこちらの台詞せりふ……そもそもロリなど……フッ、犯罪ではないか。━禁じられた愛ほど燃え上がるんっす！　━たわけめ。もはや、語る言葉を持たぬ!!　ゆくぞ!!　━来いっす!!

　モラセスが重心を落として棍こん棒ぼうを構えると、クアトロもまた重心を落とし、徒と手しゆ空くう拳けんのままで構える。前者はもちろんだが、後者の構えもまた経験を匂におわせるものがあった。

　二人の間に重い空気が流れ出すと同時に、三度の飯より喧嘩が好きなリキュールの住民達の目もまた輝き出す。

　そんな時、カウベルが鳴って新しい客が来店し、カウンターに着くなりビールを頼たのんだ。

「緊きん張ちようで喉のど渇かわいたよ、急いでね！　いやぁ今店の前、盛り上がってるねぇ~。知ってる？　これで勝った方があの何でも屋のサシャと結ばれるって……あ、サシャいるじゃん!!」

　サシャはカウンターの隅すみで頭を抱えていたので、客も最初は気付かなかったようだ。

「違う、そんなルールは設けてないし、そもそも私は……」

「選ぶ立場の人間も辛つらい、というわけだな。うんうん、わかるわかる」

　その客は勝手に納なつ得とくすると、出されたビールを手に窓まど際ぎわの席へと移っていった。

　二人の雄お叫たけびが轟とどろいたので、モルトもまた窓際の空いていたテーブル席に移って二人の様子を見やる。

　初撃から事態は動いた。モラセスが棒で強きよう烈れつな突つきを放つ。それは前動作がほとんどなく、突とつ如じよとして棍棒が伸のびたかのような見事な一撃。どう考えても一三の少女に放つような技わざではなく、本気のそれ。当たり所によれば重傷は免まぬかれない。

　あまりに大人げなく、思わずモルトは声が出そうになった。

　……だが、次の瞬間には別の意味でまた声が出そうになる。

　クアトロが迫せまり来た棍棒の先を左手で上から叩たたく。そして、頭を下げた棍棒の先に彼女が飛び乗り、そこを踏ふみ台だいとして、モラセスの側頭部に見事な蹴けりを放ったのだ。

　モラセスはこれを腕で受けたのだが、そのまま押し込まれるようにして吹ふっ飛ばされた。

　──クッ!?　小娘、貴様、靴くつに……いや、某の棍棒を捌さばいたその手て袋ぶくろにも……仕込んでいるな!?　──誰だれが徒手空拳でやるって言ったっすかねぇ？　足りないウェイトを靴底に入れて、そして手袋の下には手てっ甲こうっす。……まさか素す手での女の子相手でないと勝てないんっすか？　自分は棍棒まで使っておいて？　ぷぷっ、これはお笑いっすね!!　世間の皆みなさん、聞きましたっすか!?　この男、あれだけ鍛えた云うん々ぬん言っておきながら、このザマっすよ!!　──黙だまれぇ!!　……素手のガキだと思って手加減していたが……ならば相手にとって不足なし、本気で行くぞ!!　我がサシャ殿への愛の重さ、その体で知るといい!!

　本当に本気らしく、モラセスの仕し掛かけていく技に鋭するどさが増した。殺意すら滲にじんでいる。

　……が、それでどうやらクアトロと五分といったところのようだ。幼いながら、クアトロはかなり鍛えている。

　棍棒と手っ甲がぶつかり合うやけに甲かん高だかい音、肉と肉が叩き付け合う鈍にぶい音、そして男と少女の覇は気きの籠こもった声が轟き、野次馬達も大きな歓かん声せいを上げていくにつれ、カウンターで項うな垂だれていたサシャの首の角度が深くなっていく。

「なぁおい、サシャ。外、見てみろよ、結構血みどろになってきたぞ。盛り上がってる」

「なぁ、モルト……私はどうしたらいい？」

「そりゃお前、勝った方と結ばれれば丸く収まるだろ」

「何故なぜこの状況に私の意見は介在しないんだ！　私にだって選ぶ権利はある！」

「なら選んでこいよ」

　外では野次馬がはやし立てているせいもあるのか、二人の技にはどんどん重さと鋭さが増し、激しい攻こう防ぼうが続いていく。サシャも恐おそる恐るというようにモルトのテーブルの椅い子すに座ると、外の二人を見やった。

「……いささか死し闘とう染じみてきているじゃないか……」

「二人の本気度というか、愛の重さだろ。……どうするんだ、サシャ、止めるんなら早い方がいいぞ。これ、こんだけやって勝っても何もありません、付き合えませんって言っても納なつ得とくしにくいだろうし。それとも一晩ぐらいサービスするか？」

「冗じよう談だんよせ。……だが、確かにこのままではマズい」

「正直にガチロリでも男色の趣味もないって突き放すしかないだろう。……そうしなけりゃ世せ間けん体ていもよろしくない。リキュールだぞ、ここは。世界中に噂うわさが広がるぜ？」

　しかしこのまま誤った情報が広がればサシャに黄色い声を上げる女性は減るだろう。それはそれでモルトとして、否、一人の男として好ましい状況ではある。

「今すぐ止めに入って、きっぱりと断るか……いや、しかし私を好いてくれる相手を傷つけるというのは主義に反する……」

　冷や汗なのか脂汗なのかわからないものを流しつつ、サシャは両りよう肘ひじを突いて、その上で組んだ手の上に顎あごをのせ、外の死闘を見つめた。

　そうして、苦く渋じゆうの決断をするかのように唇くちびるを噛かみ締しめると、彼はそっと瞼まぶたを閉じる。

「……なぁ、モルト。新しい仕事を一つ、受けてくれないか？」

　報ほう酬しゆうは今夜の酒代。悪くはない、そんな三つ目の依い頼らいだった。

2

　モルトはカウンターに席を移すと、クラッツに強めの酒を要求した。

　これは報酬とは別に、経費としてサシャに要求できるので思いっ

きり高いのにしても良かったが、昼から高級ウィスキーというのも間ま抜ぬけな気がしたので、ラム酒に落ち着いた。

　四〇度ほどあるダーク・ラムをストレートでグラスに注つがせる。ホワイト・ラムより樽たるで熟成させたこちらの方が風味が高く、モルトの好みだった。

　少々大きめのグラスに注いでもらったそれの香かおりをまず、ゆっくりと楽しむ。

「おい、モルト。急いでくれ。外の二人、もうボロボロだ。そろそろ決着がつく」

「まぁ待てよ、サシャ。ガブ飲みするには少しもったいない」

　何よりストレートだ。四〇度ほどある酒となるとさすがに一気にいくのはしんどい。

　焦あせるサシャはクラッツとカウンター越ごしに何か喋しゃべり出すも、モルトはそちらを無視してじっくりとダーク・ラムを味わった。

　芳ほう醇じゅんで華はなやかな香りに、しっかりとしたコク、甘み……。

　酒に優ゆう劣れつをつける趣しゅ味みはないモルトだが、上等なダーク・ラムはヘタなウィスキーより好みである。価格がどうこうではなく、不思議と気楽に飲めるところがいい。晴れた日中に飲むなら、断然こっちである。

　肴さかなが何か欲ほしかったが、さすがに急げと連呼する雇やとい主ぬし相手に要求するのも悪い。モルトとて、そこら辺はわきまえられる男である。

　そわそわするサシャをよそに、モルトは時をかけてグラスを空けた。

「クラッツ、お代わりを」

「おい、モルト！　急ぎだと言っているだろう！」

「この依頼をこなすには気合いを入れる必要がある。だからもう一

いつ杯ぱいぐらい……」

　サシャがクラッツに向けて小さく指を鳴らす。すると食事の時に出される、水のグラスが出てきた。

「それを一息に飲め」

　飲み終わってからこんな大きなチェイサーを出されても……と、モルトは思うものの、酔よっ払ぱらって仕事をするな、ということなのだろう。

　モルトはやれやれと呆あきれながら大きなグラスを手にし、一息に飲み──噴ふいた。

「テメェバカなのか⁉　これ、スピリタスじゃねぇか⁉　殺す気か⁉」

　医い療りよう用の消毒アルコールよりも強力な、九〇度を優に超こえる酒である。純度が高いために無色透とう明めい、匂いもほとんどない。水だという思い込みもあって、その強烈な度数で口内、喉のど、食道が斬きり付けられるような刺し激げきを覚える瞬間まで、モルトも気が付かなかった。

　今でこそアルコールが揮発して口の中が冷え冷えとしているが、スピリタス自体は常温だったらしく、大半の液体はするりと腹まで滑すべり込んでしまっていた。

　床ゆかをのたうち回りそうになる食道の痛みだったが、モルトは拳こぶしを固く握にぎり締しめて耐たえる。

「あのさ……だからって、アタシに噴きかけないで欲しいんだけど……」

　本日三度、酒まみれになってブラウスに下着を透すけさせたクラッツは、ピクピクと怒いかりに頬ほおの筋肉を痙けい攣れんさせつつ、カウンター周りを拭ふいた後、また二階へと引っ込んでいった。

「酒を入れる必要があるなら、それが手っ取り早いだろう。ほら、モルト、急ぐぞ」

「だからってお前、スピリタスを一気させんなよ！　マジで死ぬ

ぞ!?」

　大きなグラスの大半を口に入れ、半分ほどは噴き出したが、残り半分はサンドイッチとラムしか入っていない胃の中だ。強烈な度数の酒はほぼダイレクトに吸収されるだろう。

　大声を出したせいか、早さつ速そく目眩めまいを覚えるぐらいにクラリとくる。

　もはやダーク・ラムの余よ韻いんもクソもない。ショットグラスでならグイッとやったことは幾いく度どもあるが、ここまでの無茶をした経験はさすがにモルトにもなかった。

　サシャに肩かたをつかまれて席を立たせられると、体から力が抜ぬけつつあるのを感じる。

　カウンターに立て掛けていた長なが柄え刀とうすら置いたまま、モルトはサシャに肩を抱だかれるようにして安美亭の外へ。

　良く晴れた空の下、野次馬の人ひと混ごみをかき分け、モルト達は進んだ。

　サシャの登場に周りはどよめき、それにつられるようにして真っ二つに折られた棍こん棒ぼうを両手に持って構えていたモラセスと、手袋が破れて白銀の手っ甲を剝むき出しにして構えていたクアトロがハッとして、目を見開く。

「サシャさん、あたしの勇姿を見に来てくださったんっすね！」

　モラセスが上着を引き千切って上半身をさらけ出す。

「サシャ殿どの、某それがし、出会ってからの半月でさらに絞しぼったのだ！　見ていただきたい、この体を！　技を！　魂たましいの輝かがやきを！」

　キモいっす!!　と、甲かん高だかい声を上げて、クアトロが人々の頭上よりも高く飛び跳はね、体ごと縦回転させる大技の踵かかと落としを放つ。モラセス、これを右手の棍棒で横に弾はじき、体勢を崩くずしたクアトロの腹部に左手の棍棒を突き刺さんとする。

「双そう方ほうそこまでだ！」

　サシャのその声と共に、彼の肩に頼たよっていたモルトは地面を転がった。

　世界が回り出していた。そんな視界の中でサシャの抜ばつ刀とう。煌きらめきを放つ刀身が空気を斬きり、オッサンと少女の間を駆かけ抜ける。

　さらに、棍棒が斬り飛ばされると共に、二人に目にも留まらぬ峰みね打うちを一撃ずつ。

　二人がモルトに続いて地面を転がり、野次馬から感かん嘆たんの声が漏もれる。

　サシャはゆっくりと納刀し、モラセスとクアトロをそれぞれ見やった。

「双方の気持ちは、この……あー、何だ、今そこで倒たおれている同業のモルトから承うけたまわった。このサシャ、それはとても嬉うれしく思う。しかしながら──」

「ガチロリなんっすよね！　だからこのオジサンの好意は受け入れられないと!!」

「否いな！　生きつ粋すいの男色家ゆえ、小こ娘むすめなど眼中にないというわけですな!?」

　地面に膝ひざと手を突つきながら必死に叫さけぶ二人に、サシャは言葉を続けられず、頭痛がするように頭に手をやって俯うつむいた。

「……とりあえず話を聞いて欲しい……。私は……一応、その、アレだ、女性が好きだ」

　モラセスが目を見開き言葉を失う横で、クアトロが弾けるような笑え顔がおでガッツポーズ。

「し、しかし、ガチロリでもない」

　今度言葉を失ったのはクアトロである。そして二人はこの世の終わりを見たかのように、絶望的な表情を浮うかべる。サシャが、焦った。

「とはいえ、私は……その、真実の愛があればそれらなど些さ細さいな問題だと思っている」

　モラセスとクアトロがハッとして、俯きつつあった顔を上げる。サシャの言葉一つ一つに一いつ喜き一いち憂ゆうする様に、モルトは何だか新しい宗教の誕生を見ているような気になってきた。

「つ、つまり、あたし達にもチャンスはある……と⁉」

「そういうことなのですか、サシャ殿‼」

　サシャは残念そうに首を振ふった。

「気持ちは嬉しい。でも、だ。生あい憎にく今、私のハートには先約があってね……残念だ」

「なっ⁉　そんな、そんな……あたし達の物語はそんな悲ひ恋れん的展開なんっすか⁉」

「何ということだ……。某の告白が遅おそいばかりに……いっそ、その相手を某が……」

「それっす‼　そいつを二人で殺して、それから正々堂々雌し雄ゆうを決すれば‼」

「おぉ‼　いいではないか、よし、やろう‼　よし殺そう‼」

「殺ヤりまくりっすよ‼」

　あぁ、本当にさっき安美亭で予想した通りの考えに辿たどり着くのな、この二人……。

　モルトはそんなことを思いながら、ふらつく体で何とか一人、立ち上がった。

「モラセス、クアトロ、よく聞いてくれ、私はそういう暴力は好まない。しかし、その、何だ。一応伝えておく。私が今、心を向けている相手……それは、このモルトだ‼」

「「なんと……⁉」」

　二人が驚きよう愕がくし、野次馬からどよめきが起こった。

　同業ということもあり、傍はたから見ても仲は悪くない二人。一いつ緒しよに酒を飲むこともあれば、仕事をすることも多々ある。そんな二人が、実は……。

　そんな驚おどろきの中、モルトは照れるように頭を掻かいた。

　このサシャの発言は当然、嘘うそである。

　これこそが、先さき程ほど安美亭で受けた三つ目の依頼なのだ。サシャが誰だれかに心を奪うばわれている、とすればモラセスとクアトロでは最悪暗殺に動くかもしれない。だからヘタに適当な人物の名を挙げるわけにもいかず、かといって遠方の地にいる云うん々ぬんとしてしまうと、モラセスはともかく、クアトロが家を飛び出し、殺しの旅に出しゆつ立たつしかねない。

　そんな様々なことをサシャが考こう慮りよした結果……モルトに白羽の矢が立ったのだ。

　モルトなら最悪二人に夜や襲しゆうを仕し掛かけられたとしても対処できるだろうし、万が一があったとしてもサシャの心が痛まない相手ということで丁度良かった……らしい。

　改めて考えてみればいろいろと酷ひどい話ではある。

「何ということだ、某は恋こいのライバルに仲ちゆう介かいを依頼してしまったというのか……」

「これは悲劇っす……。あ、でも、モルトさんを殺したら万ばん事じ解決しないっすかね？」

「うむ、それはそうだな」

　相変わらず妙みように呑のみ込みが良く、さらに意気投合も早い二人である。

　彼女らから殺意の籠こもった視線を向けられるも、モルトは平然としていた。一応ここも打ち合わせ通りだ。

　モルトはふわっふわする頭で必死に台詞せりふを思い出す。

「あ、あぁ、サシャ、そうだったのか。そんな目で俺を……。しかし残念だ、俺は女が好きなのだ。お前の気持ちには応こたえられな

い」

　棒読みで口にすると、今度はサシャが遠い客席を意識してオーバーアクションをする舞ぶ台たい俳優のように頭を抱かかえ、声を張る。

「あぁ！　何ということだ！　私の気持ちは受け入れてもらえないのか、何という悲劇……！　しかし私は諦あきらめないぞ、いつかきっと彼を振り向かせてみせよう！」

　そのわざとらしい演技をすることで、少女とオッサンを諦めさせつつも、野次馬達に自分達は二人の好意から逃にげるためにわざとやっています……と、アピールしているのだ。

　だが……である。

　サシャはこれで大だい丈じよう夫ぶだと思っているようだが、街に長くいるモルトからすると、ここの住人はノリは良くとも、察しはよろしくないので、多分ストレートに受け取るのだろうな、と確信に近い思いを抱いだいた。

　恐おそらく、最低でも半年は〝サシャ男色家疑ぎ惑わく〟がはびこるのは間ま違ちがいない。

　そして、こんな女みたいな顔をした男である。

　どっちつかずのボーダーライン上の趣しゆ味みを持っている連中がこれから大挙して押し寄せるに違いないのだが……サシャはそこまで思い至ってはいないようだ。

　……しかし、確かに見れば見るほど……綺き麗れいな顔をしている……。

　モルトは改めてサシャを見やっていると、そんなことを思った。

　こいつが自分に好意を抱いていることになっている以上……今なら何をしても……。

「あぁ、残念だ。残念でならない。二人からの好意すら無む礙げに……ん、何だ、モルト？　まだ台詞が……え？」

　モルトは滔とう々とうと台詞を述べていたサシャの両肩に手を置

き、正面から見つめた。

「サシャよ、お前の気持ちは嬉しい。しかし、俺は女が好きだ」

「あ、あぁ、うん？　……おい、モルト、その台詞、もう言ったぞ。しっかりしろ。酔っ払ってるのか！」

「そう、俺は女が好きだ……が、たまには何かの間違いがあってもいいだろう」

「……え？」

　唖あ然ぜんとするサシャに、モルトはその顔を近づけ、彼の唇くちびるを素す早ばやくも強ごう引いんに奪った。

　野次馬が歓かん声せいを上げ、クアトロとモラセスが絶ぜつ叫きょうする。

「ん、んん

――――!?」

　サシャが悲鳴のような声を上げるが、強きよう烈れつなアルコールが腹から脳へと送り込まれつつあるモルトには聞こえはしない。

　逃げようと背をこれでもかと反らせるサシャを固く抱だき締しめ、お辞じ儀ぎをするようにして追い込み、唇を離はなさない。

　サシャの手がバンバンとモルトの体を叩たたくも、無論、無視。

　周りの注視が痛いほどに……熱いホツト。それに背を押されるように、モルトはさらにそこから仕掛けていく。わざと唇を動かし、周りに聞こえるように音を立てたのだ。

　崩れてしまいそうなほど柔やわらかで潤うるおいある唇をたっぷりと嬲なぶっていると……モルトの体を叩いていたサシャの腕うでは徐じよ々じよに静かになり、彼の体からも力が抜ぬけていった。

　酒の場でノリと勢いで男と接せつ吻ぷんした経験を持つモルトではあったが、サシャの唇は完全にそれとは別物。もはや女のものと同じ……いや、むしろ極ごく上じようの女のもののようだった。

　瞼まぶたを閉じれば……いや、開いていても綺麗な顔があるので、どちらにせよ、美女に口づけしている感覚しかモルトにはなく……少し、テンションが上がった。



「ん……うぷぅ。ま、こんなところか。……こいつ、男のくせに唇まで女みたいだな……少し本気になっちまったぜ」

　心に妙な〝やっちまった感〟はあるものの、終わった今になっても体としては女としているような感じしかなかった。……アルコールの力なのか。

　モルトが抱き締めていた腕の力を抜くと、サシャはそのまま地面に倒れてしまう。

　モルトが唇を手の甲こうで拭ぬぐっていると、ハァハァという吐と息いきが聞こえてくる。出所はクアトロとモラセスである。二人は地面に膝を突いたまま、何故なぜか興奮した面おも持もちで息を荒あららげ、サシャとモルトを交こう互ごに見やっていた。

「……な、何なんすか、こ、この胸の高鳴りは……体の芯しんにきゅんきゅん来て、手足が震ふるえてくる感動は!?　憧あこがれの人の唇が目の前で奪われたというのに……何なんっすか!?」

「わからぬっ!!　今まで数十年という月日を生きてきた某それがしでさえも未経験だ……こんな興奮は……！　こ、これは、まさか……『寝ね取られ属性』という……禁断のアレなのか!?」

「そ、そんなのがあるんっすか!?　ということは、あたしも……そんな身の破は滅めつしかなさそうな趣味が……!?」

「恐らく、違いない！　そもそもサシャ殿という、言うなれば互たがいのそれまでの性せい癖へきからすると対象外の相手に同様に好意を抱いた関係から、近い何かを持っているのやもしれぬ！　つまり我らは……二人して同じ趣味の可能性が!!」

「つまり同好っすか!?　マジっすか!!　お仲間っすか!?」

　何だかまた意気投合を始めた二人をよそに、倒れたままのサシャにモルトは目をくれた。

　すると彼もまた、顔を紅潮させ、気が付くと「ハァハァ……」と呼吸を乱して、目め尻じりに涙なみだを溜ためてモルトを見上げており……何だか、モルトまで妙な興奮を覚えてくる。

　髪かみを乱して地に広げ、震える指先を己おのれの唇に当て、

弱々しくも秘部を守ろうとするかのように内うち股またになっている細く長い足……。まるで強ごう引いんにどこかの貴婦人を押し倒したかのようなサシャの姿は、モルトの心を盛せい大だいにかき乱した。

　青空の下、衆しゅう人じん環かん視しはおろか、寝取られ属性に目覚めた少女とオッサンに見つめられる路上という異常な環かん境きようではあったが、そこはアルコールがうまく誤ご魔ま化かしているようだ。

　いけないことをしてしまっている。だが、何故かわからない興奮が湧わき起こってくる。

　相手はよく知る男……だが、何だ、この感覚は……。

「あ、あぁ、すまん、サシャ。悪ノリが過ぎた。いや、きっと酒のせいだ。スピリタスの……。た、立てるか？」

　半身を起こしつつあるサシャに、モルトは手を伸のばす。だが、その手は弾はじかれた。

　一人で立ち上がったサシャは俯き、涙目のまま唇を拭うと、逃げるようにして人ひと混ごみの中へと駆かけて行く。

　そんな彼の後ろ姿さえ、モルトにはどうしても女子のそれに見えてしまう。

　サシャを止めようと伸ばした手は、自然とそのまま自身の唇へ向かっていた。

　あの交わった感かん触しよくは、紛まぎれもなく女のそれ……。

　頭が混乱しそうになる。酒のせいか。スピリタス。九〇度オーバーの生命の水。かつて地ち下か牢ろうでモルトが信しん頼らいし、尊敬する相手と初めて飲んだ思い出の酒。

　少なくとも心臓がバクバクと強い鼓こ動どうを生んでいるのは、それのせいに違いなかった。

「何やってるんっすか！　モルトさん、ほら、早くサシャさんを追わないと!!」

「その通りだ!!　ほら、行くのだ!!　そして仲直りをして……そこからさらに発展を……」

「そしてそれをあたしらが間近で漏もらすことなく観察して……ハァハァ」

「うむ、我らは未経験の興奮の坩堝るつぼへ足を踏ふみ入れるのだ……ハァハァ」

　完かん璧ぺきに息が合ってきたクアトロとモラセスを無視し、モルトは疑念とたっぷりの罪悪感を胸に抱き、ふらつく足のままで安美亭へと戻もどったのだった。

３

　安美亭のカウンターの隅すみの席。モルトの一番のお気に入りの席ではあるが、結局そこで何をするでもなく、半日もの間、突つっ伏ぷしたまま時を過ごしてしまった。

　スピリタスのせいでもあるが、それ以上に、心にある妙な感覚のせいだった。

　当初はモラセスとクアトロの二人から、早く追い掛かけろ、とせっつかれていたが、二時間も突っ伏していたらいつの間にかいなくなっていた。クラッツによれば、心に宿った情熱の正体をより正確に見み極きわめるため、そして見聞を広めるために、と、二人は連れだって図書館に向かったらしい。

　深いんだか浅いんだかよくわからない眠ねむりから覚めるなり、目の前には氷の入ったグラスが置かれる。モルトは礼を言うより先にそれをひと舐なめして、水であることを確かく認にんしてからグビリと飲んだ。水を飲む時はしばらくこのやり方になるだろう。

　腹と頭が酷ひどく重く、胸も含ふくめて何だか嫌いやな感じである。

　冷たい水だけでは流し切れないものがあった。

「モルト、何にする？」

　クラッツがさっぱりしたトマトリゾットを勧すすめてくるが、モルトは首を振ふる。

　すでに時刻は夜。夕食時のラッシュも知らぬ間に過ぎ去っていたので、モルトはウィスキーをロックで頼たのんだ。

「またお酒？　大丈夫？」

「……いいんだよ、何だか、そういう気分なんだ。金はある」

「体に悪いと思うんだけどなー。あ、いらっしゃ……サシャ！」

　モルトは危あやうく口にしていた水を噴ふき出しそうになったが……さすがにクラッツを日に四度も着き替がえさせるわけにはいかない。モルトは必死に口を閉じて、堪こらえた。

　モルトが見やれば、難しげな顔をしたサシャが確かに出入り口に立っていた。

　彼はモルトから視線を逸そらしつつも、隣となりの席に座る。

「私も、モルトと同じのを。……ジンあたりだろう？」

「それは水よ。今モルト、ウィスキー頼んだけど？」

　じゃあそれで。そうクラッツはオーダーを受けると、モルトとサシャからわざと離れた場所で、初めから球体の氷を使わず、わざわざ正方形の氷をアイスピックで削けずって丸くし、それをグラスに入れ、酒をゆっくりと注いでくれる。……しかし、そんな気き遣づかいもむなしく、結局サシャもモルトも酒が出てくるまで言葉を交かわしはしなかった。

　モルトはすぐさま丸い大きな氷ランプ・オブ・アイスが収まるグラスを口に運ぼうとするが、視界の端はしでサシャがグラスを持ち上げたまま止まっているのを見て……そこにそっと打ち当てた。

　優やさしく、弱々しい、乾かん杯ぱい。グラスが鳴って、氷が踊おどった。

　唇を湿しめらせると、モルトは腹に力を入れ、覚かく悟ごを決め

る。

「……昼間はすまん。つい、悪ノリした」

「……いいさ、酒を飲ませたのは私だ。潰つぶせれば今夜の飲み代も浮うくだろうと思った浅はかな考えもあったんだ」

　考えてみればサシャの報ほう酬しゆうは今夜の飲み代だった。つまり、今夜さえスピリタスで潰してしまえば、報酬の支し払はらいはしなくていい……となるわけだ。

　モルトはしてやられた感を少し味わいつつも、サシャを見る。

　サシャもまた、ようやく、そして躊躇ためらいがちに視線を合わせてくれた。

「仕事は完かん了りようした。二人を傷つけることなく、振り払えたんだ。……払うよ、今夜の飲み代ぐらい」

「……そうか」

　二人して、また、唇を湿らせる。

「なぁ、サシャ。こう言うのも何だが……髭ひげでも生やせよ、もっと男らしくさ。そうすりゃ変なのが寄ってこなくなるし、俺も……」

　俺も変な気が起きなくなる……と、言おうとして慌あわててモルトはグラスで口を塞ふさいだ。

　まるで変な気になっていたかのようだと言ってて気が付いたのだ。

「俺も……なんだ、モルト？」

「お……俺も……酔よっ払って悪ノリしたとしても、あんなことはしなくなる」

「生あい憎にくと髭は生まれつきてんでダメなのさ。何より似合わない。……だが、もう、あぁいうのはやめてくれよ、モルト。……しかもあんな強引に……」

「初めてだったか？」

ようやく心に余よ裕ゆうが出てきたモルトは、いつもの気分を取り戻しつつ、グラスを傾かたむける。

「あぁ、初めてだった」

──噴いた。しかも間の悪いことに、サービスのナッツを持って来てくれたクラッツの顔に向かって。

「……何、モルト。アンタ、叔父おじさん共々人に酒ぶっ掛けるのがブームなわけ……？」

ガンッと、乱暴に湿ったナッツの皿をモルト達の前に置くと、クラッツは二階へと消えていった。

「え、えーっと、サシャ……初めて……？　な、わけない……よな？」

サシャは少し頰ほおを赤らめつつ、俯うつむき加減に小さく首を振る。

「……正しよう真しん正しよう銘めいの……初めてだった……」

「そ、そんなわけ……!!」

「……男は、初めてだ」

モルトは一いつ瞬しゆん言葉に詰つまり……そして、笑った。

そりゃそうか、と、言われてみれば納なつ得とくだった。

「と、ともかくだ。もう、よせよ、モルト。私はその……そういう趣しゆ味みはないんだぞ」

「わかってる。俺もそういう趣味はないさ。……お前が女だったら危なかったけどな」

笑いながらモルトが言うと、サシャは一瞬驚おどろいたような顔をして……その後、恥はずかしげに微笑ほほえみ……モルトと声を合わせて笑った。

そしてまた、グラスを打ち付け合う。

　甲かん高だかくも心地ここち良い音がし、氷が踊る。

　二人が唇くちびるを湿らせる時、ふと、サシャの頬に赤みが差しているように見えたが……きっと、酒のせいだろう。もしかしたら自分の頬も子供のように赤くなっているかもしれない。

　それもきっと、酒のせい。

　モルトは、何とはなしにそう思った。

## ●第二話『雨の夜の女』

　雨の音が聞こえてきて、サシャはベッドの上で目を覚ました。

　左手は意識するより早く、ベッド脇わきに立て掛けておいた刀を握にぎる。その硬かたさ、重さを感じ、鞘さやの中に眠る刃はの鋭するどさを想おもいながら、サシャはベッドから体を起こした。

　かなり遅おそい時間なのだろう。耳には雨音だけ。人の気配など微み塵じんもなかった。

「……嫌な夜だな」

　サシャは目覚めてしまったことを悔くやみつつ、ベッド脇に転がしておいた魔ま光こう球きゆうを指でなで上げた。拳こぶし大だいのそれではあったが、今は亡なきグリコゥ国製の高品質なものなので、リキュールの外れにあるアパートの一室には十分過ぎる明かりをもたらしてくれる。

　石造りの平屋のアパートで、大昔からある古くさい部屋だ。とはいえ、大昔からあり続けることからわかるように、建物は堅けん牢ろうだし、火事にも強い。

　洒落しやれた男として知られるサシャにしては少々無骨過ぎる部屋ではあったが、当の本人はそれなりに気に入っている。各部屋に風ふ呂ろとトイレが備わっているという利点もあるのだ。これもまたサシャには嬉うれしい……というか、助かる。

　リキュールの中心街であるアルコ・ホールの外であるにもかかわらず、少々家賃は高めだが、それを差し引いても悪くない部屋だ。サシャはそう思っている。とても安心できる。

　実際、リキュール出身であり、実質的に街のトップである議長マドラーもこの平屋の一つに住んでいる。つまり、地元の人間があえて選ぶだけの価値があるのだ。

　しかし、そんな部屋であっても……雨の重圧からは守ってはくれ

ない。

　サシャは白に近い金きん髪ぱつを簪かんざしでまとめ、カラフルなマフラーを巻き、腰こしに刀を帯びて、逃にげるように部屋を出た。

　傘かさを差して、雨の中を歩む。室内で感じたままに、街は静まり返っていた。

　荒こう野やを行く旅人にとって太陽の光がどれほど有益で、夜の暗くら闇やみはどれだけ危険リスクがあるか考えるまでもない。だからこそ日が昇のぼると共に旅人は動き出し、彼らを相手にする関係で住民達もまた動き出す。つまりリキュールの朝は早いが、それに比例して夜も早いのだ。

　人ひと気けのない道ばたで、夜の雨の冷たさに身み震ぶるいしながら、歩みを速めた。

　明かりを、そして人の気配を求めるようにしてサシャが扉とびらを開いたのは……安あん美び亭ていだ。

　来客を告げるように、木製扉に取り付けられたカウベルが鳴る。食事処どころが好んで取り付ける柔やわらかな黄色い魔光球の光が溢あふれ、サシャを包んだ。

「……らっしゃい」

　大衆酒場とはいえ、日付もとうに変わった今ぐらいの時間ともなると、客はそう多くはない。というより、本当にまだ開いているのかどうか、不安になるほどだ。

　テーブル席で魔導士ギルドの三人の老人が仲良く酒さか瓶びん片手にイビキをかいている他ほかは、店主であるオーガのように大おお柄がらなグレーンがカウンターの奥に座って一いつ杯ぱいやっているだけである。強しいて言えばその彼の対面に、イビキをかいてカウンターに突つっ伏ぷしているモルトがいたが、これを客とみるかどうかはサシャには判断がつかなかった。

　金を持たなくても安美亭に顔を出すのがモルトという男である。差さし詰ずめ、グレーンが閉店直前から一杯やるのを目当てに現れ、おこぼれにあずかろうとしたのだろう。

「やってますか？」

「まだ、閉めてない。座れ。何にする？」

　ぶっきらぼうに聞こえる、短く区切った言葉だった。これはグレーンの生まれが言語の違ちがう遠方の地であったことから、未いまだにこんな喋しやべりというだけで機き嫌げんが悪いわけではない。

　サシャはカウンターの隅すみで潰れているモルトから幾いくらか席を空けて、腰を落ち着けた。

「そうだな。少し強めのを、適当に」

　この店でカクテルが飲めるのは看板娘むすめのクラッツがいる時だけである。夜がある程度深くなると、客と共にクラッツも店を離はなれてしまう。それ以降はグレーン一人で店を回すため、面めん倒どうな注文はしないのが常連の嗜たしなみである。こういう時は、お任せで頼たのむのがいい。

　グレーンは数秒考え、カウンターの下に設けられた製氷を行う魔導具から丸い氷を取り出してグラスに納めると、大きな酒瓶の中身を注いだ。

「少し、いい酒だ」

　グラスに注つがれた透とう明めいな液体の中で、透明な球体状の氷が回る。

　何の酒なのかも説明なく、ただ手元にあった酒を即そく座ざに出されたわけだが、グレーンはこういう時にふざけるような男ではない。サシャは躊躇ためらわず口を付けた。

　あまり経験のない種類の酒……芋いも焼じよう酎ちゆうか。唇に酒が触ふれるとほぼ同時に匂においが鼻び腔こうを抜ぬけて、それを察した。訪おとずれる、グッと濃こいめの匂い。異様に強いアルコールが鼻から抜ける。三〇……いや、四〇度を超こえているだろう。予想以上に強い酒である。

　グレーンはストレートでやっているが、あえてオン・ザ・ロックにしてくれたのは、彼なりの気遣いかもしれない。実際、普ふ段だんのサシャならまず頼まない度数である。

グレーンは自分のグラスの液体を呷あおる。大きなグラスにそれなりの量があったものの……一口だ。透明ではあったが、水というわけではないだろう。

酒に弱い印象のないモルトが潰つぶれている理由がサシャにもわかった。この度数の酒をグレーンに合わせて飲めば三杯と持たないだろう。

グレーンは口内の酒を転がしながら、ゆっくりと鼻で息を吸い、吐はく。そして今一度吸い……恍こう惚こつとした表情で口内のそれを飲み干し、深い息を吐いた。

「……何か、喰くうか？」

「こいつに負けないもので。適当に。……あー、魚か、その辺で」

グレーンはチェイサーとしてグラスに水を注いでサシャの前に置くと、酒瓶片手に奥の調理場へと姿を消して行った。多分、飲みながら作る気なのだろう。

「雨の夜に、閉店間ま際ぎわじゃ文句は言えないな」

フッと小さく笑いつつ、サシャはグラスに唇を這はわせ……咳せき込みかける。

ついいつもの調子で格好をつけてしまい、カクテルのようにグイッといってしまった。

周りにいるのは潰れた男と老人だけなのを今一度確かく認にんし、サシャはホッとして、細い指先でグラスの中の氷を回す。少し解けるまでチビリチビリとやることにした。

度数はウィスキー並みかそれ以上に強いが、味わいもそれらに負けない。独特の臭くさみこそあるものの、ふんわりとした香かおりや芋由来と思おぼしき甘みが隠かくれており、それを舌と鼻で探さぐってみれば思いの外楽しめる。とはいえ、氷によってにわかに冷え始めており、それで臭みやアルコールのキツさ共々、味わいの深さまでも大人しくされている気がした。

そういえば、とサシャは透明な液体を両手で包みながら、ふと思い出す。

　いい焼酎はうまく燗かんを付けると本来の深い味わいが表に出ると聞いたことがある。燗を付けるだけならやってもらえるかもしれない。これを飲み干してもまだいけそうなら、頼んでみてもいいだろう。

　透明なグラスの中で、透明な液体が揺ゆれ、透明な丸い氷が踊おどる。

　サシャはカウンターに両りよう肘ひじをつき、グラスを両手の指先で支えて、しばらくその美しい光景を見つめていた。

　雨の音は聞こえない。聞こえるのは、老人とモルトのイビキだけ。

　安美亭に来て良かった、とそう思う。

　雨の夜に一人はいささか重い。強い酒と安心できる人間の気配が、ありがたかった。

　幾度目かの焼酎とチェイサーの往復を経て、酒の味がやんわりと変わって飲みやすくなってきた頃ころ……安美亭の扉が乱暴に開かれた。

「やってる!?　ちょっと、かくまっ……あぁ、もう！」

　燃えるように赤く長い髪かみを湿しめらせた小柄な女が、店の外を一度見やった後、慌あわてて中へと入って来る。ガーナだった。人種がサシャ達と違うらしく、パッと見はほぼ同じながら、二十歳はたちそこそこの彼女でも子供のような身長しかない。だが、その体のラインは完全に成人のそれであり……要は、純じゅん粋すいに成人女性を小さくしたような、そんな姿なのだ。

　なお、掌てのひらにすっぽりと収まるものの、体のサイズからするとなかなかに大きな張りのある胸や、キュッという感じに挑ちよう発はつ的なヒップラインをしているのは人種の違いなのか、彼女が単に魅み力りよく的な女性であるからなのかは、わからない。

　どちらにせよ、その少女のように小さいくせに大人の体という彼女の容姿と、姐あね御ご肌はだの快活な性格は街の住民達に好かれていた。

　店の外の気配を警けい戒かいしつつ、ガーナは老人達のテーブル

の上から酒瓶を一つ取ると、それを手にしてグイッと呷る。彼女の喉のどがゴクリと鳴ると同時に、カウベルが激しく鳴って、三人の男が店内になだれ込んで来た。

「ガーナ、まさか逃げる気なのか？　約束が違うじゃないか」

　大おお振ぶりのナイフを腰に帯びた如何いかにも粗そ暴ぼうそうなガタイのいい男が二人、そして金持ちそうな小男が一人。小男は細目でニヤついた笑えみを浮うかべており、不細工というわけではないが、どこかしかいやらしさが染しみついている顔だと、サシャは思う。

　派手な服装からして裕ゆう福ふくな商人とその護衛が二人、といったところか。

「約束？　ハンッ、アタシが酔よっ払ぱらった時に取り付けたもんだろ!?　どんだけ意味があるんだか！　何だったら出るとこ出て確かめてみようか、え、ヒオチ!?」

　ガーナは強気に言ってのけると、酒瓶をもう一度呷った。ヒオチと呼ばれた男は護衛の二人と共に声を上げて笑い、懐ふところから何やら書類を取り出して見せる。

「この借用書は公的なものだ。立会人にはリキュールの政まつりごとを執とり行う議員三名の名までついている。当然、ガーナ、君のサインと拇ぼ印いん……あぁいや、君のは手形だな。ともかく完かん璧ぺきなのですよ」

　サシャが横目で見やれば、確かに街の議員のフラついた連名があり、拇印が押されている。そこにはガーナの名と、叩たたきつけたような赤い小さな手形がはっきりとあった。

　ぐっ、とガーナが口の端はしから垂れた酒を手の甲こうで拭ぬぐいつつ、顔をしかめる。ガーナは強気な表情が似合う女性のせいか、こういう表情の時は酷ひどく弱々しく見えた。

　サシャは介かい入にゅうしようかとも考えたが、状じよう況きょうをまだ呑のみ込めていない以上、動くに動けない。純粋にガーナに非がある可能性もある。か弱い女性が常に被ひ害がい者しやとは限らない。か弱い女子供を虐しいたげる者は大だい嫌きらいだが、女であることを利用する者も、サシャは好きではない。

「ガーナ、君は確かにこの私と契けい約やくしたのだよ。……私の物になる、とね。一年間だ」

「そんなふざけた話が通るか！　あの賭と場ばを仕切ってる胴どう元もと連中なら絶対通さな──」

「普ふ通つうはな。だが、この契約を持ちかけてきたのは君だ、ガーナ。だから、通る。その小ぶりなんだか大きいんだかわからんが、何とも魅力的な胸を私の腕うでに押しつけながら無心したのだ。……金を貸してくれ、と。担保は己おのれの体でいい、とな。念のため今日の昼、方々で確認したが、そういうことならば致いたしかたないと了りよう承しよう済みだ」

「そんな!?　だ、大体、もう金は返しただろ!?」

「さっきも教えたが、利子が足りんと言っているんだ。この借用書にはな、利子を含ふくめた全額を期限内に返さない限りは担保を支払う、となっている。君は借りた金と利子の一部を支払ったに過ぎない。祭りの気分に浮かれ、詰つめが甘かったのだな。その愚おろかさの代だい償しようを体で払うといい。……なぁに、悪いようにはせんよ。一年、じっくりその引き締しまった、小柄で抱だきやすそうな体を楽しませてもらうだけだ」

　ヒオチが笑みを深くする。下げ卑びた顔だった。

「いやぁ、長かった。この街を訪れ、ガーナ、君を見つけてからこういう機会をずっと待っていたのだよ。慣れぬ賭かけ事に興じて、都合良く私を頼たよってくれるとは地上に顔を出したというエビの女め神がみの加護があったのだろうな、ついてる、私はついてる。うんうん」

　女神？　と、サシャは一いつ瞬しゆん疑問に思うものの、借用書が作成された日付を見て、今現在下水道に君臨するエビーザのことなのだろうと察し、ようやく事の全容が見えてきた。

　街の伝統である漢おとこ祭まつりの夜、久方ぶりに最深部に漢達が到とう達たつし、祈いのりを捧ささげることができた……というか、祈りの対象である女神を漢達が連れ帰ってきたために、あの夜は街中異常なまでの盛り上がりを見せた。

　人々はこの事態を一晩中語り明かし、酒しゆ杯はいを重ね……そ

してまたある者は、朝までやっている賭場でその熱気を財さい布ふの中身と共に発散したのだ。

　その時に派手に散財した者が多数いる……というのは、サシャも噂うわさに聞いていた。

　賭と博ばくの駆かけ引きを知らぬ素人しろうとが、祭りの陽気に誘さそわれて足を踏ふみ入れてしまうのは仕方ないが、程ほど良いところで切り上げられないのは自じ業ごう自じ得とくとしか言いようがない。

　胴元や博打ばくち打ち達は浮かれてやってくる素人を待ち構えているのだから、当然そうなる。ガーナもそんな一人だったのだろう。

　しかし、とサシャは思う。ジンとかいう男をはじめとした、この街のゴロツキ達はそれほどにあくどいやり口はしないはずである。程良く勝たせ、程良く負かす。手に汗あせ握にぎる勝負の緊きん張ちよう感かん、期待や興奮、勝利の快感、そんな博打の楽しみを与あたえ、その報ほう酬しゆうとして最後にコロリと負かして金をいただく。場合によっては最後にもう一度ぐらい相手に勝たせてやって、勝利の余よ韻いんを土産みやげとしてくれてやったりもする。

　有り金全部せしめ、その上借金までして喰らい付いてくる素人を相手にするものだろうか。祭りという特とく殊しゆな状況だし、ベテランの胴元とて、人が多くてガーナの存在を見み逃のがしてしまっただけなのかもしれない。しかし……。

　サシャは何とはなく、引っかかる。ヒオチの嫌いやな顔のせいか、それとも……。

　何にせよ、話を持ちかけたのはガーナであり、正式な借用書があり、返済しきれていないというのならば……サシャが介入するわけにはいかなかった。借金の踏み倒たおしに手を貸すのはさすがにまずい。

「ず、ずるいって！　あの時、アタシバカ勝ちして、借りた金はすぐに返しただろ!?　利子だって言われた額だけ……」

「そうです、あなたが勝って、返済可能になったタイミングでその時の利子を含めた借金総額をお教えし、あなたに支払っていただい

た。……それから六時間後の朝に、ね。……その六時間分の利子、あなたは期日までに払っていただけなかった。故ゆえに……」

　ガーナは懐から財布を取り出すと、ヒオチに投げつける。だが、それは護衛の一人が素す早ばやく大振りのナイフを抜き、空中で両断する。二つになった紙し幣へいとコインが床ゆかに転がった。

「借用書には、期日までに支払わなければ、とあるんですよ？　期日最終日である昨日、つまり二時間前ならともかく、今いま更さら払ったところで……。んふふふふふ♪　いやはや、そこそこに金を使ったかいがあるというものです」

　ガーナは青い顔をして辺りを見み渡わたし、サシャを見る。だが、この状況でも淡たん々たんとしてカウンターについている様子から助けは期待できないと察し、彼女の赤い瞳ひとみはすぐさま潰つぶれているモルトへと移っていく。ガーナはカウンターの隅すみのモルトの所へ走り寄ると、その頭を引っぱたき、肩かたをつかんでぐらぐらと揺らした。

「モルト、起きなって！　アタシのピンチだよ!!」

「ん～……チクビ？　しゃぶっていいのか？」

「死ね!!」

　ガーナはモルトの額に膝ひざ蹴げりを放ち、再び彼をカウンターに突つっ伏ぷさせた。

　なかなかに酷い扱あつかいである。

「もういいでしょう。私にも予定がある。今日の仕事が始まる前に、ガーナ、君を一度抱いておきたいのですよ。……さぁ、ワガママ言わずに……」

　カウンターに後ろ腰ごしを密着させ、そこからさらに怖こわがるように仰のけ反ぞったガーナに、ヒオチの手が伸のびる。ペンより重い物を握にぎったことがないような手で、ガーナの肩を撫なで、そしてその胸むな元もとへ下がっていく。

　ガーナは青い顔のまま、泣きそうな瞳で、サシャを見てきた。

　助けを求めている。だが、動いたところでどうにかなるものなの

か……。

「うっ……」

　球体のような胸を鷲わし摑づかみにされ、たまらずガーナが呻うめいた。



　芋いも焼じよう酎ちゆうを少々多めに口に含み、口内を転がす。鼻から大きく息を吸い、臭くさみと共に風味を楽しみ……最後に、鼻の奥と喉を焼く。強きよう烈れつなアルコール度数が、腹と頭にグッと来る。

　その刺し激げきに身を任せるように、サシャは声を吐はいた。

「そのぐらいにしておけ、ヒオチとやら」

　ヒオチが笑みを消し、濁にごった瞳を向けてくる。

　護衛の一人が動こうとするも、上げられたヒオチの手がそれを止めた。

「……何か用かな？　あぁ、目に毒か。どれ、続きは私の宿に行ってからにしよう。騒さわがしてしまって、すまなかったね」

　ヒオチが奢おごりだとでも言うかのように幾いくらかの紙幣をカウンターに置こうとする。

　その手を、サシャはつかみ、鼻先がくっつく程に顔を近づけ、ガンを飛ばす。

　護衛の二人がナイフを抜ぬき、サシャに突き付けてきたが、そちらは気にもしなかった。

　相手の口の中に酒臭い息と共に言葉を投げ込むようにして、サシャは言う。

「そうじゃない。アンタのやり口の話さ。……今し方耳に挟はさんだ程度の情報しかないが、それでもいささか汚きたない」

　ヒオチが驚おどろいた顔のまま冷ひや汗あせをかいていたので、汚いと言ったのはアンタの顔のことじゃない、安心しろ、と付け加えてやった。

「借金返済可能になった時点、つまりはガーナさんが勝ちの流れに乗った時、ということだろう。そのタイミングを狙ねらったように客観的には感じた。……勝ちの流れを切ってまで借金を返すというのは実際難しい。また、返済時、足りないというのならその場で言うべきことでもあるだろう。そして祭りから……昨日だったか

な？　期日までの間、一度も催さい促そくをせず、日を跨またいだ途と端たんに担保を回収しに来るというのはどうにも……な」

　ヒオチがサシャの手を払い、距きょ離りを取る。護衛も退いた。

「まるで……私がガーナをハメたかのような言い方をするね、君は」

「そうじゃない。やり口がいささか汚い、と言っているだけさ。議員の連名と言ったところで、当日は漢祭りだ。飲むだけ飲んで、誰だれも彼もがへべれけだった。酔よっ払いのサインと拇印にどれだけ信しん頼らいがおけるのか、いささか怪あやしいと私は思う。とはいえ、ガーナも領収書なり何なりを受け取らなかったのはミスと言える。どっちもどっちだ。……自警団なり、署名した議員なりにきちんと状況を説明し、今一度借用書の信しん憑ぴよう性せいを確かく認にんし、その後、人道的な解決の道を模も索さくするのがいいのではないか」

　まるで沙さ汰たを言い渡わたす裁判官のように、サシャははっきりと、力強く告げた。

　酒が回っているのをサシャ自身が感じる。普ふ段だんはできるだけこのような喋しやべり方はしないように意識しているのだが……。

　ヒオチはあまりに堂々たるサシャの言葉に一いつ瞬しゆん怯ひるむも、またすぐに笑えみを浮うかべた。

「ほぉ、そこまで言うか、美び丈じよう夫ふの剣けん士し。……ふむ、言われてみれば署名した議員はいささか酔っていたし、こちらも怠たい惰だだったのは否定できない。しかし彼女のミスでもあるし、そもそも発ほつ端たんは賭け事に興じた愚かさ故でも……。となると、これはもうどうしたものか。いっそゲームでもして白黒ハッキリつける、というのはどうかな、ガーナ？」

「なんで、そんな！　アタシは今、サシャが言った……その、人道的な解け──」

「おやおや、賭け事で身を滅ほろぼし、女の武器を使って借金を誘い、その上契約を踏み倒して何が人道的なのか！　面おも白しろいことを言うのですね。君をよく知る街の人々が知ったらさぞがっか

りすることでしょう。……あのガーナという女、姐あね御ご肌はだだの、姐ねえさんだのと呼ばれておきながら中身は女め々めしいクセ者だ、と。互たがいに非がある、故にちょいとしたゲームでケリをつけようとした私の提案からすら逃にげる女ですから、当然そうなるでしょうね」

　安い挑ちよう発はつだ、とサシャには感じられたが、ガーナはそうは思わなかったようだ。

　彼女は手にしていた酒を一息に飲み干すと、気き炎えんをあげる赤い瞳をヒオチに向ける。

「……わかったよ。その挑発……乗ってやる。やってやる。ただし、きちんとしたゲームでだ。もしアタシが勝ったら二度とアタシにそのキモいツラを見せるな」

　ガーナにとって、街の人々から姐さんと呼ばれるのは案外大事なことなのかもしれない。

　遠方の地よりはるばるやって来たこの地で、小こ柄がらで、ともすれば少女として扱われかねない彼女が、一人で生きていくには相当な気き概がいなくしてはやっていけないのだろう。

　そんな中で生来の気きっ風ぷの良さを見せ、親しまれ、自分より大きい男達はもちろん、年上の者達にさえ姐さんと呼ばれるようになった……そんなこの街での在り方は、彼女にとって特別な価値を持つものなのかもしれない。

　そこまで考えた時、サシャの中にあった止める気は萎なえた。何が大事かは、周りが決めるのではなく当人が決めるものだ。……しかし……。

「いいでしょう。何でしたらあなたがお支払いした借金と利子、全額お返しもしますよ」

　護衛が中身の詰まった革かわ袋ぶくろを取り出し、カウンターに置いた。

「……随ずい分ぶんと気前がいいのだな、ヒオチとやら」

「金貸しは小回りと信用が第一にして全すべてですからね。彼女が全てを擲なげうってきているのですから、こちらも同等のものを

張って相手をしてやるのが筋でしょう」

　ヒオチは店の隅に落ちていたガーナの財布からコインを一枚抜いた。ロテ国の一番大きな硬こう貨かである。王おう妃ひシャルロッテの横顔が刻まれ、反対には神聖な獣けものであり、ロテ国の守護者とされる伝説上の幻げん獣じゆうコアラの顔が描えがかれたコインだった。

「コイン・トスでいいでしょう。表裏で互いに賭かけ、私が負ければカウンターの上の金を置いて退散、君が負ければ私に体を捧ささげてもらう。証人はそこの美丈夫だ……いいかな？」

　断る、止める、という選せん択たく肢しはなさそうだった。サシャは頷うなずくしかない。

「待ちな。コイン・トスは腕うでのいい手品師や博打ばくち打ちからすると、キャッチする際に裏表をコントロールできるって聞いたことがある。アタシがやる」

「それはこちらとて同様。ガーナ、自らの身がかかっている君を信頼できるとでも？　美丈夫にしても君寄りだ。……そうだな、では、こうしよう。トスしたコインはキャッチせずに、床に落とす。それならまずコントロールはできまい」

　ガーナは鋭するどい目つきのまま、頷いた。この女、案外に博打打ちの性しよう分ぶんなのかもしれない。

　サシャには彼女とさほど積極的に関かかわった記き憶おくはなかったが、普段はもっと気前のいい、余よ裕ゆうのある目をする女だったはずである。小柄ながら、素晴らしい体付きをしているのと同様、そのギャップが彼女の魅み力りよくなのかもしれない。

「では、勝負だ。コアラは表、王妃は裏。ガーナ、君はどちらに賭ける？」

　何とはなしにガーナ、ヒオチ、そしてサシャの三人は円えん陣じんを組むようにして立っていた。

「コア……いや、王妃シャルロッテに賭ける。アタシは裏だ」

「いいでしょう。私は表、幻獣コアラ。ではこのコインにて、いざ尋じん常じように……勝負！」

ヒオチがコインを指で弾はじいた。

コインが舞まう、運命が踊おどる。

ヒオチはあのいやらしげな笑みのままガーナを見つめ、ガーナもまたその視線に引っ張られるようにしてコインではなくヒオチを睨にらんでいた。

頭上を越こえたコインが激しく回転しながら、三人の丁度中央を落ちて来る。その瞬しゅん間かん、サシャは気付いた。……見えたのだ。

──このコイン、両方ともに表だ。

コアラだけ。王妃がいない。イカサマ用コイン。どこかですり替かえられたのだ。

止めるか。いや、ヒオチは言った。〝このコインにて〟と。

よくよく考えてみれば、このコインの表と裏どちらにするか、と問うのが普ふ通つうのところ……あえて表裏、どちらに賭けるかを決めてからヒオチは〝このコイン〟と指定していた。

全て、初めから仕組んでいたのか。それとも普段からこの手のコインを持ち歩き、使い勝手のいい道具としているのか。

何にせよ、ガーナの負けは確実だった。所しょ詮せん口頭上での約束事とはいえ……恐おそらく今し方の彼女の性格や顔を見るに、たとえイカサマだとしてもその体を渡すだろう。

それだけの女だというのは、サシャにもはっきりとわかった。

荒あら波なみに立ち向かう女というのは、魅力的である。その覚かく悟ごには敬意を払はらうべきものだ。

だから、サシャはあえてコインを止めようとはしなかった。ただ、彼女ガーナとヒオチ、どちらに勝利の女め神がみが微笑ほほえんでいるのか……それを見届けようと思った。

踊るコインがサシャの目の高さに達した瞬間、愛刀の鯉こい口ぐちを切る。それはまさに電光石火。リキュールーと謳うたわれる初撃最速の一ひと振ふり。居合いの技わざ。

　サシャはその刃はで、回転するコイン、その側面、二ミリに満たない厚みを捉とらえた。二つに斬るスライス。

　抜かれた刃にヒオチ達がリアクションを取る間もなく、コインは二枚となって宙を舞う。一枚は何ら影えい響きようを受けずにそのまま下へ、一枚は天てん井じよう近くまで今一度飛び上がる。

　奔はしった刃が再び鞘さやに収まった時、半分の厚みになったコインが一枚、床ゆかを跳はねた。全て終わった後になってヒオチ達はサシャの居合いに驚き、身を反らす。

　……だが、ガーナだけはサシャの動きに揺ゆすぶられず、ヒオチを見ていた。

　床を跳ねたコインが再び床をノック。それと同時に空中に今一度上がったコインは重力に引かれ、サシャの手の中に吸い込まれるようにして収まった。

「貴様ッ、何をする!?」

　護衛の二人が慌あわててヒオチの前に出てナイフを抜いた。

「別に、何も。それより勝負の結果が出たはずだが、そちらは気にならないのか？」

　その言葉に、ヒオチと護衛、そしてサシャはゆっくりと視線を床へと落とした。

　サシャを除いた全員が目を見開き、息を呑のむ。

　床の上にあったのは……何も描かれていないコインだったのだ。

「バ、バカな……まさかコイツ、今の一瞬で……コインを斬きったのか!?」

「ロテ国の硬貨は銀の含がん有ゆう量が多い。さほど難しくはないさ。……それより、勝負の行方ゆくえを確認しようじゃないか。ガーナ、ひっくり返してみるといい」

　ガーナが床へと手を伸のばすと、ヒオチがハッとした表情をする。何か彼が言おうとするが、それより先に……五人の視線の中、コインがひっくり返され、コアラが顔を覗のぞかせた。

「コアラは表。その反対が出ていた。ならば、このコインは裏だった。つまり……」

「アタシの勝ちだ！」

「バカを言うな！　この男が剣けんを使ったのですよ!?　つまり、勝敗に手を加えた、故ゆえにこれは無効試合ノーゲームだ!!」

「回転に影響するようには斬っていない。まぁ、それを置いておくとしても空中に舞ったコインを剣で斬ってはいけないというルールはなかったはずだ」

「そんなことまでルールを制定する奴やつなどいない！」

「それもそうか。では、こうしよう。私の手の中にあるコインをここで確認し、それから本当に尋常な勝負をする……それでどうだ。信用第一の金貸しさん」

　ヒオチが脂あぶら汗あせを垂らして呻うめく。そして、指で何か合図をし……護衛の二人が動いた。大おお振ぶりのナイフが左右からサシャを狙ねらう。

　サシャは握にぎっていたコインをヒオチの顔に向かって投げつけ、抜ばつ刀とう。居合いの一振りで二本のナイフの刃を宙に飛ばす。そして一人の鳩尾みぞおちに蹴けりを叩たたき込み、続け様に峰みね打うちでもう一人の護衛の肩かたを砕くだいた。

　最後に目を見開き固まっていたヒオチの胸むな元もとに、白はく刃じんを走らせる。

　空振ったようにも見えたが、それでもヒオチの上着は裂さけ、懐ふところに納まっていた契けい約やく書しよが二つになって床に落ちたのだった。

　ヒオチの顔に当たって跳ね返り、今一度宙を舞っていたコインの片割れをサシャは握り取り、そしてもう一方の手で小ずるい金貸しの鼻先に剣を突つき付けた。

「さて。そろそろ失うせる頃ころ合あいではないかな？　ヒオチとやら」

「……貴様、覚えていろ……」

「三番街の何でも屋と違ちがって物覚えは良い方だ。安心していい。両面が表のコインのことは忘れないさ」

　コインを指で弾いて飛ばすと、ヒオチはそれを憎にくらしげに受け取ったのだった。

「……クッ。行くぞ、役立たず共！」

　護衛が互いに肩を貸すようにしてヒオチと共に店を出る。その気配が遠ざかっていくのを感じてから、サシャはまた再びカウンターの椅い子すに腰こし掛かけたのだった。

「……あ、ありがと。サシャ。助かった」

　ガーナが二つに斬られた財さい布ふを拾って、隣となりの席に座った。

「やり方がスマートじゃなかったな。少々差し出がましいことをしてしまった。……酒が強すぎて、頭が回らない。許して欲しい」

　サシャが苦く笑しようすると、ガーナは首を振った。

「あのコイン、両面が表だったんだ？」

「あぁ。恐らく君が表に賭ければ両面が裏のコインが宙を舞っただろうね」

「助けてくれたんだね」

「いや、助けてないんだ」

　え？　という顔をするガーナに、あえてサシャは視線を向けなかった。

「私がしたのはゲームを平等なものにしたところまでだ。床を跳ねたコインがどちらの向きになるかまでは、わからなかった。だから今のゲームの勝ちは、君の勝ちなんだ」

　切っ先でどちらになるか、コントロールしようと思えば恐らくできただろう。

　だが、それはあえてしなかった。

　ガーナは明らかに勝負をしていたのだ。

　自らの体がかかっているというのに、あの短時間で状じよう況きようを割り切り、己おのれの不利を呑み込んで賭けに望んだその心意気は、尊重して然しかるべきだった。

「……やっぱり、〝ありがとう〟だよ。十分に助けられてる」

　ガーナが訥とつ々とつと祭りの夜の出来事を語ってくれた。

　それによると、ヒオチがガーナを賭と場ばに誘さそい、そこで大負けしたものの、酒を奢おごってくれていた彼に金を借りて勝ちに勝って、大金を手に入れたのだという。それで気が緩ゆるんだ……ということらしい。

　きっとヒオチは初めからガーナ狙ねらいで仕組んでいたのだろう。

　大勢がやって来る祭りの夜だから胴どう元もとの管理も甘くなるだろうし、その中の一つの卓たくがガーナをハメるために、ヒオチの子飼いで占しめられていたとしてもおかしくはない。

　隣に座って反省するように俯うつむき、深くため息を吐つくガーナに視線を向けた。

　今でこそ萎しおれた花のようだが、普ふ段だんはサバサバとした性格に気高さを見せている。小さな体にそんな魂たましいを持つ、そのアンバランスさは彼女の体つき以上に魅力的だろう。

　男の人生に於おいて女子供は獲かく得とくすべき目標であり、故ゆえに彼女らは被ひ害がい者しやであり続ける。……そんなことが書いてあった本を、幼い頃ころに書庫から持ち出して、大人ぶって読んだ記憶がある。当時はちんぷんかんぷんだったが、今ならその言葉が何を指しているのか、嫌いやというほどにわかった。

「……雨の日は嫌だな」

「なんだい、それ？」

「雨の日が嫌きらいだってことさ。特に一人でいると尚なお更さらだ。……だから、飲みに来たんだ」

　ガーナが赤い髪かみを掻かき上げ、何かを思い出そうとする。

「……誰だれだったか、同じようなことを言ってる奴がいたっけね」

「雨の日が好きな奴なんてそうはいないさ」

「……アタシは、割と、嫌じゃない。今はね。今夜は奢らせてよ」

　ガーナはヒオチが置いていった革かわ袋ぶくろをつかみ上げると、子供のような顔で笑った。

　そんな彼女もまた、魅力的だとサシャは思う。

「待たせた。できたぞ」

　ノシノシと床ゆか板いたを鳴らしながら、店の奥からグレーンが現れる。その手には酒さか瓶びんと大皿があった。パーティ料理などに使うものである。その上にあったのは、これまた大きな銀色のアルミホイルの包み。──ホイル焼きだ。調理しているはずなのにほとんど料理の匂においがしてこなかった理由がサシャにもようやくわかった。

「グレーンさん、酷ひどいですよ。揉もめ事だったんですから」

「わかってる。だが、お前がいた。だから、心配しなかった。いざとなったら、モルトも……アイツは、ダメか」

　グレーンが牙きばのような犬歯を見せて笑う。ガーナは「こっちにとっちゃ人生賭かけた一大事だったっての」と苦笑し、サシャも笑った。

「この料理、火加減が、難しい。失敗すると、硬かたくなる。火の側そばを離はなれられなかった。ガーナも、喰くえ。多めに、作っておいた」

　グレーンはガーナの分の芋いも焼じよう酎ちゆうを用意すると……ナイフでアルミホイルを裂いた。

　溢あふれ出る、湯気。そして……涎よだれを誘う匂い。

　思わずサシャはガーナ共々、湯気の中に目を凝こらす。これ

は……。

「牡蠣かきのホイル焼き、だ。味み噌そ味あじにしてみた」

　東側の調味料だ。最近の流通の変化に合わせ、あちら側の味を安美亭では積極的に取り入れようとしているらしく、これもまた、その一つらしい。

　具材はプリッとした大振りの牡蠣、そっと横に控ひかえている賽さいの目状の焼き豆どう腐ふが嬉うれしい。目を凝らしてみれば、何気にほうれん草も入っているようだ。

　それらが、とろりとした濃のう厚こうな味噌だれをこれでもかと纏まとっている。

　グレーンは箸はしと、気を遣つかってフォークも用意してくれるが、サシャは迷わず箸を選んだ。それで、湯気を上げる牡蠣を摘つまむ。

　生の時のような面めん妖ような形状ではなく、柔やわらかでありつつもぷっくりと膨ふくらみ、ぬらぬらとした味噌だれを纏うその姿は、喰い手を妖あやしく誘う。

　舌より先に、鼻で味わった。濃厚で、ほのかに甘みの混じる味噌の香かおり……。

　サシャは生なま唾つばを呑み、牡蠣を口へ。

　火傷やけどしそうな程ほどに、熱い。だがそれ以上に味噌の味。酒の肴さかなとしての味の濃こさが強い。甘く、塩気もあり、そして何よりコクが強い。牡蠣の旨うま味みが溶とけ出ているのか。

　食はむ。むっちりとした牡蠣の身の歯は触ざわりから一いつ拍ぱくおいて、磯いその香りがにわかに漂ただよい、味噌の甘みとはひと味違う、牡蠣の甘みや旨味が口内を占めていく。

　その味に、やられた、という気持ちでサシャは瞼まぶたをキュッと固く閉じた。

　だが、口は動く。牡蠣がいい。良い食感、良い香り、良い味だ。たまらない。

そうしている内に、不意に爽さわやかな香りが鼻から抜ぬけた。何だ？　とサシャは目を見開くものの……どうやら、柑かん橘きつ類るいが隠かくし味として仕込まれているようだ。恐おそらく柚ゆ子ず。それの皮を細かくしたものを、少量、臭くさみ消しとして味噌に混ぜたのだろう。

サシャは思わず笑えみを浮うかべて呑み込むと、その余よ韻いんが残る内にグラスの芋焼酎を口に運んだ。強い味と強い味。だが、不思議と喧けん嘩かはしない。

また、一ひと悶もん着ちゃくの間に氷が解けたことで、サシャに丁度良い度数になっているようだ。とはいえ、水割りではないので、調子に乗ってまたグイッと多めに飲むと強きよう烈れつなのが来る。

サシャはむせそうになるのを我が慢まんして、牡蠣と共に鉄板で味噌を纏う豆腐に箸を伸ばした。指先程度のそれには、見事に味噌の味が染しみている。もう少し大きくてもいいようなものだが、そうすると味が染みる前に牡蠣に火が通り過ぎてしまうから、あえて小さくしているのかもしれない。実に良い味がする豆腐だった。

おまけのようにして入っているほうれん草も、摘まんでみれば他の食材よりもたれが多く絡からまるために、味噌だれそのものを楽しむ意味合いがあるようだ。

牡蠣は牡蠣で、ほうれん草はほうれん草で、酒が進む。

「うまいよ、グレーンさん。いい味だ」

「いつも、出せるもんじゃない。牡蠣は、入にゅう荷かした、その日、だけ、だ」

口の端はしについた味噌を拭ぬぐいつつ、グレーンは少しばかり照れるようにして、言った。

うまい肴は、酒を進める。サシャはもう一いつ杯ぱいもらう際、燗かんを頼たのんでみた。グレーンは快く応じてくれる。三人分用意してくれるようだ。

残っていたチェイサーを飲み干し、サシャは一息ついた。

心地ここち良い酔よいが、体を占めている。体中がとろけそう

だった。

　ふと、隣のガーナが体を寄せてくる。

「……雨の日だって、いいことはあるよ。晴れてる時と、何も変わらない」

　君が言うのか、と、サシャが苦笑しているとグレーンが燗した酒を陶とう器きの杯さかずきに入れて出してくれる。少し水を足して寝ねかせたものを燗したというので、サシャは怯おびえることなく口を付けた。人ひと肌はだ程度のそれは、先程とはひと味もふた味も違うまろやかな酒になっていて、少し驚おどろいた。もちろん、ほぼストレートの状態で口を付けた時の方が酒の個性の強烈さはあったものの、今の方が風味と甘みが立っていながら、ずっと飲みやすい。

　酒が、柔らかいのだ。

　ホッと一息ついた時、臭みはコクなのだと酒自身に教えられたような気がした。

　芋焼酎なら、自分はこれだ。サシャは胸の内で頷うなずいた。

「……いい料理に、いい酒だ。最高だ」

　しかし雨はまだ降り続いている。夜は、明けない。

　サシャが窓の外に視線を向けていると、その顎あご先さきをガーナの指が這はった。

「同じ酒でも飲み方が違えば印象は変わるんだ。……雨の日だって、過ごし方次し第だいさ」

　サシャの肩かたに寄りかかりながら、顔を赤らめているガーナがはにかむ。

　確かに、そういうものかもしれない、とサシャは思う。

　……けれど、過去は変えられないのだ。おぞましく、そして哀かなしい記き憶おくは体の芯しんに刻まれた傷きず跡あとのようなもの。雨が呼び水となる以上、どうしてもそれは脳のう裏りに滲にじみ出てくる。

　サシャは瞼を閉じる。幼い頃の嫌な思い出が蘇よみがえりそうになるのを、酒で止めた。

　強い酒は全すべてを有う耶や無む耶やにして、夜を短くするものだ。

　もう一杯呷あおれば、夜は簡単に明けてくれることだろう。

　カウンターの奥の大おお柄がらな店主、体温を感じる隣のガーナ、そしてイビキを響ひびかせる老人達と同業者のモルト……。こんな夜に、彼らの存在はうれしい。

　今夜はこの店で、この強烈な酒こいつに寄りかかろう。

　サシャはそんなことを思いながら、杯さかずきを呷あおった。

　強烈なくせして、温かく、柔らかくて優やさしい……そんな、いい酒だった。

## ●第三話上編　『Grasp　モルトとリキュール自警団』

　ついに力ちから尽つきた。ここまでだ。少年は濡ぬれた石いし畳だたみの上で膝ひざを突つく。

　あれから何百キロ走ってきたのか。この酷い豪ごう雨うの中をどれだけ駆かけ抜けてきたのか。逃にげに、逃げた。ひたすらに逃げた。仲間から、仕事から、全てから。身を守るための武器一つを除いて、全てを捨て、ゴミを漁あさって身なりを変え、走りに走った。どこへ行こうとしているのかもわからず、何をしたいのかもわからず、ただ、逃げたのだ。

　逃げた。瞼に焼き付いた赤色から。それを為なしてしまった己から。そして幼い少女の喉のどに突き刺した一いち撃げきから、兄妹きょうだい同然の仲間達を裏切ってしまった己から。

　走った。逃げた。ひたすらに。……だが、それも、もう終わりだ。

　あの日と同じような夜よ雨さめの中、少年は地面に両手を突き、鼻と顎の先から滴したたる雨あま粒つぶが地面に垂れていくのを見ていた。

　視界がかすむ。ブーツの中でぐずぐずになっている両足の裏、その痛みも今は遠い。

　終わりだ。いや、あの夜、すでに自分は終わったのだ。ならば、これでようやく──。

「……なんだ……？」

　雨が止やんだ。違ちがう、止んでいない。雨音はけたたましく、今もなお。

　だが、頭に当たっていた雨粒の感覚がなくなっている。

　なんだ？　口に出した言葉を今一度胸の中で呟つぶやき、少年は

ほとんど閉じていた瞼を意識して開く。視界に映る、石畳。体を支える汚よごれた己おのれの両手。そして……小さな長なが靴ぐつ。

　少年が顔を上げて見れば、腰こし近くまである長く綺き麗れいな髪をした幼児が傍かたわらに立っていた。

　二歳か三歳の、女の子。その子は自分が濡れるのも気にせずに、小さな手で、小さな子供用の傘かさを、少年の頭の上に掲かかげていた。

　……なんだ？　三み度たび、少年は同じ言葉を口にした。

「にゅれ……ちゃう……から」

　たどたどしい少女の言葉が聞こえた時……雨は、不意に上がったのだった。

0

「……上がってるな」

　目を細め、孫の成長を見る老人のような優しい表情で、モルトはポツリと口にした。

「何がだ、モルト？」

　年季の入ったデスクに着き、大量の書類にらしくもなくペンを走らせ、ハンコを押していくライはチラリと横目で見てきた。モルトは、気にもせずにある一点を見つめ続けた。

「アンタ、いいケツしてんなぁ」

　酷く冷たい視線がライ、そしてそのいいケツの持ち主である事務の女性から向けられる。

　ヒールが低めのパンプスを履はき、艶つややかなグラデーションを見せる黒タイツにタイトスカート、チェック柄がらのベストでその細い体を絞しぼるようにして如何いかにも事務でございますと

いった彼女。そこに艶やかなショートボブに薄うすい眼鏡、いささか鋭するどい目元などが合わさり、とても知的な雰ふん囲い気きを纏わせている。

　地味な感じ、お堅かたい感じ……だが、エロい。スカートがかわいそうなぐらいピチピチに張っているだけでなく、キュッと上がっている尻しりは若さと弾だん力りよくを見る者に想像させた。

　事務員は憎にくらしげな目をしてモルトを睨にらむと、サインと認にん可かのハンコを押した書類を奪うばい取るようにして団長室を去って行く。その後ろ姿……揺ゆれ動く尻が最高にいい。

　もしかしたら尻が大きいのを気にしてタイトなスカートを穿はいているのかもしれない……が、それによって皮肉にも余計に尻の魅み力りよくが突とつ出しゆつするのに加え、下着のラインまで浮き出る始末であり……まるで男を誘さそっているかのようだ。

「何だよ、ライ。あんないい事務を雇やとったなら何ですぐに連れん絡らくしてくれないんだ」

「連絡も何も……彼女が働き出したのは二ヶ月以上前だぞ？」

　自警団には全体の経理・事務を一手に担になっているオバチャンがいるのだが、その補ほ佐さとして新たに雇われた新人というのが彼女なのだという。

「代々自警団の事務は少数精せい鋭えいがモットーだからな。だからこそ頗すこぶる優ゆう秀しゆうで、信しん頼らいできる人材でなければならない……そうなると最後は血の繋つながりに頼たよるしかない」

　大たい抵てい、親族で職を継ついでいくとどこかしらで腐ふ敗はいが始まるものだが、リキュールの住民達は気質として妙みような真ま面じ目めさを持っているので大だい丈じよう夫ぶなのだろう。

「何にせよ……これから自警団本部に顔を出すことが多くなりそうだぜ」

　ライの姉であるオリービーの胸が天使の羽のようにたゆんたゆんと揺れ動くのを眺ながめるのも素す晴ばらしいが、あの事務員のピチピチとした尻が窮きゆう屈くつそうに動き回るのを拝むのも、きっと人生を豊かにすることだろう。

「だったらいっそ自警団に戻もどれよ、モルト。いつも言っているだろう？　そうすれば家賃や仕事の不安が消えるぜ」

　モルトはわざとらしく肩をすくめてみせ、誤ご魔ま化かすように団長室を見回した。

　訓練所と団員寮りようの間にあるリキュール自警団本部の二階、そこにある団長室の壁かべは所ところ狭せましと書類棚だなが埋うめ、中にはぎっちりとここ数十年分の関係書類が詰つまっていた。残りの壁スペースにも街、及およびロテ国やオードビー国からの感謝状が扉とびらと窓を除いてぎっしりと飾かざられている窮きゆう屈くつさだ。

　初めて来た一〇年前から何も変わっていないようにモルトには見えた。しかし床ゆかに幾いくつか木箱があり、そこに書類が納められているのを見ると模も様よう替がえの最中なのかもしれない。

　どちらにせよ、仕事仕事で嫌いやになるような部屋だ。モルトはそんな感想を抱いだきながら開かれた窓へと視線を逃がす。窓まど枠わくにライとモルトの長なが柄え刀とうが立て掛かけられてこそいるが……そこだけが、文字通りに開放的だ。

　窓から見えるのは訓練所である。丁度今は入団してまだ幾らも経たっていない十代の若者達五人が、二人のベテランから指導を受け、声を張り上げていた。

　まだ体ができ上がっていない者達なので、鋼鉄製の長柄刀ではなく、木製柄である軽量の長柄刀を用いての動きの訓練である。とはいえ、刃は長柄刀と同じもので、軽量と言いつつも実際にはかなりの重さがある代しろ物ものだった。しかしそれを使い熟こなせずに、鋼鉄製の長柄刀など、まともに扱あつかえたものではないのだ。

　事務員の尻を見るのと同じように、目を細めつつ、初うい々ういしい長柄刀の扱いをモルトはしばらく眺めた。風が吹ふき、モルトの黒くろ髪かみと、隣となりに立ったライの亜あ麻ま色いろの髪を揺らす。

「どうだ、モルト」

「今の生活でそれなりに幸せだよ。……それより俺は今日、何で呼

ばれたんだ？　なんか渡わたしたい物がどうとかこうとか」

　モルトが今日団長室を訪おとずれたのは何も事務員のケツを拝むためではない。

　仕事を求めて大通りの掲けい示じ板ばんを見ていると、ライに声をかけられ、ちょっと渡したい物があるから来いよ……と誘われたのである。

　貰もらえるものは基本的に何でも貰うのが、モルトという男だった。

「部屋を見るに……大おお掃そう除じか模様替えかをしていたら、金目のもんでも出てきたか？」

「半分以上、当たりかな。……まぁ、見てくれ、モルト」

　ライが一六〇センチ程度の小こ柄がらな体格からは想像もできないような力でもって、書類が詰まった大きな棚を一人でズズッ……と、唯ゆい一いつの出入り口の扉を塞ふさぐようにズラした。

「ほー？　……団長室を密室状態にして、ようやくお目見えするってわけか」

　窓こそ開いているものの、出入り口を塞ぐように棚を動かすと……床に指を引っかけられるような穴が現れた。

　壁に沿うように細長い、つまりは本棚の形に合わせて作られた隠かくし床下収納である。

「代々団長が扱っている機密を隠す場所ってことらしいんだけど、親父おやじは個人的な物を入れていたみたいだ。……まぁ見ろよ」

　重い棚を支えるためか、収納の蓋ふたは分厚い鋼鉄製。それをライが指一本で軽々持ち上げてみれば、子供が扱うような安いノートや、古びたヌイグルミなどが現れた。それらはライとオリービーの幼い頃ころの品々らしい。団長の、親としての思い出だ。

　あえて部屋を密室にしないと見られない場所に入れるあたりが、堅かた物ぶつとして知られた前団長らしかった。家族の思い出を振ふり返っている姿を見られたくはない、けれど、すぐに見られるように手元に置いておきたかった……そんなところか。

「オレと姉ちゃんも、当面これはこのままにしておくことにしたよ。ここは親父の場所だ。……で、だ。その中で一つ扱いに困るものがあったんだ。……これだ」

　ライが白い布に包まれた何かを取り出すと、モルトに放ほうる。かなり重い。

「何だこれ。中を見ても？　……あっ!?」

　見るまでもなかった。手に持っている内に、その重さで中身が何であるのか、知れた。

「おい、これ、まさか……」

「あぁ、お前のだよ。……そしてこっちは……オレ達があの時へし折ったやつだ」

　ライが取り出したのは二本の木の棒。だが、それは元々軽量型長柄刀の木製柄だ。

　モルトは呆あつ気けに取られながら、手にしていた品物の包みを解く。

　中から現れたのは古びた革かわ製せいのナイフホルダー。そこに収まっていたのは先せん端たんが膨ふくらんだ鉈なたのようにも見える肉厚で大振りなナイフである。

　手て汗あせの染しみた木製のグリップが酷ひどく懐なつかしかった。もう握にぎることはないと思っていた。……というより、どこにいったのかわからなかったし、探す気もなかったのだ。まさかそれが団長室に、ライやオリービーの家族の思い出と一いつ緒しよに保存されていたとは。

「親父、あの時は街にいなかったくせにな。……数えてみたんだが、モルト、あれからもう、七年になるんだぜ」

　七年、モルトは思わず繰くり返した。

　モルトが一七かその手前、ライはまだ一一歳だった……そんな頃。

　男達二人は、自然と窓枠に立て掛けられている二本の長柄刀を見

やる。

　それはモルトとライの得物。そして元々は彼らの、長柄刀だった。

1

　吹っ飛ばされた。いや、正確には吹っ飛ばされるとわかったので、攻こう撃げきを受ける直前に素早く自ら跳とんでいた。地面に着地すると同時に、続け様に攻撃が来る。長柄刀。軽量型である木製柄のそれだが、刃は金属製だ。そこに布を巻いてあるにせよ、人体に直撃すれば骨折は確実であり、そこに遣つかい手の技わざが重なれば命だって持っていくことだろう。

　だからこそ、モルトは受けるだけであっても全神経を注いだ。ライの横よこ殴なぐりの一撃は、一一歳のガキとは到とう底てい信じられぬ鋭さと重さがあるのだ。

　彼の一撃は木製の柄では防げない。確実に折られる。だが、モルトはあえて両手で握った長柄刀の柄で、ライの一撃を迎むかえんと構えた。

　その瞬しゅん間かん、ライの目が見開かれ、彼の技が鈍にぶる。躊躇ためらったのだ。

　モルトは隙すきを逃のがさなかった。即そく座ざに持ち手を変え、ライの刃の一撃を金属で覆おおわれている石いし突づきで突いて弾はじく。

「おまっ、モルト!?」

「優やさしいな、ライ!!」

　モルトはライの体勢が崩くずれたと同時に素早く上段からの一撃を放ち……彼の額の上でその動きをピタリと止めた。上半身裸はだかの二人はその体勢のまま、息を荒あららげつつ互たがいの顔を見やり、そして……モルトが吹っ飛んだ。教官として指導に当たっていたベテラン団員からの跳び蹴げりである。

「戦い方が小こ賢ざかしいわよモルト！　ライちゃんの良心を利用しちゃダメでしょ!?」

　言葉遣いは女のそれにも似ているが、発するのは坊ぼう主ず頭あたまに髭ひげ面づら、さらに身長は二メートルを超こえる熊くまのようなガタイのいい大男の声だった。そんな男の全体重が乗った跳び蹴りなので、筋肉質ながら細いモルトはゴミ屑くずのようにぶっ飛び、訓練所の地面を転がった。

　汗だくだったせいもあって肌はだ中に砂が貼はり付き、立ち上がったモルトはほぼ魔ま獣じゆうか何かのような有様だ。訓練所にいた十数人の団員達から笑いが起こる。

　一方のライは長柄刀を地面に置き、それと共に尻をも落として項うな垂だれた。

　その亜麻色の髪を大きな手の平で撫なで始めたのは、一九〇センチほどの身長である細身の男である。長い黒髪の間から彫ほりの深い顔を覗のぞかせ、ライを見下ろした。

「……しかしライ、お前のミスでもある。訓練だが、遊びじゃない。何故なぜ、気を遣う」

　だって、とライは苦く笑しようした。

　細身の男は、ボソボソと小さくも硬かたい声で続ける。

「ライ、『驕おごっていいのは己おのれの腕うでだけ』……自警団内でそう言われているが、これは相手を侮あなどっていいというわけではない。……わかるな、ライ？」

　ブレンデッド！　と、熊男が長ちよう髪はつの男を荒あら々あらしく呼ぶ。

「ライちゃんは仲間を傷つけたくないから力を抜ぬいた、それを、そう来るだろうとモルトが予想して利用した、そういうことでしょう!?　ライちゃんは悪くないじゃない！」

　ブレンデッドは顔をしかめるのだが、元々彫りが深く、長髪で顔に影かげが入ることもあって、かなりおぞましげな表情にモルトには見えた。

「コーン……それは違ちがう。モルトは万が一ライが力を抜かなかった場合でも、対処できるだけの余よ裕ゆうを持っていた。そうだろう、モルト？」

　体に貼り付いた砂を払はらいつつ、モルトもまたライと同様に苦笑して曖あい昧まいに応じた。

「ライ、聞け。グリコゥ国が滅めつ亡ぼうしてから三年だ……リキュールにも難民は押し寄せ、治安はどうしても悪化している……。優しさの皮を被かぶった油断や慢まん心しんはお前の命を、ひいては街の治安をも悪化させる……わかるな？」

「まったく、そうやってブレンデッドはすぐ脅おどしをかける。大丈夫よ、ライちゃんが一人前になる頃にはさすがに落ち着いているわ。だからこそ、今気を遣うべきは……モルトッ、アンタよ！　未いまだ自警団見習い、というか未だ自警団非正規見習いだったわね……ともかく、アンタが頑がん張ばる時なのよ⁉」

「長柄刀を扱い出してから日が浅いモルトに多くを望むのは間違いだ。できることから……ゆっくりでいいんだ」

「何よ！　だからってライちゃんに脅しかけることには繋がらないでしょ⁉」

「常つね日ひ頃ごろから警けい戒かいし、それに対して準備を……」

「かぁーっ、準備準備で目の前の状じよう況きように対処せずに先々のことばっかなんて！」

「未来に備えれば、いずれはそれが今日にな……」

「その時にはまた先の備えを始めて結局現在の問題には手が回らないパターンね！」

　一瞬の沈ちん黙もくの後、ブレンデッドが厳いかつい顔のままで殺気を放ち、それに応じるようにコーンが覇は気きを放った。

　二人は互いに距きょ離りを詰め、罵ののしりながら議論を始めてしまう。

　それが始まるや否いなや、当事者だったはずのモルトとライは汗

と砂を流すためにさっさと寮内の風ふ呂ろ場ばへ移り、頭から水を被かぶった。

　あの二人が揉もめ出すとそう簡単には終わらない。どうせ言葉では行ゆき詰づまり、最後は訓練所で模も擬ぎ戦をやって、どちらかが立てなくなるまで打ち合うのだ。

　時間の無む駄だとは言わないが、空きっ腹を抱かかえたままで見守る程ほどのものでもない。

　寮の風呂場に浴よく槽そうはないが、個室のシャワーがある。そこでモルトとライは冷水を浴び、体をサッパリさせると乾かわいた服へと着き替がえた。

　夏も終わって日も短くなりつつあるが、それでもまだ暖かいので薄うす着ぎで十分だ。

「モルト、確か訓練中に昼食のベルは鳴ってたよな？　飯行こうぜ」

　おぅ、とまだ濡ぬれた髪を額に貼り付けるモルトは応じる。

　一一歳のライと、大体一六、七歳のモルト。その年ねん齢れい差は大きいが長なが柄え刀とうでの腕うで前まえは実際のところほぼ互ご角かくだった。

　体こそまだ年齢相応に小さいが、ライは自警団団長の息子むすこという以上に、過去の英えい傑けつ達の血を色いろ濃こく受け継ついでいる。愚ぐ直ちよくなところこそあれ、戦せん闘とうに対する才覚や体の扱あつかいは少年だとして侮れるものではない。幼い頃に母を亡なくしてからは自警団を家族、そして本部を自宅として過ごしていることもあり、将来は団長の座に就つくと誰だれもが信じていた。

　また一方のモルトは、リキュールに来る以前は世界を転々と廻まわってきた経験を持ち、また俊しゆん敏びん性や反射神経は極きわめて優ゆう秀しゆうと評価されている……が、長柄刀の扱いはまだまだだ。体こそ大人のそれにほぼ到とう達たつしているものの、体重も軽く、また軽いなりの扱い方もできず、未だ鋼鉄製の長柄刀を持つには至っていない。

　結果、不思議と均きん衡こうが取れ、年の差六歳ほどもある少年

と青年は不思議なライバルというような関係となっていた。また普ふ段だんはライの父親である団長から主に技を教えて貰っているため、年齢とは逆の兄弟弟で子しとも言えたし、互いに持っていないものを持っていて、馴なれ合あいではなく補い合える、そんな親友と呼べるような間あいだ柄がらとも言えた。

　だからこそ、今し方の模擬戦でのモルトの卑ひ怯きような手口をライは不満に思うこともなく、またモルトも引け目を感じることはない。コーンとブレンデッドは不満そうだが、当の本人達は、相手がコイツなら、と納なつ得とくしているのだ。

「今日のメニューはなんつってたかなぁ」

　着替え終わったモルトは、最後にもう一つ大きな装備を右の腿ももに装着した。

「まだ、そんなもの付けてるのか？」

　ライに言われ、モルトは「うん」と素す直なおに応じた。

　そんなもん、と呼ばれたのは、太腿に取り付けた革製のナイフホルダーである。そこに収まるのは鉈のようにも見える肉厚で大振りなナイフだ。全長は刃は渡わたりだけで二〇センチほどもある物であり、腰こしから下げると着座時に邪じゃ魔まなので、腿に備えるようにしていた。

　モルトのお守りのような物である。しかしそれを告げたところで、生まれた時から長柄刀と共にあったライからすると、こんなナイフなど、武器としては頼たよりなく、道具ツールとしては大きすぎる、そんなふうにしか見えないのだろう。

　これはライだけに限らない。自警団全体に長柄刀至上主義の風潮は強かった。

　何せ、自警団のほとんどが、長柄刀を得物とした最強兵士達の末まつ裔えいなのだ。

　外から来た身であるモルトからするとその思想は何とも異様ではあるが、それが錯さく誤ごとも言い切れないだけの実力を誰もが備えているから、何も言えない。

　全身を鎧よろいに包んだ重武装の兵士を盾たてごと両断した、五

メートルを超える巨きよ大だいな魔獣を一撃で屠ほふった、騎き士しを剣けんはおろか、その馬に至るまでを一ひと振ふりで叩たたっ斬きったという冗じよう談だんみたいな話が伝わっているものの……それをやれる人間が今も当たり前に自警団員内にいるのだから、おぞましい。彼らの存在は伝説を現実に繋つなぎ留め、空想にさせない。

　モルト達は長柄刀を肩かたに担かついだまま食堂へと向かった。

　午前の締しめとしてモルトとライが一騎打ちの模擬戦を始めたタイミングで昼食のベルが鳴ったので、そろそろ空すき始めた頃ころだろう。そう思っていたのだが……食堂前の廊ろう下かにズラリと立て掛かけられて並ぶ長柄刀を見て、二人はうんざりした。まだ混んでいるようだ。

　大テーブルが並ぶ室内に足を踏ふみ入れてその理由がわかった。みんな窓まど際ぎわに食事が盛られたプレートを手にして集まり……そこから見える訓練所を見やっていたのだ。

　コーンとブレンデッドの一騎打ちである。二人はすでに言葉を使い果たし、長柄刀での語らいの段階へと入っているようだ。彼らから溢あふれるチリチリと肌を刺し激げきする緊きん張ちよう感かんに、訓練所に残っていた団員達は腕を組んで仁に王おう立だちし、また食堂内では誰もが口を動かしつつも彼らを窓まど越ごしに見守っていた。

　血の気が多く、誰も彼もが熱き戦いを好物とするこのリキュールならではの光景であった……が、未だ成長期の若いライとモルトにとってはまず食事である。

　見習いでろくにお金もなく、休きゆう憩けい時間に買い喰ぐい等々もできないので、喰える時にはしっかり喰わねばならないのだ。特に、大きくなりたいライと、体重を増やしたいモルトにとって、食事は訓練と同じぐらいに大事だった。

「はいはい、ボクちゃん達、喰うんならさっさと並ぶ！　大きくならなきゃアタシを抱だくことはできないよ！」

　ここ二〇年程の間、食堂にて絶対王政を敷しき続けている体重一〇〇キロは優に超している中年の女性、カルジャガ（未み婚こん）が木べらを握にぎり締めつつ、そんなことを言った。

彼女を抱くことができれば真の英えい雄ゆうだ、と二〇年言われ続けているらしいが、未だその偉い業ぎようを成し遂とげた勇者をモルトは知らない。

「オバチャン、今日は何？」

ライが尋たずねると、カルジャガはニッコリと笑う。

「最高の料理さ」

いつものやりとりを聞きながら、モルトはプレートを手に取る。

プレートと言っても、三つに区分けされており、その一つ一つが深皿のように凹へこんでいるものだ。これがなかなかの深さがある。大量に盛るための工く夫ふうなのだが……。

「ほいよ、ボクちゃん達、いっぱい喰いな！」

プレートをカルジャガに差し出し、お任せでよそってもらう。

カルジャガは団員の姿なりを見て量を絶ぜつ妙みように調節する……らしいのだが、今のところモルトとライが微び調ちよう整せいされたことはない。いつも、ただひたすらに大盛りである。

食堂は窓際の席こそ人でギュウギュウ詰づめだが、それ以外は空いているので、モルトとライは適当なテーブルで向かい合って座り、食事という名の戦いを始めるのだった。

今日のメニューはラザニア、サラダ、チリビーンズである。プレートの上に山となっているそれらに、モルトとライは大きなフォーク付きスプーンで立ち向かう。

サラダはスライスして水に晒さらした玉ねぎのもの。それに鶏とりササミの燻くん製せいとチーズが千切って混ぜられ、味付けはオリーブオイルに黒くろ胡こ椒しよう、そしてビネガーと塩。シンプルな味付けではあるが、トッピングがサラダをワンランク上の味へと押し上げている。

薫かおり高いものの水分量の少ないササミの燻製でありながら、玉ねぎの瑞みず々みずしさが口内の渇かわきを防ぎ、それらのムグムグ、シャキシャキという二種類の食感は咀そ嚼しやくを楽しくさせる。またチーズによる味の力強い後押しもあって、口慣らしのサ

ラダというよりは、しっかりとした料理としての趣おもむきがあった。

　モルト達は口一いつ杯ぱいにそれを押し込み、咀嚼しつつ、チリビーンズへとスプーンを向ける。

「相変わらず圧あつ倒とう的てきに豆だな……」

「文句言うなよ、モルト。オバチャンに豆、追加されるぞ」

　溶よう岩がんが噴ふき出して山を覆おおったかのようになっているプレート上の山盛りチリビーンズは、挽ひき肉にくと刻み玉ねぎ、それに刻みトマトこそ入っているものの……ほぼ、豆である。大豆、ひよこ豆、エンドウ豆といった数々の豆がごった煮となって山を作っていた。

　モルトは腹に気合いを入れて、それにスプーンを突つき刺さす。

　汁しる気けは少なめで、ややねっとりとしているそれは、何気に味は悪くない。むしろ、うまいのだ。料理屋で出るタイプの料理というよりは、家庭的な味がするそれ。大量の豆のおかげで穀物特有の甘みが出て、少々野や暮ぼったい味ではあるが、その分温かく、腹に溜たまる。

　味付けはさほど強くなく、辛からみはほどほどで、後からじんわりと来る程度。どちらかといえば甘みの方が強いぐらいだ。これは大量に食べられるように、という配はい慮りよだろう。

　これもまたモルトとライは大量に口に含ふくみ、頬ほおを膨ふくらませる。それで咀嚼し、そして苦しいぐらいに一気に喉のどへと送る……その感覚が空腹の身には最高の快楽たり得た。しかもこれだけしっかりとしたチリビーンズなので、一気に大量に喰らうと、はっきりとわかるレベルで胃にずっしりと来る。それがまたいい。食事は場を楽しみ、味を楽しむものだが……それだけじゃないのだ。腹を満たす満足感を楽しむものでもあり、このチリビーンズはしっかりとそこに届く料理だった。

　モルトとライは口周りについた赤色を指で拭ぬぐいつつ、次なる獲え物ものへとスプーンを向けた。〝さっぱり〟としたサラダに〝まったり〟としたチリビーンズ……今度の料理はそこに〝こってり〟かつ〝ずっしり〟と来るであろうことを予感させる。

　カルジャガ特製ラザニアだ。彼女の得意料理である。巨大な耐たい熱ねつ容器によってオーブンで焼かれたそれは、素晴らしい匂においを喰い手の鼻へと送り込む。

　木べらで切り分けられ、プレートの上に載のせられたそれは長方形というより立方体である。もはや学生が扱あつかう辞書が載っているかのようだ。

　ラザニアは平べったい板状のパスタとトマトベースのソースを交こう互ごに入れて重ねて表面にチーズをトッピングしたものが一いつ般ぱん的だが……カルジャガのはひと味違ちがう。

　パスタ、トマトソース、チーズの層が幾いく重えにも折り重なっているのに加えて、多種多様な豆達が各層に潜もぐり込んでいるのだ。それも、かなりガッツリ、かつ、所構わず。

「相変わらず隙すきあらば豆だな……」

「文句言うなよ、モルト。オバチャンに豆追加されるぞ」

　うまいので別に文句ではないのだが、さすがに親の敵かたきのように入っていると何とはなく言いたくなるものである。

　スプーンで地層を削けずるようにしてラザニアを掬すくう。柔やわらかいそれはムギュッと潰つぶれて赤いソースと共にチーズをむにゅ～っと飛び出させ、モルトを誘さそった。

　口に含む。熱々のそれは、やはり、うまい。

　上品さなんてない、躊躇ためらいのないたっぷりのチーズに、刻まれた玉ねぎや挽肉の入った──恐おそらくチリビーンズと同じ下した拵ごしらえをしたもの──酸味のしっかりしたトマトソース、もちもちとした板状パスタ……そして大量の豆がラザニアに食感を加え、かなり熱いものの、やはりこれも口いっぱいに含むとえも言われぬ幸福感を与あたえてくれる。

　チーズの旨うま味みが強いせいか、自然とモルトとライはラザニアを咀嚼しつつチリビーンズを追加でさらに口に含む。違う料理ながら、味は口内で見事に融ゆう合ごうしてくれ、また違った味わいとなる。

　交互に、そして時折一いつ緒しよにして食べ、口直しにサラダで

喉を潤うるおした。

運動後に、この圧倒的な量の昼食はたまらない。そんな幸せを嚙かみ締めていると、対面のライがハッとしてモルトを見る……というより、モルトの後ろを見ていた。

「はいはい、いっぱい喰っていっぱい育ちな！」

カルジャガが巨大な寸ずん胴どうを脇わきに抱かかえ、お玉で中身を掬ってモルトのプレートの上に大量に盛った。塩茹ゆでされた豆である。当然、その後にはライのプレートにも豆が注がれた。

食堂名物の〝追い豆ビーンズ〟だ。基本カルジャガの料理は豆を主しゆ軸じくに作られるため、常に大量に茹でられており、盛られた料理で足りない場合はそれを自由に自分で盛ることが許されている……のだが、そうでなくてもカルジャガが勝手に盛りつけに来るというサービスか拷ごう問もんかわからない特とく殊しゆシステムが存在していた。

主に若者が対象とされるが、モルトとライは特に凄すさまじい。

ちなみに余った茹で豆は次の食事で活用されるのでまったく無む駄だが出ず、また豆は低価格で保存も利きき、さらに高タンパクという体を酷こく使しする男達にとって極きわめてピッタリな食材ということもあり、誰だれも文句は言えなかった。

ある意味で食事は戦いだが、モルトとライの場合、追い豆ビーンズが来てからが本番と言える。モルト達は一度豆と、そして対面に座る相手の目を見て……息を大きく吸う。

そして、二人一いつ斉せいに豆の山へと挑いどむのだった。

「ほぉ、いい喰いっぷりだね。……はい追加！」

「「ちょっと!?」」

二人が同時に声を上げる。

それを面おも白しろがったのか不服だったのか、カルジャガがさらにもう一杯追加し、モルト達の心と腹を完全に打ち砕くだいたのだった。

2

　──戦いは終わった。激戦に次ぐ激戦だった。次々に迫せまり来る豆の軍勢に、先割れスプーン一本で立ち向かい、見事その全すべてを腹に納めたモルトとライは食堂の椅い子すに座ったまま意識を失いそうになる……が──。

「おら、喰い終わったなら出ていきな！　食堂は飯喰うとこ、寝ねるとこじゃないよ！」

　──カルジャガに声を荒あららげられ、食堂を追い出されたのだった。

「いくらウェイトを増やさないといけないったって……これ、しんどいなぁ」

「でもモルトはもう少し体を重くできたら鋼鉄製の長なが柄え刀とうを持てるんだろ、頑がん張ばらないと」

　モルトは力もそうなのだが、それ以上にウェイトが圧倒的に足りていない。極めて重い完全鋼鉄製のそれを扱うにはせめて突とつ出しゆつした力か体重、どちらかが絶対的に必要なのだ。

　幼い頃、モルトは意識的に体を大きくしないようにしていたため、今ではなかなか太ることも、特定部位以外の筋力を高めることも、難しい体質になっている。成長期がほぼ終わり掛かかっているというのも、問題だった。

　しかしながら、とモルトは隣となりを歩く少年ライを見て思う。自分の体がこうなのはわかる。が、こんなハードな食事を幼年期から続けているクセにどこにもライの体に無駄な肉がつかないのは素す直なおに凄すごい。食事から得たエネルギーが筋力として蓄たくわえられ、力として見事に消費されているのだ。だからこそ、この年ねん齢れいでありながら、そこいらの大人はもちろん、ちょっとした傭よう兵へいや軍人相手でも対等以上にやり合えるだけの戦せん闘とう力を持っているのだろう。

「それに街の住民としての登録をすれば、正式な自警団員……じゃ

なくて、正式な自警団員見習いになれるんだろ。何でしないんだよ」

「そりゃ……俺は、根無し草というか、迷い犬みたいなもんだからさ。こうして自警団で厄やつ介かいになってるけど……」

　リキュールにおける自警団の重要性は高い。それは特殊な立地に関係があった。

　リキュールは大国二つの首都間を最短で繋つなぐルート上にあり、一〇〇〇年前の戦争で荒あれ果てた土地が広がる中にある、オアシス的なスポットなのだ。故ゆえに街は流通で潤っているのだが……訪おとずれるのは善意ある人と幸福を含んだ物だけではない。街の住民より、旅人の方が多い街である。何もしなければ治安はあっという間に乱れ、街は荒すさむことだろう。

　それらに対応するために、街の規模からするとリキュールはかなり大きな予算を組んで、強力な自警団を抱かかえている。一人一人の質の高さと共に、絶対の信しん頼らいがおけるようにと思想、身元、性格その他諸もろ々もろをしっかりと審しん査さする徹てつ底ていぶりだ。

　ある意味で、盾たてにして矛ほこでもある自警団は、伝統的な武器である長柄刀共々街の象しよう徴ちよう的な存在なのだ。

　また、そうであるからこそ、モルトのような流れ者が厄介になることが時折あった。

　浮ふ浪ろう者しやに街中でうろうろされて不安を世間に与えるぐらいなら、と、全員が屈くつ強きような者達で占しめられる自警団員寮りようの空き部屋にしばらく住まわせ、カルジャガの豆料理を喰くわせて健康になったら働かせるなり、出て行かせるなりする……という、ある種のセーフティネットとしての役割をも持っていた。モルトもそれと同じであったのだが、気が付いたら……というより、早々に軽量の長柄刀を渡わたされて午前は訓練、午後は仕事（ベテランのパシリ）という、自警団員見習いと同じ扱いを受けるようになっていた。元々動ける体をしていて、若かったから、というのが主な理由だろうが、それと同時にライと気が合い、彼の練習相手に丁度良かったから、というのもあったのかもしれない。

　何にせよ……自警団は、そしてこのリキュールという街は居い心

地ごこちがいい。

　だからこそ、だった。

「……何だか、自分が居着いちゃいけないみたいな気がしてさ」

　きっと自分は遅おそかれ早かれ自警団を、そしてリキュールを去ることになる。それは、ある種の確信としてモルトの胸にいつもあった。

「なぁおい」

　ドンッと、ライがモルトの胸を強く叩たたく。まるでそこにある何かを打ち砕くかのように。

「逃にがさないぜ、モルト。お前はオレと一緒に自警団に入るんだ。他ほかには渡さない」

　咳せき込むモルトを置いてライが先へ行く。肩かたに長柄刀を担かついだ少年は振ふり向きざまにニヤリと笑って見せる。ガキのくせに、とモルトは内心笑う。

　……素直に、嬉うれしかった。

「モルトぉ」

　不意にかわいらしい声が聞こえ、ライもモルトも足を止める。寮のエントランスの方からトテテテテと軽かろやかで、小刻みな足音を響ひびかせて来たのは……小さな小さな女の子。

　フリル付きの白いワンピースにサンダルを履はき、背の中ほどまである髪かみをそよがせながら、その子はモルトへと飛びついた。

「うぐっ……！　食後すぐにタックルして来るのは勘かん弁べんしてくれ、リッツ……」

　モルトは腹に顔を埋うめるリッツの頭を撫なでる。指の間を髪の毛がするすると抜ぬけていく感覚が、心地良い。

　見下ろせば、どこか得意げな顔をして微笑ほほえむリッツと目が合う。

……顔付きや肌はだの色からして体調は良さそうだった。ここ何日か寝込んでいたのだ。

「あらあら、ダメよ、リッツちゃん。食後の見習いさんはお腹なかパンパンなんだから」

そう言ってリッツの後を追うようにして廊ろう下かに現れたのは、ライの姉、オリービーだ。緩ゆるやかにカールのかけられた亜あ麻ま色いろの長い髪の女性の登場に、モルトは体を硬かたくした。

「あ、どうも、オリービーさん……こんにちは」

オリービーは肩をすくめるようにして、仕方ない子ですね、とニッコリと笑う。そして、そっとお辞じ儀ぎをするようにしてモルトに抱だきつくリッツの肩をつかみ、引き離はなした。

モルトは極ごく々ごく自然に、オリービーのサマーセーターの襟えり元もとから覗のぞく彼女の胸の谷間へ鋭するどい眼光を向ける。

薄うす暗ぐらい洞どう窟くつの中にある心躍おどる神秘の谷間……それは覗く度たびに深くなっているように思える。実際、今まで見たことがないブラだというところからしても、新しく買ったものだろう。またワンサイズ上がったのかもしれない。

彼女の年齢は今一四歳らしいのだが、すらっとしたスタイルや大人びた口調や表情から、もう少し上に見えた。ライが生まれてすぐに母親が亡くなり、幼い頃ころからその代わりをしていたせいかもしれない。いいとこ……一六、七歳ぐらい。胸のサイズも、その年齢の少女達と同じか、それ以上にあるように思える。

……が、胸むな元もとの緩みというか油断や隙すきは、年齢相応だ。自分がどれだけ魅み力りよく的で男達に狙ねらわれているのかを理解していないところがある。近くにいるだけでチャンスはいくらでも訪れ、彼女の性せい徴ちよう、違ちがう、成長の様をたやすく目に焼き付けることができた。

「……うっ」

引き離されたリッツだったが、オリービーが手を放すなり、彼女はまたモルトの腹にタックルするように抱きつき、彼に天てん罰ば

つを与えた。

「あらあら。もー、リッツちゃんはモルトさんが大好きなんだから」

「姉ちゃん、今日って花屋のバイトじゃなかったっけ？」

「うん、そうだったんだけれど……今日はお花が届かなかったから、臨時休業になっちゃって。暇ひましてたの」

　オリービーは場所的にも経済的にもリキュールの中心部である、同心円状に道が造られたアルコ・ホールというエリアの花屋でバイトをしていた。

　元々花が好きだったらしいが、老ろう婆ばの店主が腰こしを痛めた際に親切心で手伝って以来、バイトという扱あつかいで週の半分以上をそこで働いていた。

　彼女の存在はただでさえ賑にぎやかなアルコ・ホール、そして華はなやかな花屋に、もう一輪大きく美しい花が咲さいたようなもので、客だけでなく行き交かう人々の気分さえ明るくさせている。モルトなど、団員達のパシリだと言い訳して意味もなくうろうろするぐらいだ。

「花が届かないって、どういうことです？」

　モルトがリッツの頭を撫でつつ尋たずねると……どうも、ロテ国方面の農場から向かってくる荷馬車が、道中、賊ぞくに襲おそわれたらしい。

　それで荷はダメになり、運び人達もかなり酷ひどい目にあったようだ。

「あぁ~、それで親父おやじ達が朝から出で払はらっていたのか」

　流通がリキュールの要かなめであることから、街を通る交易路ルートで事件が起きた際は、自警団が積極的に出動することになっていた。

　危険性の高いルートだと思われることは、即すなわち街の衰すい退たいに直結するからである。

「うん。多分襲われた辺り一帯を警けい邏らして、危ない人が全部いなくなるまで行ったままだと思うから、しばらくは、ね」

「……あの、オリービーさん、それとリッツは何の関係が？」

「ご両親が壁かべのペンキを塗ぬり替かえてらしたんですけど、リッツちゃん、暇そうにしていたので。折角元気になられたようですし、お散歩がてら、と思って」

　リッツは花屋の近くにある、アルコ・ホール三番街のアパート、その大家の一人ひとり娘むすめだ。最近もずっと寝込んでいたのだが、生まれつき体の弱い子だった。けれど、その分周りの人間に大事にされて育てられたことで、根が真っ直すぐで、優やさしい子だった。

　だからこそ……三年前のあの夜、彼女はモルトを拾ってくれたのだ。

　逃げても逃げても、雨から抜け出せなかったモルトの頭上に、そっと子供用の小さい傘かさを差しだし、彼女の自宅へと招いてくれなければ……今の日常はない。

「だからって、こんなところじゃなくてもいいのに。姉ちゃん、なんでまた」

「リッツちゃん、モルトさんがお見み舞まいに来たのに眠ねむってってわからなかったのが悔くやしかったみたいでね。それで」

　しゃがんで視線の高さを同じにし、オリービーが「ねー？」と言うと、リッツは急に顔を赤らめ、「んなぁ！」と、オリービーの胸を叩いた。

　ブニョン、と揺ゆれ動くのをモルトの目はセーターの隙すき間まからしっかりと拝むことができ、それだけでモルトはリッツに心の中で感謝を述べ、彼女の頭を撫でた。

「良かったね、リッツちゃん。しばらくモルトさんに遊んでもらう？」

「あ、俺はこの後、昼寝を……」

　たらふく喰った後は、警邏や急ぎの仕事がない場合、一時間程度

の仮か眠みんが認められている。特に成長を期待されている身としてはこれはかなりありがたく、モルトとライはすでにそのつもりでいたのだが……。

「寝ねかせたげる！」

　そんなことを言って、いろいろバラされるオリービーから離れようとするかのように、リッツはモルトの服の裾すそをギュッとつかんで引っ張った。仕方ない、というように、モルトも苦く笑しようしてそれに任せ、二度も拝ませてもらったし、ということでオリービーに別れを告げ、リッツに連れられるがままにライと共に二人の自室へと向かった。

　二段ベッドに小型の棚たながあるだけの部屋。しかも他の部屋より明らかに狭せまい。どうも元々物置だったものを改装したスペースらしかったが、身一つで拾われたモルトにすれば十分だったし、ライはライでちゃんとした自宅が近くにあるのでこうして寮りよう内ないに仮眠用のベッドがあるだけで不満はないようだった。

　モルトが下で、ライが上のベッドに横になると、リッツもまたサンダルを脱ぬいでベッドに上がる。そして、その頼たよりない腕うでででモルトに掛かけ布ぶ団とんをそっとかけてくれた。リッツは座ると、顔を覗き込みながらポンポン……と、優しげにモルトの腹を撫でるように叩いた。

　モルトは内心苦笑するばかりだ。きっとリッツは自宅で母親にこういうふうにされて寝かしつけられているのだろう。

　それをモルトにする、というのは幼いながらある種の母性が出ているのか……はたまた、ままごとの人形役をやらされているのか。もしくは、拾われた犬か……。恐おそらく最後のが正解だろう。何かにつけて、リッツはモルトの世話を焼きたがる。

　実際、こうして寝かしつけられるのは今日が初めてではない。以前は、何だこの状じよう況きよう……と寝ていられはしなかったが、今ではライが茶化すこともなくなり、モルトもまた、早々に眠りにつけるようになっていた。

　リッツの小さな手とその微び妙みようにー定ではないリズムを感じながら、モルトはそっと瞼まぶたを閉じたのだった。

　ふと、モルトは目を覚ました。ライの寝息が聞こえる中、窓からの日差しの角度を見て、時刻を察する。寝始めて一時間弱といったところだろう。

「丁度いいぐらいかな。……ん？」

　モルトの腹の上にリッツが抱きつくような体勢のまま、寝息を立てていた。

　これもまた、いつものことである。モルトは彼女を起こさないように、そっと転がすようにして腹の上からベッドに寝かせる。すやすやと穏おだやかな寝息を立てる彼女の両手は顔の横にあり、柔やわらかにグーに握にぎられていた。

　掛け布団をかけてやろうと思うものの、その前に寝転がした時にめくれ上がったワンピースの裾を引っ張るようにして直してやる。すると、少々引っ張り過ぎたのか、それともどうせすぐ大きくなるとして大きめサイズのを着せられていたのかわからないが、襟えり口ぐちから桜の花びら一枚程度のものが顔を覗かせた。色合い的にもサイズ的にも、まさに丁度花びら一枚ぐらいのそれ。

　それを見下ろしていると、モルトは不思議な気分に囚とらわれる。

　こんな男のそれと変わらぬ、リッツの胸。肋あばらの上の薄うすい肉と皮ひ膚ふがこれから膨ふくらみ出し、ゆくゆくはオリービーのそれのように育ち、男達の目を引きつけるというのだろうか。

　本当に？　これが？　そう思わずにはいられない。しかし、人は誰だれもが生まれた時は小さな赤子であるのに、年月を経るとコーンのような熊くま染じみた巨きよ体たいに育ったりもする。

　頭ではわかっている。だが、実感がなく、不思議に思ってしまう。

　指でその淡あわい色の先せん端たんを突つついてみるが、そこに弾だん力りよくもなければ悦よろこびもない。

　リッツはただただすやすやと眠り続けるだけである。

最初は小さな種であっても、地に埋めれば芽を出し、何年もすればそれが木になり、花を咲さかせ……そして、たわわな実を付ける。

リッツのこれもまた、そうなのだろうか。ちゃんとオリービーほどの明るい未来をつかめるものであるのだろうか。

この街にいれば、いずれその答えを知ることができるだろう。……けれど、そうはいくまい。この街を去ってしばらくしたら、別人の名と風ふう体ていで訪おとずれるぐらいが関の山だ。

その時、この小さな花びらはどれだけの実を結んでいるのだろう。モルトは少しばかり寂さみしげに、そんな自分の未来を想おもった……リッツの乳ち首くびを突つつきながら。ついでに人差し指と親指で挟はさんでみ──。

「んんぅ……モルトぉ……」

──やり過ぎたか！　グーにした両手で両目を擦こすり出すリッツに、モルトは己おのれの内で舌打ちを放った。

やり過ぎた。出来心とはいえ、眠る幼女の乳首を突つつき、あまつさえちょっとつまんでみたりしたことで……起こしてしまうとは何たることだ。

だが、まだどうとでもなる。可能性とは諦あきらめない心を燃料に燃える炎ほのおだ。それはモルトの歩もうとする道──未来をいつだって明るく照らしてくれる。

今ある全すべての力を用いて極きわめて高速にワンピースのズレを直し、それと同時に掛け布団を両手で持ち、表情筋の全てを意識で支配する。

そっと掛け布団をリッツに被かぶせると共にモルトは柔らかに微笑ほほえみ、噴ふき出そうになっていた冷ひや汗あせを毛穴を閉じるイメージを強く意識することで内々に閉じ込める。

「……どうしたんだい、リッツ？」

声も合格だ、とモルトは自画自賛した。喉のどから出た音の全てに素そ朴ぼくな優しさとそっけなさ、そして大だい丈じよう夫ぶだよ、とどこか安心させるような柔らかさが染み渡わたっていた。

　間ま違ちがっても幼女の乳首を突つつきつつ、こんな薄っぺらいのがホンマにオリービーみたいなおっぱいに育つんかいな？　と、疑問に思っていたとは誰も思うまい。

　モルトは掛け布団をリッツに掛けるものの、それを払はらうように彼女の手が伸のばされ、モルトの両手をつかんだ。

　逮たい捕ほだ、とでも言いたいのか、とモルトは焦あせったが、そのまま半身を起こすとリッツがモルトに抱だきついてくるので、ちょっと安心した。変質者に抱きつく女の子はいるまい。

「……今ね、モルトがね……どこかに行っちゃう夢、見た……」

　モルトはポンポンとリッツの頭を撫なでるように叩たたくと、彼女をまたベッドに寝かせ、掛け布ぶ団とんをかけた。少しだけ潤うるんだリッツの瞳ひとみに微笑みかける。

「大丈夫だよ、リッツ。どこにも行かないから」

　恐らくくっついて寝ていたところを離はなしたので、体温や感かん触しよくからそんな夢を見させてしまったのだろう。もし万が一にでも彼女が、いつかこの地を去るだろう、というモルトの心を読んでいたとしたら一大事である。……おっぱいの件まで、この五歳の子の頭に流れ込んでいることになってしまう……。

　どんなに大丈夫だと安心させてもモルトの体のどこかをつかみたがるので、仕方なくまたモルトはリッツの脇わきに横になり、彼女の頭を撫でてやっていると……また、幾いくばくもなくその小さな口から寝息が漏もれ始める。

　今度こそ起こすまい、間違っても乳首をいじったりはすまい、と心に決めてそっとベッドから下りると、先さき程ほどから上段のベッドでイビキをかいていたライを小突いて起こす。

　するとそれと連動するかのように、コンコンと部屋の扉とびらが小さくノックされた。

　オリービーだ。一時間経たった、ということで起こしに来てくれたようだ。

「オリービーさん、悪いけどリッツを……」

「はい、大丈夫ですよ。見ています。起きた時に一人だと、不安で怖こわいですからね。……私も横になってもいいですか？」

　もちろんですよ。モルトは爽さわやかに微笑みつつ……今夜はオリービーの残り香がの中で眠れることが確定し、思わずグッと力を込こめた拳こぶしを作っていた。

「それじゃ、仕事に行ってきます。ライ、寝ぼけて落ちるなよ」

　ライがふらふらという感じに二段ベッドを下りてくるのを補助し、モルトは壁かべに立て掛けていた長なが柄え刀とうを手に取った。

「ライ、あなたも学校が休みだからって遊んでばかりいないで宿題ね。ちゃんとよ？」

　へいへーい、とどこの家庭にでもあるような会話を聞きつつ、モルトとライはそっと自室を後にしたのだった。

　……しかしながら、あのヘタをすると命を失う可能性すらある激しい訓練を〝遊び〟と言い切る辺り、やはりオリービーもこの街の住民だとモルトはさりげなく思った。

　寮りようを出ると、ガギャンガギャンと金属を激しく叩き付け合う凄すさまじい音が聞こえてくる。並ではないその音は、恐らく未いまだにコーンとブレンデッドが争っている音なのだろう。

　相変わらず元気な二人だった。

3

「犯人も捕つかまったし、今日はもういいぞお前ら。……お、そうだ、確かおれが出てくる時にまだ寮にあのお嬢じようちゃんがいたから、送って行ってやんな。最近は物ぶつ騒そうだかんな」

　窃せつ盗とう犯を捕まえるためにモルトとライは街中を奔ほん走そうしたものの、結局犯人はベテランの一人が捕まえてしまったので……特にこれといった手て柄がらもなく、彼らの半日は終わっ

た。

　すでに暗くなりつつある帰路に就つくと、本部の待合室でオリービーとリッツを見つけることができた。

　普ふ段だん、自警団へ苦情やら嘆たん願がんやら相談やらで常に幾人もいるのだが、そろそろ夕食の準備の時間帯ということもあってか、今長なが椅い子すに座っているのはオリービーら二人だけだ。

　そんな彼女達はモルト達を見るなり、パッと花でも咲さいたように笑顔になる。

「あっ、モルトぉ、お帰りなさい！」

　リッツはまた、トテテテと走って来るなりモルトに飛び付いた。

「ん、ただい……ま？　あれ、変わった髪かみ型がただね？」

　昼は背中までの普通のストレートだったが、今は、両サイドに細めの三つ編みを作り、後ろ髪はさらに大きな一本の三つ編みという、三本の三つ編み状態だ。

「うん、教えてもらったの！」

　オリービーの指導の下もと、リッツが自分で編んだものらしい。

　途と中ちゆうこっそり耳打ちされたが……本当はその三本の三つ編みをさらに編んで完成となる髪型だが、リッツはこの状態のが気に入ってしまったらしい。

　とはいえ、年相応に子供っぽい感じがして、かわいらしい。それを告げるとリッツはニンマリと笑ってぴょんぴょん飛び跳はねていた。

「リッツ、そろそろ遅おそいから、送っていくよ」

　途と端たんにリッツは不満げな顔をするが、お腹なかが空すいただろ？　と尋たずねると、渋しぶ々しぶというように頷うなずくのだった。



「そうだ、モルト。この子にニンジン持たせようぜ。いいのが穫とれ……何だよ、リッツ、その嫌いやそうな顔は」

　ライがリッツの前にしゃがみ込んで、その頭を撫でた。

　自警団の訓練所の片かた隅すみには畑があり、そこでは若手達が半ば趣しゅ味みで野菜を作っているのだが、先日ニンジンの収しゅう穫かくがあったばかりだった。このニンジンはどうもライにとって自じ慢まんのデキだったらしく、収穫してからはとにかく手当たり次し第だいに人に配りたがる。

「ニンジンは栄養があっていい。元気になる。それにいろいろ使えるんだぞ？」

「……なぁライ、ニンジンを喜ぶ五歳児なんていないと思うぜ？」

　持って行けば親おや御ごさんに喜ばれるだろ？　ということでライが取りに行こうとすると多めに持ってくるようにオリービーが言う。ライは布ぬの袋ぶくろにたっぷりとニンジンを持ってきたので、モルトがそれを受け取り、リッツと手を繋つないで送っていこうとすると……オリービーもまたリッツの手を取った。リッツを送りがてら花屋の店主のところにもお裾すそ分わけするつもりらしい。

　畑作業するというライを残し、モルトはリッツとオリービーの二人と共に自警団本部を後にした。

　三人で手を繋いで夜道を行く。まるで若い夫ふう婦ふと一人ひとり娘むすめのようだ。

　昼ひる寝ねもして元気いっぱいのリッツをオリービーと共に持ち上げたりしていると、本当にそんな未来が来るような気がしてくる。

「モルトさん、どうかしました？　何だか凄すごく嬉うれしそう」

「え？　あぁいえ……えーっとあー、いや、その……あっ！　いえね、実はライからさっさと住民登録しろよって言われてるんです」

　恥はずかしい想像をしていたことを慌あわてて誤ご魔ま化かしたところ、オリービーは「まぁ」と何ら疑うことなく乗ってくれた。

「住民登録なしの非正規の団員見習いではお給料、貰もらえないんですよね。どうしてなさらないんです？　モルトさんなら特に問題はないじゃないですか」

「根無し草の性しよう分ぶんなもので。登録して居着くことが怖いというか、変に身を重くするのに気が引けるというか。何より団員寮じゃ衣食住に困りませんし、別にいいかなって」

　フンフンとリッツが鼻息を荒あららげ、モルトを見上げた。何か言いたいことがあるようだ。

「あのね、モルト、お金稼かせいだら、リッツの家に来て！　お部屋空いてるよ！　三階の一番いいとこ、この間ね、空いたばかり！」

「まぁいい考え。そうしたらリッツちゃん、毎日モルトさんに会えるね」

　リッツがはにかむように笑って繋いだ手をブンブンと振ふる。モルトは、ただただ苦く笑しようするしかない。こんなに嬉しい言葉はない……と、一いつ瞬しゆん思うものの、よくよく考えてみると、言っている言葉自体は商売人、それも夜のお店の常じよう套とう句くと一いつ緒しよである。

　そんな、温かいくせにどこかしらに怖さを感じる話をしながら、モルト達はアルコ・ホールの大通りを歩んだ。

　街の外れにある本部からアルコ・ホールの中心部近くの花屋は遠いはずだったのに……その道程はあまりに、あっという間だった。

　花屋は木戸が閉められ、臨時休業を示す看板がぶら下げられていた。店てん舗ぽ兼けん住居なので、店主のお婆ばあさんは中にいるらしくオリービーが木戸をノック。しかし、反応がない。

　通りは夕食を求めて飲食店を目指す人々や仕事終わりで帰路を急ぐ人々で賑にぎやかだ。そのため、ノックが聞こえないことも多いので、オリービーは今一度強く木戸を叩いた。

　だが、反応はやはり、ない。

「あれ？　外出中かしら。珍めずらしい、日が暮れるとあんまり出歩かない人なんだけど」

──いや、いる。

モルトは身を硬かたくした。確実に、中に、いる。

「仕方ないから、裏に置いていきましょうか」

「……オリービーさん、俺が置いてきますよ」

モルトはニンジンが詰つまった布袋を手に、長柄刀と共に店の裏へと回った。

アルコ・ホールの通りは広く、立派な石いし畳だたみが敷しかれているものの、店と店の間やその裏となると狭せまくて、人がかろうじて行き来するだけのスペースしかない。

さすがにここでは長柄刀は邪じや魔まである。店の裏口の前に辿たどり着くと、モルトは長柄刀と袋を静かに地面に置き……そして、足のホルダーからナイフを抜ぬいた。

間ま違ちがいなく、未まだ、いる。裏口の扉から、隙すき間まから、そして壁かべ越ごしに……はっきりとモルトはそれを感じた。

ナイフを握にぎり締しめた瞬しゆん間かん、モルトの中にあった先程までの気恥ずかしくも温かい気持ちが瞬時に失うせ、代わりに現れるのは鉄の塊かたまりのような冷たく固い心。

分厚いナイフの刃はに手を這はわせ、その冷たさと硬さを感じつつ、呼吸を整え、波打っていた水が静まるように、心を落ち着け、気配を消す。

訓練されたままに、生まれついた本能のままに、冷静かつ冷れい徹てつに事を為なせる己おのれを久方ぶりに呼び戻もどした。

足音なく裏口の扉へと近づき、静かに、そっと、寝ている赤子の頬ほおを撫なでるような、ともすると優やさしさすら感じるほどソフトに、押し開く。

不意に、血の臭においが溢あふれた。

室内は暗くら闇やみだった。夜、かつ、室内に灯あかりがないという以上に窓という窓のカーテンが閉められているのだ。

闇。そこに漂ただよう血の臭い。そして、気配を殺している気配。

それは肉にく食しよく獣じゆうが獲え物ものを狩かろうとする際に気配を消すのと同じレベルで、人の身でありながら訓練でそれを身につけている。完かん璧ぺきだった。

しかし、モルトはそれを見つける訓練を幼年期に積んでいるのだ。

しゃがんだ体勢のまま、モルトは室内にそっと足を踏ふみ入れた。

暗い。室内は見えない。だが、それでも空気の流れから、そこが椅子やテーブルのある、やや広めのキッチンだと知れた。かなり散らかっているようだが……。

肌はだは何も感じない。耳は壁越しに伝わってくる往来の雑ざつ踏とうだけ。しかしモルトの鼻先は、室内の片隅にある濃のう密みつな血の臭いを嗅かぎ取っていた。

死体。それは間違いなくある。だが、それは誘さそいだろう。

同族が来ると察した彼は、モルトが裏に回る間に死体を裂さいたか何かして、わざと血を出し、暗闇の中であっても死体がある場所をわかりやすくしたのだ。

だからこそ、入った瞬間に急に血の臭いが溢れたのだ。今し方殺されたのならばまだ恐おそらく店主の老ろう婆ばの気配を感じることができただろうが、それはなかったし、これだけしっかりと気配を殺せる者が大量に血を流させるような殺しをするとも思えない。

だから、誘いだ。モルトは室内の気配を探さぐりつつ、臭いを辿る。大量の血が溜たまっている一角。そして……かすかに、わずかに、血の臭いがする場所がある。……天てん井じようだ。

開け放たれた裏口から差し込むわずかな光で、己のシルエットが床ゆかに映っているのを見て、モルトはそっと扉とびらを閉めた。

完全な暗闇の中、さほど広くもない空間でモルトと彼と、そして死体が沈ちん黙もくの時間を過ごす。そうしている間に、わかった。闇へ溶とけ込む技術もなかなかだが、この手の戦せん闘とうそ

のものに対しては……かなりのものだ。以前ならともかく、果たして今のモルトで対たい抗こうできるかどうかは際きわどいところだと予感した。

　長柄刀の扱あつかいには慣れてきたが、代わりにナイフを用いた暗闘からは遠ざかっている。

　かつての勘かんが、今なお体に宿っているのか否いなか、モルトにはわからなかった。

　モルトが、死体が囮おとりであることに気が付いたことは、すでに向こうも察しただろう。

　それは同時に室内に犯人がいることをモルトが察しており、扉を閉めたということはここで一戦かます覚かく悟ごをしている……ということころも理解しているはずだ。そして、今、彼はモルトがどの程度の腕うでなのかを必死に探っているはずである。

　互たがいに手を伸のばせば触ふれ合える距きょ離りにいる二人が気配を殺しつつ、暗闇に身を沈しずめながら相手を計り合う……そんな、肌がひりつくような状じよう況きようだった。

　動けば一瞬だろう。だが、そこまでは長くなりそうである。

　……そんな永遠にも似た均きん衡こうが崩くずれたのは唐とう突とつだった。

「モルトぉ、まだぁ～!?」

　リッツの声。それが、合図だった。それによってモルトの内に抑おさえ込んでいた気配が外に漏もれ、天井の彼が飛び来た。

　気配も殺気もない。完全に消している。だが、狭い室内の空気は動く。モルトはそれを肌で感じて迫せまり来る攻こう撃げきを予想し、床を転がってかわした。

　床に左手を突つき、もう一方の手でナイフを逆手に握り直す。ぬめる。血だ。

　だが、気にしている場合ではない。しゃがんだままのモルトに向かって彼の腕が振り下ろされる。得物はモルト同様、大振りのナイフ。室内の詳しよう細さいがわからない以上、ヘタに動くと物に足

を取られる可能性があるため、モルトはあえてそれをナイフで受けた。

　ガキンっと激しい金属音と共に火花が散る。黒ずくめの見知らぬ男、顔はボロボロ。しかし、モルトが驚おどろいたのは相手の顔ではなく、その得物だ。

　モルトと同じ形状のナイフの刃だった。そしてグリップには鍔つばのないロングソードが幾いく本ほんも並んでいるという……三年前に滅めつ亡ぼうしたグリコゥ国の刻印。

　あまりに予想外の得物に思わず息を呑のんだ。そしてそれは向こうも同じだったようだ。彼の目がこれでもかと見開かれていた。……だが、それは互いに刹せつ那なだけ。

　火花による一瞬の明るみが消えると、闇の中での激しい攻こう防ぼうが始まった。

　互いに一言も喋しやべらず、ナイフのみならず手足による体術を駆く使しして相手を攻せめ、同時に相手からの攻撃を受ける。

　目に頼たよらず、全すべて耳と空気の流れを肌で読み合い、刃を、そして手足をぶつけ合った。肉を打つ鈍にぶい音が立て続けに起こり、時折金属音が響ひびく。

　まるでベッドの上の男女のように、体を激しく動かす際の床の軋きしみや空気の乱れを生みつつ、モルトは彼と激しく絡からんだ。

　そして、知れた。この男が身につけている技わざを、モルトは過去に経験している。

「お前、グリコゥ国の……！」

　ようやく喋ったその一言が隙すきとなり、モルトは彼から蹴けりを受けて血だまりの中に倒たおれる。追撃が来るかと身構えたが、それがない。

「こちらもお前を察したぞ。……運命なのか、これは……」

　その言葉を最後に裏口の扉が激しく開かれ、彼の気配が本当の意味で消え失うせた。

　モルトもまた即そく座ざに立ち上がって裏口を出る。店てん舗ぽの路地裏を見事な速度で走り抜けていく。一瞬追いつけるかに思えたが、すぐに追いつけないと悟さとった。今の体は、意図的にウェイトを付けたせいで俊しゅん敏びん性が落ちているのだ。

　それでもモルトは走る。男を追い、表の通りに出た。そこには夕食時で行き交かう大勢の人々がおり……どこにもあの黒ずくめの男の姿はない。

「……俺を察した、だと……バカな」

　思わず呟つぶやくモルトの声を悲鳴が打ち消した。若い女が口を押さえてモルトを凝ぎよう視ししている。何だ？　と、一瞬思ったものの……モルトはその時になって己の姿を意識してハッとした。転てん倒とうした床には血だまり。手にはナイフ。

　どう見ても、それはそういうことに見えてしまう。

「ち、違う、これは……!!」

　周りを行き交う人々が一いつ斉せいにモルトと距離を取る。まだ、タガは外れていない。

　治安が良いとされるリキュール、その中心街であるアルコ・ホールの大通りである。誰だれも彼もがそんなはずは……と、ギリギリで思っている。だが、モルトの纏まとう血が発する臭いは遅おそかれ早かれ彼らの脳に危険信号を与あたえることだろう。

　どうする、どうすればこの場を収められるのか、モルトは考えた。

　だが、その答えが出るより前に、場の緊きん張ちようをモルト自身が壊こわしてしまう。

　瞬時に重心を落とし、ナイフを擡もたげて構えてしまったのだ。それはモルトに向けられた鋭するどい殺気に自然と体が反応したからに他ほかならないが……周りの人間達はそうは思わない。

　一斉に女子供が悲鳴を上げて逃にげ始める。男達もジリジリと間合いを広げていく。

　夕食時という人が多い中でその混乱は次々に波は及きゆうし、拡

ひろがっていく。逃げろ、向こうへ行くな、通り魔だ、そんな声が辺りから次々に聞こえてくる。

　気が付くとそれはあっという間にパニックと呼ぶに相応ふさわしいものになり……モルトが追っていた男の痕こん跡せきを完全に消し去ってしまうのだった。

　モルトは身構えたまま、周囲を警けい戒かいする。

　━まだ、いる。彼はどこかから見ている。それを直感した。

「何だ、どうした!?　どいてくれ、自警団だ、道を開けてくれ!!」

　人ひと混ごみの中を逆流するようにして近づいて来る長なが柄え刀とうの刃が二つ。

「お、おい、お前……ぶ、武器を捨てろ!?」

　モルトは思わず歯は噛がみしたくなった。現れた自警団の二人はまだ鋼鉄製のそれを持っていない見習いである。モルトより年下で、長柄刀の経験も浅い連中だ。

　二人は慌あわてながら教えられた通りに長柄刀を構えてモルトを威い嚇かくするのだが、ナイフは手放せなかった。

　これを手放せば……恐らく、その瞬間に彼が来る。

「いい加減にしろ、最後の警告だ！　武器を捨てろ!!」

「俺だ、モルトだ、良く見ろ！　事件に遭そう遇ぐうして、今その犯人を……！」

　モルト？　と、二人は顔をしかめた。見習い同士、お互いに面識はあるが、どうやら髪かみ先さきから滴したたる程ほどに血を浴びてしまっていることでわからなかったようだ。

「い、いや、モルトだからといって関係ない！　武器を捨てろ、まずはそれからだ！」

　確かにそうなのだ、そうするように自警団では教えられる。危険因子はそれが何者であろうが関係なく、まず無効化する。そうすることでそれ以上状況が混乱するのを抑え、現場の主導権を明確に手

にするのだ。

　彼らの行動は正しい、だが、そうはできない状況。それを説明したところで彼らは納なつ得とくするわけもない。何より納得したとしても、ルールである以上、刃やいばを向けるしかないのだ。

　見習いの二人がやむを得ないと顔に出しながら、長柄刀を振ふってくる。モルトは二人の一撃を素す早ばやくかわし、膝ひざ裏うらを蹴るようにして一人を転倒させ、もう一人はその顎あご先を殴なぐりつけて意識を飛ばした。まだ基き礎そ訓練を終えたばかりのような二人とはいえ、長柄刀を持った自警団が倒れた……それによって場の混乱はさらに大きくなっていく。

「モルトさん！」

　人混みを逆流し、現れたのは……リッツの手を引く、オリービーだ。彼女は血まみれのモルトの姿を見るなり口に手を当て固まってしまう。

　一方、リッツは慌てた顔でモルトへと駆かけ寄ってくる。

「どうしたの!?　モルト、怪け我がし──！」

「リッツ来るな!!」

　腹の底から怒ど声せいが飛び出し、少女の動きを止めた。

　モルトは辺りを警戒し、未まだ構えが解けない。

　まだ、視線を感じる。彼はまだ、近くにいる。

「みんなどいて頂ちよう戴だい！」

「もっと急げ、場の混乱が抑おさえられなくなるぞ！」

　今度逃げ惑まどう人々をかき分けて来たのは、長柄刀を担ぐ大おお柄がらな熊くまのような男と、彫ほりの深い男……コーンとブレンデッドだ。

　二人は血まみれでナイフを持つモルトと、地面を転がる二人の見習いを見るなり、素早い動きで長柄刀を構える。瞬しゆん間かん的に浴びせられる衝しよう撃げき波はにも似た二人の強きよう烈れつ

なまでの覇は気きに、モルトは即座にナイフを捨て、両手を挙げて膝を突いた。

　この二人ならば、屋外ならば、彼に対抗できる。そう判断したのだ。

　コーンがモルトを乱暴に突き飛ばして這はい蹲つくばらせると、その背に太い足を乗せて完全にその動きを封ふうじる。重量に息苦しさを覚えるものの、しかし、当面の危機は脱だつしたのだと察し、モルトは深く息を吐はいた。

「……あの、雨の夜にいたのか、お前もまた……」

　モルトは地面に頬ほおを付けながら呟くが、それに応こたえは返ってこない。

　彼の視線も、今はもう、ない。

　周りの忌き避ひ感を抱いだく人々の視線と愕がく然ぜんとするオリービー、そして泣き出しそうな顔のまま、心配げに見つめているリッツの視線だけを、モルトは感じていた。

　それから幾ばくもなく、花屋店内にて店主である老婆の死体を自警団員が発見。その傷口と特とく殊しゆなナイフの形状が一いつ致ちしたがために、花屋店主殺害の容疑者としてモルトは強制連行されることとなったのだった。

●第三話中編『Grasp　牢ろう獄ごくの少年達』

　荒あら縄なわで縛しばり上げられた血まみれのモルトを担かつぎ上げ、コーンは人ひと垣がきを押しのけつつ、自警団本部を目指した。途と中ちゆう、場の混乱を抑おさえるために動ける若手をかき集め、アルコ・ホール中に配置するよう指示を出す。休きゆう暇か中の連中も叩たたき起こそうかと思ったが、現場で別れたブレンデッドがすでに声をかけてくれていたようだった。

　花屋店主の殺害……。大勢が行き来するリキュールだ、事件が起こるのは致いたし方のないことではあるし、殺人が極きわめて珍めずらしいというわけでもない。だが、事件に自警団員が関かかわった、しかも誰の目から見ても犯人としか思えぬ身なりで大通りに現れ、駆けつけた団員二名を倒したとあっては、騒さわぎにならないわけがない。

　モルトは見習いの見習いといったところだし、血まみれで人前に出た時は長柄刀を持ってはいなかった……だが、顔は知られている。

　治安を預かる自警団への信しん頼らい、そしてリキュールの安全だとするイメージ……それらだけは何があっても守らねばならなかった。流通を命いのち綱づなとするリキュールにあって、それら二つは街の発展・維い持じにおいて極めて重要な要素なのだ。

「どいて頂戴！　邪じや魔まよ！」

　本部の前にはすでに男が待ち構えており、顔を見るなりそれがゴシップ記者だと知れた。

　ハンチング帽ぼうを被かぶり、手には万年筆とメモ帳という非常にわかりやすい格好のそいつを、コーンは乱暴に押しのけた。見知った顔の男である。リキュールに記者は何人もいるが、この男ほど耳が良くて行動の速い男はいない。

「コーンさん、事件、あの、例の花屋殺人の犯人ってのは、その……えっと、モルトか、自警団見習いのモルトだって本当です

か!?　今あなたが担いでいる、そいつが……!?」

　息を切らせながら言うその姿からするに、まだ情報が頭の中で整理がついていないのだろう。事件を聞きつけ、断だん片ぺん的な情報だけを握にぎり締しめてここに来た、というところか。彼もプロだ。今この現場を押さえなくては収しゅう監かんするモルトを拝めないと判断したのだろう。

「さぁね、どうかしらね！　それをこれから調べるのよ！」

「ですが犯人だと思ったから捕ほ縛ばくして連れてきたわけでしょう!?　見習いのモルトを！」

「さぁね、わからないわ！　それからモルトは見習いの見習いよ、正式な登録はまだ！」

「それは事件と自警団は関係ないとする発言ですか!?　蜥蜴トカゲの尻尾しっぽ切きりに思えますね!?」

　余計なことを言った、とコーンは内心舌打ちしつつ、それ以上記者に応じることなく本部へと入った。

「……やってないんでしょ、モルト？」

　ボソリと囁ささやくように尋たずねるが、モルトは応えない。捕縛してからというもの、ずっと死人のようにグッタリとしたままだ。

　騒がしい本部の中を抜ぬけ、地ち下か牢ろうへと続く階段へ向かうのだが……そこにもう一人、立ち塞ふさがる者がいた。ライである。手には長なが柄え刀とうがあった。

「コーン、モルトを放せ。そいつはやってねぇ」

　情報を小耳に挟はさんで、ここで待っていたか。記者の男と同じく、行動の速い子である。

「ライちゃん、いい？　怪あやしければまずその身み柄がらを押さえるのよ。犯人の可能性は当然あるし、違ちがったとしても何か情報が手に入るかもしれない。何より怪しい奴やつを捕つかまえることで不必要な憶おく測そくや不安を街に広げないことにも繋つながるの。わかったわね？」

　コーンはライの脇わきを抜けて地下への階段を下りようとしたが、その動きがピタリと止まる。ライが、長柄刀を構えたのだ。

「だったら牢屋じゃなくてもいいじゃねぇか！」

　やれやれ、とコーンは首を振った。激情的なところは母親譲ゆずりか。そのくせして放ってくる覇気は父親譲りと来ている。両方と親しかった身としては、ライが何とも眩まぶしかった。

「……でもね。お子ちゃまの我わが儘ままだけじゃ、街は守れないのよ」

　ライが長柄刀を振り被りつつ、迫せまる。刃はを返し、峰みね打うちとしているが、一いつ般ぱん人ならばそれでも当たり所によっては致ち命めい傷しようたり得うるだけの力は入っているようだ。

　コーンはモルトを担いだまま、大きく踏ふみ込む。急接近によってライの間合いを崩くずし、彼の顔面に強烈な張り手を叩き込んだ。常人なら首の骨が折れてもおかしくない程のそれではあったが、ライなら問題ない。

　何せあの二人の息子むすこだ、さらに自分とブレンデッドの手によって鍛きたえているのだ。殺す気でやったとて、生き残りはするだろう。

　破は裂れつ音にも似た音と共にライは吹ふっ飛び、壁かべに激しくぶつかる。壁にヒビを入れたライの小さな体は床ゆかに落ち、ピクピクと痙けい攣れんを始める。

　その衝しよう撃げきに本部にいた数人が駆けつけてくるが、コーンは彼らに背を向けたまま階段を下り始める。

「ライちゃんの頬、手当てしてあげて。あと、お姉さんを連れて……あぁ、いっそ起きたらまたうるさくなるだろうから、この子もモルトと一いつ緒しよに地下牢に放ほうり込んでおきましょう。うん、そうしましょう」

　我ながら悪くない考えだ、コーンはそんなことを思う。

　たとえどんな時でも、どんな場所でも、相棒が傍そばにいれば大だい丈じよう夫ぶ。

男の子というのは、そういうものだ。

1

テーブルの上に大きなナイフが突つき立てられた。

刃は渡わたりだけで二〇センチほど、肉厚だが特に先せん端たん部は厚く、叩き付ければ相当な力を発揮するのが、見ただけで察することができるような、そんな一本だった。

「ほぅ、これはまた……見事な」

自警団本部内の薄うす暗ぐらい取調室において、鼻がやたらと大きな武器屋の店主がそんな声を漏もらした。

彼を両りよう脇わきに挟むのはコーンとブレンデッド。二メートルほどの熊のような大男、細いが一九〇ほどある彫りの深い強面こわもての男……そのため老人である武器屋は小こ柄がらであるという以上にやたらと小さく見えた。

触さわっても？　と、武器屋が言うのでブレンデッドが頷うなずく。

「厚さは六ミリから七ミリ強、先端部は簡易的な斧おのとしても使える、獣けものの牙フアングのような形状、峰みねにある鋸のこぎり刃ば……そして柄ハンドルの先まで心材を通らせたフルタング仕様……。形は完かん璧ぺきで、この質感……どうやら本物か、それに近いだけの高品質を持っているようだ」

本物とは？　と、ブレンデッドが尋ねる。

「グリコゥ国でしか造れなかった極めて硬かたく、折れもしない、とても特別な製法によって生まれる刃……。何せ剣けんと打ち合って、その剣はおろか、敵の首ごと斬きり飛ばしたっていう逸いつ話わがあるぐらいだ。……この素材は技術的、そして政治的な理由から外国向けに出しゆつ荷つかしなかったもんだから紛まがい物がかなり出回ってる。……本物だとしたらかなりのお宝だ」

　武器屋の話によれば、そのナイフはグリコゥ国の特別な人間にだけ支給される武器というよりは、勲くん章しようのような意味合いのものらしい。小国でありながら技術大国で知られるグリコゥ国でさえ、その製法の難しさから大量生産できなかった逸いつ品ぴんであり、それを支給されることは兵士にとって最高の誉ほまれなのだという。

「これを持つ者？　そうだねぇ……将校、近この衛え隊といった連中かね。とはいえそいつらは完全に勲章扱あつかいでこんな見事なものなのに一生使わずにしまっちまう。宝の持ち腐ぐされだ。……だが、実際に使用する部隊もあったはずだ。……グリコゥ国軍の特殊工作中隊さ」

　その名はコーンも知っていた。中隊規模の部隊ながら、その働きは凄すさまじく、数百年に亘わたって小国であるグリコゥ国の独立を守り抜く陰かげの功労者という話である。

　ただ傍はた目めからは、かの国は高い技術を売り、それで得た莫ばく大だいな資金で国を富ませ、自らの身を守っていたようにしか見えないため、噂うわさ自体が眉まゆ唾つばではあるのだが……。

「しかしこのナイフはハンドル材が正規のものじゃない。正規品のハンドルには鍔つばのない剣が幾いく本ほんも彫ほられたグリコゥ国の刻印が入っている。……だが、これは木材を重ね合わせ、使用者の手のサイズに合わせて削けずったものだろうな。遣つかい手に合わせたハンドメイドだ。……女かな？　少し小さい手に合わせて作られているようだが……。ともかくブレードが本物であるのならば、特とく殊しゆ工作中隊のものだと私は判断する」

　身元がわかるような得物を持って他国で工作活動するというのは、確かにリスクが大きい。本来であれば現場で手に入れた得物で仕事をするべきだろうが、もし、このナイフが他に類を見ないだけの有用な物であったというのなら……状じよう況きようによってはこうするのも、わからないでもないのだという。

　だが、そうすると……モルトは……孤こ児じだった関係で年ねん齢れいは本人もわからないらしいのだが、一六歳程度、せいぜい一七歳辺り。グリコゥ国が滅めつ亡ぼうしたのは三年前……となれば十代前半……ないとは言い切れないが、正規の軍に入れるにはいささか若すぎるような気もする。

　かなり、際どい。

　コーンは思わずブレンデッドと目を合わせる。そしてお互たがいに相手の発言を待ったが、言葉になるものはなかった。

　沈ちん黙もくの中、まるで最高級のウィスキーを舌の上で転がすように、武器屋はナイフを手にし、うっとりとした表情で掲かかげ、その刃に指を這はわせていた。

「……おじいちゃん、端たん的てきに訊きくけど、そのナイフ、本物だと思──」

　コーンの目の前で武器屋は席を立ち、モルトのナイフを振ふり被る。

　何を！　とブレンデッドが制止しかけたが、それより先に、そのナイフが一いつ閃せん。

　──キンッ！　と、小気味良さすら感じる小さな金属音が響ひびく。武器屋は右手にモルトのナイフ、左手にはいつの間にか小ぶりなナイフ。

　しかし……その左手のナイフの刃の半ばから先は床を転がっていた。

「俺が護身用に持ち歩いている、そこそこの得物だ。……本物だよ。グリコゥ国でしか造り得なかった幻まぼろしの逸品だ」

　ゴトリ、とテーブルにナイフが横たわるのを、再び沈黙でもってコーン達は見つめた。

「おじいちゃん。これと同じもの、手に入れようとするとしたら……どうやれば？」

「さぁてな。グリコゥ国が滅亡した際には少量流出したと噂になったが、相変わらず手に入れたと自じ慢まんしている奴は見たことがない」

「三年より前、グリコゥ国が滅亡するより前だとしたら？」

　モルトはこのナイフを三年前、つまりはリキュールに辿たどり着いた時点ですでに持っていたはずだ。こんな中ちゅう途と半はん端

ぱな得物を何故なぜ大事そうに持ち歩いているのかと疑問に思ったのをコーンは覚えている。

「造り手をともかくとすれば……グリコゥ国で出世するか、特殊工作中隊に入るか……」

　やはりそれしかないのか。コーンは今一度ブレンデッドと視線を交かわした。

「……あとは、そいつらから奪うばい取るかだな。国をろくに出ない近衛隊と、存在すら怪しい幻の部隊から。……いやはやいいものを見せて貰もらった。今夜はうまい酒が飲めそうだ」

　安あん美び亭ていの無骨な店主の顔でも見ながら一いつ杯ぱいやるとしよう。そう言い残し、武器屋は斬り飛ばしたナイフの刃もそのままに、取調室を後にしたのだった。

　床に落ちていた刃を手に取ってみれば、確かに、鋭えい利りな刃物で切断されたのだとわかる。

　金属が、金属でこうも見事に切れるものなのか……そんなふうに思ってしまう程ほどに、綺き麗れいな切り口だった。

「コーン、モルトは何と言った？」

「ほとんど喋しやべらないわね。……でも、自分はやっていない、店内にすでに犯人がいて、それとやり合った……ってのはさっきようやく聞き出したわ」

「だが店主の切り口はモルトのナイフと一いつ致ちした。極きわめて珍めずらしいナイフの形状に、だ」

「もしそれが正しいとすれば、やたらと人や物が流れるこのリキュールの武器屋ですら目を剝むくマニア垂すい涎ぜんの品が、あの花屋に二本集まった、ということになるわね。……それともモルトが肌はだ身み離はなさないあのナイフを真犯人が奪い取り、店主のおばあちゃんを殺し、かつ、またモルトが奪い返した……とか？　暗くら闇やみの中で」

　どちらもあり得るとは言いにくい話であった。何より、このナイフを何故モルトが持っていたのか……それがどうしても気になってしまう。

三年前、グリコゥ国が滅亡した際には多くの難民が出たのは事実だし、その中に、密ひそかに軍人達が混じっていたのも間ま違ちがいはない。その中に、モルトはいたのだろうか。

だが、やはり軍人とするには若すぎる。

モルトは赤子の頃ころに隊商キャラバンに拾われ、それからは世界を旅して廻まわっていた、とコーンは聞いていた。実際、ふとした時にはるか遠くの国の知識を口にすることもあるし、さらっと異国の民たみと聞いたこともない言語で挨あい拶さつしているのも、見たことがあった。

それらが付つけ焼やき刃ばで頭に入っているだけ、という感じはしない。実際に肌で経験して学んできた、という印象だった。モルトはずる賢がしこくはあっても、本を読んだり、誰だれかに教えられたりして学を身につけるタイプではない。

「あの子が、どこでこの得物を手に入れたのか……それを聞き出してみる？　ナイフの出所、モルトの過去……それが不明だから怪あやしく思える。だからそれを問い、向こうが素す直なおに答えればあるいは……」

いや、とブレンデッドがナイフを手に取る。

「その前に尋たずねることがある。一つだけ。それさえ応じてくれれば、後は些さ細さいなことだ」

用意してくる。そう言い残してブレンデッドもまた取調室を出て行った。

事件調査の専門部署である〝調査部〟から、花屋店主の遺ゆい言ごん書しよが見つかったと報告があったのは、それから幾ばくもなかった。

本部の地下にある牢ろうは、当然のことながら窓などもなく、暗かった。

床ゆかも壁かべも、ざらざらとした硬いレンガで覆おおわれて冷たい。だからか、空気すらひんやりとしている。体が冷える。……雨の夜に、横たわっているかのように。

久々にナイフを使った。モルトは二つある牢のベッドの上で、己おのれの右手を見やる。

最後にあのナイフを使ったのはいつだったか。……確か二ヶ月前だ、とモルトは思い出す。ライと街をふらついていた時、安美亭の店主おやつさんから大きなソーセージを貰った時だろう。それを街外れまで持って行き、そこで火を熾おこして焼き、ライと二人で分けるために使ったのが、最後だ。

我ながら酷ひどい扱あつかいだ、とモルトは笑う。だが、そうできるぐらいに、このリキュールに……そして、ただの人としての生活に慣れてきた、ということなのだろう。

それでも、結局は……モルトは半身を起こし、壁を背もたれとした。

「んがっ!?　……あぁ、クソッ!!　コーンの奴やつ!!」

耳に響くような声と共に、昨夜放ほうり込まれて以来ベッドで唸うなっていたライがようやく起き上がった。彼は腫はれ上がった頬ほおのまま、きょろきょろと辺りを見回し、牢にいることを認にん識しきすると、そっと腹に手をやる。

「この腹の減り具合からすると……あれから半日ってとこか」

「ライ……お前、随ずいい分ぶんいい時計持ってるな……」

実際今は昼頃ごろ、つまりライが放り込まれてから半日といったところだった。

ライはベッドから降りるなり、太い鉄てつ格ごう子しをつかみ、看守の団員に声をかけた。団員全員をよく知るライは彼の名を呼び、飯はどうなっているのかを問う。

「もうすぐ昼の時間だ。ちゃんと出されるから待っていろ」

　ならいい、とライはすぐさま引き下がると、ベッドに腰こし掛かける。牢の左右の壁にベッドがくっついているせいもあって、それに腰掛けるとモルトと向かい合うようになった。

　腫らしてはいるが、昨日放り込まれた時に比べればかなりマシになった顔で、ライはモルトを見み据すえた。

「じゃ、飯までの時間を使って……モルト、聞かせてくれ」

　何を問われるのか、わかっている。コーンに散々やられたのだ。だが、答えられることは多くない。あの黒ずくめの男が意図したものではないにせよ、完全にモルトが犯人であるかのような状じよう況きよう証しよう拠こが揃そろってしまっている。

　それを覆くつがえせる情報は、今のモルトにはないのだ。強しいて言えば動機がないこと、野菜をお裾すそ分わけするために第三者であるオリービーが花屋へ寄ろうと口にしたこと、そしてオリービーやリッツの前から姿を消してから血まみれで外に出てくるまでが比ひ較かく的てき短時間だったことの三つだけだ。

　だが、どれも無罪だと言い張るにはあまりに頼たよりなく、一方の状況証拠はそのインパクトの強さと相まって、どれか一つ取ってもかなり強固だった。

　もし、これを覆すとするのならば……モルトの全すべてを話さなくてはならないだろう。しかしそれでも状況をひっくり返すのは難しいと思えた。しかも、仮に釈しやく放ほうされたとしても……全てを話せば、この街にはいられなくなる。

　いつか来ると思っていた別れが、こんなにも早く……それを思うと息苦しさを覚えた。

「なぁ、モルト」

　ライの目が、鋭するどい。たかだか一一歳の小こ僧ぞうがするような目ではなかった。

　三年寝しん食しよくを共にしたせいもあるが、それ以上にヘタなことを言えばすぐにバレてしまうような……そんな気がした。

　だからこそ、モルトは沈黙という回答を準備していたのだが──。

「犯人はどんな奴だったんだ？」

　ライは、いきなりそんなことを言った。

　自分はやっていない、犯人はすでに中にいて云うん々ぬん……という、モルトがコーンに絞しぼり出すようにして語ったのをこの少年は聞いていないはずだ。つまり、ライが知っているのはモルトが店主の死体が転がる花屋からナイフを手に血まみれで大通りに現れ、若い自警団員二人を叩たたきのめした……というだけのはずである。それなのに……。

「あのさ、ライ。……自分で言うのも何だが、普ふ通つう、最初に俺が犯人か否いなかを疑うべきじゃないのか？」



「モルトはやんないだろ、そんなこと」

　ライはそれだけしか言わなかった。きっと、理由はない。自分がそう思うから、犯人じゃない。そう信じて疑わない。子供っぽい、独善的な、そんな……。

　そう、理由なんてないのだ。けれど犯人ではないとする確信を彼に抱いだかせるだけの何かがモルトと彼の間にあったのは、間違いなかった。

　それは、心がくすぐったくなるぐらいに嬉うれしい。無条件の信用。それはどれだけ金を積もうが、ともすると長い時間を重ねたとしても得られないぐらいの……そんな……。

　これで相手がかわいい女の子であれば最高だったのだが……モルトは胸の内でそんなことを呟つぶやいて、くすぐったさから逃のがれようとした。

「……いいか、ライ、その信用はありがたい。けどな……？」

　ありがとう、と言いたくなる気持ちを堪こらえ、モルトは切々とライの考え方を否定する。一いつ般ぱん人同士ならそれでいい。だが、街を守る存在である自警団員がそれではいけない。感情や思い込みではなく、証拠に基もとづいて誰もが納なっ得とくできる理由を見つけ出し、物事を判断しなくてはいけない。そうじゃなければ、組織というのは腐くさってしまう。

　それを切々とモルトは年上の身として教えるのだが……ライはろくに聞きもしない。彼の中にある確信というのは、どんな証拠よりも根拠たり得るものらしい。

　このまま大人になったら面めん倒どう臭くさい奴になりそうだな、とモルトは思いつつも忍にん耐たいを持って話を続けた。

「わかった、わかったよ、モルト。俺は信じているものの、モルトはかなり怪しい。そういうことだな？　……いいって、もう。そういう面倒臭いところは、調査部の人間がやるもんだ。オレ達は実力行使が専門だから、これでいいんだよ」

　良かねぇよ、とモルトは頭を抱かかえた。自分が優ゆう秀しゅうな頭脳を持っているとは思わないが、ライはライで大たい概がいで

ある。

「ライ、モルト、飯の時間だぞ」

　看守が持って来てくれたのは、巨きよ大だいな金属製の深めの容器、二つ。金属製の取っ手がついているせいもあって、正直モルトとライはそれを見た瞬しゅん間かんに、食器の類たぐいというより、やや小ぶりなバケツを連想した。……とはいえ、確かにうまそうな匂においは漂ただよっている。

「ようやくか。……ふーん、これが噂うわさに聞く豚ぶた箱ばこの臭くさい飯ってヤツ……か……」

　ライがどこか楽しそうに昼食等々の出し入れ用の穴から受け取ると……固まった。

　彼が除よけ、モルトも受け取れば……その理由が嫌いやというほどにわかった。

「……圧あつ倒とう的てきに……豆だな」

　器うつわを覗のぞけば、ぎっしりと、豆なのだ。

　小型バケツにめいっぱいに、恐おそらく二キロに迫せまる勢いで……豆だった。

　豚箱の臭い飯、というよりは、豚のエサである。

「カルジャガは、アレか？　豆を使い続けないと死んでしまう体か何かなのか？」

　モルトの言葉に、ライが応じる。

「いや、豆と契けい約やくして豆を使し役えきする豆遣づかいなんじゃねぇかな……」

　当然ながら、他ほかに出される料理はない。モルトとライは床ゆかに座ると、胡座あぐらをかいて、器を抱だくようにして入れられていた木べらのような巨大スプーンを手に取る。

　豆である。これほどの量の豆と相対したのはモルトの記き憶おくにない。初めから追い豆ビーンズをぶっ込んでいるのだとして

も……凄すさまじい量だった。

　しかしながら匂いはかなりいい。この香かおりは生しよう姜がだろうか。それに、豚肉の匂いがする。

　きっと料理があって、その上に追い豆ビーンズとして塩茹ゆで豆がぶっ掛かけられているだけなのだろう。モルトはそう思ってスプーンで豆をかき分けるのだが……どこまでいっても悪夢のように豆ばかりだった。

「……なぁモルト、肉の匂いがするのに肉がねぇぞ」

「多分だけどさ、これ……肉ないぞ。あ、いや、欠片かけらが……あぁ……そういうことか」

　モルトが見つけたのは豆の隙すき間まに挟はさまっていた小さな肉にく片へん。それも脂あぶらカスのようなものだ。モルトは予想を確信に変えるために、豆を頰ほお張ばる。

　肉の旨うま味みに、生姜が香る。そこにパンチの効いた塩味が来るものの、咀そ嚼しやくするに豆のぼんやりとした味が追い掛けてきて、程ほど良よい具合になっていく。

「あぁ、やっぱりそうだ。これ、多分豚の脂身と生姜を鍋なべかフライパンで熱して、脂が溶とけ出て香りが出たところで豆と和あえたもんだ」

　恐ろしくシンプルにして、その気になればいくらでも大量生産できる豆料理である。手て抜ぬきと言えば手抜きだろうが、牢ろう獄ごくで食べる食事であることを考えると非難はできない。しかも味はさほど悪くないのがまた、腹立たしいところである。

　とはいえ、それが二キロ弱となれば……。

　豚の脂が味のベースとなっている以上、冷めてしまうとかなり悲ひ惨さんな味になりかねない。器は金属で、ひんやりした地下……時間的な余よ裕ゆうは皆かい無むだった。

　ライもそれを察したのか、モルトと共に怒ど濤とうの勢いでスプーンを豆の海に突つき刺さした。掘ほるようにしてすくい、流し込むようにして喰くらう。

頬を膨ふくらませ、咀嚼する間に次の一いつ杯ぱいをスプーンですくう。

豆、豆、豆……。ひたすらに、豆。たまに出てくる小さな小さな脂カスが最高のごちそうに思えるぐらい、豆に、豆だった。

ただひたすらなる豆。とにかく豆。やっぱり豆。どこまでいっても豆。世界は豆で埋うめ尽つくされているのではないか。そんな錯さつ覚かくを抱く程に、豆だった。

豆とは何なのか。豆が存在する理由、それを食べる理由、豆と共に歩む人生とは如何いかなるものなのか。そう、豆だ。豆なのだ。豆しかないのだ。

半分を過ぎて満腹感が出てきた辺りからモルトの頭が豆に支配されていく。

豆に酔よう。豆に染まる。豆だ、豆なのだ。豆だけなのだ。

普段豆ばかりだと思っていたカルジャガの料理だが、豆オンリーのバケツ飯を喰らっていると、アレがどれほどのごちそうだったのかと理解できる。

玉ねぎサラダなどの瑞みずみずしさが恋こいしかった。挽ひき肉にくなんて夢のようじゃないか。

……そんな感想を抱きながら、もそもそとした豆を喰らって喰らって喰らいまくる。

ふと気が付くと、鉄てつ格ごう子しの向こうから看守が眉まゆを顰ひそめて哀あわれむような目で豆を貪むさぼるモルトとライを見ていたが……二人は無視して意地のようになって豆を口に運び続けた。

最後、器の底の方に溜たまっていた至し極ごくの脂あぶら汁じるまでを啜すすり、二人はものの十数分で豆の全てを平らげたのだった。

「……ライ、お前、よくずっとこんな食事ばっかでやっていられるな……」

「ここまで豆だったのはオレの人生でも初めてだよ……」

　二人は大の字になって床ゆかの上に寝ね転ころがったが、生姜のせいか、体が火ほ照てっている。ブロックの冷たさが何とも心地ここち良かった。

「……で、こんなナリで訊きくのも何だけど、モルト、犯人は見たのか？」

　やれやれ、とモルトは仕方なしに、花屋の一件について語った。

　闇やみの中のナイフ遣つかい。それとの戦い、そして、逃にげられたこと……。

「……なるほど、だいたいわかった。間ま違ちがいなく犯人はモルトじゃねぇ。だが、こうなっちまった原因はモルト、お前の失敗のせいだ。……何で長なが柄え刀とうを置いた？」

「え？　そりゃ狭せまい場所での長物は不利だから……」

「確かにそれでナイフってのはわからねぇでもない。……が、だ。あのばあちゃんが殺されている可能性を察し、中にまだ犯人らしき気配がある……そこまでわかっていたんなら、長柄刀でいける」

　ライの言葉を理解できず、モルトは半身を起こして彼を見た。

「家ごとぶった斬ぎれば良かったんだ」

　ライは真しん剣けんな目で、モルトを見つめ返していた。

　冗じよう談だんや、子供染じみた無茶な理論ではない……確信を持って、彼はそう言っている。

「長柄刀は街の象しよう徴ちようであり、誇ほこりでもある。それを扱あつかう者が確信を抱いたのならば、家の一いつ軒けんや二軒、ぶち壊こわしたところでどうってことはない。その力強さを賞賛こそすれ、粗そ暴ぼうだ何だと非難する者などいはしないさ」

　無茶なことを。モルトは苦く笑しようするが、この少年ならそうするし、この街の人間なら本当に賞賛するだろう。それが、この街なのだ。いろんなものが振ふり切れている。

　だからこそ、シンプルで、スッキリとしていて……居心地がいいのだ。

　モルトは再び大の字になると、ライと共に木製柄の長柄刀で如何いかにして家の壁かべを破は壊かいするのかを議論した。全てが鋼鉄でできている長柄刀ならば如何様にもできるが、木製柄ではそうはいかない。折れる。……となると、その向こうにいる相手への攻こう撃げきを行うと共に壁をぶち抜ぬくにはどういう技わざがいいのか、そしてその一撃で仕留められなかった場合は……そんな議論を途と中ちゅうから身振り手振りを交えて続けていると、鉄てつ格ごう子しの外からも意見が加えられ──つまり、長柄刀を持っている看守もまた交ざり出す。

　三人はアレやコレやと自分なりの理論をぶつけ、時間を潰つぶしていった。同じ得物を持つが故ゆえの不思議な親和性だ。この手の話はいくらでもできてしまう。

「あーら、男の子同士仲がよろしいようで」

　鉄格子を挟みつつも車座となっていた看守は、その野太い声に反射的に直立する。コーンだ。そして、その後ろには革かわ袋ぶくろを持つブレンデッドとオリービーが続いていた。

「も、申し訳ありません！」

「あぁいいのよ、別に。怒おこっているわけじゃないわ。……席、外してくれる？　アタシ達が出ていくまで地ち下か牢ろうには誰だれも入れないようにしておいて」

　はっ！　と、看守はフリスビーを投げられた犬のように駆かけて行った。

　彼と入れ替かわるようにして、オリービーが鉄格子の前に立つ。

「ライ、モルトさん。着き替がえ、持って来ました」

　ライの保護者ということもあって、オリービーは寮りよう室の鍵かぎを持っているので、そこから見み繕つくろってきてくれたようだった。

　モルトは礼を言って受け取るのだが……ライは表情硬かたく、姉を見やっていた。

「……姉ちゃん、泣いていたのか？」

　言われて、モルトがよく凝ぎよう視しすれば俯うつむき加減の彼女の目元は赤く腫はれていた。隠かくすためにあえて顔を伏ふせていたようだが、弟には一発だ。モルトは着替えを差し出される際、両りよう腕うでに押しつけられ、谷間が強調された胸ばかりを見ていた己おのれを悔くいた。

「う、うん、少しね。店長が……その、あんなことになっちゃったから……凄すごく、いい人だったのに……」

「犯人はすぐに捕つかまる、いや、オレ達が捕まえてやるさ！　な、モルト？」

　あぁ、とモルトは曖あい昧まいに頷うなずいた。

　オリービーが顔を上げ、ニッコリと笑って首を傾かしげるのだが……その目め尻じりには涙なみだの雫しずくがあり、ライ共々モルトを動どう揺ようさせるのだった。

　オリービーは零こぼす涙を見られまいとするかのように、足早に去って行き、地下牢には重苦しい空気が残ってしまった。

「……何だよ、姉ちゃん。どうしてあんなに……」

　コーンがブレンデッドに目配せをすると、彼の持っていた革袋から新聞が現れた。

「今日の朝刊だ。ちょっとしたことが重なって、いささか面めん倒どうな憶おく測そくが生まれている」

　鉄格子の隙間から差し込まれた新聞を開いた瞬間、モルトとライは目を疑った。

　──花屋の老ろう婆ば店主殺し、真犯人はバイトの娘むすめか？

「なっ……なんだよ、コレ!?　何で姉ちゃんが犯人みたいに書かれてるんだ!?」

　喚わめき出すライをよそに、モルトは記事に目を通す。それで、確かに偶ぐう然ぜんが悪い方向で重なったのだと知れた。

　事件のあらましは当然のように、ナイフの形状が切り口と一いつ致ちしたことや若い自警団員の制止を無視し、戦せん闘とうとなっ

たこともあって、モルトが犯人である可能性をあげていた。

　また自警団調査部の仕事により、花屋店主に遺ゆい言ごん書しよがあったことが判明。その遺言書は弁護士立ち会いの下もとに書かれたものであり、高こう齢れいで独り身、さらに最近は体調もかんばしくないから、万が一のことがあった場合……『オリービーに店及および、所有する資産の全すべてを譲じよう渡とする』とあったのだという。これは弁護士も事実であることを認めており、証しよう拠ことして遺言書の写しも持っていたようだ。

　問題はこの先である。記者の妄もう想そうがさも真実であるかのようにして記事が書かれていたのだ。

　自分に遺産相続する旨むねの遺言書があることを知ったオリービーは、親しい間あいだ柄がらのモルトに店主を殺害させ、悪漢による物取り殺人に見せかけようとした。さらに自警団団長の娘という立場から万が一の時も証拠隠いん滅めつが可能だとする判断もあった……というのだ。

「何だよ……これ……」

　記事は『さらに恐おそろしいのは……』と続く。

　オリービーはアルコ・ホールに住む五歳の少女と行動を共にして証人とし、事件の際には大通りの人目に付く場所で少女と共にモルトの仕事が終わるのを待つという周しゆう到とうさである、とあり、現在オリービーは自警団本部にて取り調べを受けている模様、この残ざん虐ぎやくな事件が一刻も早く解決されることを切に願う、と締しめられていた。

　自警団本部はライ同様オリービーにとっても家同然であり、彼女が長く本部にいることは不思議ではない。事件に関かん与よしていないにせよ、弟が牢ろうにいるのならば尚なお更さらだ。

　つまり、事実に少量の誤りを混ぜ、妄想でコーティングして仕上げた最低の記事だった。

　オリービーの涙の理由は、店主が殺されたことにこれが加わったものなのだろう。

「コーン、ブレンデッド……自警団は、今？」

「容疑者のモルトには答えられない。……だが、ライになら答えてもいい」

　ブレンデッドらしい、堅かた苦くるしい言葉だった。

「自警団の現状はどうなっていやがる!?」

「こんなゴシップに惑まどわされるものか。当たり前に街を警けい戒かいしつつ、容疑者モルトの証言にあった黒ずくめの男の捜そう索さくに当たっている。また、団長へ使いを放ったが、応答が来るには何日かはかかるだろう。その間、オリービーは念のために本部内に匿かくまうことにした」

「それじゃ姉ちゃんがまるで容疑者じゃねぇか!?」

「ただのゴシップとはいえ、鵜う呑のみにする輩やからがいるかもしれない。好こう奇きの目に晒さらされないようこちらから提案し、彼女も了りよう承しようした」

「クソッ、何だよこのクソ新聞、モルトや姉ちゃんを犯人みたいに書きやがって……！　これ書いた奴やつ、今すぐ捜さがし出してぶん殴なぐってやる!!」

　ライは大好きな姉を貶おとしめられたことで喚き散らし、鉄格子を両手でつかみ、力任せに隙すき間まを広げようと力を入れ始めた。雄お叫たけびが上がる。

「ライちゃん、落ち着きなさい。ちゃんと抗こう議ぎはしてあるわ。それにあの子、リッツちゃんだっけ？　さっき待合室にその子の両親がいらしてたから多分、二人も自警団を通して抗議を……ほら、そんなことしても鉄格子は壊れないわよ。まぁ、そもそもライちゃんは別に牢に入っ──」

　鉄格子からメシッ、と音がして、モルトとコーンは目を瞠みはった。歯を喰くい縛しばり、顔を赤らめて滅め茶ちや苦く茶ちやに力を込こめるライがつかむ二本の鉄格子は、わずかとはいえ、その隙間が明らかに広がったのだ。金属の鉄格子はかなり太い。とてもではないが、素す手でで押し広げられるようなものではない。

　さらに力を込めようとするライではあったが、鉄格子の隙間をブレンデッドの足が抜けた。ゴツいブーツの靴くつ底ぞこがライの顔面を捉とらえ、少年は牢ろう獄ごくの壁に叩たたきつけられる。

「ライを牢獄に入れておいたのは正解だったな、コーン。野放しでは傷害事件の犯人になるところだった。……しばらくそのままで、頭を冷やせ、ライ」

　コーンは無言で頷いた。ライは別に罪を犯おかしてもいなければ容疑者などでもないので、出たいというのならすぐに出してやれる……それを言おうとしていたのだろうが、コーンは告げるのを止やめたようだ。

　鼻血を垂らしながらライが立ち上がるが、さすがにもう一度鉄格子を押し広げようとはしなかった。

　本題に入ろう。ブレンデッドが淡たん々たんとした声で言い、革袋からモルトのホルダーに収まったナイフを取り出す。

「このナイフについて調べた。……いろいろ尋たずねたいことはあるが、時間がない。だから、一つだけ問わせてくれ」

　ブレンデッドは鉄格子の前に座ると、さらに革袋からショットグラスを二つ取り出した。

「ブレンデッド、アタシの分もよ。いっそライちゃんもやっちゃう？」

　ブレンデッドはさらにグラスを二つ取り出す。

　わけもわからずにいると、最後に透とう明めいな液体が入った瓶びんが革袋から出てくる。

「こっちに来て座れ」

　モルトとライはブレンデッドに言われるがままに、先さき程ほどまでと同様にして鉄格子を挟はさみつつ男四人で車座になると、透明な液体がなみなみと注つがれたグラスを手て渡わたされる。

「これは……？」

「ブレンデッドのおまじないみたいなものよ。匂においを嗅かぐといいわ」

　嗅いでみれば、無む臭しゅうだ。どういうことかわからず鼻をギリギリまで近づけて今一度嗅げば……ツンっとしたアルコールの匂

い。

「そう、お酒よ。スピリタス。アルコール度数は九〇度を超こえているの」

　名を聞いたことはあった。消毒液代わりになる高純度アルコールの酒だ。

　本来は何かで割ったり、果実を漬つけたりして利用するものらしいが……まさか、これをこのままやるというのか。

「……何でオレの方は一いつ滴てきだけなんだよ」

「ライ、お子様にはそれで十分だ。いや、それでも多いぐらいだ。さすがに早すぎる。……ともかくだ。詳しよう細さいは後で話す。まずは……いいか、モルト。これからお前に一つだけ質問をする。そうしたら酒を飲め。そして、答えてくれ。真実を、だ」

　ブレンデッドは真っ直すぐにモルトを見つめた。彼の背後に魔ま光こう球きゅうの灯あかりがあるため、彼の顔は陰かげになっており、彫ほりの深い顔と相まって……どこか、おぞましげに見えた。

　だが、モルトは怯おびえない。相手はブレンデッドだ、そう思えば怖こわいとは思わなかった。

　彼が動いたのと同時に全員がグラスを手に取り、目の高さまで掲かかげる。

　ほぼアルコール……即すなわち、飲み物としては異常な状態のものが入った透明な液体越ごしにモルトは男達を見やった。

「お前がこのナイフをどこで手に入れたのか、お前がどこで生まれ、何をしてきた者なのか……そんな質問は我々の間では意味がない。調査部が勝手にやればいい」

　ブレンデッドの言葉に「じゃ何だよ、これは？」とライが訝いぶかしげな顔をするが、それを他の誰も気にはしなかった。

「訊きこう、モルト。……我々は、お前を信じていいのか？」

　モルト、意を決してグラスに口を付ける。常温のはずの液体が、唇くちびるに触ふれた瞬しゅん間かんに氷水だったのではないかと

思う程に冷たく感じる。

　サラサラとした透明なそれ。舌に乗る前に、鼻にツンと来る匂い。

　酒は舐なめる程度にしか口にしたことがないモルトにとって、それはもはや飲食物とは思えなかった。だが、グラスに注がれたものであり、ブレンデッドは飲めと口にした。

　試ためされている、そんな気がした。

　躊躇ためらいがないわけではない。だが、飲もう、と思った。

　自分が何者で、何をしてきたのかを問われたのならば、飲めなかった。答えられない。だが、今、ブレンデッドに投げかけられた質問には自信を持って答えられる。

　モルトは一気にグラスの底を天てん井じようへと向ける。口内に流れ込む液体。まるで氷水。だが、舌をそれらが撫なでた瞬間に氷水は炎ほのおと化す。口内の全てが燃えているかのように、熱い。

　モルトは対面のブレンデッドの真しん剣けんな眼まな差ざしを見返しつつ、意志の力で喉のどへと流し込む。

　喉を、その奥を焼く強きよう烈れつな刺し激げきに歯を喰い縛りながら、息を声にして吐はく。

「俺を信じてくれ。俺は、やってない」

　まるで炎を吐き出しているかのような熱さの中、モルトは二人の男から視線を逸そらすことなく、言葉を述べ終えた。

　恐おそろしくキツい。だが、不思議とほのかな、ともすると見失ってしまいそうな程わずかではあるが……口を空にした瞬間、ほのかな甘さをモルトは感じたのだった。

　その途と端たん、ブレンデッドとコーンもまた一息にグラスを空にし、冷たく熱い息を吐く。そして彼らは相棒を見やり、頷いた。

「モルトの言葉、信じてあげるわ。犯人はグリコゥ国の近この衛え隊もしくは幻まぼろしの特とく殊しゆ工作中隊の生き残り……敗残兵だってのも含ふくめてね」

　そこまで述べてはいなかったが、モルトの予想はその通りであった。あのナイフを持つのはその二つの内のどちらかしか、基本的にない。

　喰うに困ったとしても、彼らがそれをそう簡単に手放しはしない。リキュールの人間が長なが柄え刀とうを誇ほこりとするように、彼らもまたあのナイフを誇りとしている。命の次、ヘタをするとそれよりも大事なものなのだ。

「お前を信じよう、モルト。……調査部とは別に、我々も動く。グリコゥ国の敗残兵だというのなら、ヘタをすると厄やつ介かいな装備を……何だ、ライ、その顔は？」

　先程、ブレンデッド達と共にグラスを傾かたむけたライは……苦にが虫むしを嚙かみつぶしたような顔をしたまま、体を硬かたくしていた。

「な、なんだよ……このクソまじぃのは……ど、毒か？　何でこんなのを飲んだんだ？」

「お酒よ、ライちゃん。凄すごく強いお酒。……これはね、ブレンデッドの家に伝わるおまじないみたいなものよ。お酒を呷あおってその味の変化で真実を探さぐるの」

「……酒は、酒そのものよりも相手次し第だい。それがウチの家訓だ。モルトが信じるに値あたいしない男ならば、味は濁にごる。別に酒は強烈であれば何でもいいと言われているが、スピリタスこれが一番変化がわかりやすい」

　ブレンデッドは独り言でも呟つぶやくように言って、自分とコーンのグラスにもう一杯ぱいずつ注いで、また一息に飲んだ。モルトも勧すすめられたが、体がすでに熱くなり、頭がふらついてきたことを告げて断った。

「行くとしよう、コーン。……牢は酔よいが醒さめる頃ころには出られるように手続きしておいてやる。ただし、ライを押さえておけ。いいな、モルト。それから我々と行動を共にしてもらう。ともすると山やま狩がりになる……人手が必要だ」

　片付けを終えると、ブレンデッドはコーンと共にさっさと出ていこうとするのだが……モルトはまだしまい忘れた品があるのに気付

いて声をかける。

「それはお前のだろう、モルト？」

　ブレンデッドが置いたままにしていたのは、ホルダーに収まったモルトのナイフだった。

「なぁブレンデッド……さっきの酒、どんな味がした？」

　アルコール度数九〇度を超える、消毒液のような酒。スピリタス。キツい、だが、ほぼ無味無臭といっていいもの。だからこそ、果くだ物ものを漬けたり、何かに添てん加かしたりする時に力を発揮するもの。味なんて、あるとは思えなかったが……それでも、思わず訊いていた。

　地上への階段に足をかけていたブレンデッドは、モルトの声に立ち止まり、振ふり返る。その顔にはらしくもない笑えみが浮うかんでいた。

「心に染しみていく、うまい酒だったさ。……お前の酒はどんな味がした、モルト？」

　言葉に迷いなく、真っ直ぐなブレンデッドの言葉にモルトは動どう悸きを覚える。

　酒が強烈過ぎたのか、モルトは鉄てつ格ごう子しをつかんだまま、膝ひざを突つき、そして遠ざかっていく二人の男の足音をただ静かに聞いていた。

「……アレがうまい……？　舌がどうかしてんだろ……。モルト、おい、モルト……酔っ払ぱらってんのか？　ほれ」

　相変わらず苦い顔をしたままのライは、ナイフホルダーを取ると、手渡してくれる。

　少し世界がグルリと回り出しているのを感じつつ、モルトは血の染みた服からオリービーが持って来てくれたものに着き替がえてから、いつものように腿ももに装着した。

　ブレンデッドの言葉と、ライの言葉が頭を回る。どちらの酒の感想も、わかる気がした。

ライと同意見というのが素直なところだが、思い出すに段々とブレンデッドの意見に寄っていく。特に、あの飲み干した瞬間にスッと、そしてふわっと来た冷たさと熱さを伴ともなった甘さ……あれが、気になる。勘かん違ちがいだったのかもしれない。どうだったのだろう。

不思議と……気持ちの良くなるような、異様に爽さわやかな、甘さ。

うまい、というより心地ここち良さが来る。そんな……。それを確かめるためにも、もう一杯口にしてみたい、そう思った。

ゆっくりと世界が回り出している。しかし、気を強く持てば回る世界を何とか縫ぬい止めておける……そんな気がした。これが酔いなのか。

ライはコーンに引っぱたかれた頬ほおや、ブレンデッドに蹴けられた鼻を気にもせず、「寝ねてばっかじゃ体が鈍なまっちまうな」と口にして運動を始めていた。

モルトは鉄格子に背を預けて座り、そんな少年の姿を眺ながめた。腹の底が熱い。段々と胸も熱くなってくる。酒が燃えているのか。

ライからの無条件の信用、ブレンデッドの言葉……それらを何とはなしにモルトが思い出していると、全身にじんわりとした熱と、くすぐったさを感じる。

温かい湯にでも浸つかっているかのような、心地良さ。やはり、これが酔いなのか。

酒というのは、いいものかもしれない。全すべてが終わったらどこぞの酒場に勇気を出して入ってみようか。あの強面こわもての店主と、姪めいだという若くてかわいらしい店員のいる安美亭なら顔も知れている……いいかもしれない。……しかし、金がなかった。

やはり住民登録して、自警団員見習いとなって給料を貰もらって……そんなことを考えていると、タッタッタッと、足音が聞こえる。看守が戻もどってきたようだ。

「モルト、もうすぐ出られるそうだな。良かったよ。お前はそういうタイプの人間じゃないとおれも思ってた」

「……買いかぶりだ。俺は……えっと……その、そんなんじゃない」

「ブレンデッドのアレをやられたか。ガキにはキツいだろう。鍵かぎを開けてもしばらくは動けんな、それじゃ。これでも読んで少し寝てろ……ほら」

　これ？　モルトは看守が鉄格子の隙すき間まから差し入れてきたものを見た。立ち上がって受け取ってみれば……厚い封ふう筒とうである。いや、厚いというか、中に何か入っているようだ。

「何だ、これ……？」

「さぁな。上にいたら、同どう僚りようから〝モルトに渡わたして欲しいと頼たのまれた〟と言われたぞ。ほら、なんつったか……今回の一件に関かかわってる、ほら、あの子だよ、小さい……」

　リッツか。なるほど、とモルトは苦く笑しようした。

　まだ字を覚えて間もないが、以前も習ったばかりだという字で手紙を書かれて……解読するのにえらい時間がかかったのをモルトは覚えている。何せ、ナチュラルに鏡文字を混ぜてくるので読みにくいことこの上なかった。

　血まみれで大声を出してからは連れん絡らくを取っていなかったから……不安にさせてしまっているかもしれない。牢ろうにいる間に返事を書ければいいな、と、そんなことを考えながら封を開き、中身を取り出し……そして、モルトは固まった。

「……そんな……」

　封筒から出てきたのは便びん箋せん一枚と……編まれた人間の髪かみの毛の束。その髪色、質感からリッツの三つ編みの一ひと房ふさだと、モルトは瞬間的に察し、全身に鳥とり肌はだを立てた。

　ライと看守もまた目を見開き、言葉を失なくして固まる中……モルトは便箋を見る。

　――一人だけで指定の場所に来い。あの雨の夜の話をしよう。

　腰こしが抜けそうになるのを、モルトはリッツの三つ編みを握にぎり締しめることで何とか堪こらえる。

世界が、グルリと回り出していた。

●第三話下編『Grasp　星空に雨あま粒つぶ』

　コーンは開封された封筒と、その中に収まる一房の三つ編みに目眩めまいを覚えた。

　アルコ・ホール三番街にあるアパート、その大家の五歳の娘むすめ──リッツが誘ゆう拐かいされた。

　娘の帰りが遅おそいので両親が念のためにと自警団を訪おとずれていたが、事態はそんなレベルではなかったのだ。

　コーンは調査部の人間を呼ぶよう指示を出してから、自警団本部の地下にある牢の前でその大きな頭を抱かかえた。

「コーン、悪い方にばかり考えるな。これでモルトの容疑はほぼ晴れたと言える」

「……そのモルトがライちゃんと一いつ緒しよに脱だつ獄ごくしたってんじゃ、喜びようもないわ」

　外回りをしていた若い団員に、見知らぬ男が「リッツからモルトにだそうだ」と言って封筒を渡した。それを彼は看守に、看守はモルトに渡した。

　いくら何でも中身を確かく認にんしなかったのはミスだ。そして開封の場を目もく撃げきした看守が、交代要員を用意する前に慌あわてて報告しようと現場を離はなれてしまったのも、ミス。何より、いくら信じたからといって、モルトにあのナイフを返してしまったのが一番のミスだろう。

　一つだけならば何とでもなるミスが重なり合い、事態が大きく転がり出してしまった。

　コーンは抱えた頭を上げ、牢を見る。鉄格子が二本切断され、人一人が出入りするには十分な隙間が開いていた。……見事な切り口だった。長柄刀でもこうはいかない。

あのナイフは武器屋の老人の言葉通り、間ま違ちがいなくグリコゥ国のものなのだろう。

看守、とブレンデッドが低い声で、淡たん々たんと訊きく。

「封筒にはこの髪と『一人だけで指定の場所に来い。あの雨の夜の話をしよう』と書かれた紙切れ、それ以外に地図が入っていたそうだな？」

「は、はい。しかしそれはモルト達が持って行ったようで……」

「思い出せ、大体でもいい」

ブレンデッドが懐ふところからメモ帳を取り出す。そこには周辺の地図が貼はり付けられていた。看守は曖あい昧まいながら地図のとある部分を指で示す。それはリキュールの北にある大きな山トルシユ・オマロン、その中腹。地図上ではさほど街から距きょ離りはないが、急きゆう勾こう配ばいが続く。場所によっては崖がけのようにもなっており、まともに向かおうとすると時を要する場所だった。

何より当たり前に魔ま獣じゆうが跋ばつ扈こする山である。年に一度、自警団が魔獣狩がりを行うが、それで全てを駆く逐ちくできるようなものではないため、当然ながら人が歩くための道もない。

ある程度の腕うで前まえがなければ数時間と経たたずに魔獣のエサになる、そんな場所。そこを指定したということは、犯人達もまた相当な腕前か……はたまた、おかしなものを持ち込んでいるかのどちらか……もしくは両方か。

そして、コーンの頭に過よぎるもう一つの疑問。〝あの雨の夜〟とは何を指しているのか。二人の間にだけわかる共通の記き憶おくか、それとも暗号なのか。もしそうでないとすれば、コーンにもまた一つ思い当たるものがある。……あってしまう。

グリコゥ国が滅めつ亡ぼうした日……その夜は、記録的な大雨だった。

大勢の詩人がテーマに取り上げる程ほど、その最後は凄せい絶ぜつだったとされている。城も城下町も、家も人も何もかもが雨の中で燃え盛さかり、全てが灰と化したのだ。

恐おそらく今後数百年に亘わたって語り継つがれるであろうあの夜が、はるかかなたのこの地、リキュールの現状と繋つながっているというのか。

「こうなると団長の指示は待てん。……コーン、動くぞ」

「でも一人で来いってあるじゃない。ヘタに動けばリッツちゃんにも……」

「どうせもうライがついて行っている。今いま更さら我々二人が増えたところでさほど変わらん」

言われてみればもっともだった。ライが消えたとなれば、当然モルトと行動を共にしていると考えるべきだ。

ブレンデッドは木ぼく訥とつな男だが、その分常時冷静だ。コーンが困った時ほど力を出す。

「言えてるわね。……何より急げばまだ接せつ触しよく前にモルト達に追いつけるかも。行きましょ、ブレンデッド。おバカなガキんちょ共を止めに」

「あぁ、酒の味がわからんガキ共に張れる役などないことを教えてやろう」

約一六歳のモルトと一一歳のライ、そして五歳のリッツ。

英えい雄ゆうになるのも、悲劇のヒロインになるにも、彼らはあまりに若すぎる。

コーンとブレンデッドは鋼鉄の長なが柄え刀とうを担かつぐと自警団本部を飛び出し、毎年『漢おとこ祭まつり』が行われる神しん殿でん脇わきから山へと入った。

山を登る場合はこの辺りから入るのが早い。というのも街の片かた隅すみから神殿まで続く、古い石階段があるためだ。草木をかき分けて登るよりはるかに早く、楽である。

すでに日は落ちかけ、世界は獣けものの時間になりつつあったが、コーンとブレンデッドの二人には関係ない。数えきれぬだけ山

へ入ってきた経験もある。

　そして麓ふもとに近いエリアを住み処かとする魔獣と呼ぶに足らない獣達であれば、鼻息荒あらく駆かけている大男達に飛びかかる無む謀ぼうさを持ち合わせてはいないのだ。

「……見つけた。コーン、こっちだ」

　モルト達もコーン達と同様の道を選せん択たくしたようだ。

　コーン達が登り始めて幾いくばくもなく、獣道の片隅に両断された巨きよ大だい蜘く蛛もの屍しかばねが転がっていた。切り口は長柄刀のそれ。一刀両断したと見え、技わざが冴さえているのが伝わってくる。

　モルトもまた脱獄の際に長柄刀を持ち出していたが、この切り口からするとライだろう。

　まだ母親が恋こいしいような年ねん齢れいでありながら、これほどの技をすでに使う……教え子の将来性を思うと、コーンは口元に笑えみが浮うかんでしまう。

「斬きってからそうは経たっていないわね。これなら追いつけるかも。血の臭においをたど──」

　言い切る前にコーンの喉のどを緊きん張ちようが塞ふさいだ。

　──来る。そう感じた時にはブレンデッド、そしてコーン双そう方ほうに巨大なトカゲが飛びかかっていた。魔獣。二メートルを優に上回る体。血の臭いに引かれてきたか。

「急ぐぞ」

　ブレンデッドが振ふり向きざまに鋼鉄製の長柄刀を振るう。音なく、闘とう争そうの気配すら発することなく、トカゲの首を斬り飛ばす。一方、コーンは地に足をねじ込むように踏ふみ込み、担いでいた長柄刀の刃やいばの腹でトカゲの体を横よこ殴なぐりに叩たたく。鋼鉄製のそれが撓しなる程の力が入れられた一いち撃げきは、破は裂れつ音にも似た凄すさまじい音と共にトカゲの体を横一文字に吹ふっ飛ばす。

　巨体が枝葉を弾はじき飛ばし、最後は巨木の幹にぶつかり水気の

ある音を夜空へと響ひびかせた。

「今更だが……静かにやれ。目立つのは避さけたい」

「それもそうね。忘れてたわ」

　つい、ライの技に当てられてしまった。若い芽が生えてくると興奮してしまう。それが今後巨木にならんとする片へん鱗りんを見せているのなら尚なお更さらだ。

　コーン達は再び追つい跡せきを再開する。追ってくる者がいるかもしれないと予想したのか、モルト達は移動した痕こん跡せきを消しているようで、方向を探さぐるのに時がかかった。場所によっては完全に見失う程だ。定期的に魔獣の死体が転がっているので、それで追跡の道が正解だと知れたが、それが出てくるまではかなりの慎しん重ちようさを要求されてしまう。

　しかしながら、とコーンは肌はだに汗あせを浮かべつつも、心が弾はずんでいくのを感じた。

　不ふ謹きん慎しんだとはわかっていた。だが……魔獣との戦いの痕跡が心をはやし立てるのだ。

　ライは、焦あせっている。しかし、それ故ゆえに技は冴えに冴えている。大したものだ。木製柄の長柄刀でここまでやれる者は自警団の見習いにはもはや存在しないだろう。

　ライが残した死体を貪むさぼっている魔獣を払はらいのけつつ、コーン達は山を登り続ける。

　深い木々の下、月を背負い、ひたすらに追いに追った。

　そうしていると、不意に先頭を行っていたブレンデッドが立ち止まる。

「ちょっ……何、どうしたの？」

「……妙みようだ。道がおかしい」

「道なんて元々ないわ」

　そうじゃない、とブレンデッドは懐から手帳を取り出し、地図を

広げた。

「今までもそうだったが、このまま進むと指定された場所ポイントからどんどん離れていく」

「看守あのこの見間違いだったんじゃ……いや、そうか！」

　その瞬しゅん間かん、コーンも気が付いた。

　言われてみれば、これまでの道は、明らかにおかしかったのだ。

　──何故なぜ、ライの技しかなかったのか？

　魔獣がライを選んで襲おそうようなマネはしないだろう。先頭をライが走っていたとしても、後ろから襲うのが好きな奴やつもいる。それなのにモルトの技がどこにもなかった……それはつまり、ライしかこの道を通っていないということではないのか。

「我々が追ってくることをすでに想定していた……だから、犯人との交こう渉しようを邪じゃ魔まさせないために囮おとりとしてライが走り回っている……そう思えなくもない。だが……」

「えぇ、ライちゃんがそんなのやるわけがないわ。脇わき役やくを受け入れる子じゃないもの」

　モルトが提案したとて、ライは受け入れまい。リッツの身が危ないかもしれない、そう言われたところで納なっ得とくできる程、あの子は大人ではなかった。

「……モルトに撒まかれたか？」

　ブレンデッドに言われ、それが一番可能性としてありそうなことだとコーンは頷うなずいた。

　言っても聞かない、だから隙すきを見てライを置いていった……十分にありえる。モルトならやるだろう。ただ、彼はナイフだけではなく長柄刀をも持っていった。それなのにライを……長柄刀と共に得た相棒をそんなふうに置いていくだろうか？　そこが引っかかる。

　男が最後につかむのは、金玉でもなければ女の手でもない……命を懸かけるに値あたいする得物と相棒だ。

「仮にそうだったとしても、疑問が残るわ。ライちゃんだって地図を見ている。撒かれたとしてもそこを目指すはず。それに……あの子は、進むべき道を迷っていない」

　モルトを捜さがしているというのに、ライは道を引き返したりはしていない。明確にどこかを目指して走っている。そのくせして、焦っている。急いでいる。それが、わからない。

「山の上へ上へと登っている……まるで登頂を目指すかのようだ」

「考えても仕方ないわ。ライちゃんにはもうすぐ追いつける。それで確認しましょう」

「……それでは間に合わんかもしれん。嫌いやな予感がする。二手に分かれよう。お前はライを追え、おれは例の指定されたであろう場所へ向かってみる。後で、合流だ」

　ブレンデッドがコーンの肩かたを叩き、背を見せる。

　それにコーンは嫌な不安を覚えた。予感といった類たぐいのものではない。

　もし、これから出会う連中がグリコゥ国の近この衛え隊や噂うわさの特とく殊しゆ工作中隊の人間であれば……必ず持ち込んでいるものがあるはずだった。それがあればこそ、小国であるグリコゥ国は周辺四つの国から同時に攻こう撃げきを受けてなお、一年もの間、耐たえ凌しのいだのだ。

　そんなもの我が長柄刀の前では、とコーンとて思わないでもない。だが、それは横に相棒ブレンデツドがいればこそだった。

「……ブレンデッド、死んじゃダメよ」

「お前もな、コーン。……悲劇のヒロインをやるには、おれ達はいささかゴツ過ぎる」

　ブレンデッドがたまに口にするジョークはあまり笑えない。だが、安心を与あたえてくれる。

　コーンは口の端はしを吊つり上げ、不可解な道を選ぶライの追跡を再開した。

1

　指定された場所は崖がけの半ばに突とつ如じよとして飛び出ている舞ぶ台たいのような、『見晴らし台』と呼ばれる水平な段差だった。

　伝説では巨きよ人じんが腰こし掛かけるための椅い子すだの、古代兵器で崖の一部が破は壊かいされてこんな段差ができただのいろいろ言われているが、実際には神殿をここに造るために古代の人々が崖を削けずり、地をならしたもの……ということが数年前だかに判明したばかりだった。

　その際に神殿の痕跡が見つかっており、多くは街の博物館に納められ、今では神殿の基き礎そ部であった、人の背せ丈たけほどもある正方形の巨大な石がいくつか転がっているだけである。

　腕うでと覚かく悟ごのある者なら、その見晴らしの良さから休きゆう憩けいをするのに最適なスポットだった。

　さすがに南方にある海までは見えないものの、はるか彼方かなたまで見み渡わたせる。そしてまた、日中であればリキュールに出入りする馬車や徒歩の旅人達が見え、どれだけの人間がこの街を通り抜ぬけていくのかを如によ実じつに感じられるだろう。夜であれば、夜景だ。人々の営みが明確に灯あかりとして示され、どこか感傷的にさせてくれる。……とはいえ、普ふ段だんならば、だ。

　今のモルトにそこからの灯りを眺ながめ、様々なことを感じる余よ裕ゆうはなかった。二つの瞳ひとみは見晴らし台の上に立つ、黒ずくめの三人の男達と、一人の少女しか捉とらえていない。

「……ふむ、指定通りに一人で来たか。血の臭いがしないところを見ると、魔ま獣じゆうを避けてきたようだな、さすがだ」

　見晴らし台はその上下を地層が剝むき出しの崖に挟はさまれ、そこから突とつ出しゆつしたようになっているため、上り下りするのはまず不可能だ。

　見晴らし台に行くためには山やま肌はだに沿うたった一本しかな

い道を通るしかない。それは人とすれ違ちがうのさえ気を遣つかう程ほどの細い道のため、一人で来たか否いなかがわかりやすかった。

　そのためにこの場所を指定したのかもしれないが、それ以上に野営地として都合が良かったのだろう、とモルトは思った。場所が場所なので、魔獣もあまり寄りつかないのだ。

「モ、モルトぉ！」

　月明かりの下、リッツの色白な肌は闇やみに浮かぶようにして明めい瞭りようだった。

　だからだろうか、その目元が赤く泣き腫はれ、彼女の右サイドの三つ編みがなくなっていることがはっきりとわかってしまう。

　モルトは肩に担いでいた木製柄の長なが柄え刀とうをギュッと音が鳴る程に握にぎり締しめる。

「……小こ僧ぞう、聞かせてもらおう」

「待て。……その前に、約束通りに来たんだ。リッツを放せ」

「早とちりだな。手紙には、来ればこの娘むすめを放すとは書いていなかったが？」

　黒ずくめの一人がリッツの背にあった三つ編みをつかみ上げ、彼女を呻うめかせた。リッツは引っ張り上げられる痛みに顔を歪ゆがめ、裸足はだしでつま先立ちになる。

　モルトは長柄刀をありったけの力で地面に叩き付けた。その衝しよう撃げきと音で、三人の黒ずくめ達にプレッシャーを与えた。

「お前達はなんなんだ？　……近衛隊だろう。その連中がこんなマネをするってのか。それともナイフを奪うばっただけの夜や盗とうの類か」

「私は近衛隊だ、この二人は一いつ般ぱんの兵から戦後に部下としたが……三人共にあの雨の夜にいた。見ろ」

　三人の黒ずくめの男達は顔に巻いていたターバン状の布を剝はぎ取る。モルトは当たり前として見るが、横目で見上げたリッツが

「……ひっ」と引きつった声を上げた。

　眉み間けんに深い裂れつ傷しよう痕こんが走る厳いかつい男、毛の一本すらない火傷やけど跡あとの男、そして今し方近衛隊と名乗り、モルトと花屋で戦っていたであろう男は……服の上から感じていた以上にやせ細っていた。しかも乾かわいた地面のようにボロボロの肌をし、両目の眼球は白はく濁だく色に染まっていた。

　前者二人は戦時に敵に与えられた傷跡だろうが、最後の一人は違う。体に作用する強力な魔ま導どう具の副作用だ。過度に使用すればこうなる。リキュールで見ることはないが、モルトの古い記き憶おくでは、こういう状態の兵士は少なくなかった。

　傷男はロゼ、火傷男はアカ、そして白濁目の男はシロと名乗った。ロゼ、赤、白……ワインの色である。当然本名ではないはずだった。言い淀よどんだところがなかったのを見るに、祖国を後にした際に本当の名も捨てたのかもしれない。

「要件を言え……シロ」

　モルトは躊躇ためらいなくシロを交渉相手に選んだ。リーダー格という以上に、他の二人は喋しやべらなそうだと思ったためである。傷男は顔を晒さらした際に喉のどの傷跡も見えており、拷ごう問もんか何かを受けて声が潰つぶされていると読めたし、火傷男は顔の筋肉が引きつっているのがわかった。どうしても以前のように喋れないことから口数が極きょく端たんに減ってしまう……野戦病院ではそういう者達が大勢いたのをモルトは覚えている。

「小僧。所属を訊きこう」

「……リキュール自警団員見習いの見習いにして現殺人容疑者、モルト」

「三年前の、あの雨の夜の貴様のだ」

　ふざけるな、とシロはリッツの後ろ髪がみを引っ張り上げ、一いつ瞬しゆん彼女の足を地面から浮うかせた。リッツの甲かん高だかい悲鳴が上がる。

「貴様、第六隊商キャラバンだったのだろう？」

　モルトは悲鳴を上げるリッツを見つめつつ、顔を歪め、苦々しく

頷いた。

　その瞬間にシロの両りよう脇わきに控ひかえるロゼとアカがあからさまに殺気を滲にじませる。

　シロが夜空を見上げた。

「我が祖国はまだ戦えた。あと二年でも三年でも。裏では他国との交渉も進みつつあり、窮きゆう地ちを脱だつするのは目前だった。……というのに、国は落ちた。何故だ？　……そう、貴様らが動いたせいだ」

　シロはリッツの髪を犬の綱リードのようにして引っ張りながら、歩き出す。リッツの悲痛な泣き声が夜空に響ひびいた。

「世界を股またに掛かけ、物流を支配する、かの有名なメチル大隊商組合、その第六隊商……運ぶ荷は『死』ただ一つ。……あの夜、我々の前に姿を現すまでは単なる噂の類だと思っていた」

　表向きは組合に古くから所属する荷運びの隊商の一つだとされていたが、第六隊商の実態はシロが言うように、他に比類無き力を持った暗殺組織である。荷を運ぶ仕事もしていたが、それは構成員を世界各地に送り込む際のカモフラージュに過ぎなかった。

　客は全すべて国家レベルであったため、その存在が噂として世間に流れたのは、グリコゥ国滅めつ亡ぼうから半年後、生き残った特殊工作中隊が決死の報復攻撃を仕掛け、互たがいに壊かい滅めつし合った後のはず……。とはいえ、シロが王族の近衛隊であるならば、戦前や戦中にどこぞで聞き及およんでいてもおかしくはなかった。

「前線の内側どころか、我らが城の内部にまで侵しん入にゆうされたのには驚きよう愕がくを通り越こし、ただただ驚きよう嘆たんしただけだ。我が国が誇ほこった特殊工作中隊さえあぁはいくまい」

「できるさ。……あの連中なら、その気になれば」

「そうか、知っているか。ならばあの噂も事実なのだな。戦前にぶつかり、互いに大きな被ひ害がいを出して引き分けたことがある、と。貴様のナイフはその時、奪ったものか？」

「俺のは知り合いからもらったんだよ。……おい、よせ、やめ

ろ!!」

　シロはリッツの三つ編みを引っ張り、つま先立ちにさせると、見晴らし台の縁へり、ギリギリに立たせる。

　見晴らし台は崖から突出している関係で、ネズミ返しのようにその下は抉えぐれており、もし落ちれば数十メートル下の森まで真っ逆さまである。

　モルトは反射的に動きかけるも、シロとの間にロゼとアカが入り込んだ。

「本題だ、メチル大隊商組合第六隊商モルト。……貴様ら一団はあの雨の夜、城と城下町を炎ほのおに包み……そして、我らが君をもその凶きよう刃じんにかけた……」

「復ふく讐しゆうか、シロ。花屋の老ろう婆ばを襲おそい……いや、荷馬車を襲ったのもお前らだろう。さらに幼い子供を誘ゆう拐かい……そんな夜盗に落ちぶれたお前達が、今いま更さら亡なき国を語るのか」

　彼らの背後、見晴らし台の隅すみには木箱や革かわ袋ぶくろがいくつかあり、食料や酒の他ほかに、多くの金品が顔を覗のぞかせていた。

「生きるためだ。他の連中ならともかく、このなりでは市し井せいに紛まぎれることはできん」

　シロの様子や言葉は冷静だが、ロゼとアカは今にも飛びかかってきそうだった。その手にはやや小型の魔光球らしきものが握られており、それがモルトにとって気がかりだった。

　魔導球だ。それは魔力を送ることで特定の作用を発動するガラス球体状魔導具の総そう称しようである。外見が魔光球と似ているのも当然で、光を発する魔導球に魔力を蓄たくわえる機能を持たせたのが一般的な魔光球なのだ。

　この状じよう況きようで彼らが持つとなれば、当然武器の類なのだろう。その性質上、魔力を生み出せる魔導士しか持てず、かつ、物が極きわめて高価であったために他国では魔導士ギルドからの傭よう兵へいか、同様の力を持つごく一部の兵しか持てなかった代しろ物ものである。グリコゥ国はこれらを一般の兵が当たり前の武器

として使用していたことに強さの秘密があった。

「祖国が滅ほろんだ切っ掛けを作ったことに対する怒いかりは当然、ある。だが、今更そんなことは問題ではない。無意味だ。だからこそ……問いたい」

　シロは白濁の両目にわずかに不安と期待、そして緊きん張ちようを滲ませた。

「……我が君の一族は、本当に滅亡したのか？」

　風が、吹ふいた。まだ秋の入り口だというのに、それは酷ひどく冷たかった。

「狙ねらいはグリコゥ国の再興か」

　モルトはようやく全てを理解した。彼らの狙いも、何もかも。

　矛む盾じゆんを孕はらんだ奴やつだとはモルトも思っていた。市井に紛れたくても紛れられないと言っておきながら、一番の身分証明であるあのナイフを未いまだに持っていた。どれほど大事なものであれ、亡き国の栄えい誉よなど、思い出以上の価値などない。敗残兵狩がりを逃のがれながら売り手を探し、足元を見られたとしても売りに出せば相当な額にもなる。夜盗に身を落とす必要はなかったはずだ。

　それでも肌はだ身みば離はなさなかったのは、グリコゥ国が過去のものではないとする考え故ゆえか。

「王族の血を引く者さえ……世界に散り散りになった我ら兵や技術者達をまとめる要かなめの存在さえあれば……グリコゥ国は蘇よみがえる！」

　シロが口元に笑えみを作る。ぽろぽろと渇かわいた皮ひ膚ふが粉ふん塵じんのようにして黒い服に落ちた。

「あの雨の夜、子供だけで構成された暗殺者の一団は誰だれに気が付かれることもなく王を、そしてその一族郎ろう党とうを凶刃にかけたとされている。そして、その脱だつ出しゆつの際に私を含ふくむ近この衛え隊と接せつ触しよくし、戦せん闘とうになった。……覚えている。あの激戦と呼ぶに相応ふさわしい戦い。……あの中に、お前はいた。何故なぜグリコゥ国のナイフを敵が、しかも一〇

をいくつか過ぎただけの子供が持っているのか、戦闘の最中に驚愕したものだ」

　やはりやり合っていたか。花屋での戦いの最中に感じた直感が正しかったのだと、それで知れた。体が明らかにシロの技わざを覚えていたのだ。

「問題はここからだ。晒された王の首以外にも、幾いくつかのご遺体は部下が確かく認にんしている。だが、全てを、正統なる王家の血を継つぐ一八名全員のご遺体を確認する前に、城は燃え落ちた。……聞かせろ、モルト。……本当に、お前達は全員を殺し尽くしたのか？」

　モルトは、汗あせを一ひと粒つぶ垂らした。

「言われている通り、本当に仕事を終えた貴様らと我々は遭そう遇ぐうしたのか？　……本当は仕事を行っている最中に出くわしたのではないか？　つまり……」

　シロが口元をかすかに吊つり上げる。

「……殺し残しがいるのではないか？」

　風が吹いていた。冷たい風。それに鳥の声が乗っている。空を飛びながら鳴いているのか、頭上からのそれにアカがチラリと上を見やった。

　一方モルトは、鳥の声に瞼まぶたを伏ふせる。

「……たとえ俺が何か言ったところで貴様らは自分の望む答え以外必要としないだろう。そして望む通りに言ったとしても、貴様はリッツを突つき落とす」

「……復讐として、か。そうかもしれん。だが、そうではないかもしれん」

「仮に生き残りがいたとしても、三年もの間名乗りを上げていない。……つまり、再興などその本人も望んじゃいないんだろう」

「……質問に答えろ。お前なら知っているはずだ。わかっているはずだ。あの夜にいた、第六隊商の生き残りならば！」

　モルトは瞼を開き、泣きじゃくるリッツを見る。幼いながらに聡そう明めいな子である。こんな状況であれ、今の会話の全てを理解しなくとも、要点は察しただろう。自分がどんな人間なのか、何をしてきたのか……。これで、隠かくしてきたことが、知られた。もう、終わりだ。

　三年、いい夢を見た。……見させてもらった。彼ら三人は過去からのノックだったのだ。

　目覚めろ、逃にげた現実に再び戻もどる刻ときだ、と。

　しがみついていた夢のような時間を断たつ、その刻なのだ、と。

　所しょ詮せん自分は自分でしかない。モルトと名を変え、どこまで走ろうとも、過去はいつだってすぐ後ろに……いや、いつだって体に纏まとわり付いてくるのだ。

　まるで重しを付けられ、水中に沈しずめられるかのよう。

　水面を見上げ、伸のばした手は何をつかむこともできはしない。

　ただ、沈むだけ。暗く、深い、馴な染じみの奥底へ。

　わかっていたことだった。ずっと、こうなるのではないかと怯おびえるようにして、覚かく悟ごしていたことだった。だから、受け入れる。

　……だが、その前にやらなくてはならないことがあった。

　──リッツ。あの子だけは、何があっても守る。

　沈み行く自分に手を差し伸べてくれた、あの小さな手だけは……たとえ何があろうとも。

　モルトは、心を研とぎ澄すまし、三人の黒ずくめと……そして、リッツを見た。

　言う。覚悟を表すように、そして、三年前の約束を守り続けるために、はっきりと。

「一人残らず、皆みな殺した」

三つの雄お叫たけびが上がる。ロゼとアカが手にしていた魔ま導どう球きゆうをモルトに向ける。球が赤い光を帯び、それが一直線にモルトへと延びてくる。

モルトは身を低くして二本の光をかわしつつ、ナイフを抜ぬいて振ふりかぶった。

狙いはロゼとアカではない。リッツの三つ編みを握にぎり締しめ、まるで彼女を物であるかのように、怒りに任せて振りかぶるシロ……そこに狙いを付け、放った。

一財産とされるナイフにして、史上最高硬こう度どと称しようされる、今や誰にも造ることができなくなった幻まぼろしの刃やいばが、夜空を裂さき、そして……リッツの三つ編みを断ち、シロに突き刺さる。

だが、それでも空中に引っ張り上げられていたリッツは慣性で見晴らし台の外へと身を躍おどらせてしまうのだった。

モルトは立ち塞ふさがるロゼとアカを突き飛ばし、駆かける。

よろめくシロを蹴けり飛ばし、長なが柄え刀とうを地面に突き立ててそれを強く握り、彼もまた見晴らし台から飛び出すようにして……手を伸ばす。

「リッツ!!」

リッツもまた、涙なみだを散らしながら手を伸ばす。

空中、伸ばされた二本の手。そこをアカが狙っているのをモルトは視界の端はしで捉とらえた。彼が手にしているのは魔導球。先の赤い光は炎よりもはるかに高熱を有する光の攻こう撃げき。

一いつ瞬しゆんであれば肉が焼けるだけで済むが、それ以上ならば骨ごと焼き切られるだろう。

だが、モルトはそちらへの意識などすぐに捨てた。

鳥は鳴いたのだ。約束した通りの時刻タイミングに。

だからこそ、モルトはアカのことを無視した。視線も意識も、自分の持てる何もかもをリッツへ向ける。手を伸ばす。彼女もまた、

手を伸ばす。

「モルトぉ!!」

　モルトは体の関節が外れる程ほどに、その手を伸ばし……そして、空中を彷徨さまよう小さな小さな幼い手を、力の限りにつかんだ。

「くたばれふわはえっ！　死ねふいふえ!!」

　アカの赤い光、延びる。だが、それと同時に見晴らし台全体が激しい衝しよう撃げきに揺ゆれた。

　そして、赤い光はモルト達に到とう達たつする直前で、長柄刀の肉厚な刃で遮さえぎられる。

　崖がけの上から飛び来たライ、その長柄刀だった。

　ライの足が地を蹴る。長柄刀の刃はその身を紅ぐ蓮れんに染めながら、川の流れを遡さかのぼる魚のように、赤い光を散らしながらアカの手元へと奔はしった。

「バふあ、バカなふあはら!?」

　ライは横よこ殴なぐりの一撃で、アカの手にした魔導球を彼の腕うで共々斬きり飛ばす。

「その手を放すんじゃねぇぞ、モルト!!　こっちは任せろ!!」

　予定通り、打ち合わせ通り……約束通りに、ライが来た。来てくれた。ほぼ垂直の崖の上、十数メートル。一いつ般ぱん人なら飛び来るだけで命を落とす、そんな場所から彼は何ら躊躇ためらいなく。恐おそらくあの話も聞こえていたはずなのに、それでも、ライは──。

　モルトは感謝と申し訳なさを噛かみ締めつつ、つかんだリッツの手を引き寄せ、突き刺した長柄刀を頼たよりに己おのれの体もまた見晴らし台の上へ戻す。

　二人で地面を転がる。リッツはモルトの首に腕を回し、力ちから一いつ杯ぱいに抱だきついた。

……ギュッと、震ふるえる腕で。

「もう、大だい丈じょう夫ぶだ。……ごめんな、リッツ」

リッツが首を振る。三房ふさあった三つ編みが、今は左サイドの一本だけ。それが揺れた。

カキンッと、金属の音がする。

モルトは立ち上がり、リッツを下ろして、長柄刀を構えた。その視線の先にいたのは、刺さっていたナイフを地面に捨て、背中から噴ふき出た血を足あし下もとに垂らすシロだ。



「一人残らずだと……ありえん、ありえるものか！　グリコゥ国は……ふざけるな!!」

「戦時中だったとはいえ……すまないと思っている。だが……」

　ふざけるな!!　今一度の絶ぜつ叫きようと共にシロは腰こしに下げていたホルダーからナイフを抜く。右手で逆手に握ると、体ごと突っ込んで来た。リーチの長さでいえば長柄刀は圧あつ倒とう的てきに有利だ。しかしながら今モルトの首にはリッツの腕が巻き付いている上、あのナイフが相手。

　リキュールの人間がどれほど誇ほこりに思っていようとも、長柄刀の刃ですらあのナイフは切断するかもしれない。そうでなくても木製柄を狙われれば確実に斬り飛ばされるだろう。

　一瞬。しかし、その間に多くの可能性がモルトの頭を駆け巡めぐり、一番生き残れる可能性が高いと判断した行動を取らせる。―長柄刀を、投げつけたのだ。

　シロが飛来した得物を弾はじく、その一瞬の隙すきにモルトは彼とすれ違ちがい、地面に落ちていた己のナイフを拾い上げた。そしてそのまま動きを止めることなく、振り向きざまに斬ざん撃げきを放つ。甲かん高だかい音が響ひびく。モルト同様、振り向くと同時にシロが放ってきた一撃と刃がぶつかり合ったのだ。互たがいに一撃は弾き飛ばされ合ったが、体は残っている。シロはふらついたが、モルトの足は地を離はなれもしなかった。この三年、リキュールでライと共に長柄刀を振り続け、そしてカルジャガの豆料理をたらふく喰くわされたことで身についた筋肉から成る重量の差だ。もはや迅じん速そくかつ精密なる妙みよう技ぎを放つための体ではなくなっていたが、今はこの方がいい。モルトが大きく踏ふみ込み、そのブーツのつま先でシロの靴くつ先を踏み付け、地面に縫ぬい付ける。その状態から、もう一方の足でシロの脇わき腹ばらを突き飛ばすような蹴り。

　逃げることを封ふうじられたシロは慌あわてて空いていた左腕で受けるが、それでもモルトの一撃は彼の臓ぞう腑ふを潰つぶすように腕ごと腹に深くめり込んだ。

〝く〟の字に体を折り曲げたシロの頭上にモルトがナイフの一撃。

シロは素す早ばやく右手のナイフを寝ねかせて受けようとするのだが、モルトは構わず押し込むようにしてナイフを力任せに叩たたき付けた。

シロは白はく濁だくした両目を見開き、噛み締めた歯の間から呻うめきを漏もらし、そして膝ひざを突きつつもかろうじて受けきる。この粘ねばり強さは彼の練度の高さを窺うかがわせた。だが、近この衛え隊であったが故ゆえか、練度が高いだけで経験が足りていない。

モルトはシロのナイフを刃で押さえつけたと同時に、膝ひざ蹴げりを放つ。顔面狙ねらい。

シロの鼻が潰れ、血を噴き出しながら後方へと転がっていった。

本来であれば追撃をかけるところだが、抱いているリッツの重量があったのでさすがに無茶はできない。しかし、勝てる。

シロが転がった体の動きを止めることなく滑なめらかに立ち上がると即そく座ざに猫ねこのようにして飛びかかって来た。モルトは後方に下がりつつ、シロの攻撃を刃先で捌さばいていく。

細かなナイフ技わざでシロは必死に距きょ離りを詰つめようとしたが、モルトは詰められただけ下がりに下がる。そして、シロの動きが緩ゆるんだ一瞬の隙を突いて、モルトは力を込こめた大おお振ぶりな一撃を放つ。それは受けられこそするものの、シロの体を易やす々やすと吹ふき飛ばした。

「クソッ！　おのれ、何故なぜだ、何故……我が技が、何故通じん!?　あの夜はまだ……!!」

シロはこの開けた場でありながらナイフの勝負として挑いどんできている。しかしモルトはそれをいなして剣けんでの勝負にしていた。それがこの差だった。ナイフ遣づかいの技は多くの場合極きょく端たんに間合いが狭せまく、奇き襲しゅうまたは狭い室内や森の中での戦せん闘とうを想定したものだ。開けた場では他に分があるのは当然である。

そして得物が同じものではあっても剣とナイフ、斧おのと鉈なた……それらの中ちゅう庸ようを見事にいったこのグリコゥ国のナイフは、遣つかい手の技次し第だいで如何いか様ようにも姿を変え

られる柔じゅう軟なんさがあった。昔ならともかく、今のモルトの体たい軀くならば剣のように使った方が──強い。

「国を失ってからの三年……放ほう浪ろうしながらも鍛きたえれば己の得物と技の長所も短所もわかっただろうさ。弱い者を襲おそうだけの夜や盗とうでは、無理だったな」

　膝を突いていたシロは白濁した両目でモルトを唸うなりながら見み据すえていたが、不意にその口元に笑えみが湧わく。モルトは嫌いやな予感がしたものの……その正体が何であるか察するより先に、シロが行動を起こした。ナイフをホルダーに納めると、魔ま法ほうのようにどこぞから取り出した魔導球を白く発光させ、己の胸に押しつけたのだ。

　その瞬間、シロの足下にあった土や石が彼の全身を包むようにして迫せり上がり始める。三年前に嫌という程見た、おぞましげな光景が今再び目前に現れようというのか。

　──まずい。やはり持っていたか。

　モルトは即座にリッツをその場に落とすように下ろし、斬りかかる。しかし、土や石で覆おおわれ始めたシロの腕がモルトの全力の一撃を容易たやすく受け止める。

　世界最高硬度にして最強と誰だれもが謳うたう刃が……まったく通らない。

「諦あきらめの悪いガキめが……！」

　虫を払はらうように動くシロの腕。それに触ふれたナイフは凄すさまじい力で弾かれ、モルトの体ごと持って行かれそうになる。モルトはやむなくナイフの柄から手の力を抜いた。

　ナイフが宙を舞まって地を跳はねた。しかしそれに絶望するより先にモルトは近くを転がっていた己の長柄刀を拾い上げ、未まだ石で覆われていないシロの側頭部を石いし突づきで叩き付け、そのゴーレムのようになりつつある彼の体を吹っ飛ばす。

「これでいけるか!?」

　崖にその身を叩き付け、シロは項うな垂だれるも、胸に押し当てられた魔導球は発動したまま。

　モルトの後ろ腰に抱きついてきたリッツの腕に、力が込められた。

　モルトでさえ、見ているだけで冷ひや汗あせが出る。

　失神しているであろうシロの全身をすっぽりと石の鎧よろいが分厚く覆っていくのだ。

　正式名めい称しようなのかわからないものの『石鎧』と呼ばれていたそれは、足下にある岩や石、土で極きわめて硬こう質しつな装そう甲こうを作り上げる魔導球である。それだけでも脅きよう威いだったのだが……。

「うぉっ!?　こいつら、硬かてぇ!?」

　ライの声。見やれば、アカとロゼも石鎧を纏まとい、ライの長柄刀の一撃をその体で弾き飛ばしていた。

「ライ、そいつは斬れない！　石鎧は刃は物ものじゃ無理だ！」

「なに!?　じゃ、どうするんだよ!?」

「変身されたらもう手はない、逃げるんだよ!!」

　モルトはリッツを担かつぎ上げると、走った。見晴らし台から脱だつ出しゆつする道は狭い一本の道しかない。そこを塞がれる前に……だが、当然それは敵も十分に理解している。

　ロゼがとてつもない速度で、そして十数メートルもの高さに達するほどに跳とび上がり……三人を追い越こして、道を塞いだ。

「お、おい、嘘うそだろ、何だこいつ……こんな……」

「石鎧は硬質装甲で体を覆うだけでなく、凄まじい膂りよ力りよくをも与あたえる！　だが、使用し続けるにはすげぇ量の魔力を必要とするから、時間をおけば枯こ渇かつして効果が解けるはずだ！」

「隠かくれる物がろくにない上、落ちれば即死の場所で……モルト、お前無茶言うなよ！」

「だがいいところもある！　全身を装甲で覆う関係で魔導球は使えなくなったはずだ！」

「だから、どうやって凌しのぐのかって訊きいてんだよ！」

「……逃がさんふいあふあん」

　モルト達をロゼと挟はさみ撃うちにするようにアカが立ったので、モルトはライと背を合わせ、長なが柄え刀とうを構えた。

　ライから緊きん張ちようが、そして二人の男に挟まれて立つリッツからは恐きよう怖ふが伝わってくる。

　今、同時に動かれるとまずい。リッツを庇かばいながら攻こう撃げきを避け続けるのには無理があった。受けるにしても、木製柄の長柄刀では限度がある。どうやったとて長くは持たない。

　アカとロゼが身をかがめる。顔面すら装甲が覆っているため、何を考えているかまでは読めなかったが……しかし、仕し掛かけようとしているのは嫌という程ほどにわかった。

　もう、覚かく悟ごを決めるしかなかった。──そんな、時だった。

「……どうした、何を悩なやむ？」

　声がした。見晴らし台の外から、冷静沈ちん着ちやくな、そんな声が。

　それが誰のものであるのか……モルト達が察するより先に、ロゼが跳んだ。

　いや──ぶっ飛ばされたのだ。

　石鎧で巨きよ漢かんと化したロゼが冗じよう談だんのように空中を舞まい、見晴らし台の上を転がり、その縁へりから落ちかかる。

「こんなにいい場じゃないか。ライ、何が無茶だというんだ？」

　闇やみ夜よからぬらりと姿を現したのは、鋼鉄製の長柄刀を片手に提さげる一人の男だった。

「「──ブレンデッド!?」」

　ライとモルトが声を重ね合わせると共に、ロゼが、跳ぶ。今度は自分の意思で地面を蹴けりつけ、ブレンデッドに迫った。巨体が繰

くり出す強きよう烈れつな拳こぶし。その重量から考えるだけでも凄まじいものがある……その、はずだった。

　ブレンデッドは長柄刀を両手に持つと、その長い柄でロゼの一撃を受ける。硬質な石が金属を叩き付ける凄まじい音がするも……ブレンデッドは、受け止めた。

　二メートルほど地面に溝みぞができたが、それでも、彼と長柄刀は完全に石鎧の攻撃を受け止めたのだ。

　その瞬しゅん間かん、ロゼはもちろんアカさえも、装甲越ごしであるというのに目を見開いたのがモルトにははっきりとわかった。

「力は強い。装甲もある。だが、それだけだな。……ライ、よく考えろ。こんな木偶でくを倒たおすことなど簡単だ」

　モルトもこの時になってようやくわかった。確かに場を活用すれば、十分に勝てる。

「……そうだ、落とせばいい」

　言い終わるより先に、ブレンデッドが大きく踏み込む。ロゼが慌てて腕うでを振ふるうも、身を低くして距離を詰めたブレンデッドの頭上を薙ないだだけだった。

　ブレンデッドはロゼの懐ふところに密着する程に接近。そこで彼は低い体勢から掌しよう底ていを放つ。

　ブーツを叩き付けた地面にひびが走り、そしてロゼの体が今一度空中を躍おどる。

　一九〇センチ程もあるとはいえ、石鎧と比べるとあまりに小さく、華きや奢しやにすら見えるブレンデッドが素す手でで放った一撃……それは、言うなれば子供が大の大人をぶっ飛ばしたように見え、モルト達を唖あ然ぜんとさせた。

「我々が何のために日々重く長い長柄刀を担いでいるのか、それを考えろ。これぐらい可能だ。……おっと、まだ残ったか。しぶといな」

　ロゼは見晴らし台から落ちかかるも、腕一本でぶら下がり、かろうじて持もち堪こたえた。ブレンデッドがすぐさま落としにかかろ

うとするが、アカが間に入り込み、それを防ぐ。

　アカの失ったはずの右腕、そこには代わりとするかのように石の剣が生えていた。それでブレンデッドの長柄刀の刃はと打ち付け合い、甲かん高だかい音を上げる。

「行け、モルト。ここは任せておけ」

　けど！　言うも、モルトは自分の体にギュッと抱だきついているリッツがいるのだということを思い出し、言葉を続けられない。

「案じることはない。こいつらがグリコゥ国の近衛隊だろうが特とく殊しゅ工作中隊だろうが……さしたる問題はない」

　アカ達はそれら二つの隊の人間ではないだろうが、それにしたって技術力の高さから精強とされたグリコゥ国の兵であるにもかかわらず、ブレンデッドはさらりと当たり前のように言ってのけた。

「ふざけた奴めふあふえらはふふえ！　我々こそふあれふあれふおそ、最強の兵だふあいほうのふえいら！」

　崖がけにぶら下がっていたロゼが腕一本の力だというのに、己の体を持ち上げるどころか、空高くまで跳び上がる。鍔つば迫ぜり合いのようになっているブレンデッドを頭上から襲う気だ。

　モルトとライは援えん護ごに入ろうとするも、ブレンデッドの瞳ひとみが来るな、と告げ、二人の足を止めさせた。

「グリコゥ国の兵が最強だと？　なるほど、組織戦においてはそうかもしれん。だが、今は？　ここでは？　……最強か？　違ちがうな。最強なのは……我々だ」

　ロゼの拳がブレンデッドの頭上に迫ってもなお、彼は落ち着いた声でそんなことを言う。

　もはや避けられる距きょ離りではない。ブレンデッドが、やられてしまう……。

　モルトとライが動きを止めたのを後こう悔かいした時、それは飛来した。

　自由落下をはるかに上回る豪ごう速そくで、巨大な質量を伴とも

ない、そして震ふるえる程の強烈さを伴いながら━コーンが、飛び跳ねたロゼの頭上に現れた。

　コーンの振りかぶった長柄刀が夜空を裂さく。垂直に近い崖を疾しつ走そうし、限界にまで速度を高め、そこに二メートルを優に超こす体格を加え、鍛え上げられた極ごく太ぶとの腕から繰り出される技わざ……それらが一つとなった激烈な一撃が、獣けもの染じみた雄お叫たけびと共にロゼの体を捉とらえる。

　炸さく裂れつした。そう思う程の衝しよう撃げきが辺りに轟とどろき、そして見晴らし台全体が粉ふん塵じんを巻き上げ、揺ゆれ動く。その衝撃と粉塵にモルトとライはリッツを庇いながら体を硬こう直ちよくさせる。

　そして、かろうじて瞼まぶたを開いた時、モルトは息を呑のんだ。

　見晴らし台に穴ぼこクレーターができていた。

　そして、そこに立って鼻息荒あらく長柄刀を構えるコーン。その足あし下もとには肩かたから先を失ったロゼが倒れていた。

　石鎧が、切断されていたのだ。あのナイフでさえ、ろくに傷も入れられなかった石鎧を……コーンはぶった斬ぎっていた。

　アカがブレンデッドとの押し合いをやめ、驚きよう愕がくしながら後ろに下がる。

「……バふあ、バカなふあから」

「おかしなことはない。この地で作られる長柄刀はただの鉄の塊かたまりではない。お前達のナイフがグリコゥ国でしか造れないように、ここでしか造れない特級の業わざ物ものだ。……それに我々の腕が加われば、斬れぬものなどない」

「その通りよ!!」

　コーンが相棒ブレンデッドの言葉にドヤ顔を見せつつ構えるが……今のは腕というより、もはや単なる力業だ。確かに長柄刀は鋭するどい素す晴ばらしい品ではある。だが、それで斬れるなら、刃部分は同じ素材でできている木製柄の長柄刀でも同じことができたはずだ。

　ライの攻撃では二人を斬ることができなかった。つまり……コーンは木製柄では為し得ない程の〝力〟でもって、ロゼの装甲を腕ごと叩っ斬ったのだ。

　物は、硬かたければ硬いほど、割れやすい。もしかすると石鎧もその類たぐいなのかもしれない。だから刃の鋭さで斬ろうとしてもまず斬れない、しかし、長柄刀で放つとてつもない衝撃を伴う斬ざん撃げきであれば……切断できるのかもしれない。

　石鎧と幾いく度ども相まみえた記き憶おくを持つモルトはようやくその可能性に気付いたが、コーンとブレンデッドがそれを事前に察知していたとは思えなかった。

　だが、彼らはやってのけた。

　運が良かったから？　違う。彼らには自信があったのだ。街の誇ほこりである長柄刀を担ぎ続けた時間と、そして己おのれの内に流れる、幻まぼろしなどという曖あい昧まいなものではなく、全すべてが現実のそれとして世界にその名を轟かせし、最強と謳うたわれた一〇〇〇年前の英えい傑けつ達の子孫である自負……だからこそ、彼らは斬れないとは微み塵じんも思わなかったのだ。

　圧あつ倒とう的てきな力、長柄刀の尋じん常じようならざる強きよう靭じんさ……そして何より、彼らのその自信こそが、石鎧を叩っ斬ったのだ。

　ロゼが身を転がしながら、コーン達と距離を取る。衝撃で気を失わない辺り、それなりの腕はあるようだ。失った腕の代わりに背骨のような、至るところに刃のあるゴツゴツとした鞭むち状の武器を生み出したロゼと、彼と同じ得物に剣けんを変化させたアカが覇は気きを放ち、コーンとブレンデッドを挟むように構える。長なが柄え刀とうを握にぎる二人もまた背を合わせ、構えた。

「ライちゃん、モルト、早く行きなさい。ここからは子供に見せるものじゃなくなるわ」

　コーンはニヤリと笑って言う。礼と、そして身分を偽いつわっていたことを謝りたくて息を吸う。だが、声を出す前に、先に応じられた。

「後者は同意だが、前者はできんな」

　その声、シロ。意識を取り戻もどしたのか。そう思い、見晴らし台の隅すみに吹ふっ飛ばしたはずの彼に視線をやり……モルトは目を疑った。そこにいたのは、五メートルを超す石像のような巨きよ人じんだったのだ。そしてその巨人は神しん殿でんの基き礎そであった二メートル四方の正方形ブロック二つを軽々と投げつけてくる。

　それはモルト達の頭上を越こえ、轟ごう音おんと共に一本しかない逃にげ道を完全に塞ふさいでしまった。

「あらまぁ……これはこれは大したデカブツじゃない」

　石の巨人。そんなものが生成されていたというのに今の今まで気付かなかった。

　それにモルトは違い和わ感かんを覚えるも、シロが倒れていた場所にぽっかりと人型の穴ができているのに気が付く。あの魔ま導どう球きゆうは吸い上げるのではなく、地に染みこむようにして巨体を生成していたのだろう。だから、動き出すまで視界に入っても気付けなかったのだ。

　そしてこの巨体の遣つかい手だからこそ、三年前、城の中では使えなかったのだろう。モルトに魔導具遣いである彼とナイフでやり合った記憶があった理由が、ようやくわかった。

「ロゼ、アカ、その巨漢二人を押さえておけ」

　巨体が見晴らし台を揺らし、空へ舞い上がる。五メートル強の体格のそれが夜空の星々を隠かくしつつ、モルト達へと迫せまった。ライとモルトは左右に飛んでかわす。

　続けざまに巨人の拳が放たれる。狙ねらいは、モルトだ。さすがにリッツを抱いている以上激しく動けなかったモルトは、長柄刀を振るった。受けられない。斬れない。ならば、弾はじくしかない。迫り来た拳に横よこ殴なぐりに長柄刀の一撃を放つ。全力だった。ありったけの力を込こめてのそれは甲かん高だかい音を立てなが

ら、何とか敵の拳を横に逸そらすことに成功する。

……が、長柄刀を通して伝わってきた衝撃にモルトの体は吹っ飛ばされ、そして、長柄刀の刃もまた、宙を舞った。

木製柄が、折れたのだ。

雄叫びが上がる。ライ。巨人に側面から向かう。恐おそらく彼が一番弱いと踏ふんだ巨人の膝ひざ裏うらに斬撃を叩たたき込むが、やはり……ダメだ。弾かれた。よろめくライに、まるでゴミを蹴け飛とばすようにして巨人の蹴り。ライはそれを……長柄刀の柄で受けてしまった。

木製柄は菓か子しのように砕くだけ、巨人の足先によって少年の体は空高くまで飛び上がり、崖の岩いわ肌はだに叩き付けられる。

ライが血ち反吐へどを吐はき出し、重力に引かれて落ちかかるも……そこに、とどめを刺さすように、巨人の拳こぶしが向かう。

モルトは、声を張り上げた。──やめてくれ、と。

## 2

戦法を変えられてから、面めん倒どう臭くさい相手になっていた。

ロゼとアカ、失った腕うでの先を石の鞭にした二人の男は、コーンとブレンデッドの間合いに入ることを極きよく端たんに嫌きらった。遠えん距きよ離りから削けずり取るようにして仕し掛かけてくるばかり。

コーンが長柄刀の峰みねで地面との間に挟はさみ、その動きを止めてみせても、彼らは即そく座ざに鞭を切り捨て、すぐにまた新しい鞭を生やしてしまうのだ。トカゲの尻尾しつぽのようだった。

まともに戦えば数撃でケリをつけられる自信はある。長柄刀はその大きさから技の一つ一つが大おお振ぶりになるため、複数人を相手にする際には隙すきができやすい。その隙を埋うめるのが相棒の

存在だった。今コーンの傍かたわらにはブレンデッドがいる、恐れるものは何もない。

　だからこそ、もどかしかった。力の差は歴然としている。ケリがつけられるのにつけられない。恐らくそれはロゼとアカも理解している。故ゆえに、この消しよう耗もう戦になっているのだ。

　だが、どう考えても消耗が激しいのは、彼らの方だろう。あれほどまでに強固な石の鎧よろいを形成し続けるのは相当に魔力を喰くうはずだ。それに加えて腕と血を失い、自分らの相手をする──激しく動き回れば動き回るほどその消耗もまた大きいはず。

　……そんなことを考えていた時、コーンは気付いた。敵の片割れ、肘ひじまでは腕がある男の装そう甲こうにヒビが入り、そして動く度たびに粉塵が舞っている。

　鎧が砕け始めている……限界に達しつつあるのだ。

　ブレンデッドに視線を送るも、彼もまた当然それに気付いていた。頷うなずき合う。片方の魔力が枯こ渇かつした瞬しゅん間かん、一気に勝ちに行く。それを一瞬の目の動きで確かく認にんし合った。

「──やめてくれ!!」

　モルトの声。コーンの視界に、岩肌に叩き付けられ、血反吐を吐き出すライが映る。そこに、巨人の拳が迫っていた。

　コーンは即座に目の前の敵から巨人へと意識を向ける。躊躇ためらうことなく地を駆かけ、巨人の軸じく足あしとなっていた左足、その膝裏に長柄刀を打ちこむ。

　その際、背後から鞭が迫っているのを肌はだで感じたが、コーンは無視すると決めた。

　急ぎの技のために切断こそできなかったが、巨人の体がバランスを崩くずし、拳は落下してゆくライから逸れ、空振った。

　ライが落ちてくるも、受け止める余よ裕ゆうはない。コーンは素す早ばやく振り返り、迫り来ていた鞭を弾くため長柄刀を振るうも……その前に、ブレンデッドがそれを切断してくれた。

「ありが……ブレンデッド！」

　ブレンデッドの足下にもう一本の鞭が迫っていた。あの魔力が枯渇しかけていた男の鞭。

　その焼けただれた顔を晒さらすところまで彼の装甲はすでに自じ壊かいしていたが、それでも鞭の動きは力強い。ブレンデッドの足首に蛇へびのように巻き付いた。

　ブレンデッドは冷静に足下のそれも切断しようと長柄刀を振るうのだが──。

「グリコゥ国万歳ふうりふおうふいりふおうふおくふあんさい!!」

　火傷やけど男は、ブレンデッドを捕つかまえると同時に彼を空へと引っ張り上げ……そして、見晴らし台から、自ら飛び降りた。

　魔力が枯渇しては戦えないと判断し、命を使ってこちらの戦力を削りに来たのだ。

　ブレンデッドは空中で長柄刀を鞭に叩き付けるものの、空中では踏ん張りも利きかず、技が甘い。切断できない。冷静な彼もさすがに目を見開いた。

　コーンが走る。まだ、間に合う。長柄刀を振りかぶる。だが、その時……背中に鋭い衝撃が走る。そして、自らの腹から飛び出す、石の剣を見た。

　油断した。力量の差に胡座あぐらをかいてしまった。命を懸かけた相手を甘く見てしまった。

　賊ぞくや犯罪者なら、力を使い果たせば諦あきらめる。だが、彼らは骨の髄ずいまで兵士だったのだ。

　当たり前に命を懸ける。それが、盲もう点てんだった。コーンは長柄刀を背に回して己おのれの背に突つき刺さっている剣を砕き、斬る。その際に傷口が拡ひろがり、喉のどの奥から血が溢あふれ出た。

　血を噛かみ締しめつつ、追撃を仕掛けてきた男の首に、長柄刀を叩きつけ、その体を見晴らし台の外へとぶっ飛ばした。

全ては一瞬。だが、その一瞬が致ち命めい的てきだった。

火傷男はすでに見晴らし台からは見えない。ブレンデッドが鞭に引っ張られながら、落ちていく。コーンは相棒の名を叫さけぼうとするも、血が噴ふき出ただけだった。

ブレンデッドはいつもの冷静な顔でコーン達を見ている。そして、彼は当たり前のように長柄刀を振りかぶり、そして……投げた。それは真っ直すぐに飛ひ翔しようし、岩肌を落下する途と中ちゆうのライの上着を縫ぬい留め、地に叩き付けられるのを防ぐ。

そうして、ブレンデッドは消えていった。悲鳴一つ、上げることなく。

「ブレン……デッド……」

相棒が、落ちた。消えた。武器すら手放し、はるか下へと落ちていった。

それは、腹の傷以上に、コーンに膝を突かせる。

「アカ、ロゼ……いい部下だった。再興の夢を共に抱いだけた……いい部下だった……」

頭上から声が聞こえる。あの巨人。そう思った時、蹴けりが来た。

長柄刀で受けたが、コーンの体中の骨が軋きしみ、そして吹っ飛ばされる。地を転がった。

頬ほおをつける地に、わずかにシルエットが浮うかんでいた。……巨人が踏み潰つぶそうとしているようだ。

骨は幾いく本ほんも折れているのがわかったが、動こうと思えば、まだ、動ける。だが、動けない。脱だつ力りよく感かんが身を支配している。

──来る。それを肌で感じた。

「待ってくれ!!」

モルトの声。それで頭上すれすれにまで来ていた巨人の足がピタ

リと止まる。

「お前の狙いは俺一人のはずだ。……もう、やめろ。やめてくれ」

　モルトは首に抱きついていたリッツの腕を引き離はなす。いやいや、というように首を振るリッツを無理矢理に下ろすと、彼は彼女と距離を置き、懇こん願がんするように地に手を突いた。

「頼たのむ。殺してくれ。気が済むなら……それでいい」

　バカな子。その分……素直な子。コーンは血反吐を口から垂らしつつ、そんなことを思う。風に乗ってかすかに聞こえた断だん片ぺん的な会話から考えるに、相手は生きつ粋すいの軍人。

　だからこそ、主君の報復を果たせれば本ほん望もうだと、了りよう解かいする可能性もある。

　だが、確実にモルトは死ぬだろう。

　普ふ段だんのモルトならばそうやって白旗を揚あげながら、逆転の一手を考える。その小こ賢ざかしさが彼にはある……だが、今は、それがない。

　手を突き、項うな垂だれ、瞼まぶたを強く閉じて震ふるえる彼の横顔には、諦めしかない。

「いい覚かく悟ごだ、モルト。初めからそうしていれば良かったものを。……では、死ね」

　巨人がモルトの前に立ち、その足を上げる。リッツが「やめて!!」と声を上げた。

「お前が死に次し第だい、他の連中も地じ獄ごくに送ってやる」

　モルトが絶望に顔を染め、目を見開き、顔を上げる。

「他のみんなは関係ないだろ!?」

　モルトの叫びを踏み潰すが如ごとく、巨きよ人じんの足の裏が勢い良く彼の頭上へと叩きつけられた。

　巨人の全体重を掛かけたかのような、それ。強い衝しよう撃げき

が見晴らし台に響ひびく。

　終わった──そう思った。だが、コーンは……唖あ然ぜんとした。

　それは、彼を見上げるモルトもまた、同様だった。

「関係……ねぇだ？　関係ねぇわけ、ねぇだろ……なぁモルト!!」

　コーンとモルトが見たのは、ブレンデッドの長柄刀を掲かかげるライの姿。

　その小さな体で、彼は巨人の一撃を支えたのだ。

　いくら彼がリキュールの子であったとはいえ、あの団長の息子むすこだとしても、その光景は驚きよう異いを通り越し、もはや異常の類たぐいだった。

　巨人がこの状じよう況きように困こん惑わくしつつも、体重を掛ける。

　ライの足あし下もとの地面にヒビが走った。だが、それでもなお、ライは支え続ける。

「お前の敵はオレの敵だ、そうだろ、モルト!?　お前はオレの……ぐ!?」

　ライの長柄刀を掲げていた両腕が震え始めている。さすがに無理があるのだ。

「ライ、俺はいい、だから……リッツを連れて逃にげてくれ！」

「できねぇな!!　仲間を……相棒を見捨てて逃げろと教えられたことはねぇ!!」

　少年の腕には不ふ釣つり合いな程ほど発達したライの筋肉が、生き物のように蠢うごめく。

　そして、信じられないことに巨人の足を押し返し始めた。彼の二本の足が踏み付ける地に次々にヒビが走っていく。そして、ついには巨人をよろめかせ、後あと退ずさりさせたのだった。

　巨人もまた顔は装甲で覆おおわれているが、その信じられない状

況に目を疑っているのがコーンにもわかった。

「ライ、俺は……」

「たらたら言ってんじゃねぇよ、モルト。いつもの小ずるいお前はどこに行ったんだ？　……お前がどこの誰だれで、何をしてきたのかなんて興味ねぇよ。さっき聞いたのも忘れちまった。伊達だてに姉ちゃんに呆あきれられるぐらいのバカはやってねぇんだ」

　コーンは己の腹に刺さっていた石の剣けんを抜ぬき捨て、体を起こした。

　まだ、動ける。

　大役は無理だ。だが、それでも……脇わき役やくをやってのけられるぐらいには、動ける。

　コーンは体を引きずりつつ、地に刺さっていたモルトのナイフを見つけ、拾い上げた。

「オレが知っているのは……オレが興味あんのは、今のお前だけだ、モルト。自警団員見習いの見習い、働きはそこそこ、小ずるさたっぷりの……そんな、オレの相棒だけだ！」

　今し方ので全身がボロボロのはずのライは、あからさまな強がりを見せながら……モルトに笑ってみせた。

　その少年らしい、子供っぽくて、バカっぽくて……そして恥はずかしくなるような仕草に台詞せりふ……。コーンは己に残された最後の仕事を意識した。

　最後、ブレンデッドはライを救おうと自分の得物を手放したわけではないのだ。

　ブレンデッドは勝つために、ライに長なが柄え刀とうを残したのだ。

　鋼鉄製の、グリコゥ国の魔ま導どう球きゆうの力をも打ち砕くだける、唯ゆい一いつの手段を。

　コーンはナイフと長柄刀を手に、立ち上がる。

「モルト、受け取りなさい!!」

　投げたのはコーンの得物、鋼鉄製の長柄刀。

　モルトは慌あわてながらも両手で、しっかりと握にぎり取った。

「悪いけど、アタシは逃げるわよ！　後、がんばんなさい!!」

　コーンは腹の傷から血が噴ふき出るのも構わず、立ちすくんでいたリッツを担かつぎ上げ、走り出す。モルトのナイフがあれば、麓ふもとまでは何とかなるはずだ。

　コーンは巨大正方形のブロックの上に飛び乗り、脱だつ出しゅつを図はかる。リッツがモルト達に手を伸のばし、その名を叫んだ。振り返ってみれば……巨人がコーン達を捕つかまえようとするように動き出している。

　しかし、その足下には鋼鉄製の長柄刀を握り締めた、二人の少年が立ち塞ふさがっていた。

　本来であれば、先せん輩ぱいにしてベテラン、さらには二人の指導までしていた自分やブレンデッドがそうするべき役どころ。

　油断をしてしまった己を恥じる。しかし、不安はなかった。

　彼らなら、任せられる。

　たとえどんな時でも、どんな場所でも、相棒が傍そばにいれば大だい丈じょう夫ぶ。

　男の子というのは、そういうものだ。

3

　気恥ずかしいライの言葉に、苦笑いを浮かべてしまいそうになるも……モルトは奥歯を噛み締め、堪こらえた。

　コーンから投げ渡わたされた長柄刀の重さがかなりキツい。激しく振り回せば、自分の体ごと持って行かれかねない。だが、全力で

いかなければ石いし鎧よろいは砕けない。しかもあの五メートルを超こえる巨体となれば、装そう甲こうの厚さはアカとロゼの比ではないはずだった。

　まともに戦わず、時間をかけさせる。そして、魔力が枯こ渇かつするのを待つか……はたまたコーンがリッツを連れて麓まで下りれるだけの時間を稼かせいだら自分達も逃げるか。

　それら二つが、現状最善の手だとモルトは冷静さを取り戻もどしつつある頭で考える。不可能ではない。鋼鉄製の尋じん常じようではない重さの得物を使いこなせられれば。そして何より……。

「よしっ、一発ぶちかましてやろうぜ、モルト!!」

　血気盛さかん過ぎる相棒ライが大人しく頷うなずけば、という難しい条件をクリアすれば。

「……うん、無理だろうな」

「何言ってやがる、モルト！　無理じゃねぇ、問題ねぇ!!　オレ達なら、できる!!」

　モルトは苦く笑しようした。そしてライの熱を受けて、モルトは普段の小ずるい自分に戻りつつあるのを感じる。

　握り締めた長柄刀。コーンの得物。彼の傷は腹を貫かん通つうしていた。血の量は凄すさまじい。だが、図ずう体たいがデカい上に、殺したところで死ぬとは思えないタフな彼。

　大丈夫だ、リッツを無事にリキュールまで届けてくれるはずだ。そしてブレンデッド。

　彼もまた死ぬとは思えない。確かに見晴らし台の下は数十メートル以上は真っ逆さま、そこから先もしばらくは急きゆう斜しや面めんを転がり落ちることになる。

　だが、夏を過ぎた今でも木々は、そして枝葉は力強く茂しげっている。それらをクッションにして、何とか生き残っている……そんな気がした。そう、信じた。

　彼らに感謝を。

　そして、怖こわい思いをさせ、自じ慢まんの長い髪かみを失ってしまったリッツには精せい一いつ杯ぱいの謝罪を。

　モルトは息を大きく吸い、そしてライと共に様々な想おもいを咆ほう哮こうとして夜空へ吐はき出す。

　そうして、全身から溢あふれる覇は気きを目の前の巨体へと向け、モルトはライと共に、駆かけた。

　扱あつかい慣れぬ重すぎる得物を振ふりかぶり、モルトは巨人の左ひだり膝ひざを、ライは右膝を同時に打つ。だが、ガギャンっと耳を劈つんざく音がし、長柄刀が弾はじかれ、わなないた。

「装甲の厚さが違ちがう！　そんな原始染じみた得物で何ができるというのだ!?」

　モルトは舌打ちしつつ、弾かれた長柄刀に体ごと持って行かれる。ふらつく足下を整えながら一度距離を置いた。

　巨人はモルト達をその拳こぶしで、その足で次々に攻こう撃げきしてくるが、それらは二人を捉とらえられない。守るべきものがなくなった二人は重い長柄刀を抱かかえていようとも、素す早ばやかった。

「クソッ!!　やっぱり硬かたいぞ、どうするライ!?」

「決まってる、もっと力を込こめてぶった斬ぎるんだよ!!」

　当たり前過ぎて笑いが漏もれそうになるほどの回答だった。だが、モルトもまた言われてみればその通りだと、どこか納なっ得とくしかけている自分がいるのに気が付く。

　リキュールに長くいた弊へい害がいである。……彼らと長く時間を重ねた証しよう拠こであった。

　モルトは口元に笑えみを作りつつ、今一度覇気を放つ。ライも呼応する。それでタイミングを計り、今度もまた二人同時に左右の膝を打ちに行く。先程よりも、力を込めて。扱い慣れぬ重量におっかなビックリではなく、当たり前の得物だとするかのように、堂々と。

　やはり、弾かれる。わななく。しかし、わずかに装甲表面にヒビ

が走った。

　いける。だが……まだ、足りない。

「どうする、ライ!?」

「もっとだ!!」

「だよな!!」

　巨人はこのままでは埒らちがあかないと判断したのか、両腕を左右二本ずつの計四本の鞭むちへと変化させる。それが荒あれ狂くるう。陸をのたうち回る魚のように、次々に地を、そして崖がけの岩いわ肌はだを叩たたきに叩く。地を、岩を砕き、粉ふん塵じんが舞まい上がる。

　濛もう々もうとした世界でなお、モルトは肌はだでライの気配を感じた。見晴らし台の上、どこで彼が何をしているのか、それを察する。いや、察するまでもなく、わかっている。そして向こうもまた、自分を同様に感じているはずだと、そう信じられた。

　だからこそ、モルトは躊躇ためらいなく次の一打を放ちに行く。膝、左右。ライも同時だ。

　同時であれば、確実にどちらかの攻撃は敵に届く。ライの攻撃は鞭に阻そ害がいされたが、モルトの刃やいばは敵の膝を捉えた。

　先程よりもありったけ。全力のそれ。

　長柄刀が弾かれる。わななく。装甲表面に先程よりも大きくヒビが走った。

　……まだ、足りない。まだ。モルトとライは粉塵の中で鞭をかわしにかわし、そして隙すきを見て息を整えた。長柄刀の重さが、体力を大きく奪うばっている。

　粉塵は視界を悪くするが、敵は巨大で察しやすく、ライは肌で感じられる。

　一方シロはそうはいかないだろう。魔ま力りよくを消しよう耗もうしながら自由自在に辺りを飛び回る二人の人間を追っているのだ。しかも鞭は四本だが、操あやつる頭は一つ。二人同時に狙ねら

うといった正確かつ複雑な動きは到とう底ていできるものではない。

　元々この手の巨大な石鎧は集団戦のためなのだ。軍隊同士の戦いにおいて初めて、盾たてとしても武器としても、その意味を為なす。二人だけを相手にするとなると、逆に大きすぎて扱いにくいはずだった。

　モルトはなおもライと共に打ちに行く。弾かれる。まだ、足りない。ライと共に肌に汗あせを流し、呼吸を荒あららげながらも咆哮を上げ、打ちに行く。……足りない。

　ヒビが入っても、次に打ちに行った時には修復されている以上、削けずり取るといったマネもできない。決定的に足りていない。力だ。それが、足りない。

　鋼鉄製の柄ならば、遣つかい手がどれほどの力で技わざを放とうとも耐たえられる。

　そのポテンシャルを自分達はまだ出し切れていない。ブレンデッドとコーンならば、きっと叩っ斬ってみせただろう。基き礎そが違い過ぎる。だが、それがシロに勝てないとする理由に直結するのか。モルトは考え、そして否定する。もしそうならばコーンとブレンデッドは長なが柄え刀とうを残しはしなかったはずだ。逃げろという言葉を投げて寄こしたはずだ。

　あの二人は自分達が、この長柄刀を扱い熟こなせるとして残したに違いなかった。

　……使い方そのものを変えるべきかもしれない。

　モルトは何撃目かになる攻撃を放ちつつ、考えた。

　木製柄であった頃ころの記き憶おくを一度捨てる。この得物と、あれは同じにして別物なのだ。

　何が違う？　重さ、強度、それぐらい？　他ほかに何か……。

「モルト、ボケっとしてんじゃねぇ!!」

　考えながらの攻撃だったせいか、モルトはライとの歩調を崩くずしていた。

互たがいに巨きよ人じんの右膝を狙ってしまい、粉塵を抜けた瞬しゆん間かんに鉢はち合あわせてしまったのだ。

二人共すでに攻撃の動きモーションに入っていた。モルトは慌てて長柄刀を引こうとするのだが……そこで、木製柄との違いが出てしまった。

加速した長柄刀が持つ力は、凄まじい。

モルトの手がその一撃を止めようと、腕うでを引くのだが……止めるどころか逆にモルトの体が引っ張られる。攻撃を止められない。わずかに速度が弱まっただけ。

だが、それによってモルトは、そしてライもまた、信じられないものを見た。

重厚な金属同士が叩き付けられた耳を劈つんざく凄まじい音。ライの長柄刀の峰みねに、モルトの長柄刀が叩き付けられたのだ。

「──まさか!?」

火花を散らすライの長柄刀の刃が、石鎧の膝に深く喰くい込んだ。

刃が、通ったのだ。

鞭が来る。モルトもライもまた、得物を担いで飛び退しさる。

粉塵からも逃のがれ、モルトとライは顎あご先さきから汗の雫しずくを垂らしながら互いの顔を見る。驚おどろきに染まった確信を抱いだきながら。

「いっ……行こうぜ、モルト!!　ケリをつけよう!!」

頷く間もなく、ライは疾しつ駆く。モルトもそれを追う。そして一いつ斉せいに迫せまり来る四本の鞭を二人は飛び跳はねるようにしてかわしにかわし、そして……二人共に、巨人の右膝へと強きよう烈れつな一撃を放つ。

すでに先さき程ほどの斬り込みは回復されていたが、そこにライの一撃が今一度迫る。そして、その峰狙ねらいで、モルトの一撃もまた。

今度は腕を引かず、タイミングをずらしただけの……全力だった。

激しい金属音と火花を噴ふき上げながら、ライの長柄刀の刃が巨人の膝を一断たつ。

斬った。長柄刀が、斬り抜ぬいたのだ。

片足を失った巨人が、岩肌に体をぶつけ、そこを削りながら転てん倒とうしていく。

「「ぅおっしゃぁああぁあぁあぁああぁぁぁぁぁああああぁあぁああぁああ!!」」

腹の底からモルトとライは歓かん声せいを上げた。

足りなければもっと力を込めればいい。それでも足りなければ、足せばいい。

あまりにシンプルな回答。だが、それを為すためには絶ぜつ妙みょうなタイミング、そして何より長柄刀の絶大な強きよう靭じんさがなければ不可能な、そんな回答だった。

刃は物ものを刃物で押し込むなどという、武器商人が見たら目を回すような、そんな常じよう軌きを逸いつした使い方。だが、モルトもライも、それを行うことに躊躇いはなかった。

この得物なら、コーンとブレンデッドが残した一対ついの長柄刀ならば……大したことではない。そう、思えた。……ただし、一つの問題を除いて、だ。

石鎧、そして長柄刀同士を打ち付けた衝しよう撃げきは、モルトの腕はおろか全身に至るまで響ひびいていた。木製柄ならばその素材の柔やわらかさが衝撃を吸収してくれただろうが、鋼鉄製の柄で

は、打ち付けた衝撃がそのまま手に伝わってくるのだ。

　骨が、自ら放った一撃の衝撃に震ふるえている。折れてこそいないが、腕の数カ所にヒビが入ったのをモルトは感じた。恐おそらくライも一いつ緒しよだろう。

　だが、二人は口元に浮かべた笑みを消しはしなかった。躊躇いなど、どこにもなかった。

「ありえん！　我がグリコゥ国の傑けつ作さく歩兵装備を、この装甲を……斬ったというのか!?」

　巨人が完全に転倒し、地を激しく揺ゆらす。

　ライとモルトが今一度咆哮を上げ、地を蹴ける。倒たおれる巨人の上へ飛ぶ。

　腕など、折れるなら折れてしまえばいい。痛みなどとうに忘れた。

　感じるのは隣となりにいる相棒と、握にぎり締しめた重く長い長柄刀……そして、己おのれの内に湧わき起こる〝俺達に斬れぬものなどない〟という圧あつ倒とう的てきな自信。

　ただ、それだけだった。

　そして、それで十分だった。

「「うおおぉおぉぉおおおおおおぉおおおぉおぉぉぉおぉおぉおおぉぉぉぉぉぉ!!」」

　モルトが先んじる。巨人の胸に一撃。その後ろへ追っかけのライの一撃。

　二人ともに、ありったけ。二人の男が今ある全すべてをそこに込めた。

　刃が重なり合った瞬間、凄すさまじい音がし、火花を噴き上げながらモルトの長柄刀が巨人の胸に深く叩き込まれる。

　モルトの手に己の骨を砕くだく衝撃と共に、石を斬るという経験したことのない感かん触しよくが伝わり……そして、最後に、何か

を砕いたのが伝わってくる。

　パリンっと、ガラス玉を砕いたような、そんな……。

　その瞬間、巨人の全身に無数の亀き裂れつが迸

ほとばしる。そして、亀裂から白い光が漏れると共に、その巨体は砂すな粒つぶへと変わり、辺り一帯に盛せい大だいに飛び散ったのだった。

　足場を失い、地面を転がったモルトとライが顔を上げて見たのは、割れた球を胸に乗せて倒れている、魔力が枯こ渇かつしたシロの姿──それはまるで、ミイラのようだった。

「また……負ける……のか。……私達は、幾いく度ども……」

　くぼんだ目から雫が零こぼれる。ライが駆け寄ろうとしたが、モルトが止めた。

　もう手て遅おくれだ。彼は魔力を使い果たしながらも、戦った。命をも、使い果たしている。

「王よ、王おう妃ひよ……あぁ、姫ひめ様……何故なぜ、どうして……どこに、行ってしまわれた……」

　シロの枯かれ枝えだのようになった手が、腰こしに下げていたホルダーからナイフを抜く。そして、彼は白はく濁だくの瞳ひとみで空を見上げながら、ナイフを胸に抱だき……事切れたのだった。

　モルトもライも、無言のままその場に尻しり餅もちをつき、シロの亡なき骸がらを見つめる。

「……きっと、あの世で会えるさ」

　それだけ言って、ライはふらりと力を失う。長柄刀を地面に落とし、そして隣のモルトへと寄りかかるようにして意識を失ったのだ。

　遠くから野太い男達の声が聞こえる。巻き起こる粉塵を見たのか……いや、コーン達の後を追うようにして自警団が出しゆつ陣じんしていたのかもしれない。

　きっとそれは、壮そう絶ぜつなものになっているだろう。あの屈くつ強きような男達が群れを成して山やま肌はだを駆かけ上ってくるとなれば、魔ま獣じゆう達ですら尻尾しつぽを巻いて逃にげるに違ちがいない。

　その屈強さが、荒あら々あらしさが……リキュール自警団なのだ。

　モルトは寄りかかってきたライの肩かたを抱きつつ、シロの亡骸を見る。

「きっとあの世で、か。……果たして、どうかな？」

　モルトは一人口元に笑えみを作り……そして、彼もまた、意識を失ったのだった。

4

　数度の覚かく醒せいがあったものの、きちんと意識を取り戻もどしたのは事件の夜から三日が経過した頃だった。目を覚ます度たびに周りを囲む人間は変わったが、いつもリッツとオリービーが自分、そして隣のベッドで寝ねているライの近くにいてくれたのを、何となく覚えている。

　眩まぶしいほどの日差しを浴びながら、モルトは痛む体を無理矢理に起こす。

　筋肉が腐くさったゴムで、骨は錆さび付いた金属のおもちゃのようだ。全身が筋肉痛、数カ所骨折、要所要所では肉にく離ばなれも起こしているようだ。

　痛む首で部屋を見回せば、自分が六人部屋にいたのだとようやく知れる。

たまたま病室の前を通りかかった女性看護師が見つけ、駆け寄って来た。彼女は悪いタイミングで起きてしまったわね、と笑う。何でも、今、リキュールの外れの墓地で花屋の店主の葬そう儀ぎが執とり行われているのだという。それでいつもはモルト達の側に誰だれかいるはずなのに今は珍めずらしく誰もいない、ということらしかった。

「今日、ここに来る前に少しだけ覗のぞいたのだけれど……オリービーさんがお花を綺き麗れいにデコレートしてたね。……花屋のお婆ばあちゃんも、あれならきっと安心して天国に行けるわ。お店やお花をとても大事にしていた方だったから……」

医者も葬儀に出ているそうなので、もうしばらくしてから検査を行うとのことだった。

看護師を見送ると、モルトは窓の外を見る。日差しからするに午後だろう。

窓の外を見ていると、ふと、視界の端はしに真っ直すぐな棒があるのに気が付いた。

コーンの長柄刀だ。まるでモルトの物であるかのように、ベッドに立て掛かけてあった。隣を見やれば、当然のようにライのベッドにも、ブレンデッドの長柄刀がある。

そういえば自分達の木製柄のそれはへし折れ、そしてナイフはコーンが持って行った。

丁度良い。全てを捨てるには、実に……。

モルトは、そんなふうに思いつつ、ベッドからゆっくりと下りて、一人立つ。

「……どこかに消えようとか、思うなよな」

突とつ如じよとしてかけられた声にモルトは思わず体を硬こう直ちよくさせるが、酷ひどい痛みが全身に走って倒れかけてしまう。……声の主は、ライだった。先に目覚めていたらしい。

トイレだよ、と告げると、ライはそうか、と体を起こす。

「あの時も言ったけどよ、お前の過去なんてどうだっていい。他の

みんなだって、きっとそう思ってる。流れ者が当たり前、それがリキュールだ。それが、この街だ。そして自警団は、性しよう根ねが真っ直ぐで、腕っぷしが強ければ、それでいい」

「いや、自警団ぐらいは身元がはっきりしてなきゃダメだろ」

「住民登録しろよな、モルト」

　そうじゃなくてさ、とモルトが面めん倒どうくささと共に呆あきれていると、ライは首を振ふる。

「身元はっきりしてるだろ。オレは、わかってる。それで十分だ」

「公表できない。俺が元々は……その……。ともかくあの堅かた物ぶつの団長は認めないだろ」

「だったら……オレが次の団長になれば、それでいいだろ。すぐに親父おやじから奪うばってやる。だから……」

　ライは真っ直ぐにモルトを見つめた。オリービーに良く似た、しかしそれ以上に彼の父である団長に似た、戦士を思わせる固く強い意志を感じさせる瞳。……眩しかった。

「どこにも行くな、モルト。ここにいろ。……オレの相棒だろ」

　くすぐったくなるような、少年にしか許されない、そんな言葉をモルトは苦く笑しようで受け止める。

「トイレぐらい行かせてくれよ」

　ライが笑う。モルトも、笑う。

　そして……消えようと、決心した。

　こんなにも明るく、そしてとてつもない程の才能を有した少年の横に、血と裏切りに染まった自分は相応ふさわしくない。モルトは、そう思った。

　夜、日付はとうに変わった……そんな時刻にモルトは目を覚ました。

病院内は静まり返り、数時間前にあったお祭り騒さわぎは夢のように消失している。葬儀帰りにやって来た酔よっ払ぱらいの自警団員達にもみくちゃにされた時は地じ獄ごくだった。涙なみだ目めでオリービーにライ共々抱だき締められたのは天国だったが……やはり現状の体で抱き締められると涙が出る程に痛かった。そして、リッツの両親からは涙ながらに感謝され、リッツにいつものようにタックルされてから抱き締められ……。

とにかく、ありがたいことの大半が全て痛みに変へん換かんされるという天国なんだか地獄なんだかよくわからない時間が……今はもう、遠い。

ライ、そして病室の他の患かん者じゃ達もいびきを立てて眠ねむっているのを気配と耳で感じると、モルトはそっと上半身を起こそうとする。

だが、重くてなかなかうまくいかない。仕方なくモルトは横になったままで、自分の首に絡からみつく細い腕うでをそっと解くことにした。

リッツだった。他の人がいる間は全然お話できなかったから、と涙目になりながら一人泊とまっていくと喚わめいたのだ。結局、両親はモルト達と一緒なら大だい丈じょう夫ぶだとして許可したのだが……その騒ぎのせいでリッツ本人が疲つかれて早々に寝てしまったのが、子供ならではの切なさだった。

そっとそっと……。モルトは起こさぬよう、最大限の気き遣づかいをしつつリッツの腕を解いて彼女を横へと転がして、寝かせる。

家から持ち込んだワンピース風のパジャマではあったが、思いっきりめくれ上がってお腹なかが出ていたので、そっと下へ引っ張って直してやった。さすがにパジャマなので首回りや肩も覆おおっており、余計なものが顔を覗かせることもない。

「……オリービーさんみたいに大きくなるの、見たかったけどな」

モルトはリッツの胸むな元もとをツンっと押しつつ、彼女の全身を見やる。血だらけになっていた足には包帯が巻かれていたが、それより何より髪かみを失ったのがかわいそうだった。

ロングだったはずなのに、今では左サイドにだけ長い三つ編みが

あり、他はショートボブという長さになってしまっていた。

　起きていた時にそのことに触ふれ、モルトは謝っていた。けれど、リッツは首を振った。

　━━これでいいのっ、気に入っているの！　だから……！

　涙目になりながら、リッツはそんなことを言っていた。モルトに気を遣ったのだ。〝だから、気にしないで〟と。五歳の子供に気を遣われてしまう自分が情けなくなると共に、この子が大きくなった時、どんないい女になるのだろうかと想おもう。

　そういう優やさしくていい女ほど悪い男に騙だまされたりするものだ、大丈夫だろうか……。

　父親でもないのに、不安に思ってしまう。ちなみに、ならばいっそ程ほど良よく育ったところで自分が……と一いつ瞬しゅん考えたりもした。

　モルトは寝ているリッツの頭を撫なでる。一瞬リッツが顔をしかめ、今にも起きそうな気配を感じ、モルトは身を固めた。けれど、リッツの小さな手がモルトの指先をギュッと強く握ると……それで、安心したかのように、彼女はまた静かに寝息を立て始める。

　それから、しばらくの時を置いてから……モルトは病院を抜ぬけ出したのだった。

　体中が恐ろしく痛く、老人のような歩みでしか動けない。それでも、早く街を出なければならなかった。これ以上長くここにいれば、自分はきっと離はなれられなくなってしまう。

　シロ達との戦いの記き憶おくが、過去からのノックが、モルトの胸に残ざん響きようとしてある間でなければ……離れられなくなる。それは確信だった。

　あまりにもこの街は、自分に優しすぎる。自分なんかに……。

　リキュールの人ひと気けの少ない道を選んで、足を引きずるようにして、進む。

　街に三年もいれば人に会わずに街を抜けるルートぐらいわかる。

呼吸が乱れていた。整えようと空を見上げれば……満天の星。雲などどこにもない。

別れをするには、悪くない夜だと、そう思った……その時だった。

「モルトぉ！」

遠くから聞こえたその声は、リッツ。

バカな、とモルトは焦あせる。仮に気付いて起きたとしても、自分がどこへ向かったかわかるわけがない。それなのに、声はそれほど遠くではない。近い。モルトは慌あわてて歩みを再開するが、遅おそい。痛みを無視して進んでも、子供の足よりもずっと遅い。このままでは、まずい。隠かくれないと。モルトはそう思い、路地裏の片かた隅すみにあった木箱を見るも……中にぎっしりと漬つけ物の瓶びんが詰つまっており、中には入れない。陰かげに隠れても通り過ぎる際に一発でバレてしまうだろう。モルトは諦あきらめて先を急ぎに急いだ。

「モルト!!」

声は、自分に向けられたものだった。振り返れば、涙目で、ワンピース風のパジャマの裾すそを両手でギュッと握にぎり締しめているリッツが立っていた。

リッツがタックルするように、モルトの後ろ腰ごしに抱だきつく。その衝しよう撃げきに、そして捕つかまってしまったことに思わず膝ひざを突つく。リッツの顔がモルトの背に押しつけられた。

「行っちゃダメ！　絶対に絶対に、どこにも行かせないんだからぁ！」

「ごめん、リッツ。……でも、あそこにはいられないんだ。俺は……」

ぐいぐいと顔をこすりつけられるような感かん触しよく。それはいやいやというように顔を振っているのだろう。

「だ、だったら違うお部屋に行こ、ね！　だから、だからぁ……!!」

「病室じゃないんだよ。……自警団には、いや、リキュールに、俺はいられない。俺なんかがいたんじゃ、ダメなんだ……だから、な、リッツ……」

「やだ!!」

　モルトの体にしがみつく、リッツの手は強く彼の服を握っていた。行かせない、絶対に放さない……そんな気持ちを表すかのように、ギュッと。

　この街は、どうかしている。

　世界の裏側を駆け抜けてきた、そのために、今回の事件に巻き込んでしまった……だというのにライは、リッツは、みんな、誰もかもが、自分を受け入れてくれようとする。

　それは甘い誘さそい。身を委ゆだねてしまいたくなる。……しかし、だからこそ、この街を、住民達を愛するのならばこそ……自分はここにはいられない。

　人と物の出入りが激しいこの土地ならば、いずれまた、過去からの手が伸のびてくる。そして自分を捕まえ、汚お泥でいの中へと引きずりこもうとするだろう。だから……。

「ダメ、行っちゃダメ!!　行かせないもん!!　自警団が嫌いやなら、嫌でいいから！　他のお仕事探せばいいでしょ!?　リキュールが嫌ならアルコ・ホールに来ればいいでしょ!?」

　どうもリッツの中ではリキュールとアルコ・ホールは別の街という扱あつかいのようだ。実際にはリキュールの中心街をアルコ・ホールと呼んでいるのだが……小さい子にはわからないのだろう。

　モルトは背に、湿しめり気けを感じる。涙だ。喚きながらリッツが泣いていた。

「うっ……うちなら……うちのアパート、部屋空いてるから！　それで、そこで、住めば……いいじゃ……うっぅうぅ！　アルコ・ホールだし、自警団じゃないし！　だ、だからぁ……ぅあああぁ

!!」

　バカなことを言っている。早く引き離さなければ泣き声を聞きつけたお節せつ介かい焼やきの住民達が大挙して押し寄せてくるかもしれない。

　モルトは体を捩ねじるようにしてリッツを見る。その際、視界の端はしで嫌なものが目に映った。あの、木箱である。そこからあからさまにブレンデッドの長なが柄え刀とうが顔を覗のぞかせているのだ。

　間ま違ちがいなく、ライだ。それで納なつ得とくした。リッツがここへ来たのはライが道を選んだのだ。共に三年を過ごした。モルトがどの道を選ぶかぐらい当てるのは容易たやすいだろう。

　そして、リッツに先導させつつ、自分ライは長柄刀を持って追い掛かけてきたのだ。

　もし、リッツの制止を振り切れば……今度は力ちから尽ずくで止める気なのだと知れた。

　ライほどリキュールの人間らしい奴やつはいない。最後は力で強ごう引いんにどうにかしようとする。

　愚ぐ直ちよくで、わがままで、そして……気き恥はずかしくなるぐらいに、純真で。

「どうかしてる……本当に……」

リッツが何かを言っている。けれど、すでに言葉は涙で濁にごり、喚き声にしか聞こえない。それでも、モルトを捕まえる腕の力は少しも弱まらなかった。

「みんな……バカだよ。何で、そこまですんだよ……こんな……こんな俺にさぁ……」

モルトはリッツを振り払はらえず、誰だれかへと頭を下げるように項うな垂だれ、地面に手を突いた。

ポタポタと地面に黒点が打たれ始めていた。

雨が降ってきているのか。さっきまであんなにも綺き麗れいな星空だったのに。

モルトは歪ゆがむ視界で地面を見つめながら、そんなことを思った。

5

風が団長室に吹ふき込み、モルトの黒くろ髪かみとライの亜あ麻ま色いろの髪を揺ゆらす。窓まど枠わくに立て掛けた二本の長柄刀が日差しに煌きらめいていた。

「……あれから七年か。何もかもが懐なつかしいな、モルト」

ライは長柄刀を遠い目で見やりながら、そんなことをしみじみと口にした。

そしてモルトもまた、七年ぶりに触れたナイフを握りつつ、噛かみ締めるように口にする。

「あぁ……リッツの泣き声に飛び起きた住民達に変質者扱いされてボコボコにされたあげく荒あら縄なわで縛しばり上げられて街中引きずり回されたのも、今ではいい思い出だよ……」



　ちなみに、その時のライは、おぞましいものを見るような目で惨さん劇げきを前に固まり、あれほど力強くモルトを抱き締めていたリッツはいつの間にかモルトから離れ、ライの手を固く握り締めて震ふるえていたのだった。

　この街はどうかしている。あの夜ほどそれを強く感じたことはなかった。

「この折れた長柄刀の木製の柄……モルト覚えているか？　オレ達が退院した直後にさ」

「あぁ、団員の誰かが持って来たのに、何故なぜか俺達が〝なんでこっちを持って来た!?　刃はの方持ってこいよ、バカなのか!?〟と総務部に全力で怒おこられたっけな……」

　長柄刀の練習用木製柄だが、かなり質の高いものを使っている。とはいえ、折れた木材を直す技術はないのでゴミ同然のものだったし、当然のように刃の方が貴重で高価だった。

「……なぁ、ライよ。何故だろうな。いい思い出だと思っていたが……改めて思い出してみると割と辛つらい記憶しか残ってないぞ」

「そうか？　オレはいい思い出ばかりだぞ」

　こいつは気楽でいい。そんなことを思いつつ、モルトはナイフをライに投げ返した。

「……いいのか？」

「同じようにしまっといてくれ。それでいい。もう自分のだっていう気がしない。……シロのように、墓場にまで持って行く気はないさ」

　ライは純じゅん朴ぼくな少年のままであるかのように、心の底から嬉うれしそうにニッコリと笑った。そしてモルトが来た時と同じように、床ゆか下したに納めると、棚たなの位置も最初のように直す。

　何もなかったかのように、当たり前に、いつもの団長室へと戻もどっていた。

　ライもモルトも、窓枠に立て掛けてあった愛刀を手に取る。そして、そこから見える訓練所で威い勢せいのいいかけ声を上げる新人達を見やった。

「まだ昼前だが……どうだ、ライ。久々にみんなで飲みに行かないか？　お前は飯だけだろうが」

「あぁいいな。……酒は二十歳はたちになってから。姉ちゃんにキツく言われてるから、仕方ない。……とはいえ、スピリタス一いつ滴てきぐらいならいいだろうさ」

「よし、決まりだ」

　モルトは頷うなずくと、声を張り上げる。

「おいっ、飲みに行こうぜ!!　コーン、ブレンデッド!!」

　新人達を前に腕うでを組んでいた二人の男が、声に反応する。腹に穴を開けつつ鬼き神しんの如ごとき働きで少女を担かついで下山したという逸いつ話わを持つ二メートル超ごえの巨きょ漢かんコーンと、杖つえこそ今でも使っているが、数十メートル落下して全身の骨を折りながらも一晩単独で魔ま獣じゆうと戦い続けた尋じん常じようならぬ底力を有する彫ほりの深い男ブレンデッド……新人達が恐おそれおののく伝説的な二人の猛も者さが、一いつ斉せいに顔を上げた。

　モルトとライの先せん輩ぱいにして、恩師でもある二人。そして、愛刀である長柄刀の前の持ち主達だった。

　厳いかつい顔をしていた彼らが、飲みの声と、モルト達の姿にいとも容易く笑え顔がおを見せる。

　古い友と酒。男を笑顔にさせるのには、それだけあればいい。

「さぁ、行こうぜ、ライ！」

　思い出話に花を咲さかせながら、少し高めの酒を飲むのもたまにはいいだろう。

　……どうせ、支し払はらいはライに押しつけるのだ。

　他人に奢おごらせた酒ほどうまいものはない。

　まだ日が暮れて間もない時刻ではあったが、安あん美ぴ亭ていを出てライ達と別れたモルトの足あし下もとはふらふらだった。

　ついつい飲み過ぎた。というより、ウィスキーを中心にしつつも、時折スピリタスが混じるという、尋常ではない飲み方をしてしまった。ザルのコーンとブレンデッドを前にしては、モルトなどまだまだケツの青いガキんちょである。

　気持ち悪くなるようなことはないが、寝ね床どこであるアルコ・ホール三番街のアパートに到とう着ちやくするまでにかなりの時間を費ついやしてしまった。途と中ちゆうでオリービーの花屋で雑談したのも大きかったが、それを差し引いてもリキュールを一周できるほどの時をかけていた。

　アパートに帰ってきても、モルトの部屋は三階である。遠い。果てしない。ぜぇぜぇ言いつつも、時折何故か溢あふれ出てくる楽しい気分に笑いつつ、かろうじて上っていく。

　あと数段。俯うつむきながら一つ一つ段差を上っていくと、ふと視界にサンダルを履はいた生白く、細い足が見えてくる。さらに上っていけば、視界の中に白いフリルの付いたワンピースが現れ……そして、組まれた腕、ショートボブながら左サイドだけ三つ編みになっている髪、そして……生ゴミを見るような目が──リッツだった。

「へー、明日あした家賃の支払い日だってわかってんのに昼間からお酒飲んでたんだ。へー」

「あぁ、いやな、これはライがだな……昔話をしたいってんで、コーン、ブレンデッドと安美亭でな……だから、奢りでさ……ははははは」

「コーンさん達はどうでもいいから。……お金ほとんどないけど今日稼かせぎまくってやるから安心しろよ、とか勇んで出ていった数時間後に、これ？　本気なの、モルト？」

「本気っていうか……陽気？」

　うまいこと言った。モルトはニヤリと笑いつつ、リッツの七年前からあまり成長していない胸を指先で突──。

　ドフッと、モルトの鳩尾みぞおちにリッツの拳こぶしが捻ひねり込まれた。腕だけではなく、全身を使って重さを乗せた非常にいいパンチだ。たまらず、モルトは膝を突く。

　七年前、今と同じように膝を突いた時……幼いリッツはモルトの腰こしに抱だきつき、放すまいとするようにギュッとモルトの服をつかんでいた。それが今では……。

「今度滞たい納のうしたら、本気でここから追い出すからね！」

　……モルトの胸むなぐらをギュッとつかんで、この言い様である。どこでどう道を間違えたのかわからないが、何だかいろいろおかしなことになってしまっていた。

「今からでも働いてきなさい、このクソ何でも屋!!」

　やっぱり、この街はどうかしている。

　……けれど、それがいいのさ。

　モルトは心地良い酔よいの中で、そんなことを思ったのだった。

●第四話『勇気と冒ぼう険けんの記念日』

　馬の悲痛な嘶いななきと人々の怒ど声せいで、モルトはベッドから跳はね起きた。

　心臓がドクドクと大量の血液を全身に回し、たるんでいた体を臨戦態勢へ持ち込むと共に、頭に大量の酸素を回して思考を働かせんとする。

　毎日が危険と隣となり合わせだった幼少期に叩たたき込まれた反応は、今も健在だった。

「……何だ？」

　モルトはベッド脇わきの窓から外を見やった。

　三階のその部屋から見えるのは、街リキユールの中心街であるアルコ・ホールの太い道、そこに建ち並ぶ店、そして道を埋うめ尽つくす無数の人々……。その中で荷を引いていた一頭の馬が暴れており、それを数人の男達が必死になって抑おさえていた。

　モルトがボサボサの黒髪を掻かき上げつつ、目を凝こらしてみれば馬の尻しりにダーツの矢が刺さっているのが見える。……原因はこれだろう。

「あ、こんな……クソッ、どこのどいつだ、俺の愛馬に!!」

　荷主らしい男が矢に気付き、怒声と共に辺りに睨にらみを利きかせるが、当然名乗りを上げる者はいない。モルトの目から見ても犯人らしき者の姿は見えなかった。

　……ただし、馬の後ろ側には、だ。

　上から見下ろしているモルトの目は、一人、妙みょうな動きをしている小男を見つけていた。馬の騒さわぎでてんやわんやの人ひと混ごみの中だというのに、岩間を流れる水のように素す早ばやく、滑なめらかに進みながら、両手を極ごく々ごく自然に人々の体に這

はわせている。

　モルトは慌あわてて窓を開けて声を張り上げた。

「盗ぬすっ人と、馬の前だ！　全員財さい布ふを確かく認にんしろ!!」

　布を巻いて顔を隠かくしていた男がやたらと早い反応でモルトを見上げる。

　目と目が合う。モルトは半はん裸らの体を窓から乗り出し、笑顔で中指を立ててやった。

　馬のケツにダーツの矢を投げ、人々が足を止めて騒ぎを注視する状じよう況きようを利用した犯行……プロの手口だ。モルトの声を聞いた者達が一斉に己おのれの懐ふところに手をやり「財布がねぇ！」「私のイヤリングも！」と次々に声を上げる。

　覆ふく面めんの男が全力で走り出し、人々が捕つかまえようと怒声と共に腕を伸のばす。しかし、彼は巧たくみに身をかわし、素早く家の壁かべを蹴けって屋根の上へ跳とび上がり、裏道へと逃にげて行く。

　アルコ・ホールには、追え、捕まえろ、殺せ、縄で縛しばって熱湯に沈しずめろ、といった相変わらずの言葉が飛び交かい始めたので、モルトは窓を閉めて着き替がえることにした。あとは警けい邏ら中の自警団がどうにかするだろう。

　髪を直し、髭ひげを剃そり、シャツを羽織ってコートを羽織り……そして、ふと気付いた。

　眠気がまったくない──すでに昼近い時刻だ。

　当然のことながら、モルトは家賃を全力で滞納している最中である。それなのにこんな時間まで寝ていられるというのは、明らかにおかしい。

「……リッツの奴やつ、どうしたんだ？」

　いつもならばモルトを叩き起こしに来て、仕事へ行け、とせっついているはずである。学校に行く日でもないし、予定があるような話も聞いていない。何かあったのか……。

　モルトは帯バンドを巻き付けて鞘さや代わりとした長なが柄え刀とうを手にして、部屋を出た。

　ゴツいブーツが音を立てないようにそっと階段を下り、二階の大家の部屋、その玄げん関かん扉とびらの前で聞き耳を立ててみる。

　普ふ段だんは忘れがちだが、リッツは病弱なのだ。もしかしたら寝込んでいるのかもしれない。

　耳を澄すませようと玄関扉に顔を近づけていたら、それが唐とう突とつに開く。

「うわっ……と？　な、何してるの、モルト……？」

　現れたのは小こ柄がらな少女、リッツ。かわいらしいポシェットに、普段着よりちょっとお値段の張るワンピース姿。左側にだけある三つ編みには、こちらも普段より大きめのリボンが一つ。リッツのおめかし＆お出で掛かけ仕様である。

「お、おぅ。仕事探しに行こうかと思ってたんだが……それより、だ。どうしたんだ、リッツ、今日何かあるのか？」

「え？　別に、その……ちょっと、お買い物に……。ふ、普通の買い物だし、何もないよ」

　勝ち気なリッツらしくなく、少しばかり頬ほおに朱しゆを滲にじませ、モルトから視線を逸そらして、口をとがらすようにして、そんなことを言う。

　彼女の指先が三つ編みを弄いじる。

　ぎこちない仕草に躊躇ためらうような言い方、おめかしした姿……何よりモルトを野放しに寝かせているという状況からするに、普通の買い物であるはずはなかった。

「まさか、リッツお前、今日……デートか!?」

「違ちがう！　……あ、でも違わない……かも？」

「お、おいおい……色気づきやがって、お前まだ一二歳だろ……」

「年ねん齢れいは別に問題じゃないでしょ。学校の友達には付き

合っている人、結構いるよ？」

「相手はどこの誰だれだ？　まさか、どこぞの中年変態親父おやじとかじゃないだろうな」

「仮にそうでもモルトに言う必要ないし。……デートの相手はオリービーさん」

「……あぁ、本当に買い物なのな」

　だからそう言っているのに、と、不満げに、しかしまだ何故なぜか頰を色づけたまま、リッツは部屋を、そしてアパートを出る。

「……何でついてくるの。来ないでよ」

「オリービーさんに挨あい拶さつしておこうかと。それに仕事探しに行くんだから、街に出るのは当然だろ」

　やはりどこか嫌いやそうな顔をするリッツと共に、モルトはアパートからすぐの花屋へ。

　ふんわりとした髪に柔やわらかなセーター、そしてそれらよりもふんわり柔らかな笑え顔がおのオリービーがにこやかに迎むかえ入れてくれる。……彼女の豊満過ぎるおっぱいはそれら以上にふんわりかもしれない。

「こんにちは、リッツちゃん、モルトさん。……えっと、モルトさんも、一いつ緒しよに？」

「そんなわけない。モルト、ほら、仕事探しに行って。もういいでしょ、ほら、早く！」

「何だよ、リッツ。雑談ぐらいさせろって。……こんな調子なんですけど、今日は何なんです？」

「もういいから！　早く行ってよ！」

　リッツは顔を赤らめながら、モルトの革かわコートを引っ張り、オリービーから遠ざけようとする。しかし体格差もある上、力の弱いリッツだ。モルトの足を動かすには至らない。

　そんな二人を前に、オリービーは自分の顔の前で、長い人差し指

を立ててみせた。

「秘密です。今日は記念の日ですからね」

「オリービーさん!!」

　あらあら、とオリービーは朗ほがらかに微笑ほほえむと、そのままモルトに会え釈しやくした。

　どうやら、どんなに粘ねばろうともこれ以上は教えてくれないらしい。

「それじゃ、仕方ない。俺は仕事探しにでも行ってきます」

「早く行って、ほら、早く！」

　リッツに急せかされるようにして、モルトは人混みの中、仕事を求めてアルコ・ホールの中央部、東西南北に走る大通りの十字路へと向かう。そこにある巨きよ大だい掲けい示じ板ばんに依い頼らいがあれば良し、なければ街をブラついて仕事を探すつもりだったのだが、その足は少年然とした男が現れたことですぐに止まった。

　小柄ながらモルトと同じく、鋼鉄製の長柄刀を手にした、自警団団長のライである。

「丁度良かった。モルトの部屋アパートに行くとこだったんだ。……スリの顔、見たんだって？」

　モルトはチラリと辺りを見回す。アルコ・ホールに人が多いのはいつものことだが、普段よりも自警団員の数が多い。何よりこのライの発言からするに……。

「何だ。あのスリ、結局あの後、捕まえられなかったのか」

「オレが現場にいればな」

　どうも凄すご腕うでのスリがオードビー国側から街にやって来たらしい。

　──元盗とう賊ぞくのその者、シュウズゥジオなる小男は手先と逃げ足の速さで首都を中心に盗みを繰くり返し、ついに捕ほ縛ばくのための特別チームが首都警備隊によって編成されるも、その頃ころ

には姿を完全にくらましており、恐おそらく出国したものと思われる。近きん隣りん諸国は十分に警けい戒かいされたし――。

「っていう書簡が今さっき、オードビー国側から届いた。三番街の被ひ害がい報告書と同時だぜ？　若じやつ干かん遅おせぇよ、ってな」

　モルトは苦く笑しようし、生あい憎にくだが目元だけで、顔までは見ていないことを告げる。

　ライは腰こしに手を当て、ため息をつくように鼻から大きく息を吐はいた。

「犯行の特とく徴ちようは手当たり次し第だい、一度に大勢の人間が一気にやられるらしい。一件当たりの被害が相当にデカいんだ。……早めに捕まえちまいたい」

「オードビー国の首都警備隊でも手に負えなかったスリを……か。うまく押さえられればリキュール自警団の名がまた上がるな」

　モルトはあえてライを鼓こ舞ぶするように言って、彼の肩かたを拳こぶしで軽く叩く。

　ライは少年のような顔で、やってやるさ、と笑った。

「おやまぁ、何やら怪あやしいご様子だねぇ、お二人さん。……おぃしょっと！」

　そんな声と共に何かに飛びつかれ、モルトの頭に腕うでが巻き付けられる。

　ヘッドロックだ。腕は細く、そして体重もリッツ程度しかない。その重量と共にモルトが頭に感じる小ぶりながら張りのある感かん触しよくは……そう、おっぱいである。

　モルトの頭から腕を解いて、ライとの間に下り立ったのは、見るも鮮あざやかな赤毛を揺ゆらし、燃えるような瞳ひとみをした小こ柄がらな女性。ガーナである。

　身長はリッツと同じ程度だが、体のラインは大人の女性、それも頭に『魅み力りよく的な』と付けたくなるほどのもの。モルト達とは違う種族らしく、彼女のように二十歳はたちそこそこでも身長は

モルトの胸ぐらいまでしかいかないのだ。

　赤が印象的な彼女だったが、今日はいつにも増して赤い。

　顔が赤らみ、手には赤ワインのボトルがあるのだ。

「モルト、アタシに会えたことを喜びな。今日は赤、白、ロゼに発はつ泡ぽうのまで、ワインが全部飲み放題だ。そうだよな⁉」

　ガーナが振ふり返ると、そこには酒屋の店主が木箱を手にして額に汗あせを流していた。

「飲み放題じゃないよ！　詰つめ合わせセットが今持ってるコレの他ほかは四ダースの、合計五ダースで、六〇本！　まったく、姐ねえさんはすぐこれだ」

　へっへ～、とガーナは得意げな笑みを浮うかべた。

「あっ！　ひょっとして、この前からやってたリキュール酒屋史上最大のクジっつぅアレ……ガーナ姐さん、当てたのか⁉」

　ガーナは満面の笑みで親指をビッと立たせた。

「今さ、呑のみ仲間見つけ次第、片かたっ端ぱしから誘さそってんだ。祝しゅく杯はいあげるからモルトも来るといい。文字通りに浴びる程飲めるぞぅ」

　六〇本もボトルをくれるというとんでもないプレゼント企き画かくなので、実質的に飲み放題も同然だ。ガーナはザルだが、それでも一日二日で飲みきれる量ではない。言葉通りに浴びたとしてもまだお釣つりが来るだろう。

　売れ残りの詰め合わせとはいえ、酒飲みにとっては夢のような賞品だ。けれど、それを自宅にしまい込んで惜おしみ惜しみ飲んだりはせず、一気にみんなで飲んでしまおうというのが実にガーナらしかった。彼女を〝姐さん〟と呼ぶ者が後を絶たない理由がよくわかる。

「姐さん、最高だよ。会場は？　姐さんの自宅か？」

「部屋に男を連れ込むのは嫌きらいなのさ。相変わらず散らかってるしね。……天気もいいし、これから『処しよ刑けい台だい公園』

でやる予定。肴さかなは露ろ店てんで買っときな」

　処刑台公園はリキュールの中心部から少しばかり外れた場所にあるちょっとした広場の公園だ。名の通り、中央に処刑のためのお立ち台があって、その周りを芝生しばふが、そしてさらにその周囲を桜の木が囲んでおり、春にはちょっとした観光スポットになったりもする。

　大戦時には名の通りに処刑場として活用されたことが影えい響きようしているのか、何故かその地に生える桜は……妙みように、赤いのだ。ピンクというより、不自然なまでに赤に近い。

　そのため春になるとオカルト好きな観光客がこぞって遠方からやって来たりもするので、古めかしい処刑台と芝生は定期的にメンテナンスを受けてもおり、そのおどろおどろしい名とは違っていつも綺き麗れいで、住民達にとっては代えがたい憩いこいの場となっていた。

　──処刑台の上にいたら気持ち良くて居い眠ねむりしてしまったわい。──おい、永えい眠みんしちまうぞ（笑）。

　そんな老人達のやり取りは日常的であったし、赤い桜の花弁を集め、その上で『死体ごっこ』に興じるのは誰もが通る伝統的な子供の遊びでもある。そして、当然のように今回のような酒盛りにだって利用されるのだ。

　リキュールは古代遺い跡せきである上下水道の恩おん恵けいにあずかるために、建物は特定の位置に密集して造られているため、広場的なものが少ない。特に野っ原、となると処刑台公園以外では街外れまで行くしかなかった。

「お若い団長さんもどうだい？」

「生憎、酒は二十歳からだって、姉ちゃんにキツく言われてるんだ」

「つまんない子だね。よし、それじゃそのお姉さんに許可取って今日だけ特別に飲もう！　どこにいるんだい、お姉さんは⁉　……あ、あの花屋のオリービーさんだったか！」

　許可するわけがないことを、ライはガーナに告げるのだが、それでも彼女は諦あきらめず「お姐さんが直じか談だん判ぱんしちゃ

る」と口にすると、花屋へと向かって胸を張って歩き出す。

　モルトは素す早ばやく長なが柄え刀とうをライに投げ渡わたし、ガーナの両りよう脇わきに手を差し込んで、背後から彼女を持ち上げた。しばし空中で足をバタつかせてから、なんぞ？　という顔でガーナはモルトを振り返る。

「どっちみちダメだ姐さん。オリービーさんは今日、リッツと買い物に行っちまったはずだ。今日は記念日だかで……。何の記念日なのかはよくわからないんだけどもさ」

「あら、記念日？　オリービーさんが恋こい人びとと付き合い出した日とか？」

　それはない、とライはきっぱりと即そく断だんした。

　この鉄てつ壁ぺきの弟のおかげで、魅力の塊かたまりのようなオリービーは未いまだ誰のものでもないのだ。

「あとどさくさ紛まぎれで乳を揉もむなっての、モルト。お金取るよ」

「おっと、バレてたか」

　小柄なガーナ相手だからこそできる業わざである。後ろから脇に手を差し入れれば、その指先は彼女の形のいい乳に届くのだ。

　モルトは苦笑しつつ彼女をゆっくりと下ろすのだが、その際にも極ごく々ごく自然に指をふにふにと動かす。が、ガーナの踵かかとに股こ間かんを軽く蹴けられると腰が引け、即そく座ざに彼女を下ろした。

「リッツちゃんの方に彼氏がいて……は、さすがにないか。となると……あ、アレかな。モルト、アンタじゃないの？」

　ライから長柄刀を投げ返され、モルトは内うち股またで受け取った。

「俺？　……俺が、何だ？」

「ほら、えーっと……アタシがこの街に来たばっかの頃だから……二年前か。今のアパートに住んで丁度五年経たつけど、いい街だ

ぜ、って、言ってくれたはず。それって確か今ぐらいの時期だったよね？」

　パチンっと、ライは指を鳴らした。

「そうだ、思い出した！　七年前の今、モルトが自警団員見習いを辞やめて、団員寮りようを出て行ったんだ！」

　あっ、とモルトもまた短い言葉を漏もらし、固まった。

　団員寮を出た、ということはつまり……アルコ・ホール三番街にある、あのリッツの両親が経営していたアパートに入った日、ということだ。

「で、でも毎年祝ってくれたりとかは……」

　そうそう、そうだそうだ、とライがモルトを無視して続ける。

「モルトが団員寮に来て、ぴったり三年で離はなれることになったわけだから……お前、今年でリキュール一〇年目だし、ひょっとしてモルトが街に来た記念日なんじゃ……？」

　一〇年前の雨の夜、命からがらモルトはこの街に流れ着いた。その時、野良犬同然の少年モルトを受け止めてくれたのは幼いリッツ……。

　街に来たのが一〇年前の今日？　そして、三番街のアパートに入ってから今日で七年目？　どちらもモルト自身いまいちはっきりとは覚えていない。けれど、確かに今ぐらいの時期だったはずだし、昔から物覚えのいいライがそう証言した以上、間ま違ちがっているとは思えなかった。

　モルトが街に来て一〇年ということは、リッツをはじめとした街の住人達と出会ってから一〇年目ということだ。家族にも似た他人、他人のようで身内としか思えぬ大勢の人達と出会った……そんな……。モルトにとって、これほどまでの記念日が他ほかにあるだろうか。

　ガーナとライは何とも言えない優やさしげな微笑ほほえみで、モルトを見つめる。

「あー……なるほど、な。あー……そういや、そうか……」

　モルトは気き恥はずかしさを覚えて、髪かみを掻かき上げつつ、空を仰あおいだ。

　一〇年、あっという間といえばあっという間だった。だが、長いといえば……かなりの長さ。記念日に、祝うに十分な、そんな……。

「……ガーナ姐さん、悪い、やっぱ今日の酒盛りは遠えん慮りょしとくわ。仕事してくる。家賃、滞たい納のうしてんだよね、俺」

　ガーナはパンっとモルトの尻しりを叩たたいた。

「それがいいね。七年分の家賃キッチリ納めてスッキリして、祝われてきな、色男」

「仕事内容は良く吟ぎん味みした方がいい。遅おそくなるのはやめとけよ、モルト。主役がいないんじゃ話にならないぜ」

　先程のやりとりを返すように、ライはあえてモルトを鼓舞するように言って、彼の肩を拳で軽く叩く。

「……まだ、そうと決まったわけじゃないけどな」

　期待をすれば裏切られる。現実というのはいつだってそういうものだ。だから、あまり多くを期待してはいけない……モルトはそう考えるが、どうしても、期待してしまう自分がいるのもわかっていた。幼い頃から旅をしてきたせいで、長く居着いた場所もなければ、自分の誕生日すらわからない。年ねん齢れい不ふ詳しょうで、一〇年前までは住所も不定。そんなモルトにとって記念日など一日とて持ってはいない。当然、祝われたことも一度だって……。

　だから、期待してしまう。けれど、期待が裏切られた時に惨みじめになりたくなくて……モルトは期待しないようにするのだが……しかし、けれど、でも……。

　モルトは鼻はな頭がしらを指先で掻きながら、二人の顔を見ないようにした。何だか、照れてしまいそうだった。けれど視線を外した先で、そいつぁ羨うらやましいなぁ、とニンマリ笑え顔がおの酒屋の顔が目に入ってしまって、結局モルトは照れた。

「……んじゃ、ま、ちょっくら働いてくるわ」

　モルトは走り出したくなる衝しよう動どうを抑おさえつつ、友人達と別れ、中央掲けい示じ板ばんへと向かった。

　そして、その中で一番地味で、キツい、けれど報ほう酬しゆうのいい仕事を選んだのだった。

１

　空がゆっくりと色づき始めた頃ころ、アルコ・ホールの石いし畳だたみでサンダルが鳴っていた。

　軽かろやかに、けれどその直後には酷ひどくドッシリ、でもやっぱりすぐにまた軽やかに……そんな不安定なリズム。足音の主、リッツの気持ちそのまま。

　浮うかれてしまいそうな気分を、はしゃぐのは恥ずかしいからと宥なだめる……けれど、やっぱり……。その繰くり返し。誰だれも見ていなければスキップでもしていたかもしれない。

「あの、オリービーさん、今日はありがとうございました。お仕事休んでまで……その」

　リッツは紙かみ袋ぶくろを胸に抱だき締しめ、俯うつむき加減に、ちょっと照れながらそんなことを言った。隣となりを歩くオリービーは、ニッコリと笑ってリッツを見てくる。

「全然いいのよ。むしろ、頼たよってくれて嬉うれしかった。何だか本当にリッツちゃんのお姉さんにでもなったみたいで」

「多分、オリービーさんがこういうの、一番詳くわしいんじゃないかなって、そう思って。だから……頼っちゃいました」

　うんうん、と、オリービーは嬉しそうに何度も頷うなずいてくれる。それがリッツも嬉しいし、同時に恥ずかしくもあって、口元が緩ゆるみ、〝にへらぁ〟とした笑みが浮かんでしまう。

「これでモルトさんも……意識しちゃったりするかもしれないわね」

なっ⁉　と、リッツは目を見開き、イタズラっ気な顔で笑うオリービーを見る。

「一日一日、人は成長するもの。今まで子こ供ども扱あつかいだったかもしれないけれど、リッツちゃんだって、もう女性として見られたっておかしくないわ」

「そりゃ、オリービーさんだったらそうでしょうけど……あたしは、その、まだ……」

リッツはいたたまれない気持ちになるも、紙袋を強く抱くことで何とか耐たえる。

「あ、リッツちゃん、形崩くずれちゃうわよ」

「あっ、いけない！」

慌あわてて力を抜ぬいて、念のため紙袋を覗のぞく。大だい丈じよう夫ぶそうだ。というか、そもそもその程度でダメになるようなものではないのだ。ふと、その買ったばかりの品を見ながらリッツは思う。これを見たら、モルトは何て言うんだろう。

……何て、言ってくれるんだろう。もしかして、本当に……変に意識しちゃったり……するんだろうか。

そうなったら……自分はいったい、どうするんだろう。

どんな、気持ちになるんだろう。どんな言葉を彼に返すのだろう。

もしかしたら、きっと、恐おそらく、多分、ひょっとしたらだけど、その時、自分は──。

「ふふッ、先にリッツちゃんの方が意識しちゃったわね」

クスリとオリービーが笑った瞬しゆん間かん、リッツはまた目を見開き彼女を見上げる。一気に顔が熱くなる。時刻は夕暮れとはいえ、それで誤ご魔ま化かせる色ではないのはリッツにだってわかった。かといっていつもモルトにするように、声を上げて暴れるわけにもいかず……リッツはただ、俯き、小さく呻うめきながら、溢あふれ出る恥ずかしさに心を悶もだえさせるだけだ。

　そんなリッツの顔を今一度上げさせたのは、唐とう突とつに響ひびき渡った怒ど声せいだった。

「んだてめぇ!?　調子こいってっと、後こう悔かいすんぞ!!」

「その言葉そっくり返すぜ!!　覚かく悟ごはいいか!?　あぁ!?」

　夕ゆう餉げにはいささか早い時間とはいえ、それでもアルコ・ホールはいつものように人が多い。そんな人ひと垣がきの向こうからの声に、人々は一いつ斉せいに足を止め、そちらを見やった。

「あら、何かしら？」

「……喧けん嘩か、かな？」

　ピョンピョンとリッツがジャンプしてみるも、身長の問題から何も見えはしない。けれど、漏れ聞こえてくる声からすると、足を踏ふんだだの、臑すねを蹴っただのという割としょうもないことで始まった争いのようだ。二人を取り囲み、大通りの動きを封ふうじる血の気の多いリキュールの住民達がうずうずしているのをリッツは空気で感じた。

　この街の者達は、みんな三度の飯より喧嘩が好きなのだ。おいおいよせよせ……そんな言葉を口にしながらも心の中では殴なぐり合いに発展するのを期待しているに違ちがいない。

　──まったく、そんなどうでもいいことで道を塞ふさぐなんて……。

　まだ顔に赤みを残すリッツは呆あきれる気持ちでそんなことを思うものの……ピョンピョンと跳はね続けており、彼女にもしっかりとリキュールの血が流れているのをさりげなく証明していたが……当然、本人はそれに気付いていなかった。

　しかしながら着地した瞬間に、何かを踏んづけ、リッツはバランスを崩す。倒たおれ行く瞬間、自分は誰かの足を踏んでしまったのだと察した。

「きゃっ!!」

　おめかし用のワンピースで尻しり餅もちをつくことに〝しまった！〟とリッツは思ったものの……そうはならず、彼女の細い手を

誰かがガッシリとつかんで転てん倒とうを防いでくれる。

「おっと！　これは失礼したようだ。お嬢じょうちゃん、大丈夫かな？」

　細目の小こ柄がらな、出っ歯の男だった。彼は優しげな笑みでリッツを立たせると、ダンスでもするかのように繋つないだ手を上げ、リッツをクルリと一回転させて手を放した。

「うん、裾すそは汚よごれてないようだね、良かった良かった」

「す、すみません！　足踏んじゃって……！」

「なに、ゴツい男の足と比べれば気持ちいいぐらいさ」

　鼠ねずみのような顔の男は快活に笑うと、オリービーを保護者だと思ったのか、そちらに小さく頭を下げた。オリービーも満まん更ざらでもなさそうな顔でお辞じ儀ぎをする。

「そいじゃ、アッシはこれで」

　小男はついに殴り合いに発展した往来の喧嘩に背を向け、巧たくみに人ひと混ごみの中を泳ぐようにして去って行った。リッツは一度自分でもワンピースの裾を摘つまみ上げて汚れていないのを確かく認にんすると、俯きながら三つ編みの先を指先で弄いじった。

「オリービーさん……やっぱり、あたし……まだ子供みたいだよ」

「そんなことないわよ。仕方ないの、リキュールの人なら誰だって……あら、リッツちゃん、ポシェットの蓋ふた、開いてるわ」

「あ、本当だ。……おかしいな、お店でちゃんと閉めたはずなんだけど……ん？」

　リッツはポシェットの金具を両手で留めようと指を這わすのだが、その瞬間、何かがおかしいことに気が付いて固まった。

　何かがおかしい。今、明らかに……。リッツの目は無意識に辺りの地面を見み渡わたすのだが……石畳の上には何も落ちていない。そもそも自分は何を捜さがしているのか……。

「あれ……？　リッツちゃん、紙袋は……？」

　それだ。オリービーの声にようやく合点が行き、リッツは慌てて今一度地面を見るが落ちてはいない。──ない、なくなった。何故なぜ？　さっきまでしっかりと……。

「あ、オリービーさんの鞄かばんも、金具が外れて……」

「え？　あら、本当……」

　オリービーは蓋を閉めようとするのだが……先さき程ほどのリッツ同様に指を這はわせたところで固まる。そして二人の女性は互たがいの顔を見やる。

「「……あっ……」」

　二人は慌てて鞄を開き、中を覗く。……財さい布ふが、なくなっていた。

「あの鼠っぽい男、スリだ!!」

　リッツが声を上げた途と端たん、喧嘩に熱中していた辺りの人間が一斉に「え？」という顔で振ふり返り、全員が素す早ばやく己おのれの懐ふところや鞄に手を入れる。すると途端に「財布がねぇ!?」「俺のブランド品のナイフもだ!?」「嘘うそだろ、財布の中から金だけがなくなってる!?」「それは自分で使ったんだろうが!!」という声が次々に上がった。

「ひょっとして弟ライが言っていた……スリ師のシュウズゥジオさん……？」

「そんな……って、あっ、まずい!!」

　リッツは少し前まで赤かった顔を今度は一いつ瞬しゅんにして青ざめさせた。

　財布はもちろんだが、あの紙袋も盗とられたというのが──まずい。何よりまずい。

「犯人、鼠顔の男！　誰か捕つかまえて！　あたしの紙袋、お願い、取り返して!!」

　声を上げた時、人混みの隙すき間まからかすかに出っ歯の男がにこやかに振り返り、リッツへと会え釈しゃくしたのが偶ぐう然ぜん

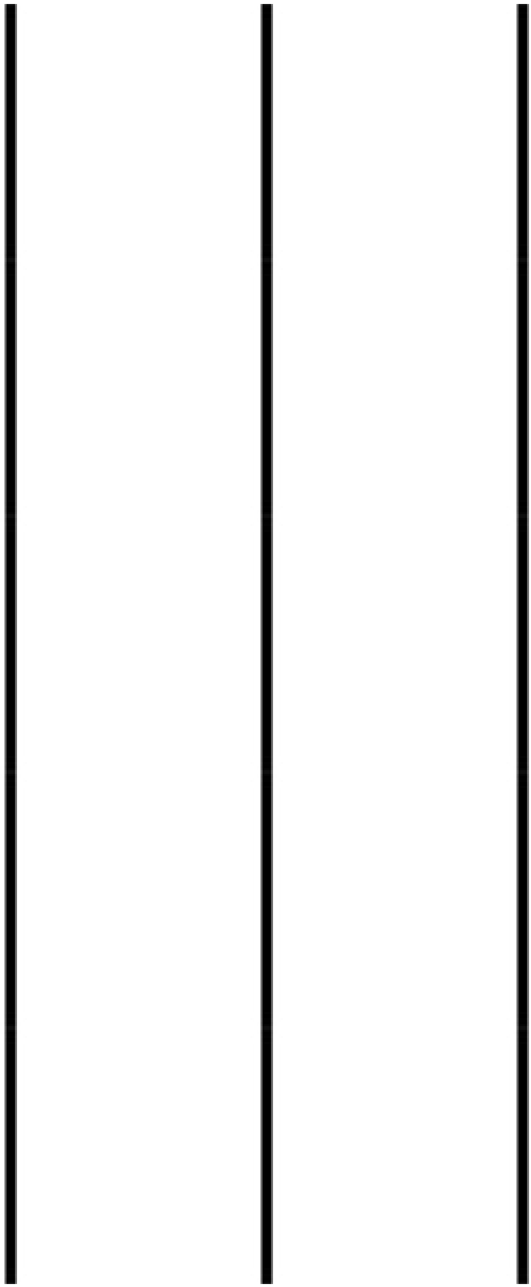
にも見えた。

　その手には、無数の財布とあの紙袋。

「あ、リッツちゃん!?」

　リッツは人混みを掻き分け、走り出した。

「あんにゃろぉ



――――――!!」

　何としてでも捕まえる。盗ぬすっ人となど気にくわないのはもちろんだ。けれど、悩なやんで悩んでようやく、勇気を振り絞しぼって、頑がん張ばって、思い切って、そしてオリービーに相談しながらついに買ったのだ。そんな大切なものを盗まれるわけにはいかなかった。

　財布が欲ほしいならくれてやってもいい。だから、あれだけは……絶対に取り返す。リッツは必死の形相で、そう思った。

「クソ盗っ人、返せぇ!!　待てこらぁあああぁあああぁあぁああぁぁぁあぁあぁああぁ!!」

2

「よぅ、モルト。……何だよ、酷い格好で随ずい分ぶんいい顔しているな」

　アルコ・ホールから外れた街の一角で、偶然にもモルトはまたライと出くわし、いきなりそんなことを言われた。

　モルトは自分の体を見下ろしつつ、髪かみを掻き上げる。

汗あせだくで、髪は木くずだらけで、服は泥どろだらけ。酷い格好なのは間ま違ちがいなかった。

「一日に三件仕事をこなしたんだ。勤勉だろ」

腕うでを怪け我がした大工職人の代わりに材木をひたすら切りまくり、逃にげた九官鳥を追い掛かけて街中を奔ほん走そうし、最後には街外れの畑で農作業中に落としてしまった結婚指輪を捜すために地面に這い蹲つくばっていたのだ。

ここしばらくの自分を振り返ってみても、なかなかの仕事をこなした気がしていた。

「それでやり切った顔してるのか。……そうか、羨うらやましいな」

「ライの方は逆に収しゆう穫かく無しって感じか？」

「覆ふく面めんしてる奴やつを見つけたら問答無用で片かたっ端ぱしからとっ捕まえてたから、その内引っかかるかと思ったけど……ダメだったよ」

「……相変わらず、やる時はえげつなく動くな、ライ」

「焚たき付けたのは、お前だぜ、モルト。とりあえず夜まで粘ねばってみるさ。モルトは？」

「一いつ旦たん、大浴場に行ってサッパリしてから帰るよ」

遅おそくなるなよ、とライはモルトの肩かたを叩たたくと、二人並んでアルコ・ホールへと向かった。

夕暮れ空の下、巨きょ大だいな得物を持つ二人が並ぶと歩きにくい程にアルコ・ホールは人で混み合っていた。そこをライはゆっくりと、辺りに視線を這わせながら歩いて行くので、モルトもそれに合わせる。五番街にある大浴場に着くまでの間ぐらいなら、付き合ってもいい。そんなことを考えていると、ふと、どこかから聞き慣れた声が聞こえてきた。

「クソ盗っ人、返せぇ!!　待てこらぁああぁああぁあぁああぁぁぁあぁあぁああぁ!!」

　その声に、そして盗っ人という言葉に、モルトとライは互いの顔を見やった。

　まさか。そう互いに声を出そうとした時、二人の間を小男が〝スルリ〟と抜けていこうとした。

　ライは素早く後ろに飛び退のくものの、モルトは立ったまま、空いていた腕を動かす。モルトの懐から引き抜かれようとしていた小男の手首をガッチリとつかむ。

「おっと⁉」

　鼠のような顔をした小男が驚おどろきの声を上げつつも、モルトから飛び退いた。やられたのをモルトは悟さとった。モルトの手にあったのは、幅はば広びろの腕うで輪わである。万が一手首をつかまれても逃げられるようにするアイテムだ。小男の手首はモルトから離はなれ、そして今日の稼かせぎが丸ごと収まっている財布もまた――やられた。

「にぃさん、随分いい目と腕うで捌さばきだ。アッシの技わざを押さえるとはタダもんじゃないね」

「昔取った杵きね柄づかってやつさ……クソが！」

「貴様、シュウズゥジオか⁉」

　ライの声に、小男は満面の笑えみで頷うなずいた。

「如何いかにも！」

　覆面を片っ端から捕まえていると知って、あえて逆に素顔で仕事ゴトに及およんでいたのか。いや、今は感心している場合ではない。今、シュウズゥジオが手にしているのは丸一日分の稼ぎ。払はらえていなかった家賃はもちろん……もし、万が一……リッツが自分を祝ってくれるのなら、お礼に食事に連れて行ってやれるぐらいの金額が入った財布である。

「あたしの、あたしの……返せえぇええぇって、あ、モルト⁉」

　リッツが息を切らせ、人混みの中を抜ぬけてくる。それを追い掛け、オリービーもまた大きな胸をたゆんたゆんと揺ゆらして、駆かけつける。

「リッツちゃん、待って、危ないわ！　あ、モルトさん、ライ！」

「姉ちゃん……まさかッ、やられたのかッ⁉」

「えぇ、お財布が。でもそれより、折角のリッツちゃんの――」

「あ、ダメ！　お願い、言わないで！」

　リッツが声を上げ、そして困ったような、恥はずかしいような顔をしてモルトを見る。

「お嬢ちゃん、世間はね、厳しいものなのだよ！」

　シュウズヅゥジオが笑い声混じりに言うと、平屋の上へと飛び上がり、リッツの荷物らしい紙かみ袋ぶくろを手にして揺らしてみせる。

「アッシが盗むのは金銭だけじゃない。人の大切なものを奪うばう時、えも言われぬ快感があるのさ。あれだけ大事にしていたんだ、実にそそるね。お嬢ちゃんのコレはいただくよ」

「――ダメぇ‼」

　リッツがワンピースの裾を両手でつかみながら、ありったけの声を張り上げる。

　それを聞けば、どれだけ彼女がそれを大事だとしているのか、誰だれにだってわかる。

　辺りから「俺のもやられてる⁉」「嘘だろ、指輪がねぇ⁉」そんな次々に被ひ害がい者しゃ達の声が上がる中、シュウズヅゥジオは軽く手を振って一本隣となりの路地へと飛び下りた。

　その瞬しゅん間かんのリッツの悲痛な顔を、モルトは見ていられなかった。

　いや、見ていなかった。

　見るべきは……友の顔。ライ。かつての相棒。

　そしてまた、彼もモルトを見ていた。

「ライ‼」「モルト‼」

互いの名を叫さけぶと共に、二人で石いし畳だたみを蹴ける。シュウズゥジオのように人混みを避さける技を持たぬ二人は、通りの人々を構わず吹ふき飛ばし、駆ける。そして、シュウズゥジオが飛び下りた平屋の壁かべに向け、ライが長なが柄え刀とうを振るう。

爆ばく音おんにも似た衝しよう撃げき波はと共に、壁をぶち抜く。

粉ふん塵じんと瓦が礫れきが飛びしきる中へライの脇わきを抜けてモルトが長柄刀を振りかぶって突とつ進しん。視界を覆おおうそれらの隅すみに呆あつ気けに取られる夫ふう婦ふの顔があったが、今は無視。そして、彼らのマイホームのもう一方の壁を、内側からモルトがぶち抜いた。

また噴ふき上がる粉塵と瓦礫。今度はモルトの脇をライが駆け抜けていき、その背を追うようにモルトもまた、走る。

瓦礫を体で弾はじき、粉塵の向こうへと抜けてみれば……シュウズゥジオが呆気に取られて立ち止まっていた。

「な、何やってんだ……こいつら……!?」

それは、かつてコンビを組んでいた時に二人が編み出した、禁じられた秘策。

道がなければ造ればいい、とする若さと強大な長柄刀があって初めてできる極きわめて強ごう引いんな力ちから業わざである。

家の壁をぶっ壊こわして〝近道ショートカット〟を造るのだ。

事件解決の有う無むに関係なく、被害総額がとんでもないことになるので当時の自警団団長━ライの父に全力で止められたが、重い長柄刀を担かついで街を駆ける上で、これを上回る走法は、現在もなお確かく認にんされていない。

久しぶりのそれ。止められていた手段。……しかしモルトはライなら最速のこの手段を選ぶだろうと信じたし、彼は彼でモルトが〝それを選せん択たくする〟と信じたことだろう。

だから、これは当然。だから、二枚の壁をぶち抜いてなお、声一つ発することもなくモルトとライは長柄刀を構え、シュウズゥジオ

へとひた駆けたのだった。

　呆気に取られていたシュウズヮジオも、迫せまり来る二人の気き迫はくを受けてようやく逃げようと背を向けるのだが……その頃ころには、すでにモルトとライは彼を間合いに収めていた。

　モルトの長柄刀が風を斬きる。横よこ殴なぐりの一撃。しかし、刃はが起こす風圧に押された枯かれ葉のように、シュウズヮジオが身を捩ねじりつつ巧たくみにかわす。

　そこにライが頭上より斬りかかったが、こちらも舞まうようにしてかわす。

　続け様に斬ざん撃げきを放とうとするのだが……長柄刀を握にぎる手に力を込こめた瞬間にモルトにはわかった。──逃げられる、と。案の定、二撃目が到とう達たつする前に、シュウズヮジオは間合いから外れ、斬撃は空気を裂さくに終わる。この男、かわしながらもなお、加速したのだ。元盗とう賊ぞくというだけあってそこいらのスリとはわけが違ちがう。

「そんなデカ物で何て鋭するどい斬撃を……！　初撃から殺しに来る覚かく悟ごも見事!!　だが!!」

　空中に飛び跳はねたシュウズヮジオが腕を振りかぶりながら身を捻ひねる。そして、全身を使って何かを投げてきた。

　夕日を照り返す無数のそれは……硬貨コインだ。

　武器でも何でもない、いつだって身近に──モルト以外の、だが──あるそれは……二人の目前に均等に拡ひろがり、猛もう烈れつな勢いで飛来した。

　剣けんなら受けられる。矢なら払えもする。しかし、これは……どうしようもない。

　ライ共々モルトは目を見開くが、その刹せつ那なに判断する。防げない、かわせない。ならば、今、どうするか。何が正しい？　恐おそらくうまいやり方というのはどこかしらにあるのかもしれない。だが、今のモルトには一つしか思いつかなかった。

　名を呼ぶのも間に合うまい。だから、モルトは隣を走るライの服をつかんで後ろに引っ張り、同時に自分はその反動を利用して前

へ。長柄刀を振ふるって一部の硬貨を弾き飛ばしながら、残りの硬貨をその全身で受け止めた。

「モルトッ!?」

「行け、ライッ!!」

　無数の金属片へんが全身を叩く。硬貨一枚一枚の威い力りよくはそこそこ。普ふ段だんならば顔をしかめるだけで済むだろう。だが、走っているところに真っ正面から、無数に、全身に……そうなると、これはたまらない。

　モルトがバランスを崩くずして転てん倒とうする中、その背にライの足が乗る。グッと重み。モルトの背を踏ふみ台だいとして、アルコ・ホールの空へライが飛ひ翔しようする。

　夕日の光の中、空中で長柄刀を振りかぶると共に、ライは長柄刀の石いし突づきへ握り位置を変え、片手で、全身を伸のばしての最長間合いリーチでの斬撃を放つ。

　さすがのそれにはシュウズゥジオも歯を喰くい縛しばり、自ら地面を転がるようにして何とかかわそうとする。

　長柄刀の切っ先がシュウズゥジオの体に、入る。そして抜け、地面をその衝しよう撃げきで抉えぐった。

　弾け飛ぶ石畳の破片と土、そして大量の貴金属や硬貨。だが……血も、シュウズゥジオの悲鳴もない。──かわされた。上着の一部を斬り裂いただけだ。

「今のは際きわどかった!!　剣風だけで服を裂くとは!!」

　地面を転がりながら、その勢いを殺さず活いかして再び立ち上がったシュウズゥジオが走り出す。しかし、ライは空中からの一撃、しかも握り位置を長柄刀の重心からかけ離れたところにしたことで、すぐに体勢を立て直せず、追い掛かけられない。

　逃にげられる。モルトのそれは確信だ。だが、諦あきらめられない。ライの一撃で一部の窃せつ盗とう品は辺りに飛び散ったが、リッツの紙袋はまだシュウズゥジオの脇に挟はさまっているのだ。

　何か、何かないのか。誰か、誰かいないのか。彼を今、捕つかま

えられる……そんな……。

　モルトは歯を喰い縛りながら、後ろ走りで距きよ離りを取るシュウズゥジオを見る。

　彼の背後には……地平にもう少しで触ふれそうな夕日。

「君らはね、戦せん闘とうに特化し過ぎだ！　逃げるのも追い掛けるのもウェイトがあり過ぎるんだよ！　それではダメさ！」

　シュウズゥジオの言葉に、ライは舌打ちをし、そしてモルトは地面に手を突つきながら……笑みを作った。

「……いいんだよ、それで。逃げもしなけりゃ、追い掛けもしねぇさ。俺は、もう!!」

　この夕日の位置からするに、今はあの時間帯。

　運が良ければ、使えるはずだ。

　届けば、いける。

　使えるはずだ。届くはずだ。そして、応えるはずだ。

「さらば、デカ物を握りし少年と青年よ！　普段味わえぬスリルだった！」

「いいや違うぞ、シュウズゥジオ。本当のスリルはまだ……これからだ!!」

　モルトは信じた。日々、何でも屋として働き、歩き回って知り尽つくした街と人。

　だからこそ、使える、と。だから届く、と。だから……応こたえてくれる、と。

　モルトは口に指を咥くわえ、甲かん高だかい音を鳴らす。肺の中の空気全すべてを使っての、指笛。

ピ

ッ!!

　逃げ行くシュウズゥジオ、そしてライもまた困こん惑わくする目で、モルトを見る。

　そんな彼らの目前で、モルトは肺に空気を入れ直し、叫んだ。

「ＧＯ!!　ピーちゃん、ＧＯ!!」

　フギュ

!!

その醜みにくい豚ぶたのような鳴き声と共に、黄昏たそがれの空に不格好なシルエットが浮かび上がる。それはまさに、豚。いや、タコ糸で縛られたボンレスハムという表現が近いのかもしれない。

短足で、樽たる腹ばらで、全身陰いん毛もう同然の無む駄だ毛げに包まれし中年男。

首には荒あら縄なわを巻き付けているも、それとは別に裸ら体たいを縛り上げる黒くろ革かわの拘こう束そく具。蝶ちようのような覆面マスクで顔を隠かくし、頭はギトギトの脂あぶらで七三分けに

されたその男こそ……かつての漢おとこ祭まつりでモルトや安あん美び亭てい店主グレーン、豪ごう腕わんのパン職人ピンガらと共にリキュールの歴史に名を刻んだ者──ピーちゃんだ。

　その勇姿が、今、まさにシュウズゥジオの行く先に空より飛来する。

「な、なんだ、こいつは!?」

「散歩途と中ちゆうのピーちゃんだ!!　俺のお得意様さ!!」

　飼い主であるリーフィが忙いそがしい時、ピーちゃんの代理散歩の仕事は実質モルトが独どく占せん的に手にしていた。漢祭りで気心が知れたというのもあるが、モルト以外に彼──というか彼の姿を御ぎよせる者がいないのだ。



散歩で人とペットを繋つなぐのは縄なわではない。──絆きずなだ。ペットを飼ったことのない人間には決して伝わらぬ理論だろうが、紛まぎれもない真実であるのをモルトは確信していた。

……たとえ、ペットがどこぞの変態オッサンであっても、それは変わらない。

だからこそ、モルトは勝負に出られたのだ。この時間帯、この場所は……彼の散歩コース。近くにいる可能性は高かった。だから、呼べば必ず応えてくれる、と信じられた。

「行け、ピーちゃん!!　その男を逃がすな!!」

「フギュッ!!」

口に咥えたボールギャグの隙すき間まから涎よだれを吹き出しつつ応じると、ピーちゃんはシュウズヅゥジオに肉にく薄はくする。先のモルトが喰らったのと同様に、シュウズヅゥジオは硬貨を投げつけてこれを退けようとするのだが……ピーちゃんに常識など通じない。

硬貨の多くがピーちゃんの全身に突き刺さるようにして喰い込み、彼は悲痛な、ともすると快感に喘あえいでいるかのような声を上げる。

だが、次の瞬間、ピーちゃんは全身に力を入れると共に覇は気きを発した。

「フッ………………ギュァアァアアァアアァアアアァアアアァァァアッ!!」

大気が震ふるえ、ぬるりとした脂っぽい汗が振りまかれると共に、その脂し肪ぼうだらけな体に喰い込んでいた硬貨が投げられた勢いそのままにシュウズヅゥジオへと跳ね返される。

「マジかコイツ──ぐわぁあぁ!!」

シュウズヅゥジオが硬貨を喰らって、転倒。そこにピーちゃんが飛びかかった。

シュウズヅゥジオには体術の心得があるのか、膝ひざ立だちで素す

早ばやく立つと共に迫り来たピーちゃんの回し蹴げりを腕うでで受けるのだが……ピーちゃんが全身にまとったぬるりとした脂のせいで、蹴りは〝ぬるりんちょっ〟という具合に受けた腕を滑すべり、シュウズゥジオの脇わき腹ばらに強きよう烈れつな一撃が――。

「何と!?　ぐほぁ!!」

　――入る。小こ柄がらな男が地面の上を走るようにしてぶっ飛び、通りに面していた家の壁かべに激しく叩たたき付けられ、粉ふん塵じんと呻うめきが上がった。

「どうだ、これがこのリキュールが誇ほこる変態……ピーちゃんだ!!」

「フギュッ!!」

　モルトの声に合わせ、ピーちゃんが大おお股またを開きつつもかわいらしく腰こしに手を当て、誇らしげに決めポーズを取った。

「モルト……お前、オレの知らない間に、なかなかの召しよう喚かん獣じゆうを手に入れてたんだな」

　ライが驚きよう愕がくの目で見てきたが、そこに軽けい蔑べつのそれが混じっていなかったのは、モルトにとって救いだった。

「へっ……何でも屋の仕事を舐なめるなってんだ」

　ピーちゃんの散歩は精神面の苦痛を捨てればかなり割のいい仕事であり、ここしばらくのモルトにとって安定した飯の種になりつつあった。

「なら次はオレの番だな。……自警団員集合!!　容疑者を確保する、一帯を包囲しろ!!」

　ライが大だい音おん声じようを上げる。無論、ピーちゃんのような即そく応おう性は皆かい無むだが、その声に応じて、または、そんな声があったと住民達が自警団員を探して伝えてくれ、一人、また一人と団員達が往来に走って現れる。

「……どうやらここまでか。さすがにこの状じよう況きようからの逆転のシナリオは思いつかないな」

　シュウズゥジオは苦笑いで脇腹を押さえながら膝を突いていた。少なくとも肋あばらが数本は逝いっているのだろう。ピーちゃんの蹴りは地味にそれぐらいの威力がある。だが……。

「ライ、油断するな。……この手の男がこの手の台詞せりふを口にするってのは相手への賛美と同時に、奥の手を出す時だって相場が決まってる」

　モルトの言葉に、ライが頷うなずいた。

「わかってるさ。油断はしない。……だから、人を集めたのさ」

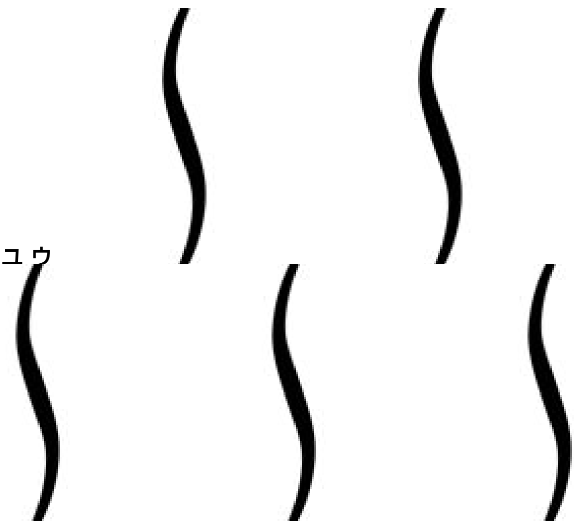
　ライの声に応じて現れた団員は十数人に及および、シュウズゥジオ、ピーちゃん、そしてモルトとライを囲むようにして配置が完かん了りようする。

　そして、ライの「押さえろ」の声を切っ掛けとして、全員が息を合わせたように一いつ斉せいに……ピーちゃんを押さえに行った。

「フギュギュッ!?」

　─捕まえろ、変態だ!!　─この変質者め、露ろ出しゆつだけでは飽あき足らなくなったか!!　─前々から犯罪に半歩はみ出てる格好しやがって!!　─というか普段からちょくちょくいろいろはみ出しやがってからに!!　─変態め！　─たいへんなへんたいめ!!

「フギュゥ



!?」

　団員達が猛もう然ぜんと襲おそいかかる中、ピーちゃんが豚のような悲鳴を上げながら逃げ惑まどうのだが、さすがに人数がいるので捕ほ縛ばく用の荒縄を一本、また一本と取り付けられ、ついにはその全身をグルグル巻きにされて、路上を転がった。

　モルトは思う。━あぁ、当然の結果ってやつだな、と。

「あらあら、ピーちゃんったら、みんなに遊んでもらって。あんなにはしゃいで……嬉うれしいわねぇ、ピーちゃん」

　ある意味当然だったような気がしないでもない事の成り行きに、呆あつ気けに取られていたライとモルトの脇わきに、いつの間にかピーちゃんの飼い主であるリーフィがニコニコ笑え顔がおで立っていた。

「違ちがう！　お前達、捕まえるのはそっちじゃない、スリのシュウズヅゥジオの方で……あぁ、クソ！　モルト、行くぞ、逃げられる!!」

　シュウズヅゥジオがピーちゃんを嬲なぶる自警団員達の間から抜ぬけ出て、一目散に走り去って行く。ライがその背を追い、モルトもまた、異様な疲ひ労ろう感かんと共に石いし畳だたみに靴くつ音おとを響ひびかせた。

「何だかわからんが逃げ切れそうだ！　ここまでアッシを手こずらせたのは君達が初めてだ！　手に入れた品物の半分以上を損失した

のもな!!」

　シュウズヅゥジオは逃げられると確信したのか、また後ろ走りとなって追い掛けるライとモルトを笑った。

　モルトにもわかった。ライが近きん隣りんの自警団員を集めてしまった結果、逆にそこを抜け出してしまえば、もう遮さえぎる人員はいない。彼は逃げ切れると判断したのだ。

　足の速さではライとモルトには分が悪い。かといって先行く場所に仲間もいない。……逃げ切られるかもしれない。その予感がモルトに声を上げさせる。

「だったらついでにその脇に抱かかえているリッツの紙かみ袋ぶくろだけでも返せよ!!」

　シュウズヅゥジオが民家の屋根の上へと飛び上がる。

「ふはははははは！　あの少女の品がよっぽど大事なのだね、いいね、尚なお更さら手放したくはなくなった！　アッシが求めるのは金銭的価値ではない、人が大切だ、大事だとするその気持ちの入った品を得ることこそが何よりの快感で──ん!?」

　シュウズヅゥジオの体を数本の矢が襲う。彼は空中で踊おどるようにして身をくねらせ、かろうじて全てをかわすものの、屋根の上を転がった。

「矢だと!?　ここの自警団は飛び道具は使わないと聞いて……なに……何だ、これは？」

　シュウズヅゥジオが膝立ちのまま、どこかへと視線を向けたまま固まっていた。追い掛かけていたモルトとライは互たがいに顔を見合わせ、彼の足あし下もとの民家をぶっ壊こわして地面に叩き付けてやろうかとも思ったが、何故なぜ動きを止めたのかがわからなかったので、あえて今回は二人共に民家の屋根の上へと壁の配管を蹴りつけるようにしてのぼった。

　シュウズヅゥジオを左右から挟はさむようにして屋根へ上ると、彼を警けい戒かいしつつ……その視線の先を見やる。

　そして、モルトとライは、驚愕するシュウズヅゥジオと違い……じわりと滲にじむようにその顔に笑みを浮かべたのだった。

「……忘れてたな、ここがリキュールだってことを」

　シュウズヅゥジオ、ライ、そしてモルトの視線の先にあるのは沈しずむ太陽と夕焼け空、赤く照らされる家々の屋根……そして、その屋根の上に無数に立ち並ぶシルエットだった。

　先のピーちゃんとは違い、彼らは全員が家々の屋根に足を着け、手には長ちよう刀とうから短たん剣けん、弓矢に金かな槌づち、そして捕縛用と思おぼしき荒縄……。

　その数、十数人。

「話は聞いたよ。……アンタ、リッツちゃんから大切なもの、盗ぬすんだんだって？」

　シルエットの集団を率いるように声を張ったシルエットはやや小さめ。その両手にはワインの酒さか瓶びん。

「……こんな狭せまい街だ、噂うわさってのはあっという間だよ。それが、リッツちゃんの悲痛な叫さけびだってんなら、一いつ瞬しゆんでも釣つりが来るってもんさ。そしてね……？」

　その小さなシルエットは──ガーナだ。

「な、なんだ、お前達は……？」

　シュウズヅゥジオは突ついた膝を上げることなく、声を漏もらした。

　状況が理解できないのだろう。自警団は凌しのいだのに、何故武力を有した者達が今、自分を取り囲んでいるのか……それが、わからないのだ。

「……この街の人間はね、女の子を泣かす奴やつが大だい嫌きらいなのさ」

　燃えるように赤い瞳ひとみに赤い髪かみ。今は、その肌はださえも赤くする彼女は、まるで戦士にも似た顔をしていた。

　──幼い少女の精せい一いつ杯ぱいの気持ちを踏ふみにじるなど、男の風上にもおけねぇ。──小こ銭ぜになら見み逃のがそう。財さい布ふならぶん殴なぐって済ませる。だが、金銭以上の大事な品を盗

む奴には覚かく悟ごを強しいる。それが、オレだ。━━桜もねぇ今の季節、余興がねぇのは気になってたしな。丁度いいぜ。━━あぁ処しょ刑けい台だい公園まで拉ら致ちって嬲り殺しコースだ。━━花のない桜を鮮せん血けつで赤くするのもいいな。━━ほっほっほっほっ、来年の桜は一層赤くなるのぅ。

　シルエット達が口々にそんな言葉を放ち、シュウズヮジオに冷ひや汗あせをかかせていく。

　モルトもライも、わかった。

　恐おそらく彼らはガーナと共に処刑台公園で飲み明かしていた連中なのだ。

　そして、シュウズヮジオがリッツの品を盗んだという噂を聞きつけ、ガーナの口からそれがどんなものなのかを聞かされ……あとは義ぎ憤ふんに駆られて我も我もと武器を手に立ち上がったのだろう。

　ある意味において彼らはリッツの、そして、呑のみ仲間でもあるモルトのために立ち上がってくれたのだ。だからこそ━━。

「……いい連中だよ、本当」

　━━少し、照れてしまうのを、モルトは止められなかった。

　顔が、熱い。今が黄昏たそがれ時どきで本当に良かった、とモルトは赤い空を見ながら思った。

　でもきっと、ライにはバレている。彼から感じる視線に……そんな気がした。

「さぁお前達、リッツの品に気をつけて……やっちまいな!!」

　酔よっ払ぱらい十数人がもはやタダの一いつ般ぱん人とは思えぬほど空高くへ跳とび上がり、シュウズヮジオにとって地じ獄ごくとなる最後の戦いが始まったのだった。

　どうやら来年の桜はこれまで通りの色で済むようだ。

　処刑台公園にまで拉致った時には「こいつ、足からゆっくりとすり下ろそうぜ！」という聞くにおぞましい提案があったりもしたが、ピーちゃんが残念ながら無罪であることを知った自警団が押っ取り刀で駆かけつけ、牢ろうへと連れて行ってくれたので、大地に染しみこんだのは、「トドメは刺させなかったが、やってやったぜ!!」という酔っ払い特有の妙みようなハイテンションな声だけであった。

「本来なら調書を取ってからの返へん却きやくになるんだが……まぁ、姉ちゃんの財布とコレはいいかと思って、先に預かっておいた」

　そう言って、ライはかなりボロボロになってしまった紙袋をモルトへと差し出した。

　それは無論のこと、リッツが今日、おめかししてまで買いに行った品である。

「あー、でも、その……この場合、どうなんだ？　俺が受け取っていいもんなのかな」

　そこでライも「あー……」と困った顔をする。その彼の背に、赤い顔のガーナが抱だきつくように飛び付いて、ライの手から紙袋を抜き取った。

「バカだね、こういうのはアンタから渡わたしちゃダメなのさ。今、持ち主を呼びに行かせてるから……モルト、アンタは処刑台の上に行きな」

「台の上に？　何で？」

　いいからいいから、と、モルトは葉だけの桜に囲まれた芝生しばふの広場、その中央に立てられている処刑台の上へと背を押されて登らされていく。

　━よっ！　━いいねぇ。━これを見るために今日があったようなもんだ！　と、そんな声が辺りから聞こえてくる。

　ご丁てい寧ねいに赤いペンキを塗ぬられている処刑台、それを取り囲むのは、先の十数人に及ぶガーナの呑み仲間に加え、騒さわぎを聞きつけてやって来たリキュールの住民達が数十人。

　もはやちょっとした祭りの見世物でも始まるかのようだった。

　……実際、その類たぐいがこれから行われるのだろうな、というのは、何となくモルトにもわかった。ただ、それが嫌いやだという気持ちはない。

　リッツは怒おこるかもしれないが、モルトからするとちょっと恥はずかしいと、そう思う程度だった。

　そうこうしていると、太陽の半分が沈んだ頃ころになって、広場に酔っ払いに連れられて、困こん惑わく気味のリッツが現れた。

「……モルト？　それに、この人達、何……？　え、ちょっと、え？」

　酔っ払い達に背を押され、リッツは人ひと混ごみの中へ。しかし彼女が一歩そこへ踏み込むと、人ひと垣がきは綺き麗れいに左右に分かれ、処刑台への道が生まれる。唯ゆい一いつ立ち塞ふさがったのは、先さき程ほどガーナに飛び付かれ、彼女の胸の柔やわらかみを首筋辺りに感じてしまい、固まってしまったライぐらいなものである。

　困惑するリッツはおろおろしつつも、少し緊きん張ちようした面おも持もちで流されるがままにライの脇を抜けてモルトの待つ処刑台の上へ。

　ガーナもまた、処刑台の上に登る。

「さぁさぁ皆みなさんご注目！　ここにいるアルコ・ホール三番街の何でも屋、モルト。巷ちまたを騒がせていたシュウズゥジオなる凄すご腕うでのスリを、見事仲間達と共に捕つかまえた！」

　ガーナの演説に、辺りから歓かん声せいが上がる。

「それもこれも全すべては、この少女、リッツの品物を盗まれたがため！　それを取り返すがため！　……こんな男を呑み仲間に持てていることを、アタシは誇ほこりに思う！」

──俺もさ！　そんな声が上がる中、モルトは口を一文字にし、顔が照れて笑ってしまわないよう足の指に力を入れると共に、歯で頬ほおの肉をちょっと噛かむ。

「ってなわけで、リッツ、はいこれ、盗まれたの。……ちょっと取り押さえるのに袋がボロっちゃったけど、中身は多分大だい丈じょう夫ぶだと思う。確かく認にんする？」

　ガーナは後ろ手に隠かくしていた紙袋をリッツへと手て渡わたした。

　ハッとした顔でリッツは素す早ばやく袋を手に取ると、モルトに背を向け、誰だれからも見えないようにして中を覗のぞき込み、安あん堵どの息を漏らした。

「良かっ……あ、ガーナさん、あの……これ、だ、誰も見ては……？」

「大丈夫、誰も見ちゃいないよ」

　ガーナがウィンクと共に、囁ささやく。そして咳せき払ばらいをすると、再び観衆に向かって声を張る。

「この勇ゆう敢かんなる何でも屋に拍はく手しゆを！　そして……リッツ、いろいろあって唐とう突とつな感じになっちゃったけど……さぁ、記念のその品を、モルトに！」

　おぉおぉおぉぉぉおぉ!!　という野太い大歓声と拍手が巻き起こる中、リッツが目を見開きおろおろとし始める。

「え？　何で、記念品だって、え？　何で、何で、何でモル……」

　まぁそりゃテンパるわな。モルトは夕日を見つめながら、そんなことを思う。

　恐らくリッツからすると、どうせガサツな男であるモルトはそういう記念日だということに気付いていない……だからこその、サプライズ。

　そんなことを考えていたに違ちがいない。それが衆しゆう人じん環かん視しの中の贈ぞう呈てい式である。

戸と惑まどうな、という方が無理な話である。

「いいからいいから。とりあえずリッツ、モルトに渡しちゃいなよ。そういう流れだから」

ガーナが満面の笑みで囁くと、戸惑うリッツの目がモルトを見る。

「何で、モルトに……？　わけわかんない……」

夕日とは無関係に赤らめた頬、緊張というより怯おびえのようにも見える表情で、リッツは両手に持った紙かみ袋ぶくろをモルトへと差し出すのだった。

おめかしして、そんな表情。手には自分のために用意してくれた記念日の品……。

モルトは基本いつでも握にぎっている長なが柄え刀とうを足あし下もとに置いてから、万ばん感かんの思いで紙袋に両手を伸のばす。

「ありがとう、リッツ。嬉うれしいよ。本当に……」

「だ、だから、何で、こうなってるの……？」

「いろいろあったんだ、本当、いろいろ。後でゆっくり話すよ」

この一〇年、本当にいろいろあったような気がする。

それと同時に、過ぎ去ってしまえばあっという間だった気もする。

けれど、積み重ねてきた時間は、絆きずなとしてはっきりと感じることができる。

モルトのために声を上げ、拍手してくれる呑み仲間達はもちろん、ライやガーナ、そして誰よりもリッツのような、そんな親しき相手との……時なくしては築けぬ、絆。

モルトは意外と軽い紙袋をリッツからしっかりと受け取る。

──大歓声。

　モルトは少し恥ずかしがりながらも、あえてみんなに笑みを向けた。すると―らしくねぇぞ！　―こいつ照れてやがるぜ！　と、声が上がって、人々の笑いを誘さそった。

「……本当、何、何なの……これ……」

　リッツが未いまだ状じよう況きようを呑み込めずにいるようだが、そんな姿もまた、何だかかわいらしくて、人々を、そしてモルトを笑顔にする。

「そうだ、リッツ、開けちゃっていいか？」

「ふぇぇぇえぇえぇッ!?」

　パチンと、ガーナが指を鳴らす。

「いいね、アタシも気になってたんだよ。みんなもそうだね!?」

　また、大歓声。リッツが目を見開き、小刻みに震ふるえながら首を振ふる。

「ちょっ！　ダメ、絶対ダメ!!　開けちゃダメだって!!　っていうか、返して!!」

　モルトに飛びかかろうとするリッツを、ガーナが押さえた。

「おっ？　ひょっとして、手紙とか入ってたりするのかなぁ？……モルト、さっさと開けちまいな！　そうしたら残ってる酒全部で、全員で、祝しゆく杯はいだ！」

　フゥ――ッ！　という、声が上がる中、モルトはゆっくりと紙袋の口に手をかけた。

「ダメ！　絶対ダメ!!　やめて、モルト、ダメ、見ないで!!」

「リッツ、恥ずかしがるなって。元々モルトのため……そうなんでしょ？　ん？」

「ち、違う!!　全然違う、絶対違う、違うから!!」

「照れちゃってもぅ、かわいいなぁ。今日のモルトの記念のための品、みんなにも見せてあげよ、ね？　ほら、うりうり」

　ガーナがリッツを押さえながらも頬ずりする中、モルトは観衆に見えるようにして紙袋を開け、中にそっと手を差し入れる。

　そんな時、ふと耳に自分の名を呼ぶ声が滑すべり込んだ。

「モルトさん、ダメです！」

　それは、広場に慌あわてて駆け込んで来るオリービーである。リッツと一いつ緒しよに買い物に行ってくれた彼女……何故なぜ、止めるのだろう？　モルトはその疑問のために、紙袋に差し入れていた手の動きを止める。

　その隙すきをついて、ガーナの腕うでからリッツが抜ぬけ出て、紙袋をつかんだ。

「ダメ!!」

「え？　いや、だって……記念の……」

「モルトに関係ないから!!　全然!!」

「いや、あの、こう言っちゃ何だけど……実は、気付いてたんだよ、リッツ。今日って、俺があのアパートに来て七年、そして街に来て丁度一〇年。……ありがとう、リッツ。本当、俺、嬉しいよ」

　モルトは爽さわやかに微笑ほほえんでみせるのだが、リッツの火を噴ふきそうな程に赤い顔に浮うかぶ必死な形相は変わらない。

　ガーナが顔をほころばせ、処しよ刑けい台だいの上で踊おどるようにステップを踏ふんだ。

「聞こえたかぃ、みんな！　実は今日！　モルトがこの街に来て丁度一〇年、アタシらと仲間になって一〇年目、それは同時に、このリッツの住むアパートに引っ越こしてからは丁度七年目の記念日だった！　だからこそ、リッツはおめかししてプレゼントを買ったんだ！　そぅ、全てはこのモルトのために!!」

　観衆から今一度全力の━フゥ━━━━ッ！　の甲かん高だかい声が上がる。

　指揮者コンダクターのように、ガーナが両手を下から上へと震わせながら上げて行き、大歓声をコントロールする。

「みんな、今一度二人に、そして記念の今日という日に盛せい大だいな拍手を!!」

　場の盛り上がりは最高潮、そして……リッツが紙袋を引っ張る力もまた、最高潮に達した、まさに……その時だった。

「それ、来週だし!!」

　──え？　モルトやガーナはもちろん、辺りにいた数十人がそのリッツの言葉にピタリと動きを止め、短くも同じ言葉を漏もらした。

　唯ゆい一いつ違う言葉を放ったのは、処刑台の上に駆かけ寄りつつあったオリービーだ。

「違うんです！　その紙袋はモルトさんへのプレゼントじゃなくて！　それは──!!」

　ビリッ。

　拍ひよう子し抜ぬけするような、軽かろやかな音と共にモルトが持ち、そしてリッツが引っ張っていた紙袋が、盛大に破れた。

　リッツが目玉を落としそうな程に瞼まぶたを開き、モルトもまた……その空中へと舞まい上がったそれらに目を見開く。

「それは──!!」

　それは、まるで、天使の羽のように優ゆう雅がに舞まっていた。

　それは、夕日の中を飛ぶ南国の鳥のように、鮮あざやかだった。

　それは、全ての疑問に対する答えだった。

「それは──リッツちゃんの、初めてのブラジャーなんです!!」

　その瞬しゆん間かん、オリービー以外の広場にいる全員が紛まぎれもなく……時が止まったのを感じていたことだろう。

　心も体も固まり、空白になり、ただ台の上で転てん倒とうしていくリッツと、夕焼け空を舞うかわいらしくもちょっとだけ背せ伸のびしたデザインの小さなブラジャーを目で追うだけ。

……頑がん張ばった少女のおめかし、あのオリービーとの買い物、記念日、リッツの赤い顔、中身を言っちゃダメだと言った彼女、必死に取り返さんとした理由……それら全てに対し、『少女の初ブラ購こう入にゅう記念日』というこれ以上ないぐらいにしっくりする解答を提示された今、誰もが思った。

―ヤベェ……、と。

そして―やっちまったぞ、と。

ドデ、という音と共に、リッツが処刑台の上に倒たおれ、顔を伏ふせた。

「何で、こんな……だから……だから、違うって言ったのに……。何で……！」

―イカン、マジ泣き一歩手前だ。

モルトはそれを敏びん感かんに察し、慌てて、このとんでもない事態を招いた二人の友人を見る。

責任を取れ、と、そう伝えたかったのだが……ライはおっぱいの感かん触しよくで今なお彫ちよう刻こくのように固まったまま。

一方、ガーナはといえば……いつの間にか処刑台から飛び下り、彼方かなたへと向かって全速力で走り出していた。その逃にげ足だけはシュウズゥジオに勝まさるとも劣おとらない秀しゆう逸いつさだ。

となれば、もう、このとんでもない事態を打破できるのは……同じ台の上に立つモルトただ一人である。

今のリッツを思うと胸が痛かった。勇気を出して初めてのブラジャーを買った少女、それなのに購入品を一度は盗ぬすまれ、その後は数十人の前で大公開するという公開処刑以外の何ものでもないこの状況……号ごう泣きゆうは必至だろう。

だが、何とかそれをうまく打破するしかない。気の利きいた言葉で、勘かん違ちがいしてすまなかったという気持ちで……何とはなしに丸く収めるのだ。

モルトは素す早ばやい動きでリッツの前に膝ひざを突つき、伏せ

る彼女に手を伸ばし……そして、言葉を紡つむぐ。



　渾こん身しんの、言葉だった。

　リッツ、さぁ、そのかわいい顔を上げて。

　そして、見よ人々よ。これが何でも屋モルトの危機回かい避ひ能力だ！　そう言い放たんばかりの堂々たる声で……モルトは、言った。

「リッツ、お前にはまだ早いって」

　次の瞬間、モルトは〝赤〟を見上げていた。

　目のいいモルトでも残像しか捉とらえられないような速度の出来事。

　伏せていたリッツが目め尻じりに涙なみだを溜ためた瞳ひとみでモルトを見上げると同時に、殺意の波動を纏まとって跳び上がり、モルトの顔面にこれ以上ないぐらいに見事な、そう、完かん璧ぺきなまでの膝蹴げりを叩たたき込んだのだ。

「──死ねえぇえぇぇえぇぇえぇ!!」

　仰のけ反ぞり、ぶっ飛ぶモルトが見上げた〝赤〟は、夕焼けの空だったのか、それとも自分の鼻から噴ふき出した大量の鮮せん血けつだったのかは……飛び行く意識ではわからない。

　ただ、どちらにせよ……来年の春には、綺き麗れいな赤い桜が咲さくことだけは、間違いなさそうだった。

●第五話『リキュールという街』

　また、あの雨の夜の夢を見ていた。

　雨の夜、マイヤという名の少年とその仲間に与あたえられた任務は戦争の早期終結のため、禁じられた古代技術の復活を阻そ止しするため、即すなわち正義のための特とく殊しゅ任務であった。

　自分達ならやれる。その自信はあった。けれど、まさか別働隊が密ひそかに動いていることまでは気が付かなかった。うまくいけば良し、しくじっても別働隊が城下町ごと城を焼く……そんな計画だとは考えもしなかった。

　結局、あの雨の夜、自分はしくじってばかりだったと、かつてマイヤだった男は思う。

　女子供を含ふくむ数千の人が死んだのだ。切っ掛かけを作ったのは紛れもなく第六隊商キャラバンであり、このためだけに構成された子供だけの……マイヤの部隊だ。

　一七人の王族を殺すも、作戦中に功を焦あせった新人のミスで戦せん闘とう状態になり、半数の仲間を失い、そして大きな街が城ごと灰かい燼じんに帰し、一つの国が滅んだ。

　いくつもミスをし、多くの死を招いた。その真の作戦内容に加え、その後に小国へなだれ込んだ連合軍の蹂じゆう躙りんを思うに、何一つ正義だったとは思えない。

　シナリオを描えがいたのは名も知らぬ大人達。

　けれど、その悲劇の幕を開けたのは間ま違ちがいなく自分……。

　罪を、大きな過あやまちを、犯おかした。もしあの雨の夜にそうでない行いがあるとするのなら……仲間を裏切ってまで、少女にナイフを突き立てたことだけ。

鮮血を漏らしながら、もたれ掛かってきた十とおに満たぬ幼い少女を見つめながら抱だき留めた、あの瞬間だけ……。

○

汗あせだくで目を覚ませば、雨上がりの匂においがした。

窓から見下ろしたアルコ・ホールはしっとりと濡ぬれている。

「どうりで、また夢を見たわけだ……」

雨が降るとわかっていたのなら、雨音はおろか、夜そのものさえも吹ふっ飛ばせる強きよう烈れつな酒にいつも通りに助けを求めていたことだろう。

時折窓を鳴らす風が吹いていた。それが一夜にして雲を運び、そして夜の内に持ち去ったのだろう。空は今、爽さわやかな碧あお一色である。

モルトはベッドを抜け出ると、やけに重い頭と重い長なが柄え刀とうを抱かかえてアパートを出た。

早朝だ。湿しめった石いし畳だたみの道を大勢の人々が行き来し、店々からは活気のある声が上がる。

アルコ・ホールのいつもの朝だった。

「やぁ、モルトじゃないか。どうした、いつも通りに冴さえない顔をしているぞ」

声をかけてきたのは、サシャだ。相変わらず綺麗な顔してやがる……と反射的に思うも、よくよく見ると彼の目元に違い和わ感かんがあった。

目を凝こらすと薄うすく化け粧しようをして目元の疲つかれを消しているのだと知れた。

「……男が化粧なんてすんなよ。誰だれに媚こび売るってんだ」

「ははは、バレたか。目がいいな。……媚びを売るわけじゃないが、客に見せる顔だ。疲れ顔は相手を不安にさせる。特に護衛となればね」

　サシャが振ふり返るようにして、顎あご先さきで二頭立ての大きな馬車を示した。

　長ちよう距きよ離り移動用の大型馬車だ。停とめられているのは旅人に人気の長期保存食を多数扱あつかう店。店頭では裕ゆう福ふくそうな老婦人が、店の人間と談だん笑しようのテイを取りつつ値下げ交こう渉しようをしていた。

　馬車に護衛の仕事とくれば間違いなく街を出ることになるのだろう。長期の仕事だ。

「旅の商人らしいが、この街でうまく商機をつかんで、多額の利益を出したそうだ。強力な自警団が目を光らせるリキュール内はいいとしても、荒こう野やに出ると……な」

「いい仕事だな。ったく。……それで、いつまで行ってるんだ？」

　モルトはもちろんだが、サシャも腕うでは良い。野や盗とうの集団が現れようとも容易たやすく退けられる。……が、問題は、それぐらいのことをやってのける連中が自警団を始めとして、この街には無数に存在しており、大した売りにならないことであった。

　だから、護衛の仕事というのはリキュールでは〝おいしい〟仕事に当たる。

「さてね。少なくともロテ国の首都まではいくし、商談次し第だいではその先にも付き合うかもしれない。アパートは昨夜解約して、荷は貸倉庫の一角に押し込んだが……まぁ大したものはないし、風向き次し第だいでは──」

「帰ってこないなら、仕事の奪うばい合いが減ってありがたいんだがな」

　そう言われると是ぜが非ひでも帰って来たくなる、とサシャは笑う。そして、実は急な仕事で友人らにろくに挨あい拶さつも出来ていないんだ、と彼は申し訳なさそうに続けた。

「生まれも育ちもってんなら話は違うが、俺達みたいに流れて住み

着いた連中なら、大して気にされないさ。だから、そんなに気に病やむことじゃない」

「……それは、何だか……寂さびしいな」

　サシャは眉まゆを八の字にし、いじめられた少女のような顔をする。

　思わず手を差しのばしたくなるような気持ちをうっすらと感じてしまうのを、モルトは「そうじゃない」と言いつつ、咳せき払ばらいで誤ご魔ま化かした。

「街の名、リキュールの語源を知ってるか？　……『溶とけ合う』って意味なんだそうだ。余所よそ者ものであっても一度住み着けば、いつの間にか馴な染じんで、当たり前に住民となる……そんな街さ。だから──」

　一度住めばもはや街の住民。それは即すなわち……。

「きっとまた……帰ってくる、と？」

　モルトは頭を掻かきながら、頷うなずいた。

「この街を出て行って違うところに住むってんならともかく、そうじゃないなら……な」

　誰もが帰ってきたくなる、そんな街。

　誰もがそう信じてる。自信を持って言える、そんな街。

　それが、このリキュールなのだ。

「……そうか。そうだな。確かに、そういう変な自負を持つおかしな人々が集つどう、そんな街だ。そういう街だ」

　寂しげな顔をしていたサシャは、まるで朝日を浴びて花弁を広げる蕾つぼみのように、口元からゆっくりと、嬉うれしそうに笑えみを作る。八の字だった眉も、最後は普ふ段だんのそれになった。

　その繊せん細さいな笑顔を見ているとおかしな気分になりそうなので、モルトは辺りを行き交かう人々へ視線を向ける。知り合いが幾いく人にんもおり、視線があった者達と「よう」「おう」と軽く

手を上げて、すれ違い様に挨拶をした。

「まぁ、そうでなくても、ここはロテ国・オードビー国の首都間を繋つなぐ最短ルートだ。大勢の人がこの街へ来て、そして去って、またやって来る。ちょっと離はなれるだけなのに、いちいち別れを惜おしんでいたらキリがないさ」

　サシャは小さく笑って、雲一つない青い空を遠い目で見上げた。

「そういえば私も〝人探しならあの街がいい〟……そんな風に聞いて、この街へ来たんだった。三年もいたせいか、いつの間にかすっかり忘れ、忙せわしなく日々を過ごしていたな」

　女か？　とモルトが尋たずねるも、サシャは瞼まぶたを閉じて首を振る。

「男さ。少年だった。今はもう青年だろう。利発そうな、鋭するどくも優やさしい目をした人だった。恨うらみと感謝と、そして……尋ねたいことがあってね。長い人生において、そんな相手が一人ぐらいいるものだろ？　モルトにだって」

「俺は……どうだろ。会いたくない奴やつらならいくらでもいるんだがな……。金借りたままとか、今度奢おごるって言って会ってない奴とか……昔の仲間とか、俺を兄って呼ぶストーカー気質な後こう輩はいとか。あとは……そうだな、あぁ、気になっている女がいるか」

「ほぅ、興味深い。泣かせた女か？」

　冗じよう談だんのつもりなのだろう。サシャはやたらと軽い口調で訊きいてくる。モルト如ごときに泣かせられる女がいるものか、とでも言うかのようだ。

　だから……モルトは、鼻で笑ってやった。

「そんなところさ。こっぴどく傷つけた。……といっても女というよりは女の子だけどな。……そいつも会いたいわけじゃない。ただ、元気でやっていて欲しいって願うだけさ」

「ふむ？　少し意外だ。基本モルトは泣かされる側だと思っていたよ」

　モルトは不服げな顔をしつつ、頭を掻いた。

「サシャさん、そろそろお願いいたしますよ」

　いつの間にか商談がまとまったらしく、老婦人が優しく声をかけてきた。水とワインと、そして食料が馬車の荷台へと積み上げられつつあり、それが終わり次第出発らしい。

　サシャは老婦人を馬車の座席へ導いた。彼女は最初、目つきの悪いモルトを不ふ審しん者と思ったのかいささか表情を硬かたくするも、長柄刀を見て自警団だと判断したらしい。ご苦労様です、と丁てい寧ねいに言われてしまい、モルトは少し戸と惑まどってしまった。

　御ぎよ者しやもまた手た綱づなを握にぎり直して、それとなく馬に出発の準備を告げる。サシャは目に焼き付けるように一度アルコ・ホールをグルリと見回すと、馬車のステップへと足を掛けた。

「モルト、しばしの別れだ。達者で」

「そっちこそ。どこぞの街で女に間違われて襲おそわれるなよ」

　悪い冗談だ、とサシャが苦笑するのだが、その瞬しゆん間かんに突とつ風ぷうが辺りを襲った。

　片足を馬車に掛けていたサシャは瞼を閉じるも、バランスを崩くずしてしまう。彼は慌あわてて持ち直そうとするが、腰こしに佩はいた刀が車体に触ふれ、危あやうく転てん倒とうしかけるのだが……。

●

「……結局、お客を不安にさせてるんじゃねぇか」

　人を小こ馬ば鹿かにするような太い声。背中に太い腕の感かん触しよく。瞼を開けば……モルト。

　思わず、ハッとした。

何故なぜハッとしたのか、わからないまま、サシャは彼の腕の中でその瞳ひとみを見上げ続けた。

「大だい丈じよう夫ぶですか、サシャさん？」

心配げな老婦人の声で、仕事を思い出し、サシャはモルトの腕から逃にげるようにして馬車に飛び乗った。

「ご安心ください。今のはただ……別れる悪友との戯たわむれですよ」

モルトが呆あきれたように、溜ためた息を吐つく。

「ま、それでいいさ。貸しにしといてやる。その内に返してくれ。酒でいいぜ」

「利子が高そうだ。早めに返すとしよう」

サシャが御者に指示を出せば、馬車は馬の嘶いななきと共にゆっくりと動き出した。

石畳を車輪が転がる。値の張る長距離用馬車といえども、揺ゆれは大きい。

サシャは老婦人と向かい合うように、進行方向とは逆向きの座席に腰を落ち着けると、人混みの中に立って見送ってくれているモルトを見た。

胸が、高鳴っている。何故？　それが、わからなかった。

彼との別れが哀かなしいというわけではない。ただ、胸だけが高鳴っていた。

不意に、モルトの目が見開かれる。目を細め、見つめるサシャを訝いぶかしげに見つめ返して来たのだが、すぐにその顔から力を抜ぬいて、自じ嘲ちようしていた。

「……んなわけ……ねぇか」

馬車の窓の隙すき間まから、賑にぎやかな雑ざつ踏とうに混じってそんな彼の声がかろうじて聞こえる。

何だ？　と、サシャは眉まゆ根ねを寄せた。

「あら、痛々しい……。戦いの勲くん章しよう、かしら？」

老婦人はサシャを見ていた、いや、サシャの首元を見ていた。それでようやく気が付いた。いつも巻いているマフラーが解ほどけ、首から下がるだけになっていたようだ。

サシャは、細い喉のどに指先を這はわせる。そこにあるのは、大きな縦一本筋の傷である。

「いえ、私が剣けんを持つより先に与あたえられたものです。……生きるために、ある人から」

サシャは瞼を閉じ……そして、あの時をそこに描えがいた。

雷らい鳴めいが怖こわくて眠ねむれず、父のベッドに潜もぐり込んだ大雨の夜。

人の話し声で目を覚ましてみれば、暗くら闇やみの中で父が覆ふく面めんの少年と何か喋しやべっていた。

召めし使つかいか、軍の人か、それとも……そんなことを寝ねぼけ眼まなこで思っていると、窓を突つき破り、赤眼の少年が室内へと飛び込んできたのだ。

赤眼の彼は一ひと振ふりで父の首を飛ばし、続けざまにサシャを……当時は別の名をした少女の首へ、短剣を向けた。幼いとはいえ、これで死ぬのだ、とわかった。

けれど、父と話していた少年が、迫せまり来ていた刃はを弾はじき飛ばしてくれ、そして……代わりにと言うように、彼が持っていた肉厚な短剣が、自分の喉へと突き立てられたのだった。

体内に硬く冷たい異物が差し込まれる感触は、今も忘れられない。そしてそれが引き抜かれ、グラスからワインが溢あふれるように、血が零こぼれ落ちていくあの感覚も、また。

全身の力が抜け、倒たおれる自分を少年は抱だきかかえてくれた。



地じ響ひびきのような雷鳴を伴ともなう閃せん光こうの中、薄うすれる意識で彼の瞳を見、そして、声変わりの終えていない少年の囁ささやきを聞いた。

──約束を果たす。死んじゃダメだ。

意味がわからず、声も出ず、意識が混こん濁だくしていく中、ベッドに寝かされた。そして少年達が言い争いをしながら寝しん室しつを出ていくのを耳で感じていた。

燃える城から自分を救い出し、二人目の父になってくれた執事バトラーに言わせれば、喉への一いち撃げきは、奇き跡せきのような絶技なのだという。ここしかない、という部分を縫ぬうようにして短剣が通っており、重要器官を物の見事に避さけていたらしかった。

囁かれた言葉を合わせて考えれば、間ま違ちがいなく、自分は助けられたのだと知れた。あの赤眼の少年から守ってくれたのだ。

でも、何故？　そして父と最後に何を話していたのか、彼の言う約束とは……。

恨みを持つべき相手なのかもしれない。間違いなく彼とその仲間達は家族を、そして彼女の国を滅ほろぼした張本人……けれど、不思議と恨みの言葉を放ちたい気持ちはなかった。

ただ、知りたい。問いたい。どうして、と。……だから……。

「サシャさん」

声がして、瞼を開くとゆっくり進む馬車に並走している女性がいた。

柔やわらかな笑みを浮うかべるオリービーである。サシャは素す早ばやくマフラーを巻き直し、老婦人に許可を取って窓を開けてみれば……一輪の花が差し込まれる。白く大きな、艶つややかな花弁が反り返るようにして咲さいている、何とも煌きらびやかな花……ダイヤモンドリリー。

それを渡わたしてしまうとオリービーは立ち止まり、小さく手を振ふってサシャ達を見送った。意味がわからずにきょとんとしてい

ると、老婦人が「まぁ」と声を出した。

「素敵な街ね」

「……どういう、意味でしょう？」

「ダイヤモンドリリーの花言葉をご存じ？　『箱はこ入いり娘むすめ』、『幸せな思い出』……そして『また会う日を楽しみに』なのよ。再開を願う、そんな別れの花」

　なるほど、とサシャは手にした花を見る。荷を積んでいる馬車とそれに乗る姿で瞬時に全すべてを察したのだろう。考えてみれば花屋ほど〝祝い〟と〝別れ〟に精通する店もない。

　馬車の進みが少しばかり速くなる。ちらりと行く先に視線を向ければ、いつの間にかライと自警団員二人が先行して歩き、混雑する人々を分けて道を作ってくれていた。

　そして見えてくる安あん美び亭てい。軒のき先さきを掃そう除じしながら笑顔を浮かべているのはクラッツ、そして彼女の話し相手は叔父おじにして店主のグレーンと、これから学校にでも行く様子のリッツ。

　そして何本ものバケットが顔を覗のぞかせる紙かみ袋ぶくろを手にした、配達途と中ちゆうらしいピンガ。五番街では大浴場の一番風ぶ呂ろを狙ねらうガーナと老人達……に極ごく々ごく自然かつ不自然に混じっているピーちゃんとその飼い主のリーフィ……。

　誰だれも彼もが馬車に乗るサシャを見つけると一瞬驚おどろくも、笑顔で手を振ってくれる。

　あっさりとしているようにも思える。けれど、モルトの言葉を信じるのなら……。

「素敵な街ね」

　老婦人がまた、同じ言葉を口にする。今度は、はい、としっかりとサシャは応こたえた。

　誰も彼もが……再会だけを信じている。

「また来たくなっちゃうわね。今度は商売じゃなくて、ゆっくりと

観光で。その時もこんな風に……」

　馬車は進む。リキュールという街を。アルコ・ホールという大通りを。活気ある雑踏の中を、ゆっくりと。行き交かう大勢の人々とすれ違い、笑顔を見せ合いながら。

「間違いなく、大丈夫ですよ」

　アルコ・ホールの中心部を抜け、道が空すいてきたのか、馬車はさらに速度を上げげた。

　雑踏が、遠くなる。胸が、少し痛んだ。

　きっと今日もまた、街のどこかで事件が起こって、頭の悪い手段で解決して、当たり前の日々として過ぎていくのだろう。



「きっと、いつ来たって同じように迎むかえてくれますよ。いつだっててんやわんやで、楽しくて、大変で、忙いそがしくて……でも不思議と居い心地ごこちがいい、そんな……」

　いろんな人が集まって、いろんなことが起こって……全てが溶け合って、一つになる街。

　誰であっても、トラブルさえも笑って受け入れてくれる、そんな──。

「そんな……私の街です」

　手にした白い花に視線を落とせば、浮かぶのは笑顔。

　離はなれる寂さびしさが湧わいても、それ以上に胸に浮かぶのは再会への期待。

　サシャは想おもう。

　必ず、帰ってこよう。この街へ。

　この、リキュールへ。

〈了〉

## あとがき

　みなさん、どうも、ダイエットを始める際はランニングに加えて、食事制限として白米ではなく、代わりに大量のキャベツの千切りを用意するアサウラです。食しよく物もつ繊せん維い豊富過ぎて、ケツがプップラプップラと少々お喋しやべりになりますが、効果が高いのでオススメです。

　いきなり話は変わるんですが、先日、ＶＲ体験して参りましてね？

　あのヘッドマウントディスプレイを装着することでゲームとかの世界へダイブってなアレです。

　以前より興きよう味み津しんゝしんだったのですが、都内の某ぼうネカフェで体験できるって聞いたもんですから、ちょっくら遠えん征せいしてきたのですよ。

　そうしたら……いやぁー、凄すごかったですよ！　もうね、今思い出すだけで胸が高鳴り、膝ひざが震ふるえるほど！

　何が凄いって……受付カウンター横でやれっていうんですから……。

　左手側はスタッフが働くカウンター、右手側は入り口の自動ドアですからね。

　ひっきりなしに人が出入りする場所で、ポツンと置いてある椅い子すに座って、３Ｄ空間にレッツダイブ！　もう死ぬかと思いました。

　ディスプレイを装着した瞬しゆん間かんに学校帰りらしき男子学生数人が来店した気配がし、周りから「おい、あれ見ろよ」という言葉と共にクスクスと笑い声が聞こえ始め、映像が始まる直前にもまた自動ドアが開いて「あっ、あれー知ってるーｗｗｗ」という女性の半笑いの声が聞こえ……もう、心臓バクバクッ！　モニターには何も映ってませんでしたけど。

　その後も途と中ちゆう二度自動ドアが開き、香こう水すいの匂においがしたりもしたんですが、ともかく、何とか無事に映像を見終わることができまして「……ふぅ、やれやれ」とＶＲを外したら……みんな、少し遠巻きにこっちを見てるっていう……。

　まさに衝しよう撃げき体験。モニターの中の世界っていうか、モニターの中から外の世界を見ているような気分を味わえました。

　さて、そんな最近の私の日常は置いておくとして、三巻です。

　前回同様、ＷＥＢ掲けい載さいしていた短編を中心に纏まとめたものとなっております。

　ページ数の都合でおさまりきらなかった短編は『ファンタジアBeyond』（http://www.fujimishobo.co.jp/beyond/index.php）のサイトにてしばらくの間公開されてますので、まだ読み足りぬと思ってくださる素す晴ばらしい方は、是ぜ非ひともそちらにてご覧らんいただければと思います。一巻ではサブ主人公みたいだったものの、それ以降不思議と出番のなかったマドラーとクリミオの短編とかもあったりしますので、オススメです。

　では、そろそろ謝辞の方をば。

　今回もまた美しいイラストを描えがいてくださいましただぶ竜りゆうさん、表紙のリッツ、大変かわいくて最高です！　本当にありがとうございました！

　意外とタブレットなどのガジェットとジャパニーズ・ホラーが好きなファンタジスタ桑くわ水ず流るさんを始め、校正者さん、印刷所の皆みなさん、さらには本書を大勢の方に届けてくださる書店員さん……関かかわってくださった全ての皆様方、まことにありがとうございます。

　そして、最後となりましたが、この本をここまでお読みいただきました読者の皆々様……本当にありがとうございます！

　皆様の支えがあってこそ無事にこうして本を出すことができます。感謝してもしきれません。今後ともアサウラをよろしくお願いいたします。

　ではでは、また次にお会いできることを祈いのりつつこの辺で。それではまた！

アサウラ

【初出】

第一話『三つの依い頼らい』

第二話『雨の夜の女』

第三話上編『Grasp　モルトとリキュール自警団』

第三話中編『Grasp　牢ろう獄ごくの少年達』

第三話下編『Grasp　星空に雨あま粒つぶ』

第四話『勇気と冒ぼう険けんの記念日』

第五話『リキュールという街』

ファンタジアＢｅｙｏｎｄにて連れん載さいされた原げん稿こうを加筆・修正

アサウラ

●アサウラ

---

皆さん、こんにちは。

二巻から少し間をあけての三巻となりました。

今回は前二冊とは少しテイストの違う感じになっておりますが、お楽しみ頂ければ幸いです。

カバー・口絵・本文イラスト / だぶ竜

カバーデザイン / ムシカゴグラフィクス

英えい雄ゆう都と市しのバカども３

～アルコ・ホール三さん番ばん街がいの何なんでも屋や～

アサウラ

平成28年6月20日　発行



本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

富士見ファンタジア文庫『英雄都市のバカども３　～アルコ・ホール三番街の何でも屋～』

平成28年6月25日初版発行

発行者　三坂泰二

発　行　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3

電話　0570-002-301（カスタマーサポート・ナビダイヤル）

受付時間　9:00～17:00（土日 祝日 年末年始を除く）

http://www.kadokawa.co.jp/

BOOK☆WALKER